玉名市文化財調査報告第28集

中世真言律宗系寺院浄光寺跡

南大門遺跡

蓮華院誕生寺南大門再建に伴う発掘調査

RENGEINTANJYOJI
NANDAIMON

南大門遺跡航空写真（南東から　平成 20 年度撮影）

巻頭図版 2

南大門遺跡航空写真近景（平成 20 年度撮影）

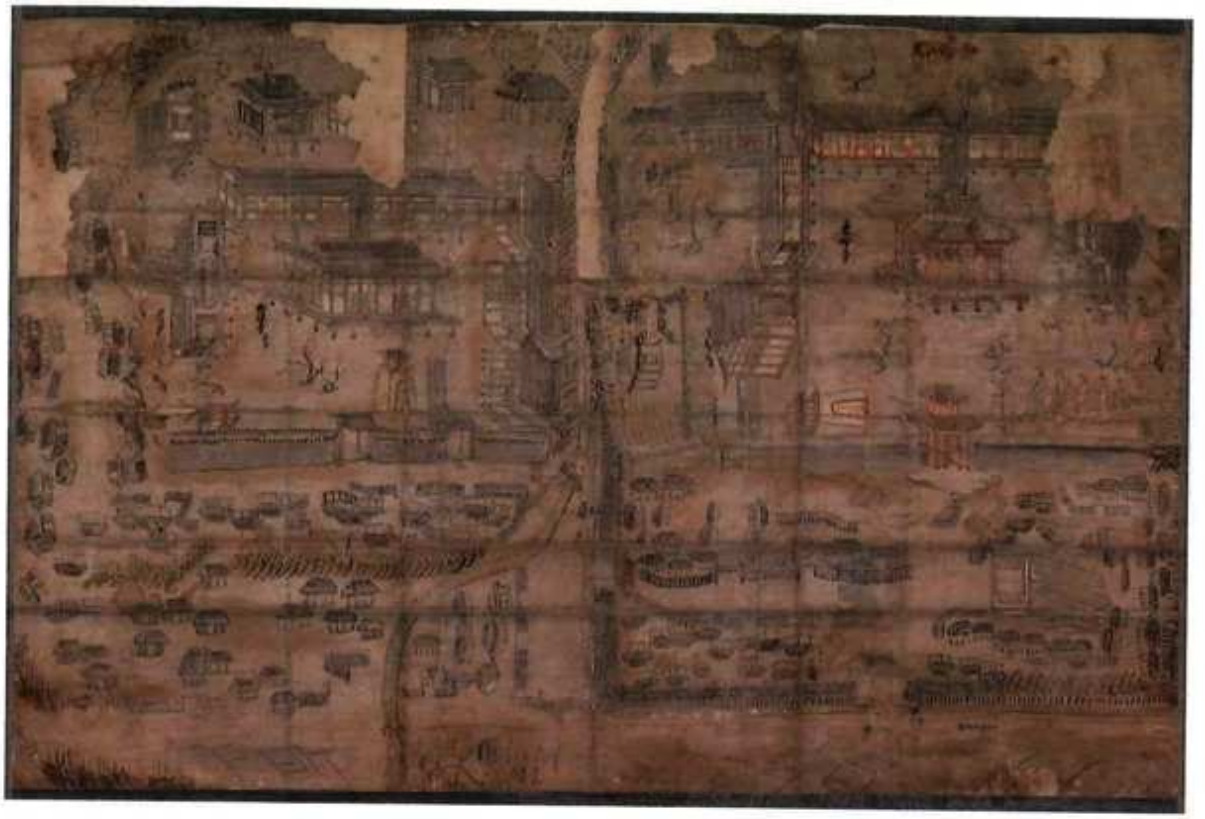
蓮華院五輪塔（西塔）

蓮華院五輪塔（東塔）

宮宣旨（手書下文）○記伝東大寺文書
『鎌倉遺文』二六一一六〇、一九七四五を参照

左弁官下大学寺
　　醍醐寺領内殺生以下禁断、弘通□（井カ）
　　法、皆記伝国東大・秘法護寺事、
右、彼東大寺住僧和尚等国去月日奏□（聞カ）
　　寺者、貞観年中興隆之時、去弘仁年中草
　　創始也、秘法寺者、建立以後、即令住住尼衆、
　　四十餘歳之間寺家、修造既寺、故有勅願、共□（等カ）
　　新天皇初入御願寺、于今無断絶、受禁回、荷受
　　先師上人之恩顧、殺護寺之恩願、衆徒衆□□（国司カ）
　　下殺之法願、因茲、被禁中禁之切、不顧小点之
　　身、修造寺家之住寺、遂遂西塔放棄、ト占□（住カ）
　　彼寺、勤修紹隆之新功、即被住内、貞観国定代、
　　自古巻巻三所大井、所謂、寺領田畠・荘園・□（田カ）
　　角明井定也、仍東塔日三昔之法水、巻巻回数
　　明井、所祈請四海静謐、鎮護国家也、且自建立□（之カ）
　　始、寺院衆徒以下之免田等、諸人寄進之剋、或自
　　代・頃所免除事、所謂東寺講堂私、雖勅之旨、無□□（無之カ）
　　族、或諸人寄内、或殺禁、或米近所、寺領無、住
　　但寺住或社寺、或不消滅、巻行之間、何寺取□（之カ）
　　且記後国修未寺者、仏門寺家私建立之寺院也、
　　雖非勅願、口綸下宣旨、醍醐寺領殺生事、弘通
　　天皇、因縁先例、綸下宣旨、寺領・寺家之内、禁殺生
　　以下禁断、鎮護寺門、興弘通秘法、明祈巻巻
　　四海静謐・天下太平者、禁中新宣旨蔵頭弁藤原
　　宣、奉　勅、仰諸寺、所宜承知、故宣行之、
　　永仁六年七月十四日　　大史小槻宿禰（花押）
右中弁藤原朝臣（花押）

資料1　東妙寺文書　宮宣旨「左弁官下大学寺」



東妙寺并妙法寺境内絵図　一幅　紙本墨画淡彩

縦八九．二×横一三九．二

本資料は、真言律宗東妙寺と妙法寺（尼寺）の伽藍を描いた絵図である。縦横三枚ずつの料紙を継いでおり、北を上にして、東に真言律宗東妙寺を、西には尼寺の妙法寺（現存しない）を描いている。

東妙寺と浄光寺との関係については、東妙寺文書の永仁六年（一二九八）七月一四日付官宣旨によれば、東妙寺の唯円が殺生禁断の宣旨を願い出た際、肥後国には沙門恵空によって浄光寺が建てられており、殺生禁断の宣旨を賜っていることを記すなど、古くから交流があったことが窺える。

東妙寺は大路によって妙法寺と区切られており、大路に沿って堀を廻らせている。瓦葺朱塗の本堂を中央に置き、伽藍正面に仁王門、前庭左右に鐘楼、五重塔などを配置している。

妙法寺も板葺の本堂を中央に置き、板葺の護摩堂のほか複数の建物、前庭左右に鐘楼と小建造物を配置している。

また、両寺院の南側には在家とみられる民家風の家が軒を連ねており、寺院とは塀で区切られている。寺院の描写が比較的精緻であるのに対して粗野に描かれているが、妙法寺門前に着物を干す場面などがあり、当時の風俗を窺い知ることができる。

本資料は年紀を欠いているが、東妙寺の草創が弘安年間（一二七八～一二八八）であること、延慶三年（一三一〇）に東妙寺造営の材木運搬船に関する記録があることなどから、鎌倉時代末期以降の制作と考えられる。僧尼両寺の律宗寺院の伽藍配置がわかる点で、史料的価値の高いものである。

資料２　東妙寺并妙法寺境内絵図

刊行のことば

玉名市は、縄文時代から今日に至るまで長い歴史を持ち、豊富な文化財が所在する地域です。熊本県北部の菊池川下流域を市域とし、近年は九州新幹線の新駅が開通し、県北部における政治経済・教育文化・観光の中心としてさらなる発展を遂げようとしています。このような中で玉名市教育委員会では、様々な開発事業と発掘調査の円滑な調整のため、体制の充実に努めて参りました。公共及び民間の事業に対応するため、玉名市内に所在する文化財の状況把握にも常に取り組み、埋蔵文化財行政の改善・充実に努力しているところであります。また、その成果の公開・活用を通じて、広く教育・文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は、蓮華院誕生寺の南大門建設事業に伴う南大門遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。中世浄光寺関連遺跡の調査はこれまで過去数度行われており、今回の調査によって浄光寺の歴史のみならず、古代から中世にかけての玉名地域の様相を知る上で重要な成果が得られています。本書が、市民の方々の文化財に対する理解の一助となり、また学術研究にも広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたっては、蓮華院誕生寺から多大なご理解とご協力を得ましたことについてお礼申し上げます。また、各方面でも多くの方々にご指導、ご協力を賜ったことに対しまして厚く御礼を申し上げます。

平成25年8月1日

玉名市教育委員会
教育長　森　義臣

ご 挨 拶

私の知る限り、当山の境内を玉名市教育委員会が発掘調査されたのは、今回で四回目であります。

第一回目は昭和43年の本堂再建に伴う発掘調査で、玉名市文化財に指定されている青銅製佛頭などが出土しました。

第二回目は昭和62年に現在の庫裡（寺院の住居）の全面改築にあたっての調査。

第三回目は平成7年の五重塔建立予定地の発掘でした。

いずれも発掘調査委員長は故田邊哲夫先生で、その全面的な指導のもとに実施されました。田邊先生は当山中興二世、先代貫主、故川原真如大僧正とは旧制玉名中学校の同級生であり、親友でもありました。

先代が三十代の頃、田邊先生が母校の玉名高等学校に教諭として赴任された時、「田邊君、蓮華院と皇円上人の歴史について学問的に調べてくれないか」と頼まれたそうです。

その時、田邊先生は、「地域に残る言い伝えや伝説は、調べて行くに従って曖昧なものになっていく事がほとんどだから、それはやらない方が良い」と、最初は断られたのでした。

しかし、先代のあまりに熱心な依頼に、ついに根負けした田邊先生は、まずは文献調査から始められました。

そして

①地元に残る「蓮華」「高原」「南大門」「小路」などの地名は『肥後國誌』にも記載があり、ここにかつて大寺院があったと記されている事、

②既に望月信亨著『佛教大辞典』に、皇円上人が「肥後國玉名郡築地村の人」と記されていた事、

③皇円上人が藤原家の系図と天台宗の法脈図に明確に出ている事

などを確認されました。

さらに田邊先生と先代は、皇円上人が遠州（静岡県）桜ヶ池で龍に化身して修行に入られたとの伝説を確認するために現地に赴き、フィールド調査を実施されました。すると桜ヶ池周辺と、現玉名市築地周辺のどちらの地にも「蛇ケ谷」「桜ヶ池」の地名が共通して現存している事が確認されました。そして皇円上人が修行された比叡山に「肥後阿闍梨皇円御住坊」が、別名「法然堂」として現存する事も併せて確認されました。

その後、本堂改築の際に発掘調査を行なった結果、約千二百年程前の新羅系の佛頭を始めとする数々の鎮壇具が出土しました。昭和末の境内池の発掘調査では、僧坊を始めとする様々な堂宇の存在が確認されました。その中で、当山が約四百年前に中世の戦乱の中で焼失した事も確認されたのです。

旧境内の北西の角を調査された際には、白鳳時代の立願瓦、重弧紋瓦が出土しました。

これは旧境内ではありませんが、平成6年には、市営の東南大門住宅の改築の際にも、同じく田邊先

生の指導のもとで発掘調査が行われました。

これらの発掘調査を踏まえて、田邉先生は、「これまで皇円上人がこの地に生まれたという伝説はあったが、学問的には確信が持てなかった。しかし皇円上人の母方が大野氏である事はまず間違いない。まさに浄光寺蓮華院は大野氏の館跡に、皇円上人と縁の深い惠空上人によって建立された寺院である事を示すものが次々と出現した。先々代の是信大僧正の霊的な直感は間違いなかったんだ」と興奮して話されたのが、私の脳裏に昨日の事のように蘇ります。

また五重塔建立予定地の発掘調査でも、私が予想していた五間四面の「基壇状遺構」が、田邉先生によって確認されました。

ある日、田邉先生が、「英照さん、岱明町に大野下という地名があるが、なぜそう言われるか分かるかね」と尋ねられました。「それは大野氏の本拠地である、ここ玉名市築地のこの蓮華院の南にあるからなんだよ。築地のすぐ北東には大野口。北野口もまさに同じような意味の地名なんだ」と楽しげに話されました。

これまでの全ての発掘調査では、中世の遺構のさらに下の層から弥生時代の住居跡が数多く発見されています。それは築地の地が古代から風水害も少なく、人びとの住みやすい地域であった事を示しています。

鎌倉時代には、大野一族は港を通じた交易の利便性を求めて東へ東へと根拠地を移動させます。その結果、玉名市中という地名も、大野市の中心地としての大野中村が元になっているとの事です。

また当山は少なくとも七百年以上前には、朝廷から「殺生禁断」の宣旨を賜る特別な寺院であった事も、国指定重要文化財に指定されている「東妙寺文書」によって分かっています。

一昨年、そのような歴史を持つ寺院に相応しい南大門を再建できました。これもかつての南大門を数々の伝説と共に守りとどめて頂いた地元の多くの方々のお陰です。このご恩に対して、今後いかにして報いて行くべきかを常に念頭に置きながら、日々精進すべしと志を新たにしている処であります。

合 掌

平成25年8月1日

蓮華院誕生寺中興三世

権大僧正　川原英照

例　言

1．本書は、蓮華院誕生寺南大門建設工事関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査から報告書発行に至るまでの費用は、原因者である蓮華院誕生寺の負担によるものである。

3．発掘調査及び報告書作成は、玉名市教育委員会を主体とし、その管理・監督のもと株式会社九州文化財研究所が作成した。

4．調査期間は、平成19年度から平成24年度までであり、調査年次は次の通りである。

平成19年度　確認調査

平成20年度　本調査

平成21年度　追加確認調査

平成24年度　整理作業・報告書作成

5．発掘調査における本調査時の遺構実測、写真撮影は、永井・尾ノ上（九州文化財研究所）が行った。追加調査時の遺構実測、写真撮影は、稲富・大野（九州文化財研究所）が行った。

6．空中写真撮影は、九州航空株式会社が行った。

7．遺物の実測及びトレースは、越知・田上・鎌崎・下野（九州文化財研究所）が行った。

8．遺物の写真撮影は、加藤・豊海（九州文化財研究所）が行った。

9．図版の作成は、末永崇（玉名市教育委員会）と大野泰輔（九州文化財研究所）が行った。東妙寺文書の校訂は花岡興史（九州文化財研究所）が、東妙寺并妙法寺境内絵図の解説は井上隆明（九州文化財研究所）が行った。

10．本書の執筆担当は末永と大野が主となり行った。その他の執筆については、目次に記載する。全体の編集は西谷彰（九州文化財研究所）の協力を得、末永と協議の上、大野が行った。

11．出土遺物は、玉名市教育委員会で保管している。

本 文 目 次

巻頭図版

刊行のことば

ご挨拶

例言

本文目次・挿図目次・表目次・図版目次

	▼執筆担当者	
第Ⅰ章　調査の概要	末永	1
第１節　調査に至る経緯		3
第２節　調査の組織		3
第３節　確認調査		5
第４節　調査の経緯と方法		5
第Ⅱ章　遺跡の環境	末永	7
第１節　地理的環境		9
第２節　歴史的環境		11
第３節　浄光寺関係の研究史		12
第４節　過去の調査内容		19
第Ⅲ章　調査の成果	大野・西谷	27
第１節　概要		29
第２節　弥生時代の調査		30
第３節　中世の調査		59
第４節　その他の遺構・遺物		83
第Ⅳ章　追加調査	大野・西谷	87
第Ⅴ章　総括	大野	101
(付論)		111
地域社会・東アジアのなかの浄光寺	小川 弘和	113

蓮華院五輪塔実測記　狭川　真一　121
南大門遺跡周辺における地理的・歴史的環境の考察　末永　崇　131
（図版）　145
本調査　147
追加調査　155
主な出土遺物　159
南大門関連　165
（報告書抄録）　166

挿　図　目　次

第１図　調査位置図　10
第２図　菊池川流域荘園分布図　12
第３図　調査地周辺遺跡分布図　13
第４図　現在の蓮華院誕生寺正門周辺図　14
第５図　浄光寺域全体図　16
第６図　築地字図　17
第７図　字南大門地籍図　18
第８図　調査前現況測量図　21
第９図　トレンチ西壁土層断面図　22
第１０図　基壇状遺構実測図　23
第１１図　出土遺物実測図　25
第１２図　全時代遺構配置図（縮尺 250 分の 1）　29
第１３図　１号住居址（S-6）実測図　30
第１４図　弥生時代遺構配置図（縮尺 200 分の 1）　31
第１５図　調査区壁土層断面図　32
第１６図　調査区壁土層断面図　33
第１７図　１号住居址（S-6）出土遺物実測図　34
第１８図　２号住居址（S-7）実測図　35
第１９図　２号住居址（S-7）出土遺物実測図　35
第２０図　３号住居址（S-8）実測図　36

第２１図　３号住居址 (S-8) 出土遺物実測図　37
第２２図　４号住居址 (S-9) 実測図　37
第２３図　５号住居址 (S-10) 実測図　39
第２４図　６号住居址 (S-28) 実測図　40
第２５図　６号住居址 (S-28) 出土遺物実測図　40
第２６図　７号住居址 (S-29) 実測図　40
第２７図　８号住居址 (S-32) 実測図　41
第２８図　９号住居址 (S-33) 実測図　41
第２９図　１０号住居址 (S-34) 実測図　42
第３０図　１０号住居址 (S-34) 出土遺物実測図　43
第３１図　１１号住居址 (S-40) 実測図　44
第３２図　１２号住居址 (S-43) 実測図　45
第３３図　１２号住居址 (S-43) 出土遺物実測図　46
第３４図　１２号住居址 (S-43) 出土遺物実測図　47
第３５図　１３号住居址 (S-44) 実測図　48
第３６図　１４号住居址 (S-45) 実測図　49
第３７図　１４号住居址 (S-45) 実測図　50
第３８図　１４号住居址 (S-45) 出土遺物実測図　51
第３９図　１５号住居址 (S-48) 実測図　52
第４０図　１５号住居址 (S-48) 実測図　53
第４１図　１５号住居址 (S-48) 出土遺物実測図　53
第４２図　１５号住居址 (S-48) 出土遺物実測図　54
第４３図　１５号住居址 (S-48) 出土遺物実測図　55
第４４図　１５号住居址 (S-48) 出土遺物実測図　56
第４５図　１６号住居址 (S-49) 実測図　57
第４６図　１７号住居址 (S-50) 実測図　58
第４７図　１８号住居址 (S-51) 実測図　58
第４８図　１号溝跡 (S-1-2) 実測図　59
第４９図　中世～近世遺構配置図　60
第５０図　１号溝跡 (S-1-2) 実測図　61

第５１図　１号溝跡（S-1-2）出土遺物実測図　61
第５２図　２号溝跡（S-1-3）実測図　62
第５３図　２号溝跡（S-1-3）出土遺物実測図　63
第５４図　３号溝跡（S-2）実測図　64
第５５図　３号溝跡（S-2）実測図　65
第５６図　３号溝跡（S-2）実測図　66
第５７図　３号溝跡（S-2）実測図　67
第５８図　３号溝跡（S-2）出土遺物実測図　67
第５９図　３号溝跡（S-2）出土遺物実測図　68
第６０図　３号溝跡（S-2）出土遺物実測図　69
第６１図　３号溝跡（S-2）出土遺物実測図　70
第６２図　３号溝跡（S-2）出土遺物実測図　71
第６３図　４号溝跡（S-3）実測図　72
第６４図　５号溝跡（S-4）実測図　73
第６５図　５号溝跡（S-4）実測図　74
第６６図　５号溝跡（S-4）出土遺物実測図　75
第６７図　５号溝跡（S-4）出土遺物実測図　76
第６８図　６号溝跡（S-25）実測図　77
第６９図　６号溝跡（S-25）出土遺物実測図　77
第７０図　７号溝跡（S-27）実測図　78
第７１図　７号溝跡（S-27）出土遺物実測図　79
第７２図　８号溝跡（S-31）実測図　79
第７３図　１号土坑（S-5）実測図　80
第７４図　２号土坑（S-26）実測図　81
第７５図　３～１１号土坑（S-52～59）実測図　82
第７６図　９号溝跡（S-1-1）実測図　83
第７７図　９号溝跡（S-1-1）実測図　84
第７８図　９号溝跡（S-1-1）出土遺物実測図　84
第７９図　３・５号溝跡、表土及び撹乱等出土遺物実測図　85
第８０図　追加調査区位置図（縮尺 500 分の 1）　89

第８１図　A区遺構実測図　90
第８２図　A区遺構実測図　91
第８３図　A区出土遺物実測図　92
第８４図　B区遺構実測図　93
第８５図　C区遺構実測図　94
第８６図　D区遺構実測図　94
第８７図　D区遺構実測図　95
第８８図　E区遺構実測図　95
第８９図　F区遺構実測図　96
第９０図　F区出土遺物実測図　96
第９１図　G区遺構実測図　97
第９２図　G区出土遺物実測図　98
第９３図　G区出土遺物実測図　99
第９４図　G区出土遺物実測図　100
第９５図　南大門遺跡発掘調査周辺地形調査区合成図　103

表　目　次

表１　遺物観察表　109
表２　遺物観察表　110

図　版　目　次

本　調　査

図版１　１ 調査区全景（上空から）　147
図版２　２ 3・5号溝跡完掘状況（東から）　３ 3号溝跡出土軒丸瓦片（東から）　148
４ 3号溝跡出土瓦片（西から）　148
図版３　５ 5号住居址完掘状況（北東から）　６ 12号住居址（北から）　149
７ 12号住居址出土家形土器片（遠景）　８ 家形土器片（近景）　149
図版４　９ 調査前状況（南から）　１０ 安全祈願（北から）　150
１１ 調査区南側検出状況（東から）　１２ 調査区北側検出状況（西から）　150
１３ 1・2号溝跡完掘状況（東から）　150

１４ 1・2 号溝跡横断西壁土層断面（東から） 150
図版５ １５ 3 号溝跡出土瓦片（北から） １６ 3 号溝跡出土瓦片（北西から） 151
１７ 5 号溝跡縦断南壁土層断面（北から） １８ 3 号溝跡出土平瓦（西から） 151
１９ 3・5 号溝跡完掘状況（東から） 151
２０ 3 号溝跡底面削り出し突起（東から） 151
図版６ ２１ 2 号住居址遺物出土状況（東から） 152
２２ 10 号住居址遺物出土状況（北東から） 152
２３ 15 号住居址遺物出土状況（南から） 152
２４ 15 号住居址遺物出土状況（南西から） 152
２５ 13 号住居址炭化物出土状況（東から） 152
２６ 14 号住居址遺物出土状況（北から） 152
図版７ ２７ 調査区北側完掘状況（西から） ２８ 調査区東側完掘状況（南から） 153
２９ 調査区西側完掘状況（北から） ３０ 1・2・9 号溝跡横断土層断面（西から） 153
３１ 3 号溝跡横断土層断面（西から） ３２ 7 号溝跡完掘状況（東から） 153
図版８ ３３ 2 号住居址完掘状況（北から） ３４ 3 号住居址遺物出土状況（南から） 154
３５ 3 号住居址完掘状況（西から） 154
３６ 10 号住居址調査区南壁土層断面（北から） 154
３７ 12 号住居址柱抜き取り痕及び廃土の散布状況（北から） 154
３８ 14 号住居址完掘状況（北から） 154

追加調査

図版９ １ A・G 区調査区全景（北西から） ２ B-F 調査区全景（西から） 155
図版１０ ３ A 区遺構検出状況（北から） ４ B 区遺構検出状況（北から） 156
５ S-60 検出状況（西から） ６ S-60 遺物出土状況（西から） 156
図版１１ ７ S-61 瓦片出土状況（北から）上層 ８ S-61 瓦片出土状況（東から）下層 157
９ G 区 S-61 遺物出土状況（南から） 157
１０ G 区 S-61 角礫出土状況（北から） 157
図版１２ １１ A 区周辺掘削状況（南から） １２ 調査区南側道路（東から） 158
１３ 調査区南側道路（西から） 158

主な出土遺物（写真番号は原稿及び遺物観察表に準じる）

図版１３　本発掘調査における主な出土瓦片集合写真、瓦（No. 64, 65, 66, 67, 70, 71, 72, 73）　159

図版１４　瓦（No. 68, 69）　160

図版１５　弥生土器等（No. 01, 02, 03, 04, 05, 06, 07, 08, 09, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17）　161

図版１６　弥生土器（No. 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27）　162

図版１７　弥生土器（No. 28, 29, 30）　163

土師器（No. 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50）　163

図版１８　銭貨、石製品等（No. 51, 53, 61, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82）　164

南大門関連

図版１９　南大門（平成 23 年 4 月　再建）　165

南大門の四天王像　165

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯
第２節　調査の組織
第３節　確認調査
第４節　調査の経緯と方法

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

玉名市築地に所在する蓮華院誕生寺では、昭和４年浄光寺蓮華院の名跡を継ぎ、寺院再興以来、逐次寺院施設の再建を進めており、『肥後国誌』にも伝承され地名ともなっている南大門の推定地（玉名市築地字南大門 2147-1）において復元事業を計画された。

事業に先立ち、平成 18 年 12 月 12 日に蓮華院誕生寺から確認調査依頼が提出され、これを受けて平成 19 年 4 月 27 日に玉名市教育委員会で確認調査を行った。その結果、浄光寺との関連が考えられる中世の瓦片や土器片が確認された。また、弥生時代の土器片も検出され、住居跡の存在も想定された。このため玉名市教育委員会と蓮華院誕生寺で南大門建設工事の内容等について協議を行い、埋蔵文化財に対して極力影響を与えないような設計で建設を行うことで合意した。しかし埋蔵文化財に対して工事の影響が及ぶ範囲については発掘調査を行い記録保存とすることとなった。発掘調査体制は、事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護を図ることを推進するため玉名市教育委員会を主体とし、調査の大部分を九州文化財研究所に委託して実施することとなった。そして平成 20 年 8 月 22 日付けで事業主体である蓮華院誕生寺と玉名市教育委員会、株式会社九州文化財研究所の３者で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結し、調査を実施した。

第２節　調査の組織

平成１９年度　確認調査

調査主体：玉名市教育委員会

調査責任：教育長　菊川茂男

調査総括：教育次長　杉本末敏

文化課長　西田道垂

調査事務：文化財係長　安田信孝

主事　清田静香

調査担当：技術主任　末永　崇

平成２０年度　本調査

調査主体：玉名市教育委員会

調査責任：教育長　菊川茂男

調査総括：教育次長　前田敏朗

文化課長　中山富雄

調査事務：文化財係長　安田信孝

主事　永野摩美子

調査担当：技術主任　末永　崇

平成２１年度　追加調査

調査主体：玉名市教育委員会

調査責任：教育長　菊川茂男（平成21年11月29日まで）

教育長職務代行者　教育次長　前田敏朗（平成22年3月28日まで）

教育長　森　義臣（平成22年3月29日から）

調査総括：教育次長　前田敏朗

文化課長　中山富雄

調査事務：文化財係長　安田信孝

主事　永野摩美子

調査担当：技術主任　末永　崇

平成２４年度　整理作業・報告書作成

調査主体：玉名市教育委員会

調査責任：教育長　森　義臣

調査総括：教育次長　西田美徳

文化課長　小山正義

調査事務：文化財係長　植原孝信

主任　西田言道

整理・報告書担当：技術主任　末永　崇

調査機関（平成２０年度本調査）

株式会社九州文化財研究所　　代表取締役　徳永和人

調査担当：主任調査員　花岡興史

発掘調査員　永井孝宏　鮫島伸吾　宮崎　拓

発掘調査技師　尾ノ上尚平

土木監理技師　徳永和人　尾ノ上尚平（発掘調査技師兼務）

発掘作業員：荒木冨士子、大森　久、草葉　聡、坂口国広、田尻良雄、中島徹郎、中島明子、野口栄一、宮本善治、村本生六、村本田茂美

調査機関（平成２１年度追加調査）

株式会社九州文化財研究所　　代表取締役　徳永和人

調査担当：主任調査員　花岡興史　佐藤伸二

発掘調査員　稲富陽子

発掘調査技師　大野泰輔（土木監理兼務）

発掘作業員：荒木冨士子、坂口国広、野口栄一、村本生六

第３節　確認調査

確認調査は、玉名市教育委員会で平成19年4月27日に実施した。敷地内の建設予定地を中心に4ヶ所トレンチを設定し、重機及び人力で掘削して埋蔵文化財の状況を確認した。その結果、中世の瓦片や弥生時代の遺構、遺物が検出された。詳細は平成21年3月刊行の玉名市文化財報告第18集『玉名市内遺跡調査報告書Ⅴ』にて報告済みである。

第４節　調査の経緯と方法

調査は、平成19年度に確認調査、平成20年度に本調査、平成21年度に本調査で検出した溝状遺構の範囲などを確認するための補足調査、平成24年度に報告書作成業務を行った。平成20、21年度の調査と24年度の整理作業は、玉名市教育委員会の監理・監督のもと本調査に引き続き株式会社九州文化財研究所が実施した。

調査地である玉名市築地字南大門2147-1は、以前から中世浄光寺の南大門の存在が推定されている地点である。工事の内容は、その地点に新たに南大門を建設する工事であり、さらに南側に隣接する道路を歩道橋で越える参道工事の計画もあり、最終的には国道208号から参道（歩道専用）を通り、南大門を経由して本堂までの参道を整備するものである。

調査の範囲は、建設予定地の掘削される部分を対象とした。建物部分と南側の橋脚基礎部分を調査対象とし、期間は平成20年8月25日から表土掘削を開始し、10月27日に現地における調査を終了した。調査面積は約243㎡である。

調査区内はこれまでの土地利用の過程でかなり削平されており、表土の直下から遺構が検出されている。土掘削後、撹乱と確認調査トレンチの掘削後に遺構検出を行い、中世と判断される遺構から順次調査した。

記録の作成は、調査区及び遺構の実測に関しては光波測距儀を使用して、調査区を1/100スケール、遺構を1/20スケールで行った。写真撮影は、6×7サイズのブローニー判と35㎜判のモノクロ及びリバーサルフィルムを使用して撮影した。一部メモ及び管理用にデジタルカメラも使用した。遺構の完掘後に空中写真撮影を実施した。

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境
第２節　歴史的環境
第３節　浄光寺関係の研究史
第４節　過去の調査内容

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

玉名市は、熊本県北部の菊池川下流域を中心とした面積約 152 ㎢、人口約７万人の地方都市である。市街地の東側を一級河川の菊池川が大きく蛇行しながら流れ、途中繁根木川や木葉川が合流し有明海に注ぐ。南大門遺跡の東側を流れる境川は、小岱山麓に源を発し玉名市晒の地点で菊池川と合流していたが、近代の河川改修で直接有明海に流入するようになった。

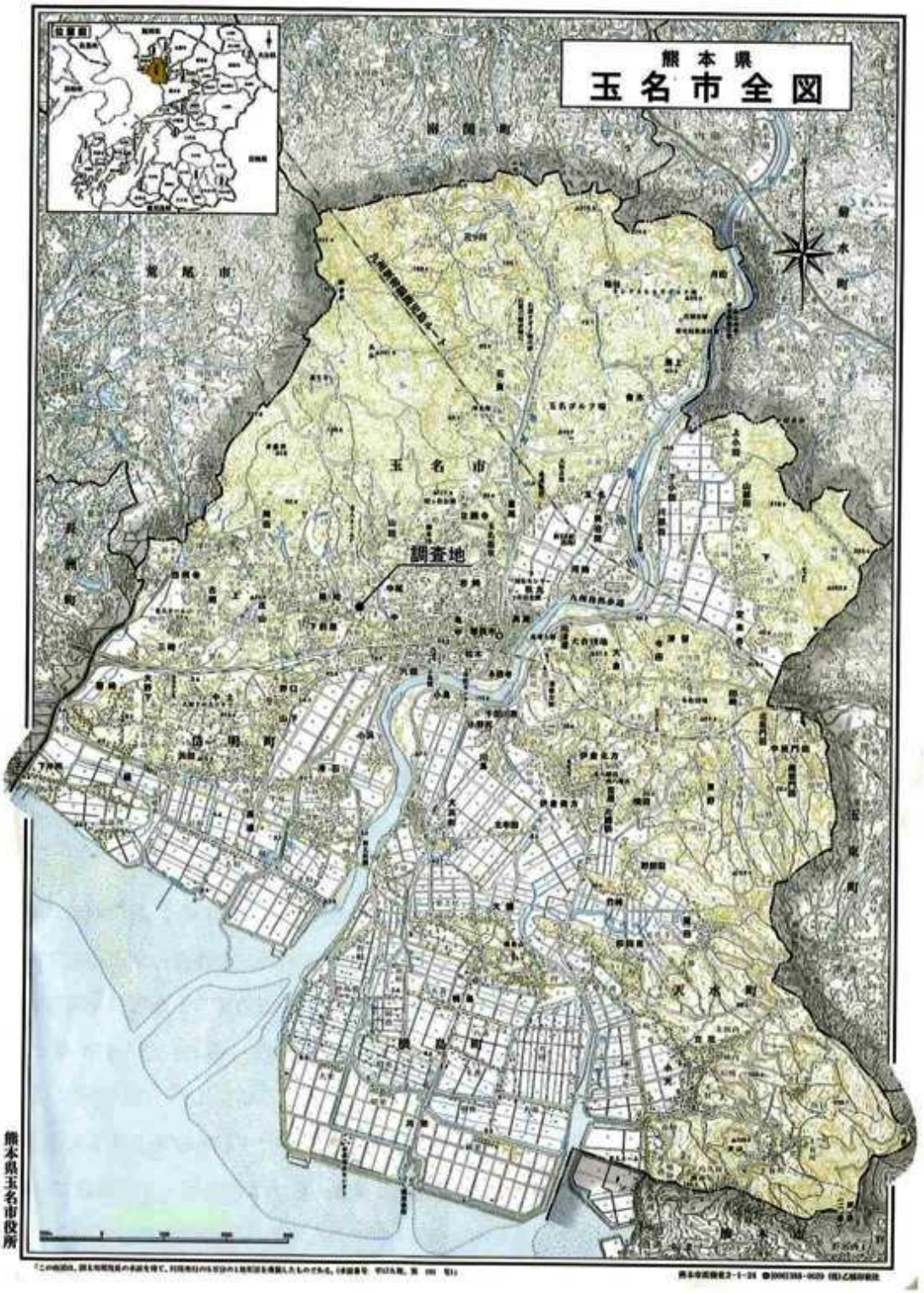
市の北側に位置する小岱山は風化の進んだ花崗岩山塊で、南側にかけて緩やかな丘陵地帯が広がっており、場所によっては花崗岩風化土のため斜面の崩落が認められる。市街地は低い洪積台地が浸食を受けた低く緩やかな丘陵に形成され、低地は水田になっている。

南大門遺跡は小岱山から南の低丘陵上に位置し、境川右岸の標高 16m ほどの地点に所在する。小岱山南麓の境川から行末川の間については、標高 10m ～ 30m 程度の低丘陵を細かな河川が開削し複雑な地形が形成される。丘陵上は比較的平坦であるが、小規模な谷が入り組み谷頭には湧水点も多い。その丘陵上に居住域が散在し近世の村として分布しており、その形成の始原は中世城館も多く所在することから、中世あるいは古代まで遡ると考えられる。

遺跡周辺は、中世に存在した浄光寺の区画跡とみられる南北 350m、東西 250m ほどの方形範囲が明瞭に残る。『玉名郡村誌』の絵図には浄光寺区画跡の宅地の周りが山林に囲まれているのが記載され、土塁が巡っている状況であったとみられる。現在は宅地化が進み、旧来の地形が失われた部分が多い。

遺跡の南側は三池往還が隣接する。三池往還はその起源は明らかではないが、筑後の三池町と高瀬町を結ぶ主要道であり、国道 208 号線が開通するまで幹線道路として機能した。国道 208 号線は太平洋戦争中に荒尾の陸軍第二造兵廠に通じる道路として建設が始まり、戦後は産業道路として工事が継続して行われ、昭和 40 年に一般国道 208 号線として制定された。さらに平成 23 年２月、玉名市岱明町開田から玉名市寺田までの玉名市街地を迂回する玉名バイパスが開通した。

現在の蓮華院誕生寺正門前の道路で、遺跡内を南東から北西にかけて斜めに通過する市道築山農協・上築地線は、大正 15 年発行の地形図（国土地理院蔵５万分の１地形図）では確認されず、昭和６年発行の地形図（同）で確認されるため、大正 15 年から昭和６年の間の建設である。



第１図　調査位置図

第２節　歴史的環境

玉名市域における縄文時代の遺跡は、当時の海岸線及び河川沿いに縄文時代前期から後期の貝塚が多く分布する。小岱山南麓の低丘陵端部には、古閑原貝塚、庄司貝塚、尾崎貝塚が所在する。弥生時代中期では、甕棺墓の検出例が多い。低丘陵上の全体的に調査例が散在し、南大門遺跡東側の東南大門遺跡の調査（平成６年度）では、42 基の甕棺墓が調査された。さらに弥生時代の低丘陵上には集落が営まれ、住居跡の調査例も多い。境川両岸の低丘陵上に建設された都市計画街路築地立願寺線の調査（平成５～６年度高岡原遺跡、平成 12 年度蓮華遺跡）では、弥生時代後期を中心とした住居跡群が検出され、丘陵一帯に集落の存在が想定される。前述の東南大門遺跡では、甕棺墓群と重複して木棺墓とみられる墓坑とそれを巡るように溝状遺構が検出され、溝内からは弥生時代後期から古墳時代初め頃の大量の土器が出土した。このことから墳丘墓とみられ、東南大門遺跡は地域の有力者集団の墓域であったことが推測される。

古墳時代には、菊池川右岸で４世紀後半に位置付けられる山下古墳、５世紀代の天水大塚古墳、菊池川左岸では５世紀代の院塚古墳、稲荷山古墳、６世紀半ばの大坊古墳まで前方後円墳が築造される。前述した市道築地立願寺線に伴う蓮華遺跡の調査では、古墳時代の住居跡 16 軒が検出され、出土遺物から５世紀末から６世紀代に位置付けられる。

古代の玉名郡においては、現在の玉名市立願寺を中心として白鳳期から奈良時代の瓦が大量に出土する立願寺廃寺跡のほか、玉名郡倉跡、玉名郡家跡などの郡衙関連施設とみられる遺跡が所在する。古代玉名郡司は玉名郡和水町瀬川出土の銅板墓誌に名前がみえる日置氏であり、立願寺一帯を根拠地にしていたとみられる。その日置氏も平安時代後期には、菊池川沿いに進出してきた菊池氏によって次第に勢力を弱めていったとみられる。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては、玉名郡内に荘園が成立していった。現在の荒尾市方面の野原荘、菊池川右岸の玉名市中央部から岱明町にかけての大野別符、菊池川左岸の伊倉を中心とした伊倉別府、菊池川右岸の玉名市玉名より上流にかけての仁和寺領玉名荘、玉名市梅林付近の安楽寺領玉名荘、南関町方面の臼間野荘がある。荒尾の野原荘は宇佐弥勒寺喜多院を領家とし、岩清水八幡宮を本家としていた。鎌倉時代には関東御家人の小代氏が地頭職を得て、その後戦国時代に至るまで一貫して地頭職を継いだ。仁和寺領玉名荘は、王家領の無量光院山鹿荘の一部を分割して仁和寺仏母領として成立した。伊倉別府は日置氏の所領であったのが、のちに宇佐八幡宮の所領となった。

大野別府は、現在の玉名市高瀬、立願寺、築地と岱明町を含む一帯で、高瀬の隣接地の繁根木には総鎮守と考えられる繁根木八幡宮とその神宮寺の寿福寺があった。寿福寺は明治時代以降廃

※国土地理院発行２万分の１地形図に加筆
荘域は『玉名市史上巻』による

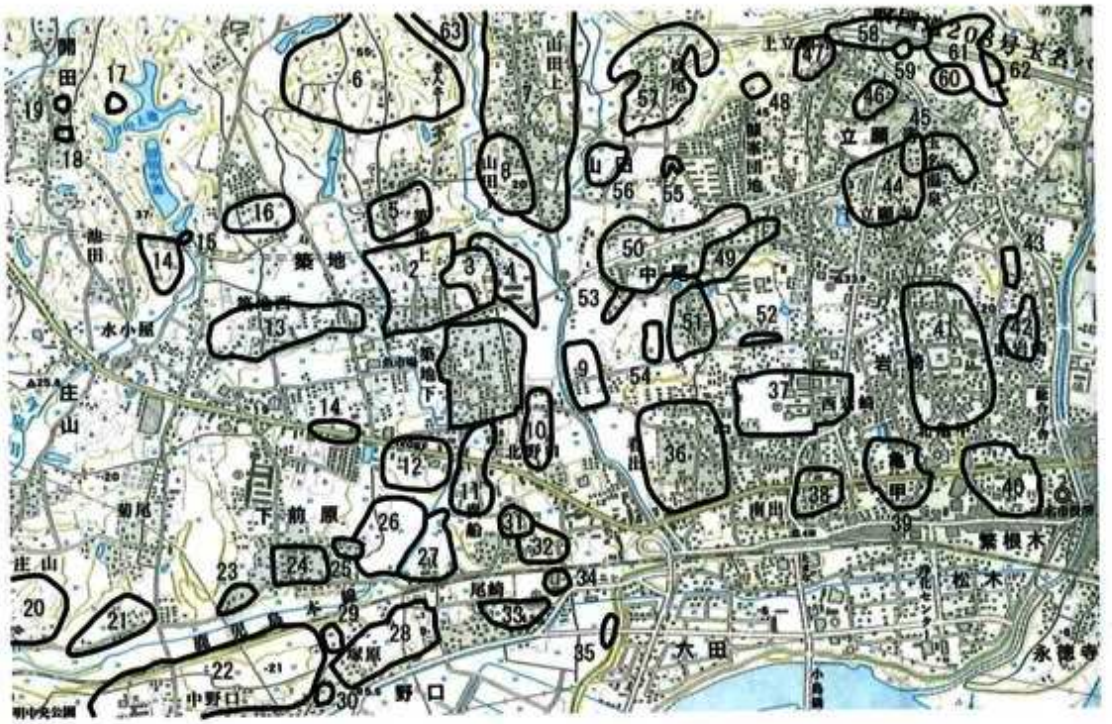
第２図　菊池川流域荘園分布図

寺となったが繁根木八幡宮は現存する。『石清水文書』によると、嘉祥３年（1237）には筥崎宮領の大野別符とされ、石清水八幡宮を本家とする半不輸領であったことが判明する。その大野別符を根拠地としていたのは紀姓大野氏であり、一族が各地に居住していたとみられる。

第３節　浄光寺関係の研究史

蓮華院誕生寺が所在する築地は、皇円上人生誕の地としての伝承がある。皇円上人は肥後阿闍梨とも称され、平安時代末期に活躍した天台宗比叡山延暦寺の高僧で、浄土宗を開いた法然の師でもあり、『扶桑略記』の著者としても知られる。遠江国笠原荘（現在の静岡県御前崎市）にある桜ヶ池には、皇円上人が人々を救う霊能を得ようと嘉応元（1169）年に入定し龍となった伝説がある。玉名市立願寺には蛇ヶ谷の地名が残り、桜ヶ池の伝承もあるという。

『肥後国誌』には「浄光寺蓮華院跡」「妙性寺跡」とあり、平重盛が父である清盛のために浄光寺蓮華院を、母のために尼寺を建立したとされる。さらに築地には景行天皇の行宮があり、それを移転させてそこに浄光寺と妙性寺の２寺を建立したとされる。寺域の南には南大門が築かれ、



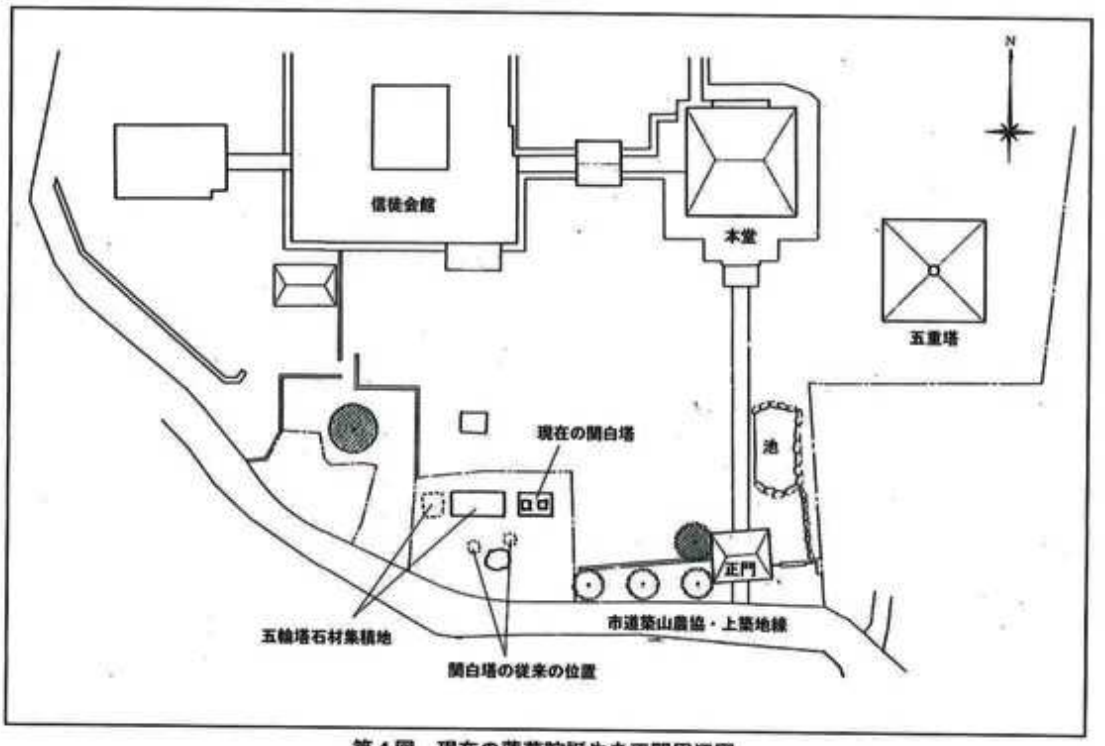
1 南大門遺跡
浄光寺跡
蓮華遺跡
2 築地館跡
3 築地東遺跡
4 古閑遺跡
5 築地ナギノ遺跡
6 西田遺跡
7 山田神社門前遺跡
8 五郎丸遺跡
9 中尾川原遺跡
10 東南大門遺跡
11 大原遺跡
12 築地市場遺跡
13 狐ん路遺跡
14 今見堂遺跡
15 浮田下ノ池の吐井出手
16 不馬向遺跡
17 律泉庵跡
18 万福寺跡
19 律泉庵薬師堂
20 東旗布遺跡
21 菊尾遺跡
22 年の神遺跡
23 下前原西遺跡
24 築地次郎国秀館跡
25 正覚寺跡
26 下前原遺跡
27 貴船西遺跡
28 塚原遺跡
29 塚原古墳
30 塚原石蓋土坑墓
31 貴船遺跡
32 貴船東遺跡
33 尾崎遺跡
34 尾崎貝塚
35 下河原遺跡
36 田島遺跡
37 玉名高校校庭遺跡
38 南出遺跡
39 亀甲遺跡
40 繁根木遺跡群
41 岩崎原遺跡
42 岩崎城跡
43 池田遺跡群
44 下立願寺遺跡
45 玉名郡倉跡
46 立願寺廃寺
47 玉名郡家跡
48 西畑遺跡
49 天神木遺跡群
50 高岡原遺跡
51 中尾馬場遺跡
52 中尾城ノ下遺跡
53 平島遺跡
54 中尾西原遺跡
55 高頭遺跡
56 山田中嶋遺跡
57 松尾平遺跡
58 松尾遺跡
59 大塚古墳
60 小塚古墳
61 大塚惣萩遺跡
62 冷水横穴群
63 保田地遺跡

第３図　調査地周辺遺跡分布図

その扉を開閉する音は吉次峠（現在の玉東町）まで響き渡ったという。昭和４年に現在の蓮華院誕生寺が再興され、昭和53年には小岱山中腹に奥之院が建立された。以来、真言律宗の有力な寺院として現在に至る。

昭和30年代はじめごろには、田邊哲夫氏の研究で「東妙寺文書」の中に浄光寺に関する内容が記載されているのが確認された。永仁６（1298）年７月14日「左弁官下大宰府」の後段に「且肥後国浄光寺者沙門惠空私建立之寺院也、 雖非勅願、已被下宣旨、被禁断殺生 」と述べられていることから、永仁６年以前に惠空が建立した寺院ということが判明する。惠空については、「密教系譜」によると、功徳院流快雅、皇圓、成源、信空（叡尊の弟子）等から教えを受けた慈胤がいてその弟子が惠空となっていることから、この僧である可能性が強い、とある。

真言律宗の総本山である西大寺は、称徳天皇の勅願寺であり奈良時代には東大寺などとともに南都七大寺として大きな勢力を持っていたが一時衰退し、鎌倉時代に中興の祖と崇められる叡尊（1201 ～ 1290）によって再興された。鎌倉時代後半になると、幕府執権の北条氏の勢力が強まり、



第４図　現在の蓮華院誕生寺正門周辺図

北条家の家督家である得宗が幕府の実権を掌握していた。その得宗と密接な関係を築いたのが真言律宗であり、元寇の際には敵国退散の祈願を盛大に行うなど勢力を増していった。また得宗領と呼ばれる北条得宗家の私領を獲得する拠点にもなったともいわれる。九州における真言律宗の主要寺院である肥前国神埼荘の東妙寺には、元寇の際の博多防衛に参加した武士が得た恩賞地が多く寄進されている。「蒙古合戦勲功賞配分状」(『深江文書』) には、玉名郡関係者の大野田島十郎幸隆、大野岩崎太郎などが恩賞を受けてそれをそのまま東妙寺に寄進している。

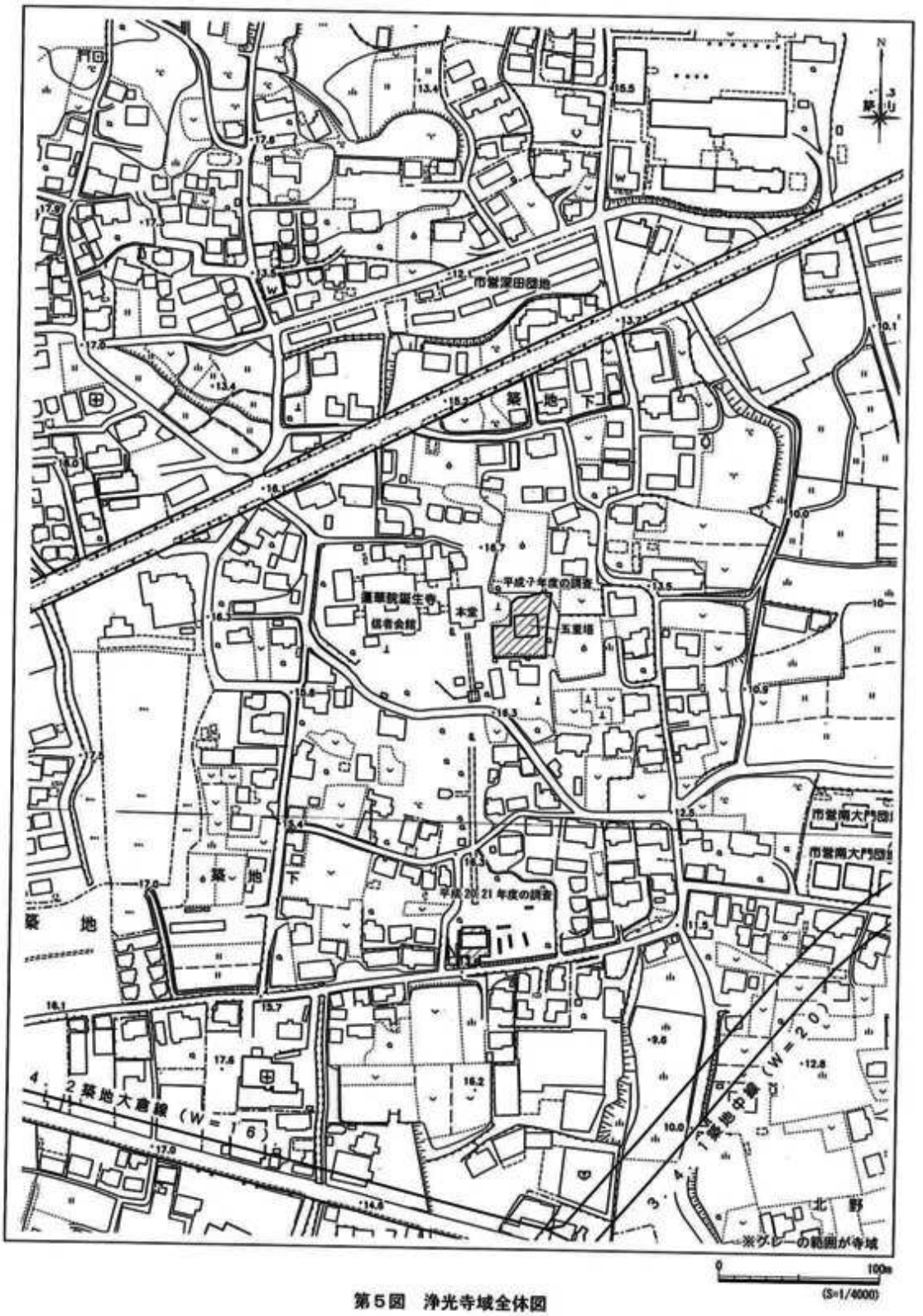
東妙寺には、鎌倉時代末期製作と推定される「東妙寺并妙法寺境内絵図」(国指定重要文化財) が伝わっている。図は北を上に中央に田手川の流域、左に東妙寺の伽藍と寺域の在家、右岸に妙法寺の伽藍と門前の在家を描いており、浄光寺の状況もこのイメージをもとに想定されてきた。寺域の南側のほぼ中央には南大門、現在の本堂がある周辺が浄光寺の本堂など主要施設の推定地、そこから東側が尼寺の妙性寺、その北側には浄光寺塔頭の蓮華院の所在が推定されている。

浄光寺域のほぼ中央の地点には、地元で関白塔とよばれる無銘の大型五輪塔が2基所在する。真言律宗では鎌倉時代後期から室町時代にかけて、律僧墓塔に梵字を刻まない大型五輪塔を造営するのが流行する。最大の五輪塔は西大寺にある叡尊塔であり、浄光寺の関白塔もそれに次ぐ規模を誇る。九州では最大規模であり、浄光寺の住職クラスの墓塔であろうことから、真言律宗内においても浄光寺は重要な位置を占めていたとみられる。

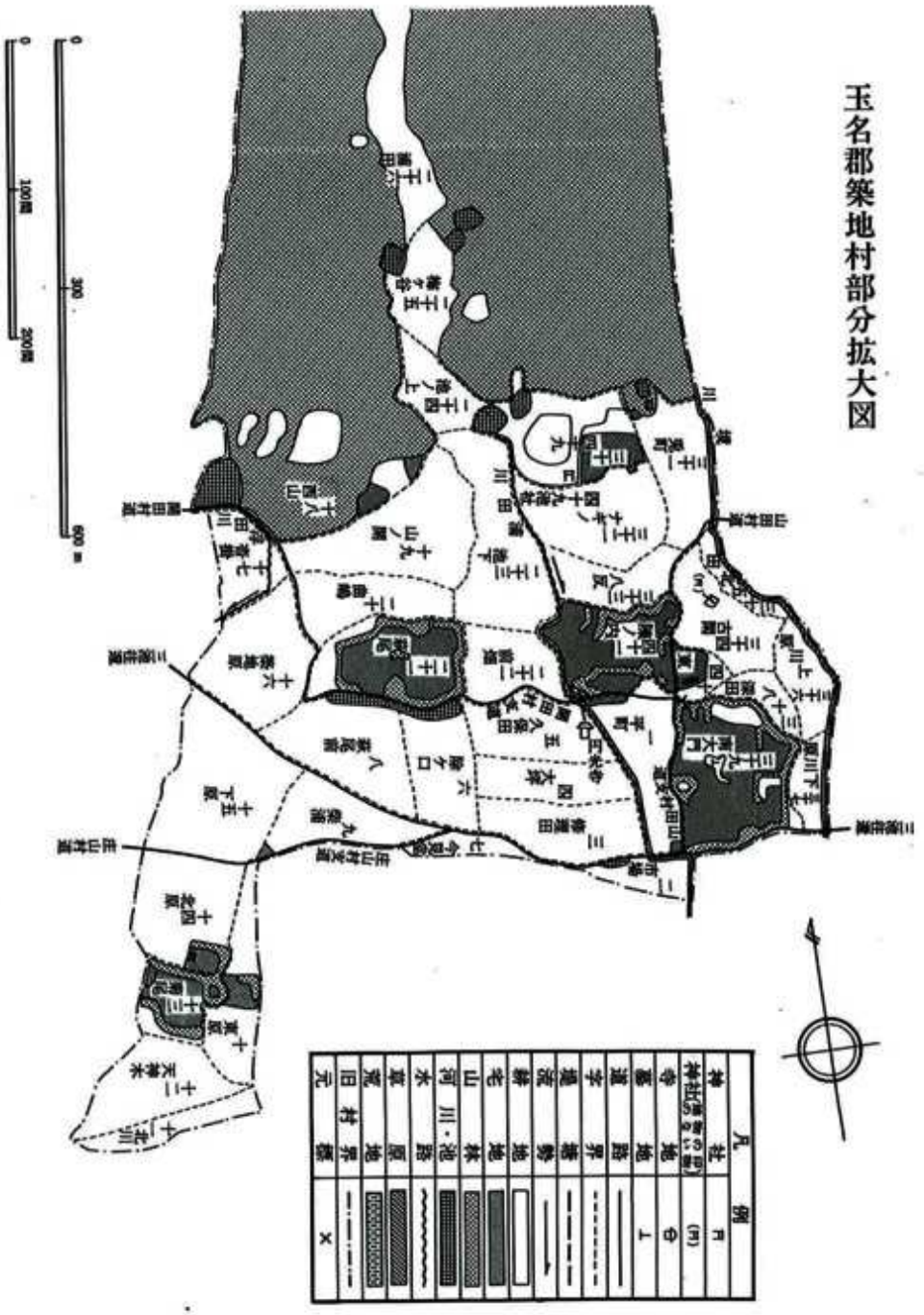
慶長9 (1604) 年9月付の築地村検地帳には、浄光寺の田畑計6町3反9畝余とあり、浄堂院・東之坊・西之坊は居屋敷のみが記載されている。

紀姓大野氏は、『紀宗善大野家由緒書上』(清源寺文書) によると、建久三年 (1193) 大野小次郎紀国隆が玉名郡内大野250町を給せられて下向したことになっているが、実際はそれ以前からの在地領主としての見方が大方で一致している。大野氏の出生に関しては不明な点も多く史料上確認できない中で、田邉哲夫氏は、古代以来の豪族で日置氏と共に玉名郡統治の関係者であることを示唆している。さらに大野氏の本来の根拠地が築地ではないかとし、『肥後国誌』に記載されている浄光寺の平氏創設説などを踏まえて、惠空上人による中世浄光寺の創設以前に、平氏の影響下での寺院の存在に言及している。

第7図は、現在の地籍図が作成される以前に使用されていた地籍図 (玉名市役所税務課で保管) であり、明治〜大正時代の地割状況を示している。現在の蓮華院誕生寺の敷地には、水路が巡り区画されている様子が見て取れる。

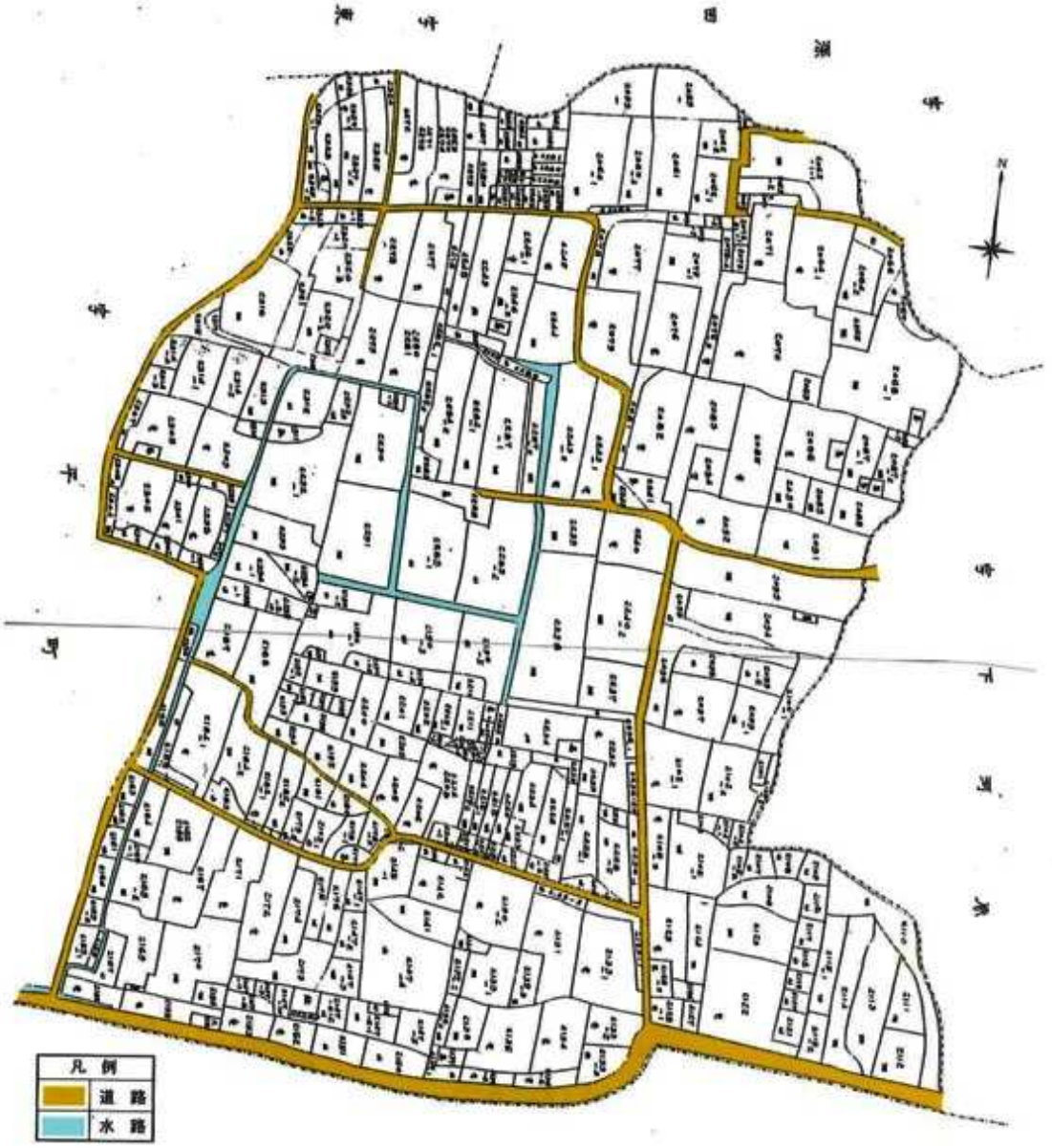

市営深田団地
築地下
平成7年度の調査
本堂
五重塔
信者会館
市営南大門団
平成20・21年度の調査
築地
北野
※グレーの範囲が寺域
100m
(S=1/4000)

第５図　浄光寺域全体図



第６図　築地字図

（玉名市史編集委員会編 1992『玉名市史資料篇１絵図・地図』玉名市より）



第７図　字南大門地籍図

第４節　過去の調査内容

昭和４年の蓮華院誕生寺建設時に、当時残っていた釈迦堂と鎮守堂を撤去して工事が行われ、その際に浄光寺に関連するとみられる遺物が出土した。

昭和34年には、今回の調査区である南大門推定地において市営西南大門住宅建設の造成工事が行われた。その際の調査で、箱式石棺や製鉄関係遺構、土坑群、竪穴式石室とみられる遺構が検出された。また、敷地南西側の地点では中世瓦が集中して出土した。昭和38年には、現在の本堂建築に伴い青銅製仏頭などが出土した。これら蓮華院再興後の初期の出土物は、田添夏喜氏によって『浄光寺蓮華院跡出土品』（玉名市文化財調査報告書第５集、1989年刊行）として報告されている。

昭和61年度から63年度にかけては、玉名市教育委員会によって、国庫補助を受けて「浄光寺跡寺域確認調査」が行われた。調査は田辺哲夫氏、田添夏喜氏らを中心に寺域全体を対象としてトレンチ調査が行われた。その結果、中世の遺構や遺物以外にも弥生時代から近世にかけての遺構や遺物が出土した。その成果は過去の調査内容なども含めて報告書にまとめて刊行された（玉名市文化財調査報告第７集）。また同時期の昭和62年には、蓮華院誕生寺信者会館建設に伴う調査も行われ、成果の一部は前掲報告書及び玉名市史上巻に掲載されている。

平成７年には、五重塔建設に伴う発掘調査が玉名市教育委員会によって行われた。当時の担当者による報文を元に末永が加筆・修正して編集し、以下詳細を述べる。

※補項　蓮華院誕生寺五重塔建設に伴う調査

１．調査に至る経緯

平成６年、蓮華院誕生寺境内の南東部分に五重塔を建設することが、玉名市教育委員会に知らされた。建設予定地には土塁と正方形の基壇状に高くなっている部分があり、建設に先だって調査を行うこととした。翌平成７年に現地調査でさらに土塁が２重に残存している状況であることを確認し、工事で影響が及ぶ部分について調査を実施することとなった。

２．調査の経緯及び組織

調査主体：玉名市教育委員会

調査期間：平成７年５月８日～６月９日

調査責任者：玉名市教育委員会教育長　生森基哉

調査事務担当者：社会教育課長　小山文雄

審議員　寺本栄久

課長補佐　永畑　勉

調査担当：主事　江原浩司

嘱託　田中康雄

専門調査委員：玉名市立歴史博物館長　田邉哲夫

発掘作業員：楠田一記　谷口義孝　山西二夫　田添良子　築森カス子　高田ミサヲ　西依元三郎　西浦道雄　平島千代子　小柳末子　草野貴美代　畠田荘仁

3．調査の成果

今回の調査地点は、第7図の地籍図での2289-2番地の南東側である。調査区に接する東側と南側の溝は、地籍図にも水路として表記されている部分に相当する。以下、確認した遺構について述べる（第8図）。

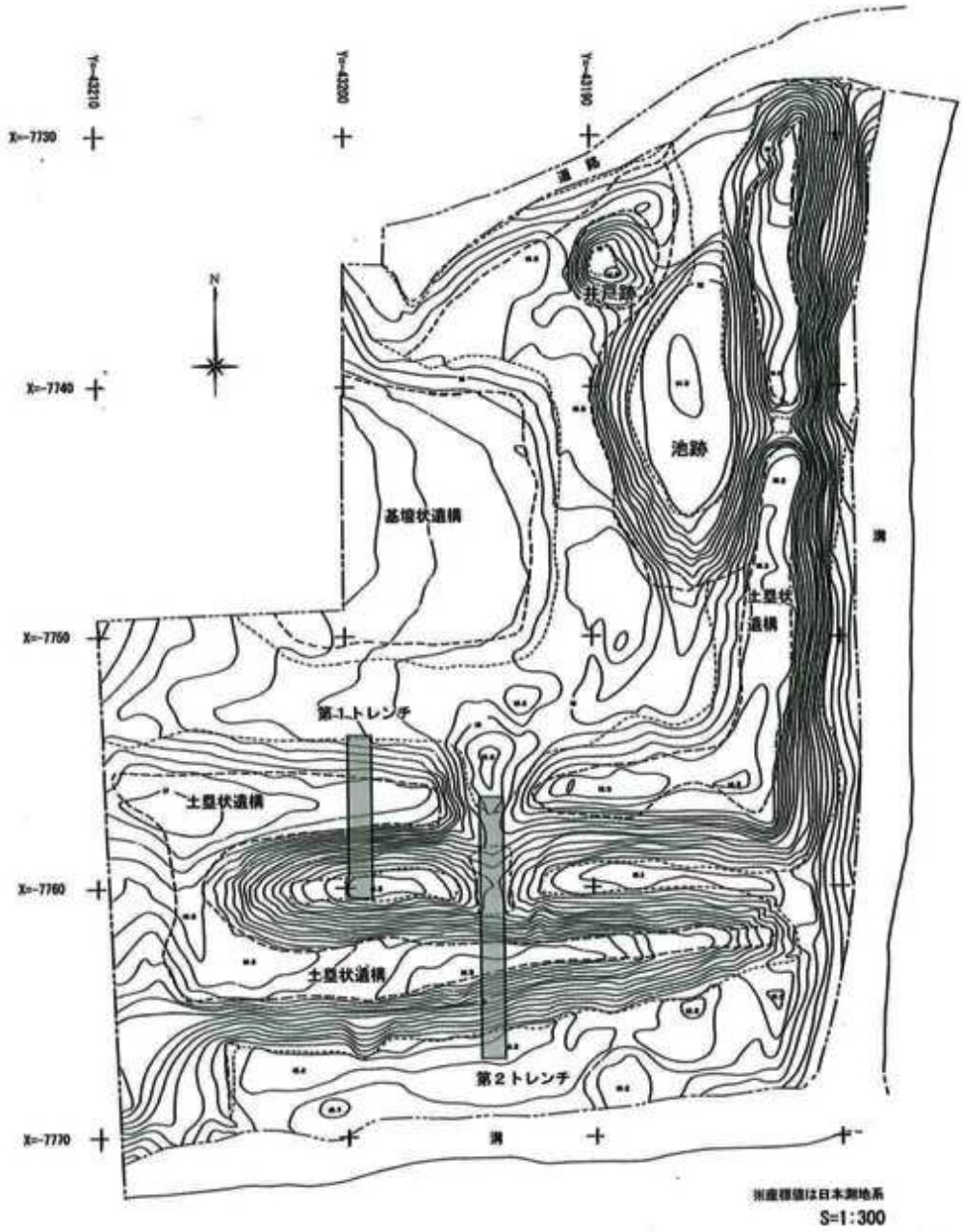
（1）土塁状遺構について

調査区内で確認した遺構は、基壇状遺構と土塁状遺構である。基壇状遺構を取り囲むように土塁状遺構が配置されている。土塁状遺構は調査区西から東へ伸び、東側で北に伸びている。南側の東西方向は二重になっており、西側で接続している。2本の土塁はそれぞれ、東西約30m、幅は最大で約6m、高さは最大で約1.3mを測る。2本の土塁状遺構のうち、北側はほぼ中央に窪み状に途切れる部分がある。南側は、東へ行くほど次第に幅が狭くなる。南北方向の土塁状遺構は、長さ約32m、最大幅約6m、最大高約50cmを測る。南側が高く北側へ向って低くなる。南北方向の土塁状遺構の北側と同様、ほぼ中央に窪み状に途切れる部分がある。方向は、それぞれ南北と東西方向にほぼ一致する。

ご住職の話によると、調査区の北東に池があり、その池の西に井戸があったそうで、それを示す窪みが残っていた。

（2）基壇状遺構について

基壇状遺構の全体形状は、約10m四方の正方形を呈し、高さは10cmほどである（第10図）。全体的に西から東へなだらかに下がる。基壇状遺構にサブトレンチを設定して層位の確認を行ったところ、版築などの明確な地業は確認されなかった。基壇状遺構の北側面には石組が認められる。石組内からは現代の遺物が出土している。配列に規則性がないことから、畑などを区切る境



第８図　調査前現況測量図

石である可能性が高い。

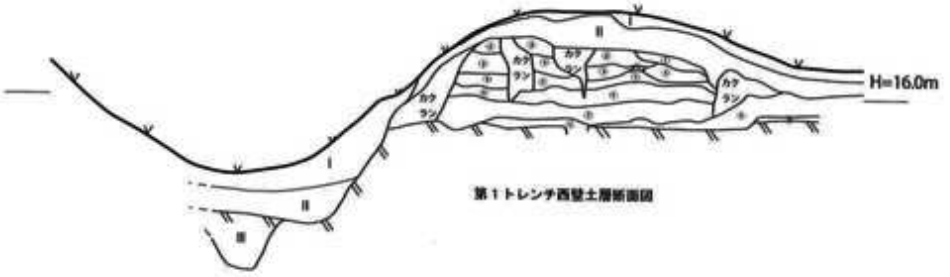
（３）トレンチの状況（第９図）

第１トレンチは、東西方向の２本の土塁のうち、北側の土塁に直交するよう南北方向に設定したトレンチである。土塁部分の層位は、Ⅰ、Ⅱ層の下に①～⑩層を確認した。その下のⅢ層から

は、弥生時代後期の土器片が出土したことなどから、住居跡等の遺構があったとみられる。

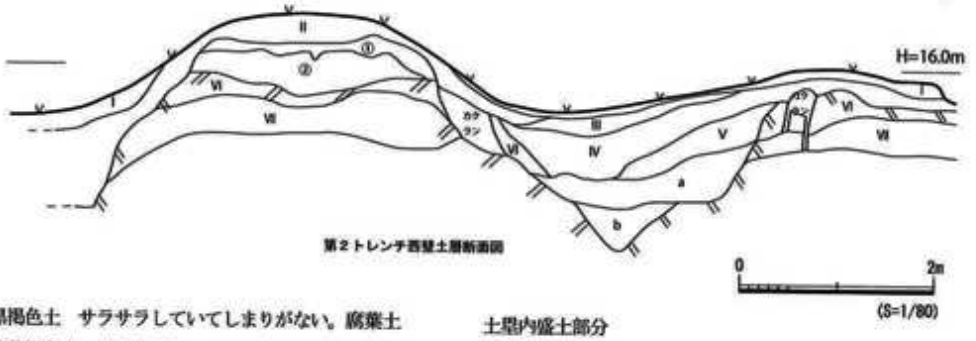
第２トレンチは、東西方向の２本の土塁の北側土塁で、一部途切れるように低くなっている部分から南側土塁にかけて南北方向に設定したトレンチである。南側土塁の層位は、①②層が盛土と判断される。北側土塁では盛土部分はみられなかった。

２本の土塁の間の溝状部分は、第１トレンチで土塁の最高部と溝状部分の最低部との高低差が、現況面で約1.7mである。第２トレンチではa･b層の堆積がみられ、一部Ｖ字形の断面形状を呈す。



Ⅰ 黒褐色土　サラサラしていてしまりがない。腐葉土
Ⅱ 暗黄褐色土　サラサラしていてしまりがない。
Ⅲ 黄褐色土　かたくひきしまったローム層
Ⅳ 暗灰色粘性土　粘性強くしまりを有する層

① 茶褐色土　かたくひきしまっている土層　土中に黄褐色の粒を多少含む
② 暗茶褐色土　かたくひきしまっている土層
③ 暗褐色土　かたくひきしまっている土層
④ 暗黄褐色土　かたくひきしまっている土層
⑤ 暗茶褐色土　かたくひきしまっている土層
⑥ 暗褐色土　かたくひきしまっている土層
⑦ 暗茶褐色土　かたくひきしまっている土層
⑧ 明茶褐色土　かたくひきしまっている土層
⑨ 暗黄褐色土　かたくひきしまった層
⑩ 黒褐色土　粘性を有するひきしまった層

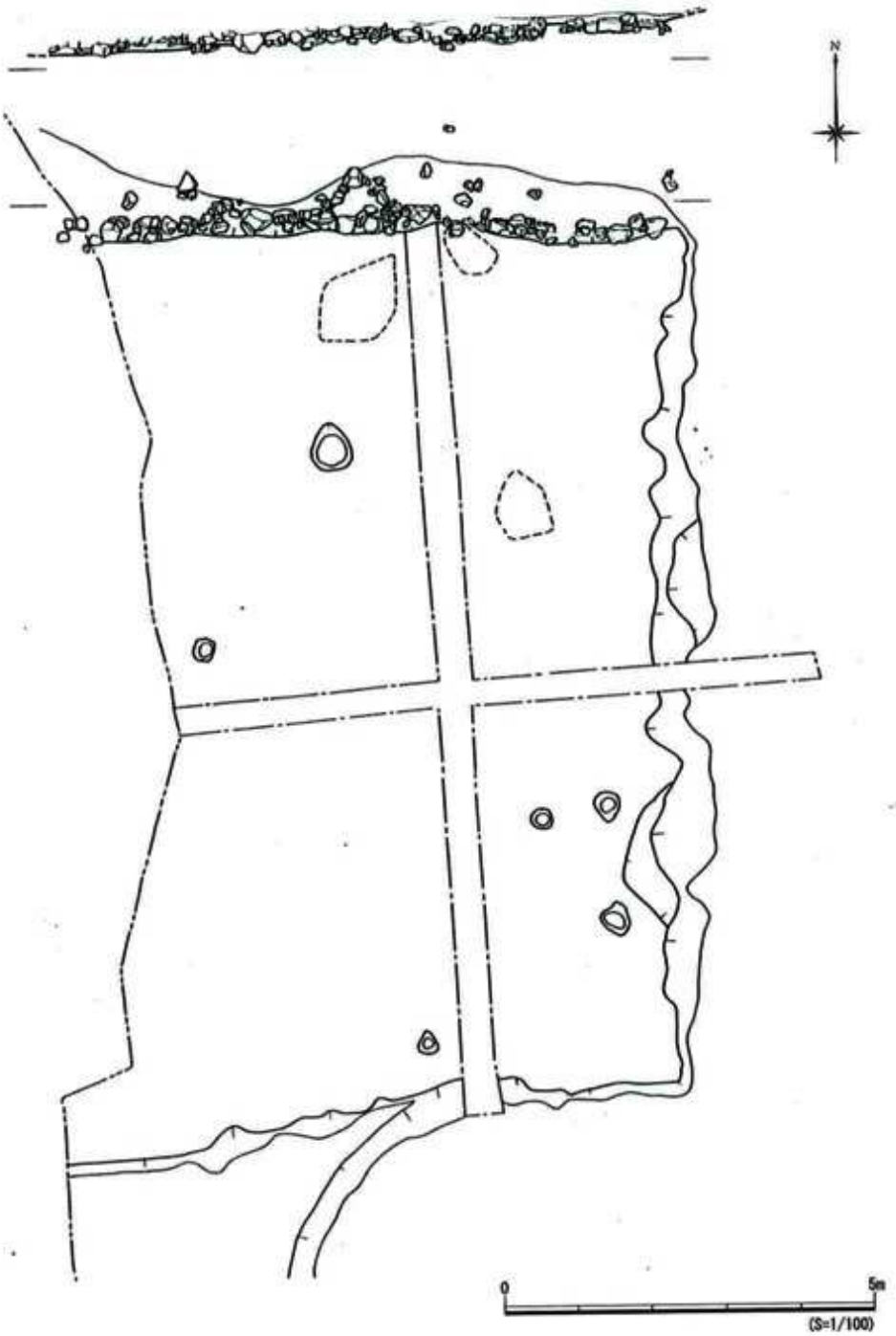


Ⅰ　黒褐色土　サラサラしていてしまりがない。腐葉土
Ⅱ　暗黄褐色土　サラサラしていてしまりがない。
Ⅲ　暗茶褐色土　サラサラしていてややしまりのある土層
Ⅳ　暗褐色土　ゴリゴリとした土質でややしまりのある土層
Ⅴ　茶褐色土　さらさらしていてしまりのない土層
Ⅵ　明茶褐色土　やや粘性を有ししまりを有する土層
Ⅶ　黄褐色土　サラサラしていてしまりがある土層

土塁内盛土部分
① 暗茶褐色土　さらさらとした土質、しまりを有する層
② 暗褐色土　さらさらとしてしまりがある土層

溝内埋土部分
a　暗茶褐色土　サラサラしていてしまりがない層
b　暗灰色粘土　粘性が強くしまりを有する層

第９図　トレンチ西壁土層断面図



第１０図　基壇状遺構実測図

（4）遺物

遺物はすべて基壇状遺構に伴うものである。

1は瓦質の擂鉢で口径37.0㎝を測る。口縁部は幅9㎜で、内側には9～10本の縦方向の条線が施されている。色調は黒灰色で、胎土には石英砂を少量含み、焼成は良好である。

2は瓦質の擂鉢で口径33.6㎝を測る。口縁部の外側は角のとれたゆるやかなカーブを描いており、内側は鋭角な角が付く。内側にはハケ目後に3本単位の縦方向の条線が施されている。色調は外側が暗褐色で、内側は口縁部から口縁部直下にかけての約2㎝幅では暗褐色、それより下部では黒褐色である。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好である。

3は瓦質の擂鉢で口径27.4㎝を測る。口縁部は角のとれたコの字状となる。内側はハケ目後に7本単位の縦方向の摺目がある。色調は黒灰色で、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

4は瓦質の擂鉢で口径20.0㎝を測る。口縁部断面の形状はやや角のとれたM字状となる。内側には7本単位の不定方向の条線が施されている。色調は灰褐色で、胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

5は瓦質の擂鉢で口径37.0㎝を測る。口縁部の外側は緩やかなカーブを描いており、内側はやや角のとれた形状となる。内側には3本単位の縦方向の摺目がある。色調は灰色で、胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

6は土師質の擂鉢で口径30.8㎝を測る。口縁部断面の形状はコの字状となる。内側には13本単位の縦方向の摺目がある。色調は外側が茶褐色、内側が淡赤褐色で、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

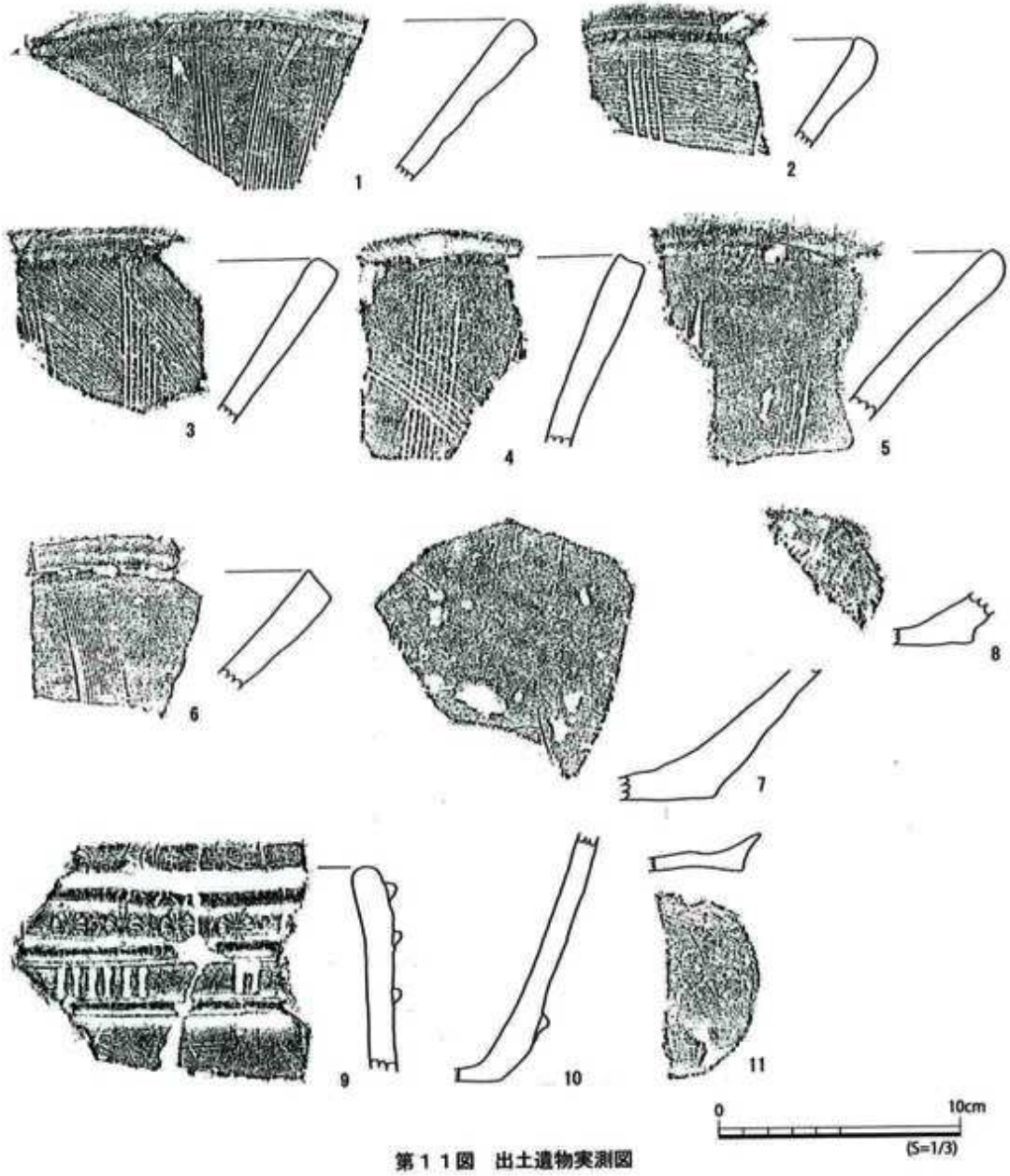
7は瓦質の擂鉢で底径13.4㎝を測る。外面は製作時の指圧痕による凹凸が残っており、底部の端部にはやや出っ張りがある。内面には7本単位の縦方向の摺目がある。色調は外面は黒褐色で、内側が暗褐色、胎土には細砂粒を少量含み、焼成は良好である。

8は土師器坏の底部とみられる。

9は瓦質の火鉢で、口縁部直下には約2㎝の間隔を置いて水平に3条の凸帯が巡る。上段の凸帯間には15の花弁を持つ花文が刻印され、下段にはヘラ状の工具による刺突文が施されている。色調は灰褐色で、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

10は瓦質の湯釜で胴部から底部にかけての部分である。底部から胴部まで、ほぼ直線的に立ち上がる。内部はハケ目調整され、色調は茶褐色、胎土に細砂粒を少量含み、焼成は良好である。

11は土師器皿で、口径8㎝、器高1.6～1.8㎝、底径7.4㎝を測る。底部から外湾しながら口縁部に至る。底部には糸切り痕が見られる。色調は淡赤褐色で、胎土には細砂粒を含み、焼成は良好である。



第１１図　出土遺物実測図

４．まとめ

今回の調査区内で確認した遺構は、基壇状遺構と土塁状遺構である。各遺構の形状や配置などの状況から、四方に土塁を巡らせ、基壇状遺構上になんらかの建物が存在していた状況が想定される。基壇状遺構内には地業など明確な基礎構造は確認されず、建物自体は比較的簡易な構造であったことが推察される。出土遺物は、多くが中世後半に位置付けられる。また弥生時代の遺物も多く、住居群の拡がりが予想される。

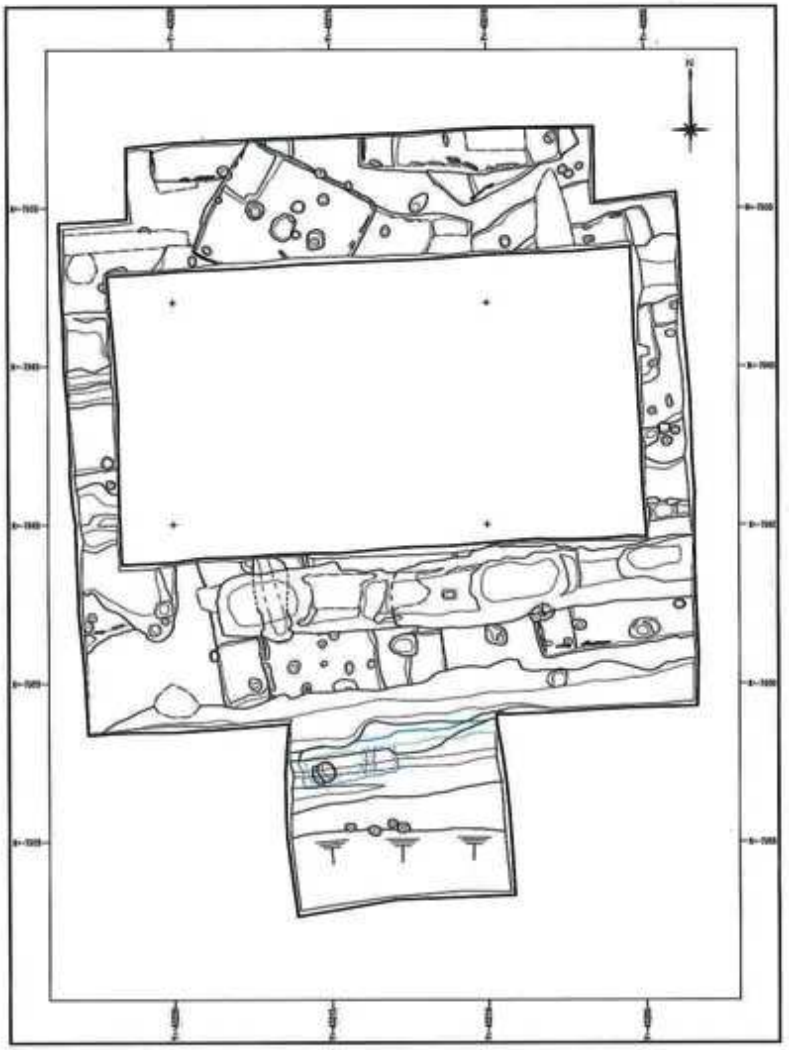
第Ⅲ章　調査の成果

第１節　概要
第２節　弥生時代の調査
第３節　中世の調査
第４節　その他の遺構・遺物

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　概要

蓮華院誕生寺南大門建設予定地で埋蔵文化財に対して影響が及ぶ範囲について発掘調査を行った。調査を行った範囲は第１２図の通りである。また、今回の発掘調査で弥生時代から近世までの遺構が確認された。確認された遺構は弥生時代の遺構が多くを占め、浄光寺跡に関連すると思われる溝跡が調査区南側から検出された。発掘調査の調査成果は以下の通り報告する。



第１２図　全時代遺構配置図（縮尺 250 分の 1）

第２節　弥生時代の調査

今回の発掘調査で検出された弥生時代の検出遺構は、住居址 18 基である。ただし、調査区の設定範囲や中世の遺構の影響で、ほとんどの遺構の全容を確認するのは困難であった。遺物は竪穴住居址から多数出土し、壷や甕以外に鐸形土製品や家形土器片が出土した。

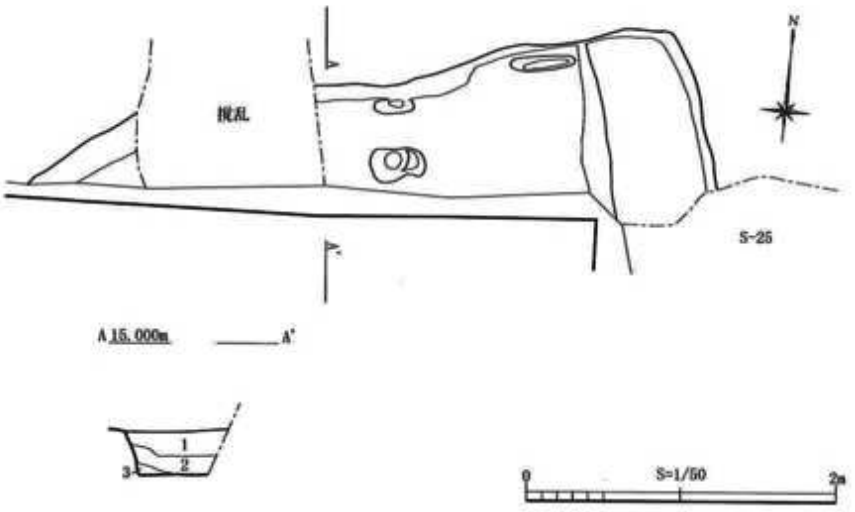
それでは以下の通り、弥生時代の遺構について所見を記述する。なお、遺構番号については本報告書の作成時に再度振り分け、発掘調査時に設定した番号は () に記載している。

１号住居址 (S-6)

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。4 号住居址（S-9）・6 号溝跡（S-25）と重複し、4 号住居址より新しく、6 号溝跡より古い。東西長 4.3 mを検出し、南北長 1.3 m、深さ約 0.3 mである。規模や平面形、硬化面を有することから竪穴住居と判断した。ベッド状遺構は地山削り出しである。

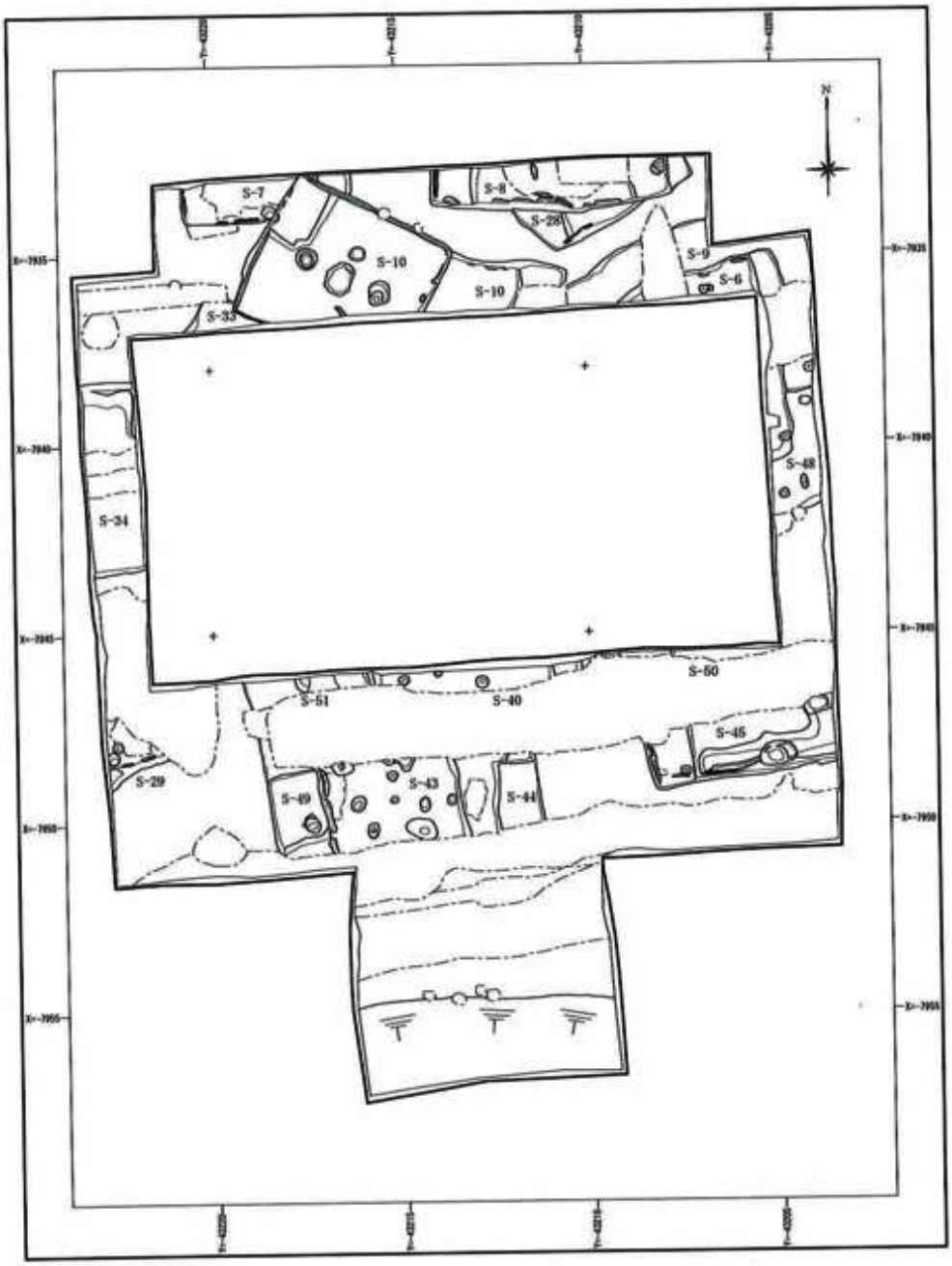
埋土は 3 層に分層される。土層の注記は第 13 図のとおりである。

遺物は、弥生時代後期の土器が少量出土している。

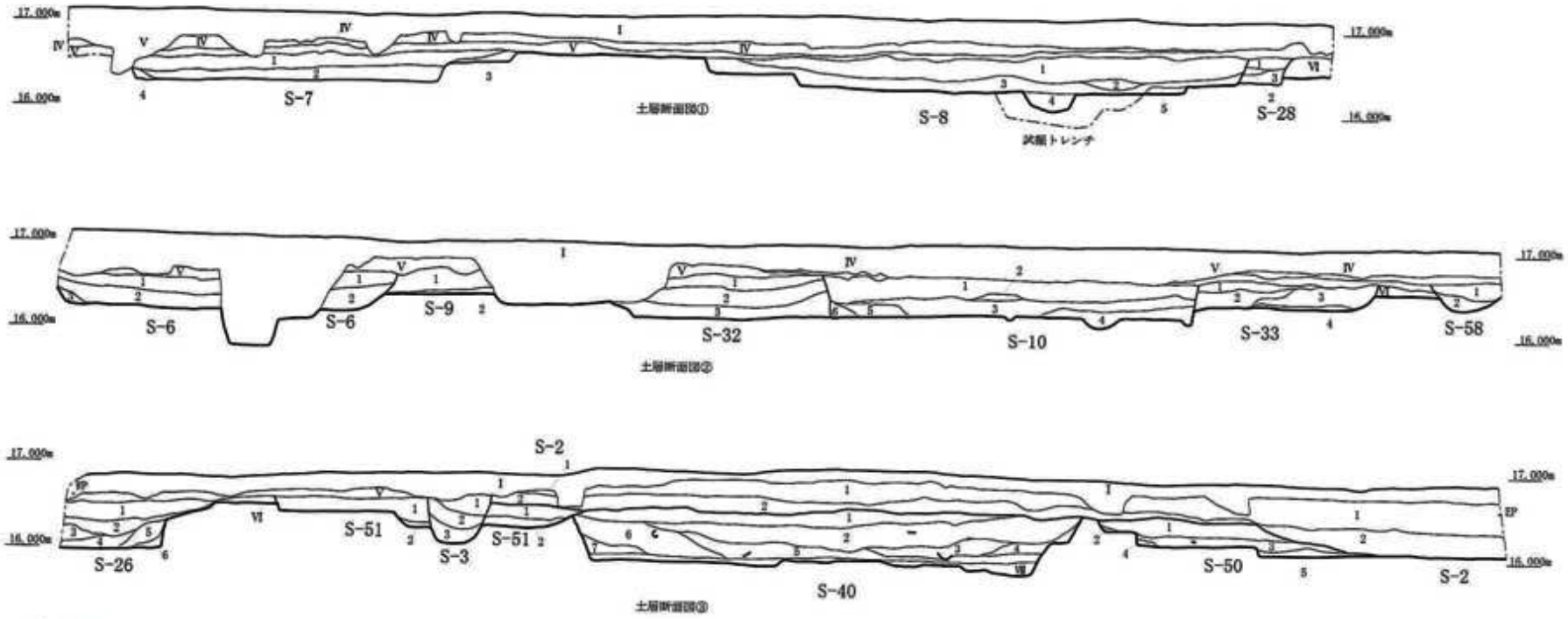


1層：暗褐色土（10YR 3/3）
　しまりあり、粘性あり。1cmの褐色ブロックを含む。
2層：暗褐色土（10YR 3/3）
　しまりあり、粘性あり。炭化物含む。
3層：暗褐色土（10YR 3/3）
　固くしまり、粘性あり。

第１３図　１号住居址 (S-6) 実測図



第１４図　弥生時代遺構配置図（縮尺 200 分の 1）



【基本層序】

Ⅰ層：表土および南大門住宅建設時の整地層。

Ⅱ層：暗褐色土（7.5YR3/3）
粘性があり、しまっている。径0.1cmの礫を多く含み、
近世陶磁器を含む。調査区の南側のみ確認できる。

Ⅲa層：暗褐色土（7.5YR3/3）
粘性があり、しまっている。カーボンを少し含み、
径0.1cmの礫を多く含む。褐色ブロックがまばらに混入。
調査区の南側のみ確認できる。中世の遺物を含む包含層である。

Ⅲb層：暗褐色土（7.5YR3/3）
粘性があり、しまっている。カーボンを少し含み、径0.1cmの
礫を多く含む。Ⅲa層よりも褐色ブロックの量が多く混入する。
調査区の南側のみ確認できる。中世の遺物を含む包含層である。

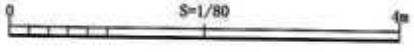
Ⅳ層：黒色土（10YR2/1）
固くしまり、粘性強い。径0.1cmの礫・カーボンをわずかに含む。
弥生時代の包含層。

Ⅴ層：黒褐色土（10YR3/2）
固くしまり、粘性強い。径0.1cmの礫・カーボンをわずかに含む。
弥生時代の包含層。

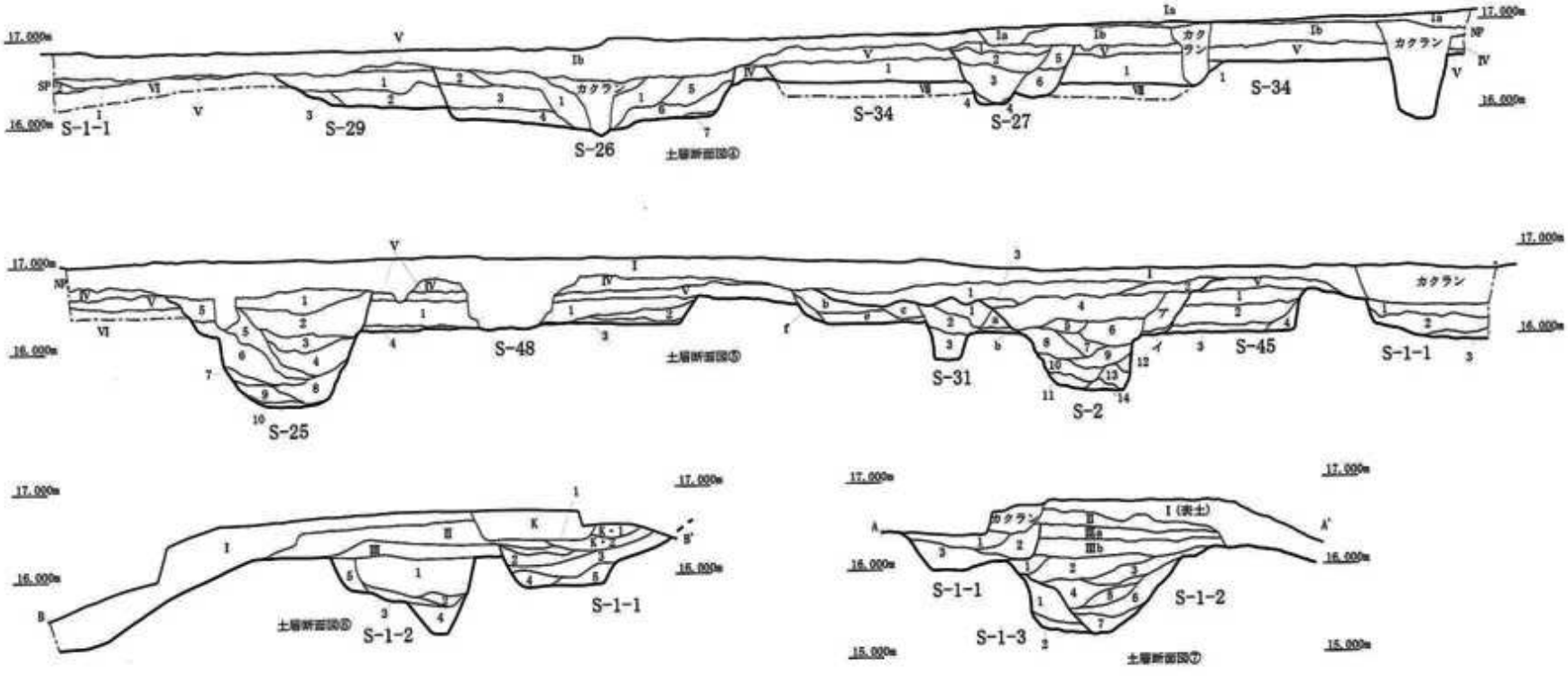
Ⅵ層：褐色土（10YR4/4）
しまっており、粘性がある。

Ⅶ層：黒褐色土（10YR3/2）
ブロック状に固くしまっている。

Ⅷ層：褐色土（10YR4/6）
固くしまっており、径0.1～0.5cmの礫を非常に多く含む。
※遺構埋土の礫は、Ⅷ層起源である。



第１５図　調査区壁土層断面図



【その他の層】

※S-21に伴う埋土の可能性が高い

a層：黒褐色土(10YR3/2)
しまりあり、粘性強い。径0.1～0.3cmの礫を多く含む。

b層：暗褐色土(10YR3/3)
しまりあり、粘性強い。径0.1～0.3cmの礫を多く含む。

c層：黒褐色土(10YR3/2)
しまりややあり、粘性強い。径0.1～0.3cmの礫・カーボンを少し含む。

d層：暗褐色土(10YR3/3)
しまりあり、粘性強い。径0.1～0.3cmの礫・カーボンを少し含む。

e層：暗褐色土(10YR3/3)
しまりあり、粘性強い。径0.1～0.3cmの礫・カーボンをわずかに含む。

f層：黒褐色土(10YR3/2)
しまりあり、粘性強い。径0.1～0.3cmの礫・カーボンをわずかに含む。VI層ブロックを少し含む。

S=1/80

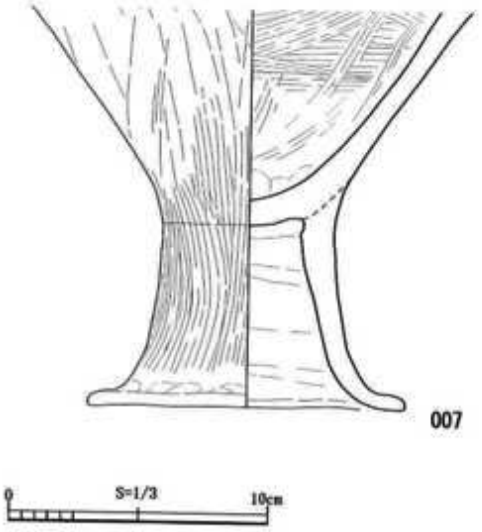
0　4m

※　ア・イは住居址埋土

ア層：黒褐色土(7.5YR3/2)
しまりあり、粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫・カーボンを多く含む。

イ層：暗褐色土(7.5YR 3/3)
しまりあり、粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫・カーボンを多く含む。

第１６図　調査区壁土層断面図



第１７図　１号住居址（S-6）出土遺物実測図

007は台付きの鉢である。鉢部は底部から頸部にかけて大きく外方へ直線的に開き、口縁部において短く外側へ反る。器面は内外面ともにハケ後ナデである。脚部は直立気味であるが、下方から端部にかけて強く外側に向って湾曲する。器面は外面が縦方向のハケ、内面が工具による横方向のナデである。脚部内面の鉢部との接合箇所には、強めの横ナデが認められる。なお、この型式は周辺地域では類例がほとんどないため、時期を比定するのは困難である。

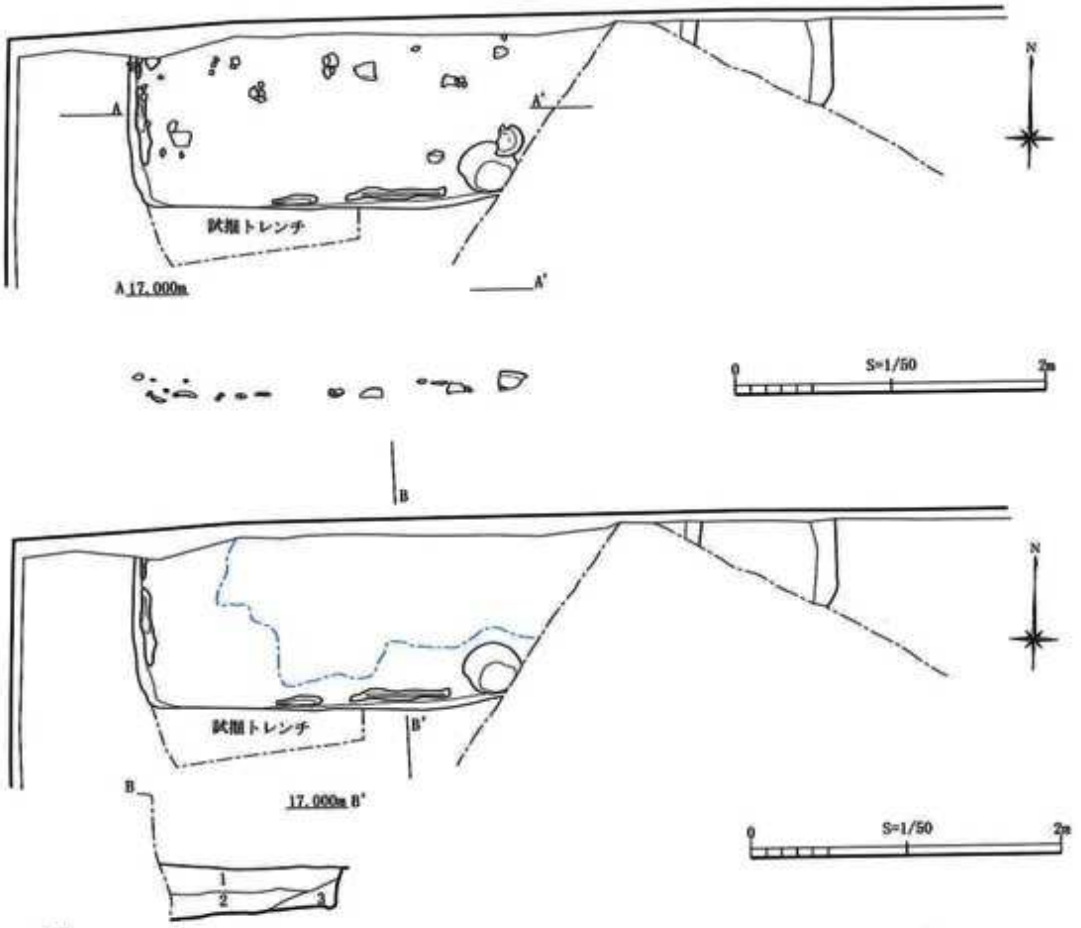
２号住居址（S-7）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。５号住居址（S-10）と重複し、５号住居址より古い。東西長4.5ｍを検出し、南北長1.1ｍ、深さ約0.3ｍである。規模や平面形、硬化面を有することから竪穴住居と判断した。今回の調査では、竪穴住居の南側約1/4のみを確認した。東側でベッド状遺構を確認した。ベッド状遺構は地山削り出しである。一部壁周溝を確認した。その規模は幅10cm程度、深さ３～5cmである。

埋土は３層に分層される。遺物は弥生時代後期後半の土器が少量出土している。

008は台付きの鉢である。鉢部は底部から頸部にかけて緩やかに内側に湾曲し、頸部で屈曲して、口縁部は外方へ向って直線的に開く。器面は内外面ともにハケで、部分的にナデで最終調整を行っている。脚部は直線的で外方へ開く。脚部高は相対的に低めである。器面調整は内外面ともにハケ、一部ナデである。脚部内面の鉢部との接合痕は、ナデ調整にて丁寧に消されている。後期後半前後に見られる型式と考えられる。

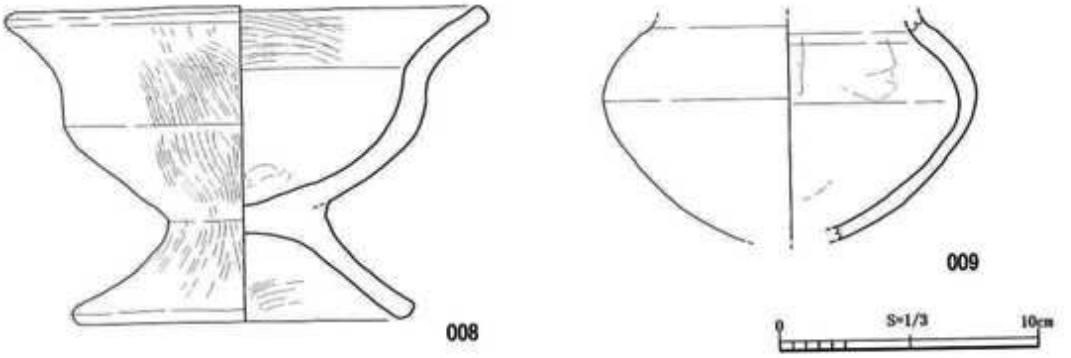
009は小型の壺、もしくは鉢である。倒卵状の体部をなすが、胴部最大径はやや上位にある。口縁部と底部を欠くため時期の比定は難しいが、類似する形態の土器は、後期後半頃にある。器面の最終調整は内外面ともナデだが、内面下半はケズリが施され、器壁が薄くなっている。



S-7

1層：暗褐色土（10YR 3/4）固くしまり、粘性あり。径0.1～0.3cmの褐色ブロック・カーボンを少し含む。
2層：暗褐色土（10YR 3/3）固くしまり、粘性あり。径1cm程度の褐色ブロック・カーボンを少し含む。
3層：暗褐色土（10YR 3/4）ややしまっており、粘性あり。カーボンをわずかに含む。

第１８図　２号住居址（S-7）実測図

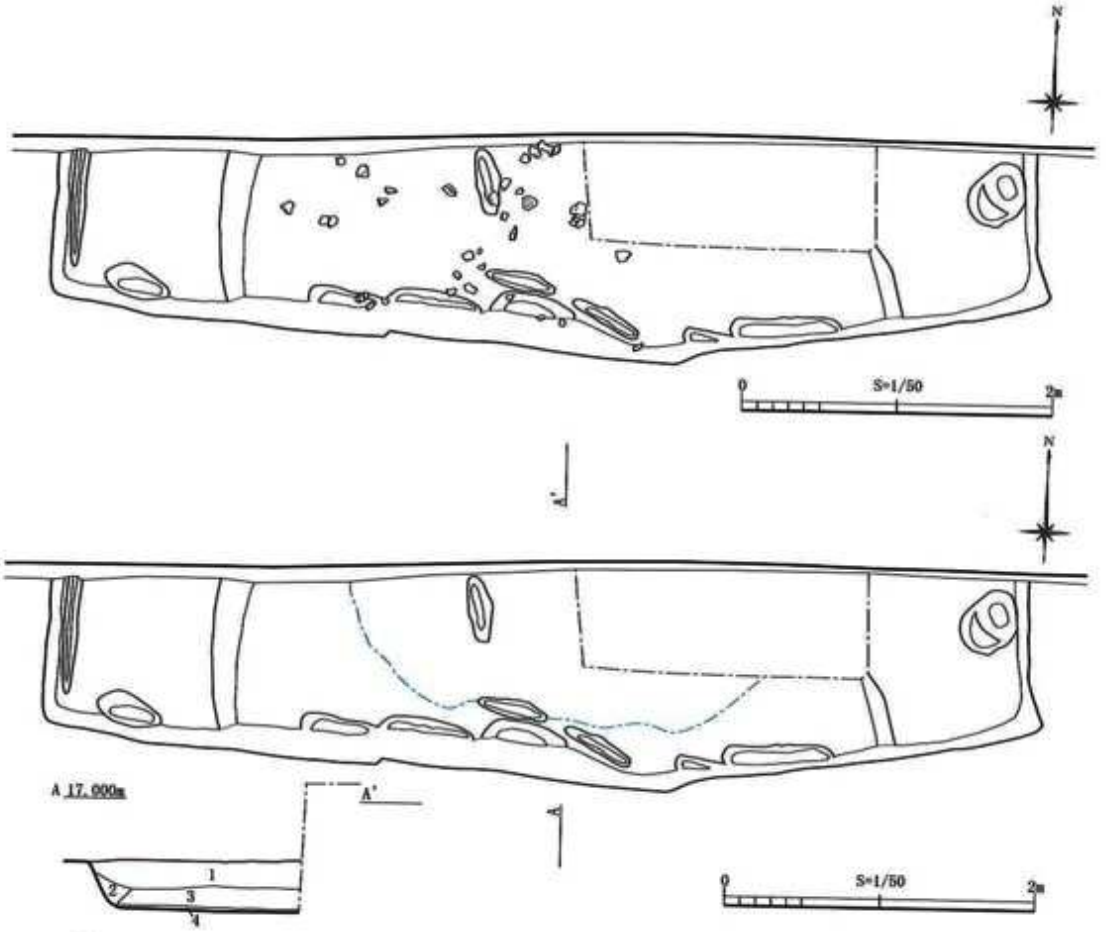


第１９図　２号住居址（S-7）出土遺物実測図

３号住居址（S-8）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。６号住居址（S-28）と重複し、６号住居址より新しい。東西長 6.4 mを検出し、南北長 1.3 m、深さ約 0.3 mである。規模や平面形、硬化面を有することから竪穴住居と判断した。今回の調査では、竪穴住居の南側約 1/4 のみ検出した。東西側にベッド状遺構を確認した。ベッド状遺構は両方とも地山削り出しである。一部側壁溝を確認した。その規模は幅 10cm 程度、深さ 3 ～ 5cm である。

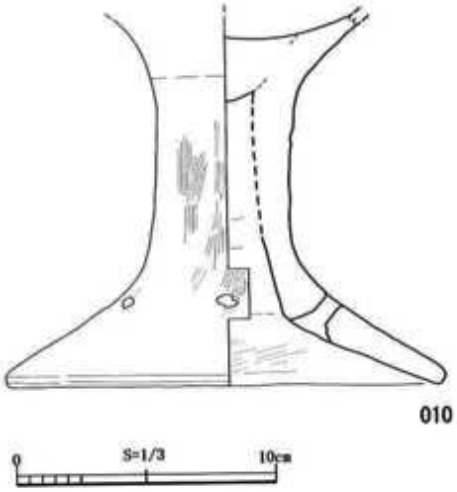
埋土は４層に分層される。遺物は、弥生時代後期の土器が少量出土している。



S-8
1 層：黒褐色土（10YR 2/3）しまりあり、粘性あり。径 0.5cm の褐色ブロック・カーボンをわずかに含む。
2 層：黒褐色土（10YR 2/2）しまりあり、粘性あり。径 0.5cm 程度の褐色ブロック・カーボンを少し含む。
3 層：黒色土（10YR 2/1）ややしまりなく、粘性あり。
4 層：暗褐色土（10YR 3/3）固くしまり、粘性あり。カーボンをわずかに含む。

第２０図　３号住居址（S-8）実測図

010は高坏の脚部である。直立気味の脚は下方で屈曲し、外方へ直線的に開く。脚端部は若干の面を持ちつつも、丸く収まる。屈曲部には現状で4つの円形穿孔が認められるが、もう一つ二つあった可能性がある。穴の状況から、穿孔は焼成前に外側から内側に向って施されたと推測される。脚部と坏部の接合法に関して、脚部内面の状況から粘土塊の充填が見られる。器面調整は内外面ともにハケとナデが併用されているが、脚内面の円筒部には、横方向の明瞭なケズリが観察できる。これらの諸特徴から、後期後半前後の高坏と推測される。

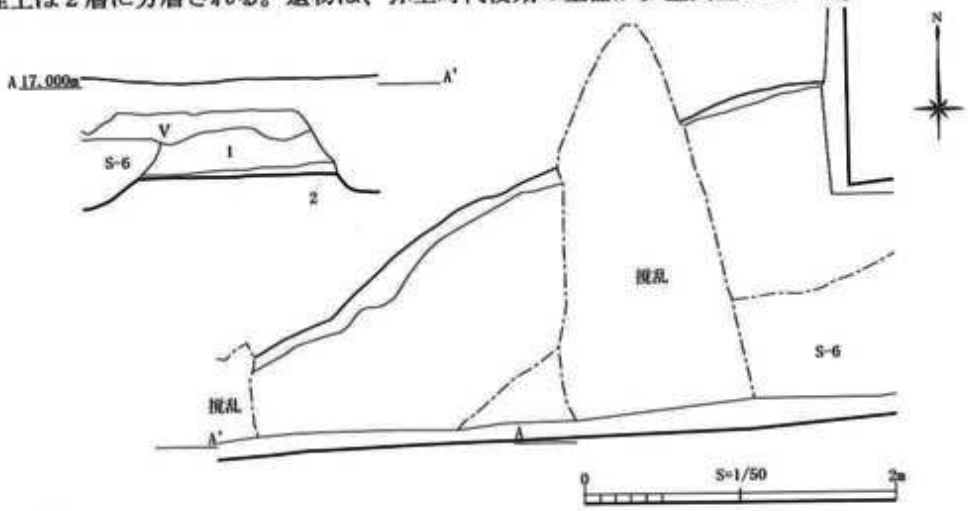


第２１図　３号住居址（S-8）出土遺物実測図

４号住居址（S-9）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。１号住居址（S-6）と重複し、１号住居址より古い。東西長4.0ｍを検出し、南北長1.1ｍ、深さ約0.2ｍである。規模や平面形から竪穴住居と判断した。今回の調査では竪穴住居の南側約1/4のみを確認し、そのほとんどは１号住居址・撹乱によって削平されている。住居西側での８号住居址との重複関係は、撹乱により不明である。東側については、住居壁面が明確ではなかった。

埋土は２層に分層される。遺物は、弥生時代後期の土器が少量出土している。



S-9
1層：暗褐色土（10YR 3/3）しまりあり、粘性あり。カーボンをわずかに含む。
2層：黒褐色土（10YR 3/3）しまりあり、粘性あり。カーボンをわずかに含む。径0.1cmの礫をわずかに含む。

第２２図　４号住居址（S-9）実測図

5号住居址（S-10）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。2号住居址（S-7）と重複し、2号住居址より新しい。東西長4.7m、南北長4.0m、深さ約0.4mである。今回の調査では、竪穴住居の南側約4/5を確認した。住居中央に炉跡を確認した。その規模は長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.1mである。住居中央に火床面を、炉跡の両側で柱穴を確認した。柱穴は埋土状態や平面形態から、抜き取られている状態である。住居北西隅に床面からの高さ約0.1mのベッド状遺構を確認した。また側壁溝を住居全周で確認した。その規模は幅0.1m、深さ0.1mである。

埋土は4層に分層される。4層の堆積はⅣ層を主体とし壁周辺に多く見られることから、壁周堤起源の埋め戻し土である可能性がある。遺物は弥生時代後期の土器が少量出土している。

6号住居址（S-28）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。3号住居址（S-8）と重複し、3号住居址より古い。東西長4.3mを検出し、南北長1.6m、深さ約0.3mである。規模や平面形、硬化面を有することから竪穴住居と判断した。今回の調査では、竪穴住居の南側約1/4のみ確認した。南西側でベッド状遺構を確認した。ベッド状遺構は地山削り出しである。一部壁周溝を確認した。その規模は幅10cm程度、深さ3～5cmである。

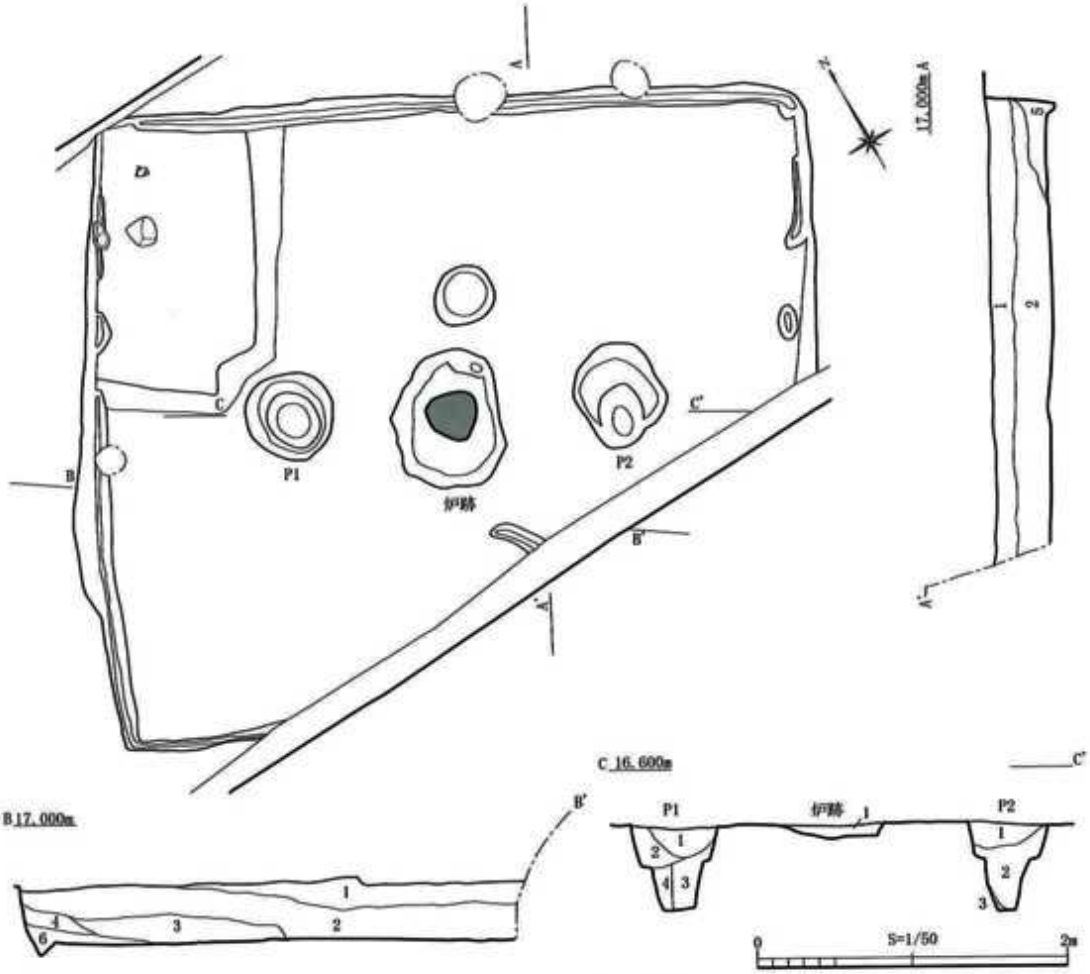
遺物は、弥生時代後期の土器が少量出土している。

011は小型の直口鉢である。側面観は半円形をなす。口縁端部は丸く収まる。器壁の厚さは3～4mmと非常に薄い。後期後半前後を中心に見られる型式である。

7号住居址（S-29）

調査区南側、Ⅵ層上面にて検出した。2号土坑（S-26）と重複し、2号土坑より古い。東西長1.6mを検出し、南北長1.8m、深さ約0.3mである。規模や平面形、硬化面を有することから竪穴住居と判断した。今回の調査では、竪穴住居の南側約1/5のみ確認した。南側の床面に小ピットを3基確認している。また、南側壁面においてスロープ状の立ち上がりが見られることから、これを入口施設の一部と考えた。

埋土は3層に分かれる。遺物は、弥生時代後期の土器が多量に出土している。



S-10　P1埋土

1層：黒褐色土(10YR 2/2) 粘性強い。礫を多く含む。
　0.5～3ｃｍの褐色ブロックを多く含む。

2層：黒褐色土(10YR 2/2) 粘性強い。礫を多く含む。
　0.5～3ｃｍの褐色ブロックを少し含む。

3層：黒褐色土(10YR 2/2) 固くしまり粘性強い。
　0.5～2ｃｍの褐色ブロックをわずかに含む。

4層：暗褐色土 (10YR 3/4) ややしまりあり粘性強い。
　0.5～3ｃｍの褐色ブロックを少し含む。

S-10　P2埋土

1層：黒褐色土(10YR 2/2) しまりあり粘性強い。礫を多く含む。
　0.5～3ｃｍ褐色ブロックをまばらに多く含む。

2層：黒褐色土(10YR 2/2) しまりあり粘性強い。0.1ｃｍの礫を多く含む。0.5～3ｃｍの褐色ブロックを少し含む。

3層：暗褐色土(10YR 3/4) しまりあり粘性強い。0.1ｃｍの礫を多く含む。0.5～3ｃｍの褐色ブロックを多く含む。

S-10　炉跡埋土

1層：黒褐色土(10YR 2/2) 固くしまり粘性強い。
　カーボン・焼土を多く含む。

S-10　住居址埋土

1層：黒褐色土(10YR 2/2) しまりあり粘性をおびる。
　カーボンをわずかに含む。

2層：黒褐色土(10YR 2/2) 非常に固くしまり粘性をおびる。
　カーボンをわずかに含み焼土がまとまってみられる。
　廃棄時の痕跡。

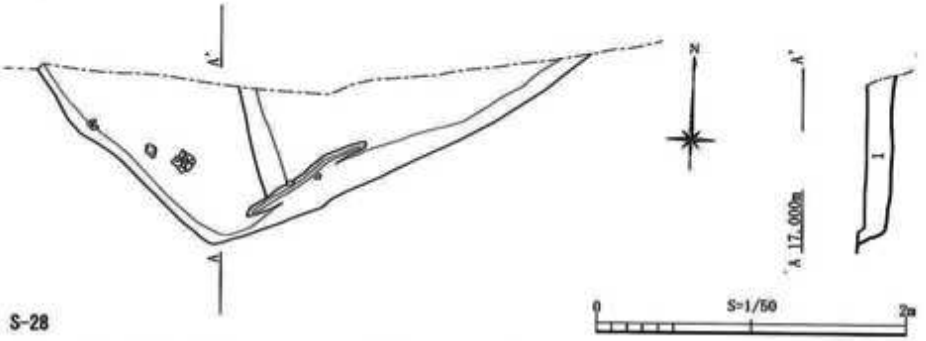
3層：暗褐色土(10YR 3/3) 固くしまり粘性をおびる。
　3～5ｃｍ程度の褐色ブロックをまばらに含む。

4層：黒褐色土(10YR 2/2) しまりあり粘性をおびる。
　カーボンをわずかに含む。

5層：黒褐色土(10YR 2/2) しまりあり粘性をおびる。4層と同じ。

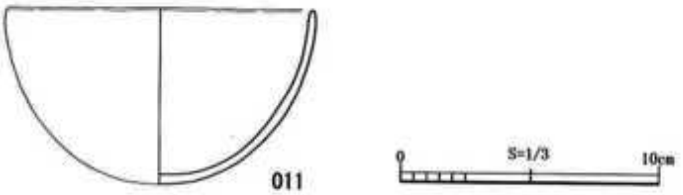
6層：黒褐色土(10YR 2/2) しまりあり粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。※ 2層上層にて部分的な硬化面が存在する。

第２３図　５号住居址 (S-10) 実測図

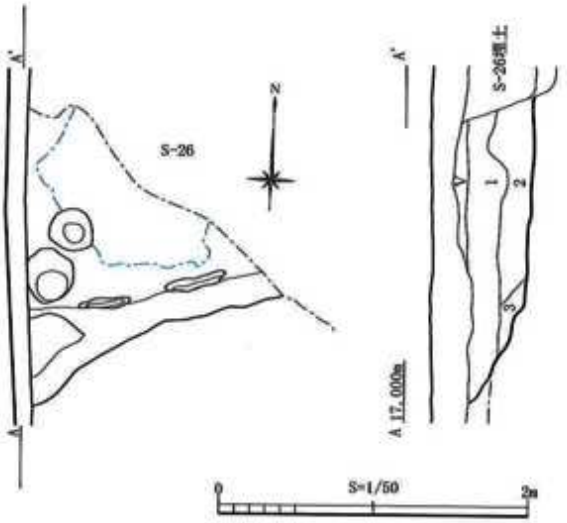


1層：暗褐色土（10YR 3/3）しまりあり、粘性をおびる。径0.1～0.3cmの礫とカーボンをわずかに含む。

第２４図　６号住居址（S-28）実測図



第２５図　６号住居址（S-28）出土遺物実測図



S-29

1層：黒褐色土(10YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボンを少し含む。

2層：黒褐色土(10YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボンを少し含む。黒色ブロック(1□ 3cm)を少し含む。

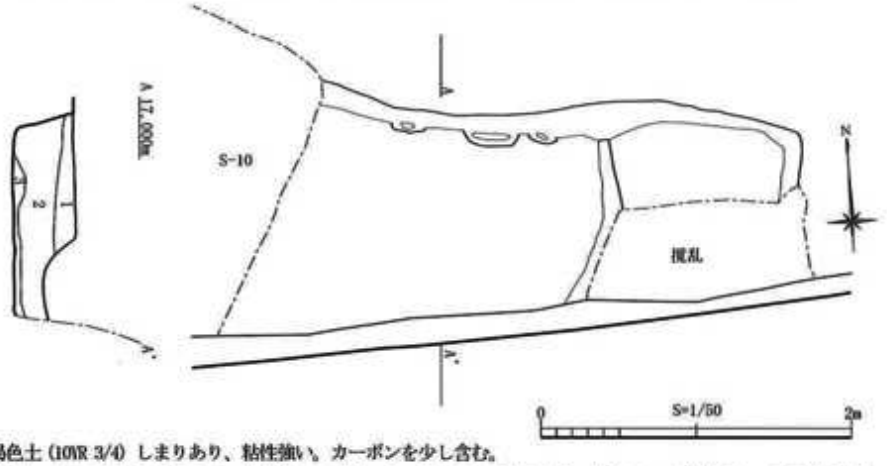
3層：暗褐色土(10YR 3/3) しまっており粘性強い。カーボンを少し含む。1～5cmの褐色ブロックを多く含む。

第２６図　７号住居址（S-29）実測図

８号住居址（S-32）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。5号住居址(S-10)と重複し、5号住居址より古い。東西長3.8m、南北長1.2m、深さ約0.4mである。今回の調査では、竪穴住居の北側約1/5のみ確認した。住居東隅に床面からの高さ約0.1mのベッド状遺構を確認した。

埋土は3層に分層される。遺物は、弥生時代後期の土器が少量出土している。



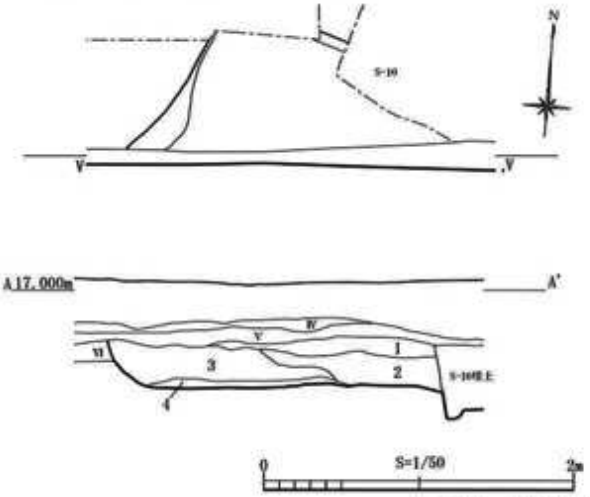
S-32
1層：暗褐色土（10YR 3/4）しまりあり、粘性強い。カーボンを少し含む。
2層：暗褐色土（10YR 3/4）しまりあり、粘性強い。焼土・カーボンをわずかに含む。径0.2cmの褐色ブロックを多く含む。
3層：暗褐色土（10YR3/4）カーボン・焼土をわずかに含む。

第２７図　８号住居址（S-32）実測図

９号住居址（S-33）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。5号住居址と重複し、5号住居址より古い。東西長1.6m、南北長1.2m、深さ約0.4mである。今回の調査では、竪穴住居の東側約1/5のみ確認した。

埋土は4層に分層される。遺物は、弥生時代後期の土器が少量出土している。



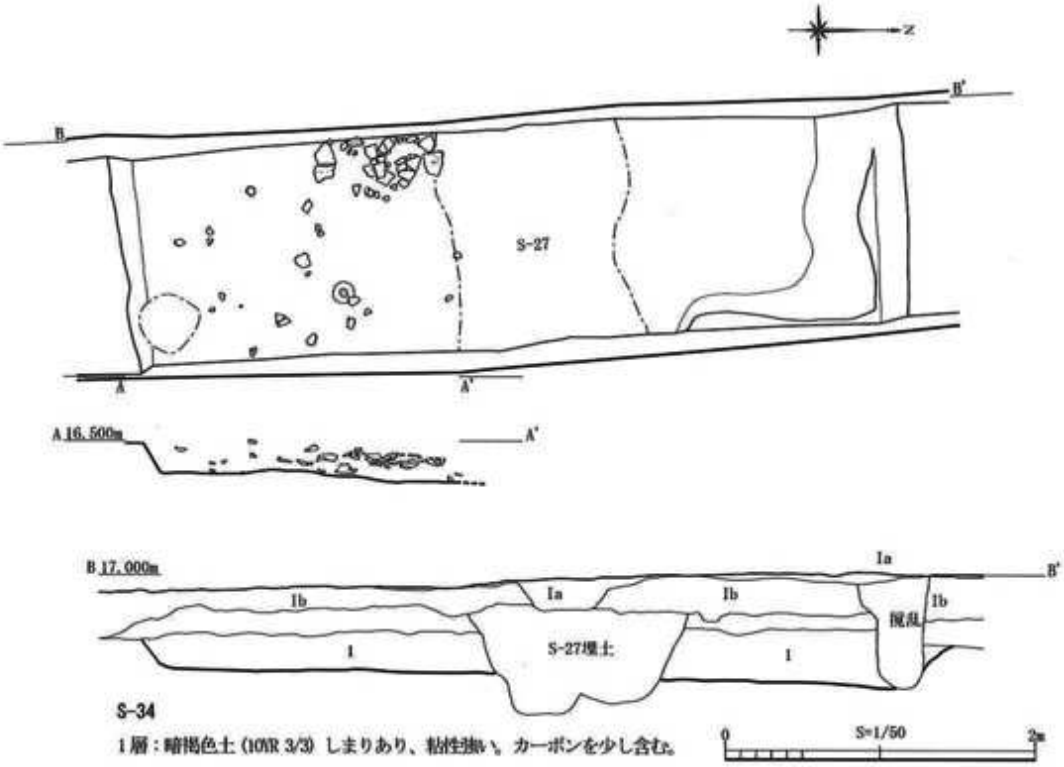
S-33
1層：暗褐色土（10YR 3/4）しまりあり、粘性強い。カーボンを少し含む。褐色ブロックを少し含む。
2層：黒褐色土（10YR 2/2）しまりあり、粘性強い。カーボンを少し含む。褐色ブロックを少し含む。
3層：黒褐色土（10YR 2/2）しまりあり、粘性強い。カーボンを少し含む。
4層：暗褐色土（10YR 3/4）しまりあり、粘性強い。Ⅵ層粒子（径0.1cm）をわずかに含む。

第２８図　９号住居址（S-33）実測図

１０号住居址（S-34）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。7号溝跡（S-27）と重複し、7号溝跡より古い。東西長1.4m、南北長5.0m、深さ約0.4mである。今回の調査では竪穴住居の1/5のみ確認した。検出段階において、硬化面を確認できなかったため床面が判然としなかったが、遺物の出土最下層をこの住居の基定面とした。

遺物は、弥生時代後期の土器が多量に出土している。また、台形石器も出土した。



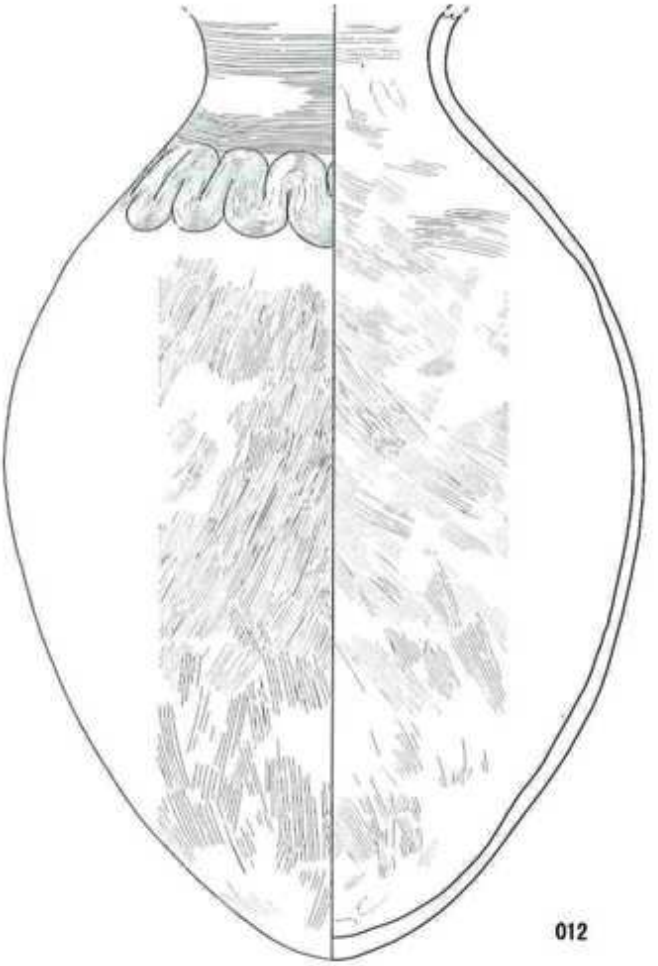
第２９図　１０号住居址（S-34）実測図

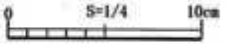
012は広口壺である。胴長の体部を有し、やや尖り気味の丸底を呈する。胴部から頸部、頸部から口縁部に向って緩やかに外側へ反る。胴部と頸部の境界は明確でない。頸部外面には浅い櫛描きの直線文が並行し、一部重なりながら施されている。その直下には、同様の工具による波状の文様が認められる。胴部最大径はやや上位にある。器面調整は、内外面ともにハケとナデが併用されている。後期後半から終末期にかけての所産と考えられる。

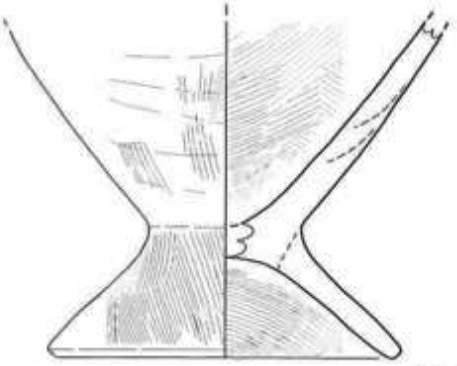
013は台付きの甕である。胴部中位以上の部位を欠いている。脚は直線的に外方へ開き、端部に面を持つ。内外面における体部と脚部の接合痕は、調整時に消されている。器面は内外面とも

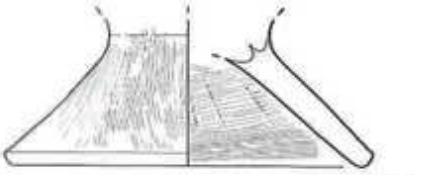
にハケで調整され、部分的にナデが施されている。やや長めの脚を有することから、後期でも中頃以降の土器と考えられる。

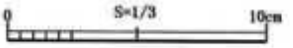
014は台付きの甕の脚部である。脚は直線的に外方へ開き、端部に面を持つ。器面は内外面ともにハケで、一部にナデが施されている。若干長めの脚を持つことから、後期後半前後の土器と考えられる。











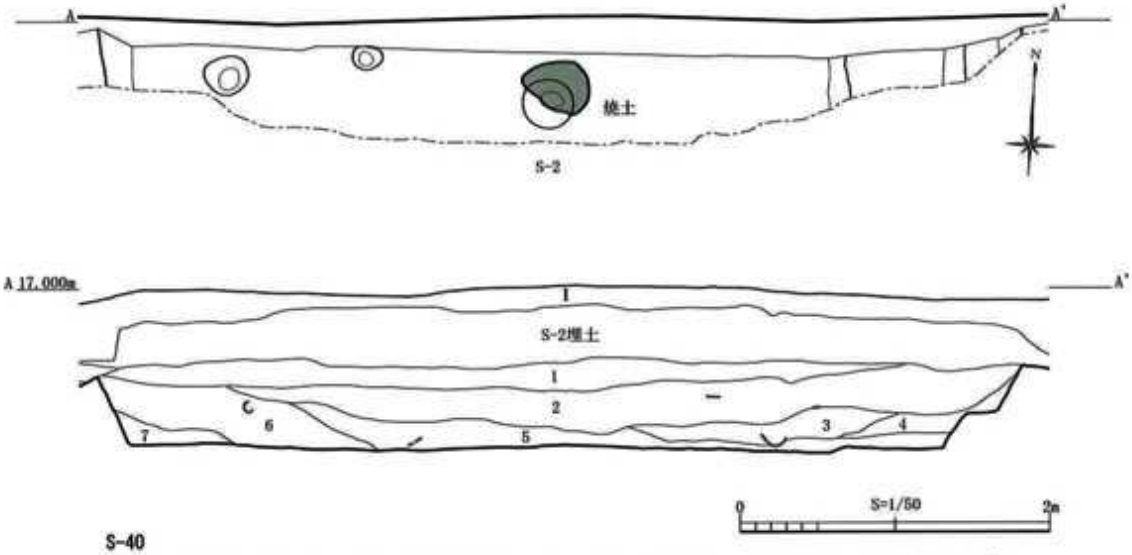
第３０図　１０号住居址（S-34）出土遺物実測図

１１号住居址（S-40）

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。3号溝跡（S-2）と重複し、3号溝跡より古い。東西長6.0m、南北長0.8m、深さ約0.6mである。南側が5号溝跡に切られ、北側は調査区外である。

住居址中央で炉跡（火床面）が確認された。その周囲にはカーボンの集中が見られた。東側においては、ベッド状遺構の存在が窺える。床は全面が硬化面である。

埋土は7層に分層される。遺物は、弥生時代後期の遺物が多量に出土している。出土状態は一度廃棄された状況ではなく、自然堆積した埋土中からの出土である。



S-40

1層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボン・焼土を少し含み0.1～0.5cmの礫を少し含む。
2層：黒褐色土(7.5YR 3/3) しまっており粘性強い。カーボン・焼土を少し含み0.1～0.3cmの礫を少し含む
3層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボン・焼土を多く含み0.1～0.3cmの礫を多く含む。
4層：黒褐色土(7.5YR 3/3) しまっており粘性強い。カーボンを少し含み1～5cmの褐色ブロックを多く含む。
5層：黒褐色土(7.5YR 3/3) しまっており粘性強い。カーボンを多く含み1cmの褐色ブロックを少し含む。
6層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボンを多く含み1～2cmの褐色ブロックを少し含む。
7層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボンを少し含み1～3cmの褐色ブロックを多く含む。

第３１図　１１号住居址（S-40）実測図

１２号住居址（S-43）

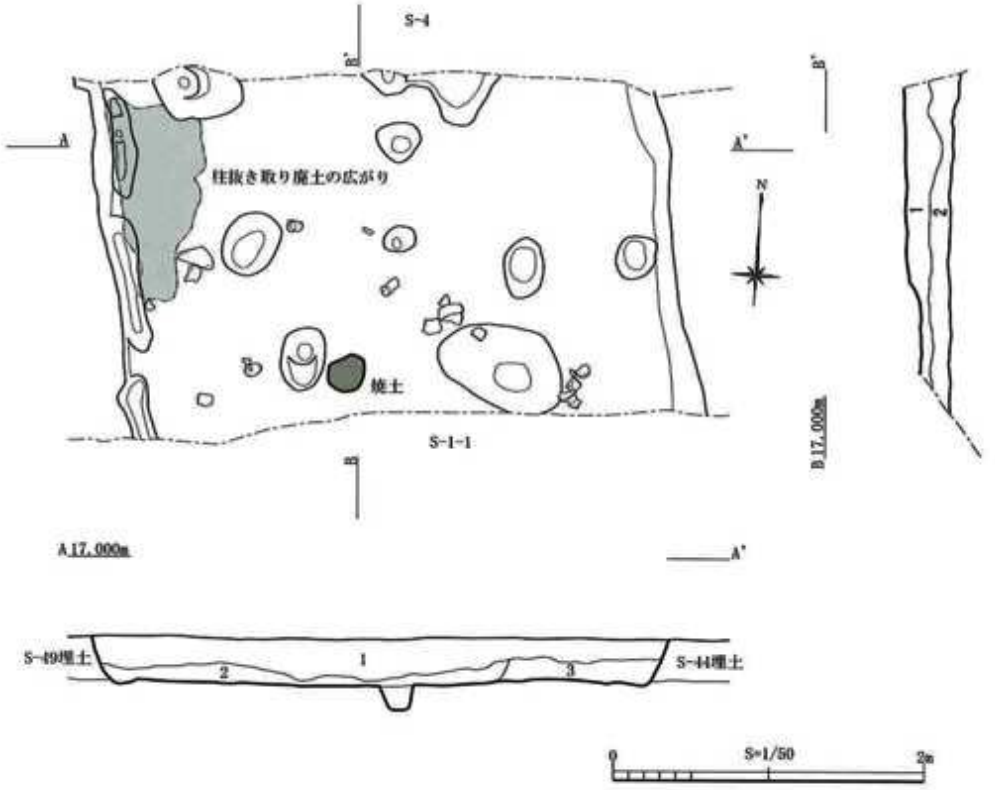
調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。9号溝跡（S-1-1）・5号溝跡（S-4）・13号住居址（S-44）・16号住居址（S-49）と重複し、9号溝跡・5号溝跡より古く、13号住居址・16号住居址より新しい。東西長3.8m、南北長2.1m、深さ約0.4mである。

13号住居址との重複関係については、5号溝跡の断面観察で13号住居址とは別遺構であると判断することができたが、12号住居址の西側部分が重複する16号住居址とは、16号住居址部分が12号住居址のベッド状遺構に相当するものとして掘削を進めた。しかし、12号住居址・13号住居址・16号住居址を縦断するベルトにおける堆積状況の精査や、側壁溝の存在、12号住居址・

P-7における柱穴抜き取り土の範囲の検討を行った結果、16号住居址とは別の住居であるとの見解に達した。

この住居では明確な炉跡を確認することができなかったが、住居内南側中央部分において、焼土化した床面を確認した。P-1～P-7までのピットを確認することができた。P-7については、柱の抜き取り痕跡やその掘削土の広がりを確認することができた。床面全体は硬化面である。

埋土は3層に分層される。3層の堆積を確認した際に、盛土によるベッド状遺構の造作を想定したが、この堆積土から多量の土器が出土したことから埋土として扱った。遺物は、弥生時代後期後半の遺物が多量に出土している。また、器種不明の鉄製品の出土もあった。さらに、家形土器の破片の出土があった。

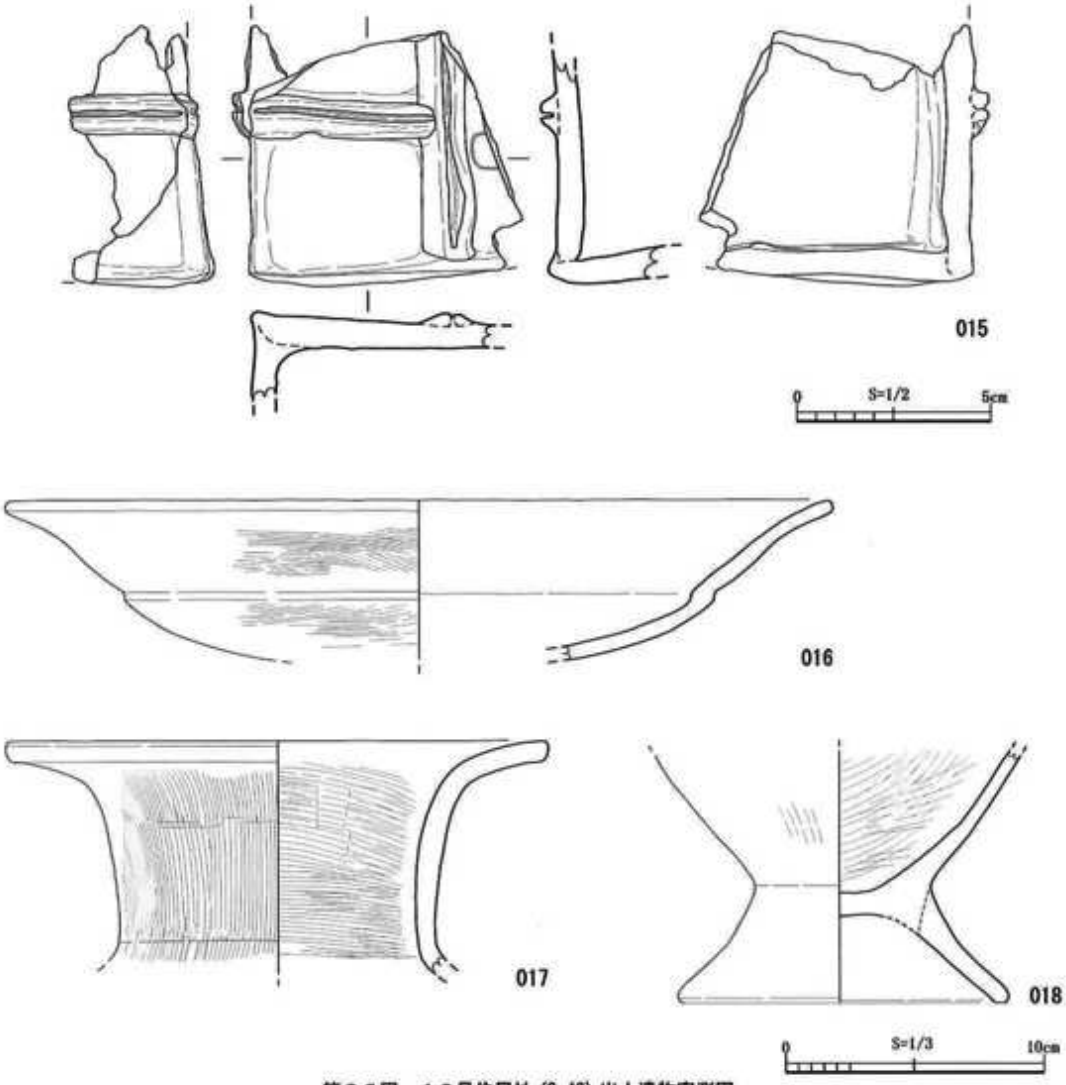


S-43

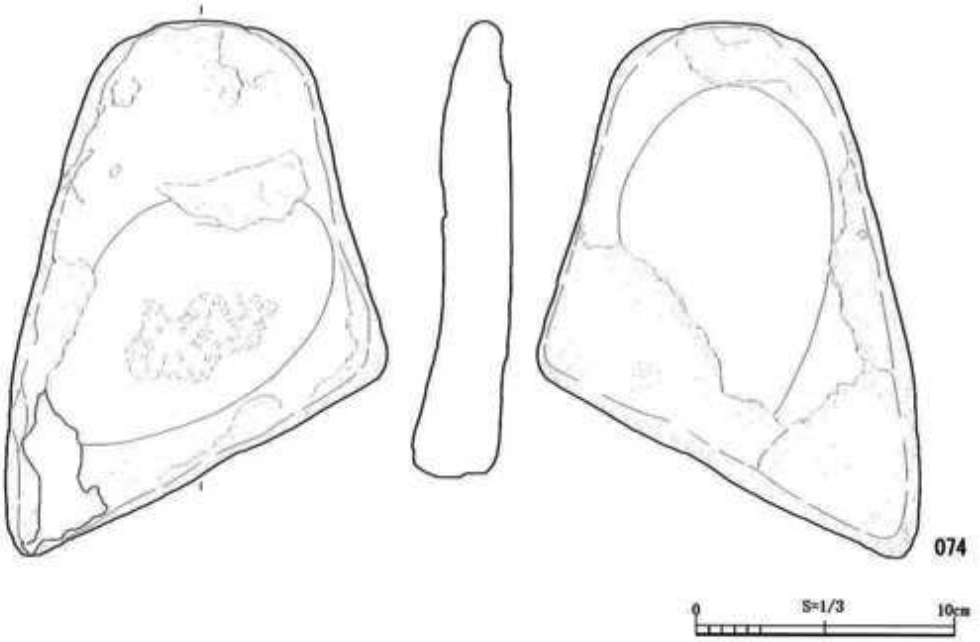
1層：暗褐色土（10YR 3/3）しまりあり、粘性強い。径0.5cmの褐色粘土・カーボン・礫を少し含む。
2層：黒褐色土（10YR 2/3）しまりあり、粘性強い。径0.5cmの褐色粘土・カーボン・礫を少し含む。
3層：暗褐色土（10YR 3/3）固くしまり、粘性強い。径3～5cmの褐色粘土ブロックを多く含む。

第32図　12号住居址（S-43）実測図

015は家形土器の破片と推測される。残存状況が良好な菊池川中流域の方保田東原遺跡（熊本県山鹿市）出土の家形土器を参考にすると、家形体部の下方の隅部であると考えられる。また方保田東原遺跡出土例に見える、扉の取っ手付け根に施される円形沈線の一部が確認できる。しかし底部が上げ底気味である点、体部側面（壁面）が直線的である点は、方保田東原遺跡の例（山鹿市教育委員会 2006）とやや異なる。また壁面の柱（垂直材）間を通す貫（水平材）の表現も、両者間では違いが見られる。すなわち、本例では細い2本の粘土紐が接し並列するもの、もしくは1本の粘土紐の長軸中央に沈線を設けるものであるのに対し、方保田東原遺跡例では並列する2本の粘土紐が若干間隔を空ける。器面の最終調整は内外面ともにナデである。方保田東原遺跡例との関係を考慮すると、後期後半前後の所産と推測される。



第３３図　１２号住居址（S-43）出土遺物実測図



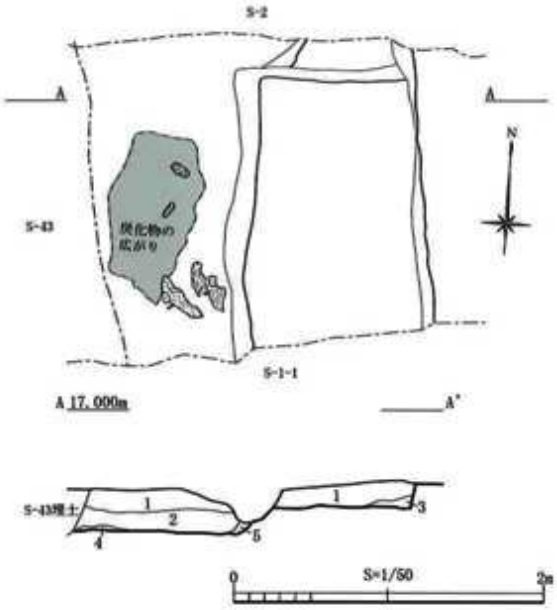
第３４図　１２号住居址（S-43）出土遺物実測図

016は高坏の坏部である。非常に緩やかに内側に湾曲する浅い体部に、長く直線的に外方へ開く口縁部が取り付く。口縁端部付近はやや外側に反り、端部は丸く収まる。器壁が磨耗気味のため器面調整は不明瞭だが、外面にはハケの痕跡が認められる。後期後半前後に比定しうる型式である。

017は胴部以下を欠く広口壺である。頸部は直立気味ながら、口縁部に向って強く外方へ反る。口縁端部は丸く収まる。胴部と頸部の境界は明瞭ではない。器面調整は内外面ともにハケで、部分的にナデを施す。後期後半前後に見られる型式である。

018は胴部中位以上を欠いた台付きの甕である。脚は直線的に外方へ開き、端部は丸く収まる。器面は体部内外面にハケの痕跡が一部見られるが、それ以外はナデ調整が施されている。形態の特徴から、後期後半前後の土器と考えられる。

074は石皿である。平面は不正形を呈し、厚みは3cm前後の平石となっている。表裏両面ともに使い込んだ磨り面が認められる。磨り面の範囲が狭い側には叩きの痕跡があり、その部分がわずかに凹んでいる。



S-44

1層:黒褐色土(10YR2/3)しまりあり、粘性強い。カーボン・焼土を少し含む。
2層:黒褐色土(7.5YR3/3)しまりあり、粘性強い。カーボン・焼土を少し含む。
　褐色ブロック(径1~2cm)を少し含む。
3層:黒褐色土(10YR 2/3) しまりあり、粘性強い。
　径1~3cmの褐色粘土ブロックを少し含む。
4・5層:暗褐色土(10YR 3/3)しまりあり、粘性強い。
　焼土・カーボンを多く含む。

第３５図　１３号住居址 (S-44) 実測図

１３号住居址 (S-44)

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。9号溝跡 (S-1-1)・3号溝跡 (S-2)・12号住居址 (S-43) と重複し、9号溝跡・3号溝跡より古く、12号溝跡より新しい。東西長 2.0 m、南北長 2.1 m、深さ約 0.2 mである。

12号住居址との重複関係については、3号溝跡壁面の断面観察で、13号住居址の多量の焼土を含む埋土が12号住居址の掘り方に切られていたことから、別遺構であるとの想定はしていた。しかし、12号溝跡との埋土の差異が明確ではなかったため、ベルト断面による精査や壁周溝の存在によって、別遺構であるとの判断に達した。住居構造は東側に高さ 0.1 mの地山削り出しのベッド状遺構を有するものである。床面においては炭化材を確認した。床面全体が硬化面である。

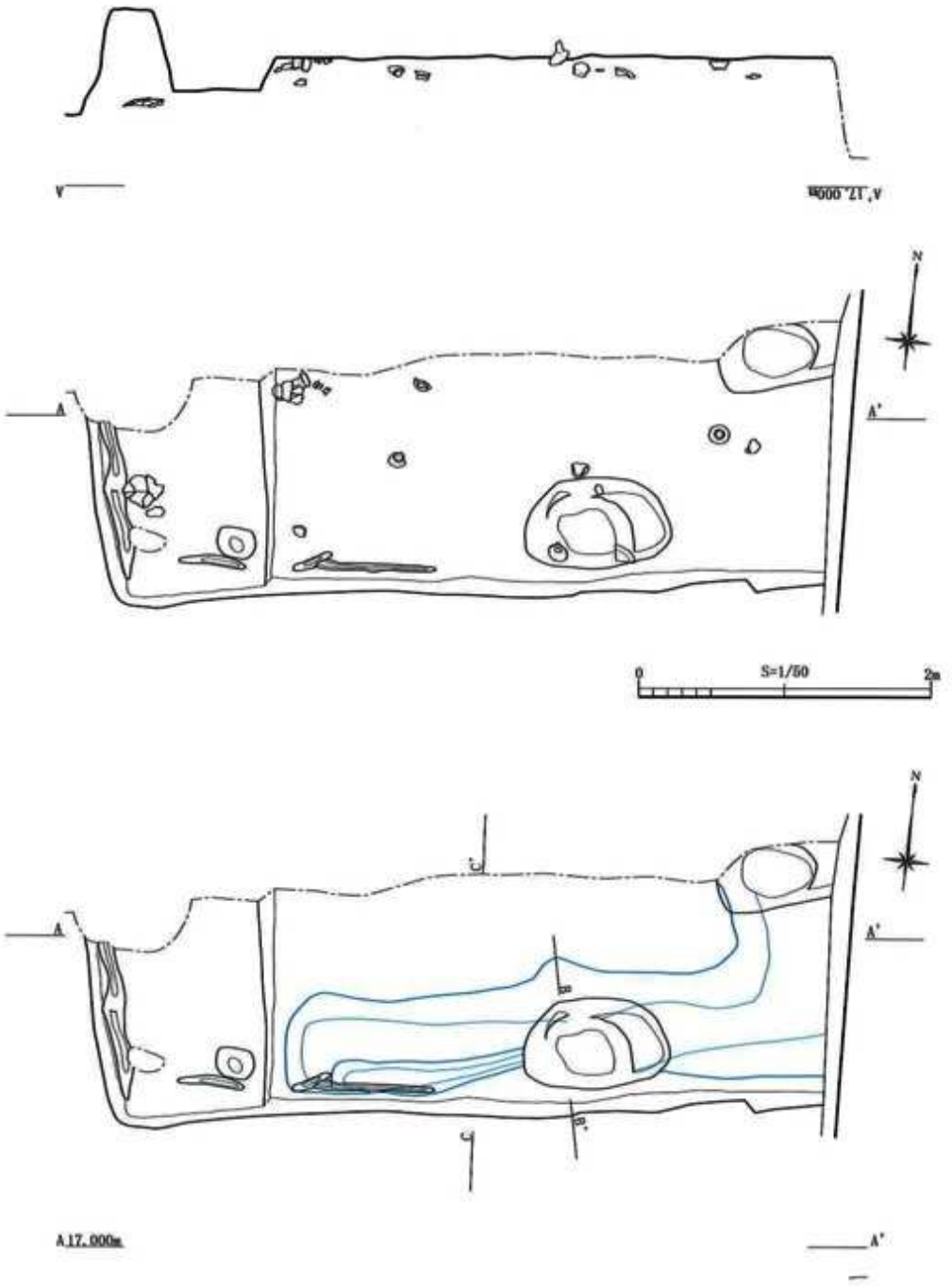
埋土は5層に分層される。遺物は、弥生時代後期の土器が少量出土している。

１４号住居址 (S-45)

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。3号溝跡 (S-2) と重複し、3号溝跡より古い。東西長 5.0 m、南北長 1.4 m、深さ約 0.4 mである。竪穴住居の南側部分、約 1/4 の調査を実施した。

住居構造は西側に高さ 0.2 mのベッド状遺構を有するものであり、ベッド状遺構は地山削り出しである。床面においては、南側住居中央部分に入口施設と考えられる掘り込みを確認した。その規模は長軸 0.9 m、短軸 0.6 m、深さ 0.3 mである。床面全体が硬化面である。壁周溝も確認した。この住居のみ貼床を有するものとして判断できた。住居の掘り方は、住居南側・東側を 0.05 mほど掘り込んだものであり、住居東側においても、ベッド状遺構を想定し得るものである。

埋土は6層に分層される。遺物は、弥生時代後期後半の土器が多量に出土している。また、入口施設より高坏脚部が出土している。遺物の時期から12号溝跡より若干古いと考えられる。

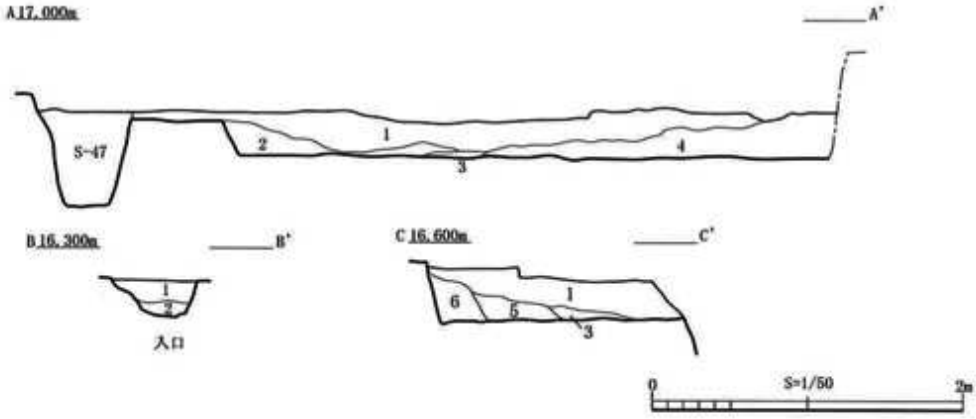


第３６図　１４号住居址 (S-45) 実測図

019は甕である。口縁部は断面が「く」の字状に緩やかに折れ、外方へ短く直線的に開く。口縁端部は面を有する。胴部最大径は、中位よりやや上方にある。脚は直線的に外方へ開き、端部は丸く収まる。器面は外面にハケの痕跡を残すが、概ねナデ調整が主体である。後期中頃の土器と推測される。

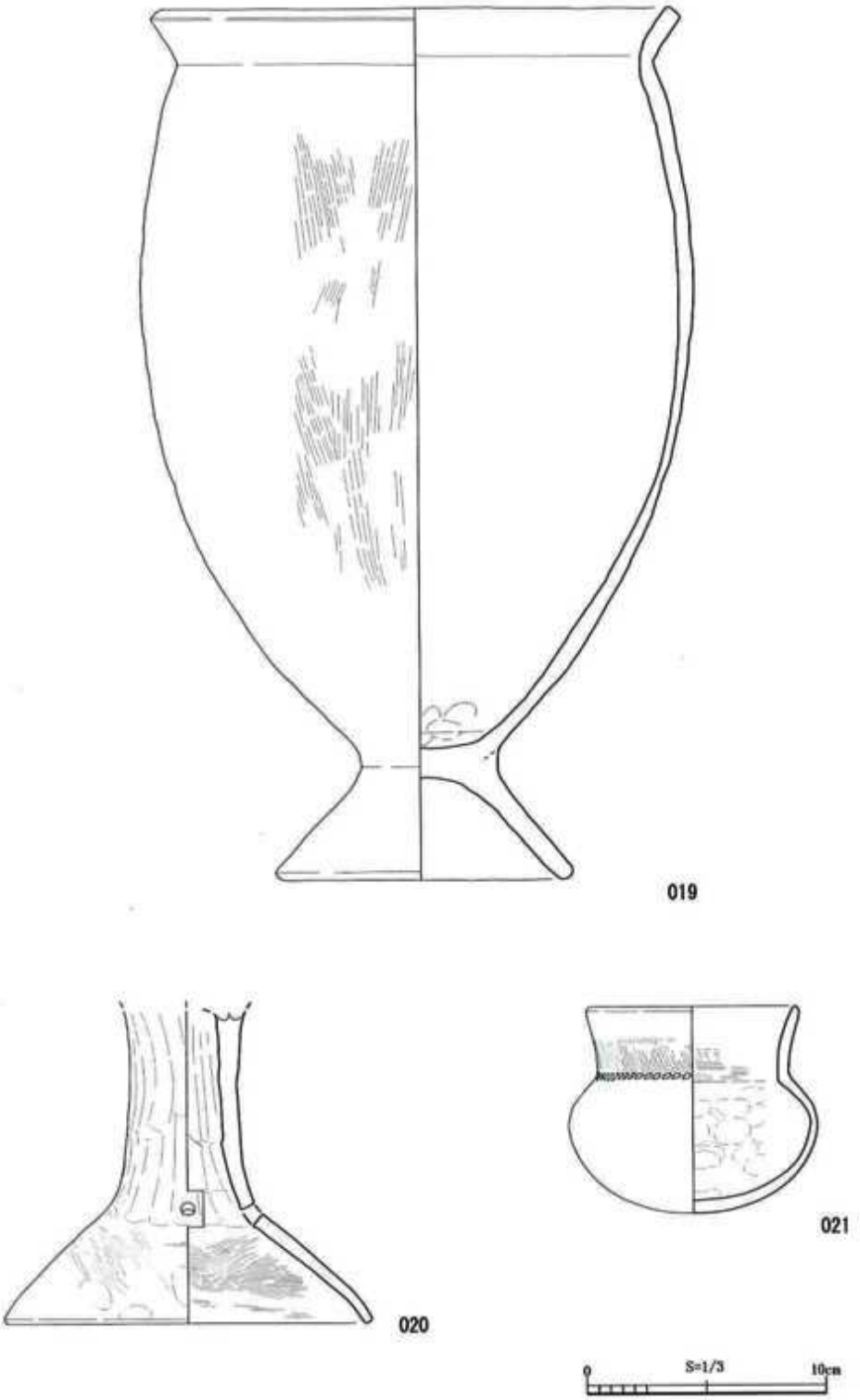
020は高坏の脚部である。直立気味の脚は、下方で緩やかに屈曲し外方へ直線的に開く。ただ端部近くでは強い横ナデ成形のためか、若干内側へ湾曲する。脚端部は、若干の面を持ちつつも丸く収まる。屈曲部には、ほぼ等間隔で3つの円形穿孔が認められる。孔周辺の状況から、穿孔は焼成前に外側から内側に向って施されたと考えられる。器面調整は円筒部が内外面ともにナデであるが、内面は絞り痕か工具による調整か、表面に凹凸が見られる。脚裾部の内外面には共にハケの痕跡があるが、最終的にはナデ調整されている。特徴的な形態を考慮すると、後期後半を中心とする時期の高坏と考えられる。

021は小型の直口壺である。倒卵形の体部に、直立気味だが緩やかに外側へ反る口縁部が取り付く。口縁端部は丸く収まる。口縁部と体部の境（頸部）には、連続刺突文が施されている。口縁部は内外面ともにハケ後ナデ調整、体部はナデで仕上げられている。終末期前後の土器と推測される。



S-45
1層：暗褐色土（7.5YR 3/3）しまりあり、粘性強い。径5cmの褐色粘土ブロックを少し含む。カーボン・礫を少し含む。
2層：黒褐色土（7.5YR 3/2）しまりあり、粘性強い。カーボン・礫を少し含む。褐色ブロック（径1～5cm）を多く含む。
3層：褐色土（7.5YR 4/4）しまりあり、粘性弱い。カーボンを多く含む。焼土粒を多く含む。
4層：黒褐色土（7.5YR 3/2）しまりあり、粘性強い。褐色ブロック（径1～3cm）を少し含む。カーボン・礫を少し含む。
5層：黒褐色土（7.5YR 3/2）しまりあり、粘性強い。褐色ブロック（径1～3cm）を少し含む。カーボン・礫を少し含む。
6層：暗褐色土（7.5YR 3/3）しまりあり、粘性強い。径1～5cmの褐色ブロックを多く含む。カーボンを少し含む。

第37図　14号住居址（S-45）実測図



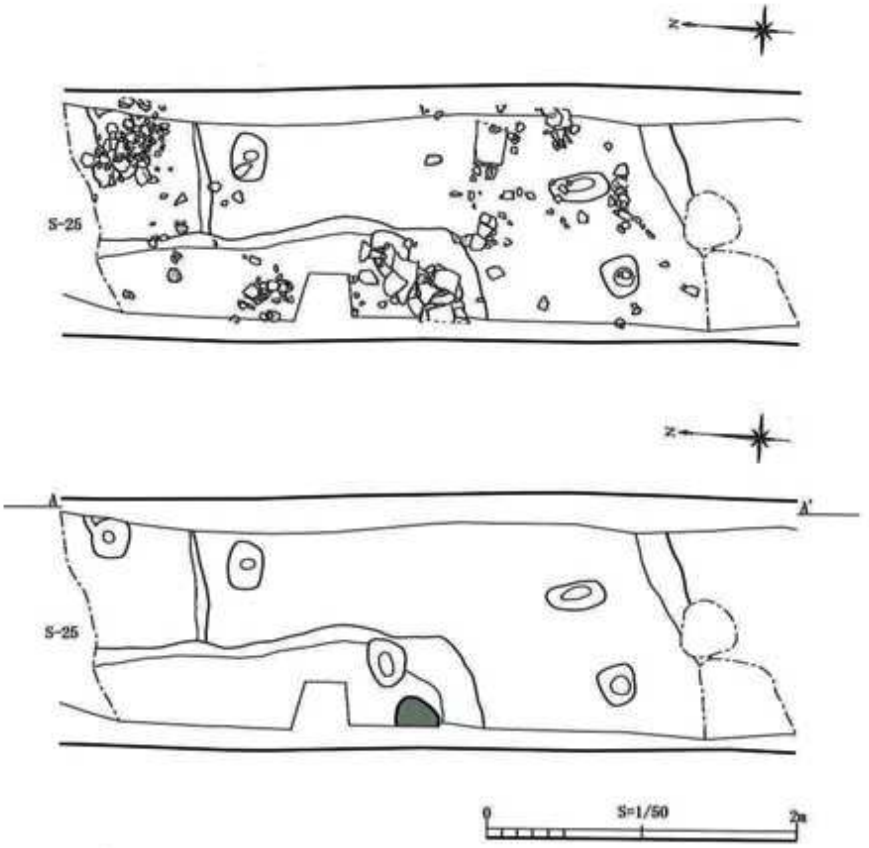
第３８図　１４号住居址（S-45）出土遺物実測図

１５住居址（S-48）

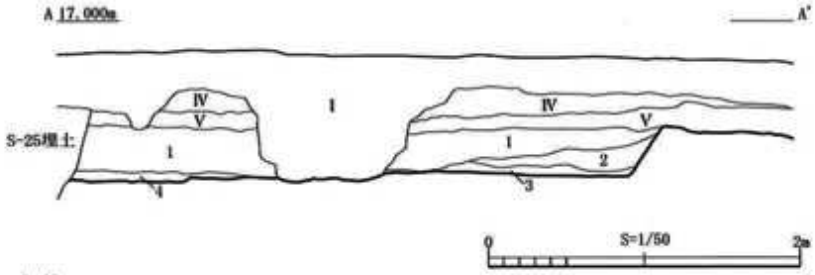
調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。６号溝跡（S-25）・８号溝跡（S-31）と重複し、６号溝跡・８号溝跡より古い。東西長 1.3 m、南北長 4.1 m、深さ約 0.4 mである。竪穴住居の約 1/4 の調査を実施した。住居北側はS-25 によって切られている。

住居構造は、調査区の影響で判然としない。南北のほぼ中央に炉跡と見られる焼土面があり、その東側と南側が約 0.1 m高くなることから、ベッド状遺構である可能性がある。床面全体が硬化面である。

埋土は4層に分層される。遺物は弥生時代後期の土器が多量に出土している。1層からまとまった遺物の出土があった。その内訳は、壺・甕・高坏・台石など多様である。



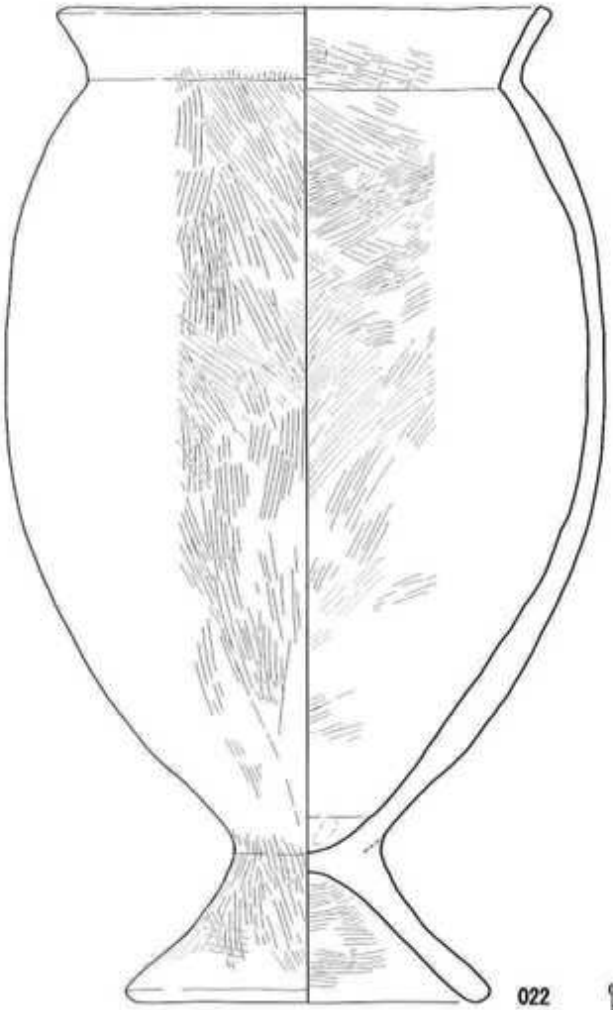
第３９図　１５号住居址（S-48）実測図



S-48

1層：黒褐色土(7.5YR 3/1) しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。
2層：黒褐色土(7.5YR 3/1) しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫・カーボンを少し含む。
3層：黒褐色土(7.5YR 3/2) ややしまりあり粘性強い。0.1ｃｍの礫・カーボンを少し含む。
4層：黒褐色土(7.5YR 3/2) ややしまりあり粘性強い。カーボンを少し含む。

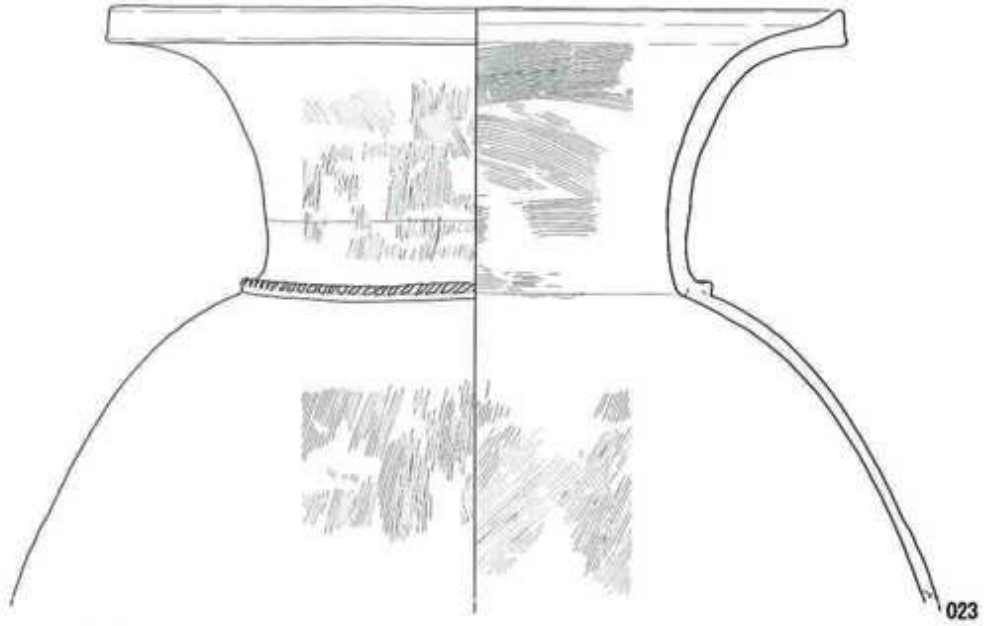
第４０図　１５号住居址 (S-48) 実測図



022は甕である。口縁部は断面が「く」の字状に折れ、外方へ短く直線的に開く。口縁端部は面を有する。胴部最大径は中位より若干上方にある。脚は直線的に外方へ開き、端部は丸く収まる。器面は全体的にハケ調整されており、部分的にナデ調整が見られる。上記の諸特徴を考慮すると、後期中頃前後の土器と考えられる。

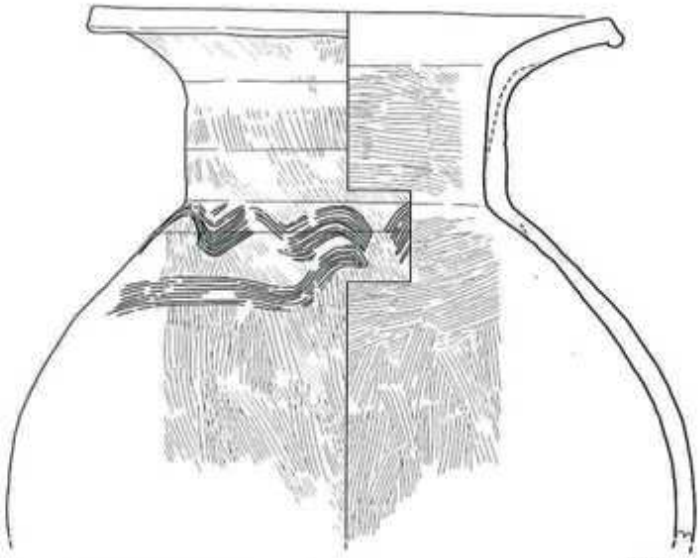
023は胴部下半を欠く広口壺である。頸部付け根は直立気味だが、口縁部に向って強く外方へ湾曲する。口縁端部は肥厚し、面を形成する。胴部と頸部の境界は明瞭で、外面には断面三角形状の突帯が貼り付けられている。突帯には連続刻み目が施されている。器面調整は内外面ともにハケで、部分的にナデ調整が行

第４１図　１５号住居址 (S-48) 出土遺物実測図

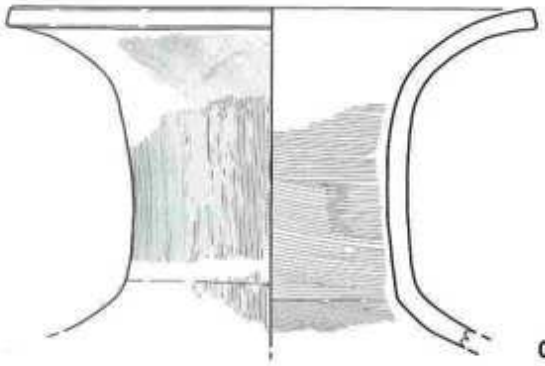


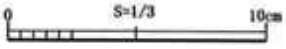
われている。後期後半前後の所産と推測される。

024は胴部下半を欠く広口壺である。体部から直立気味に頸部が立ち上がり、上方で外側へ強く屈曲。口縁部は直線的かつ緩やかに外側へ反る。口縁端部は面を持ち、斜め下方へ肥厚する。胴部と頸部の境界は比較的明瞭である。頸部外面には櫛描きによる波状、もしくはジグザグ状の文様が施されている。器面調整は内外面ともにハケで、ナデ調整が部分的に見られる。後期後半前後の所産と推測される。

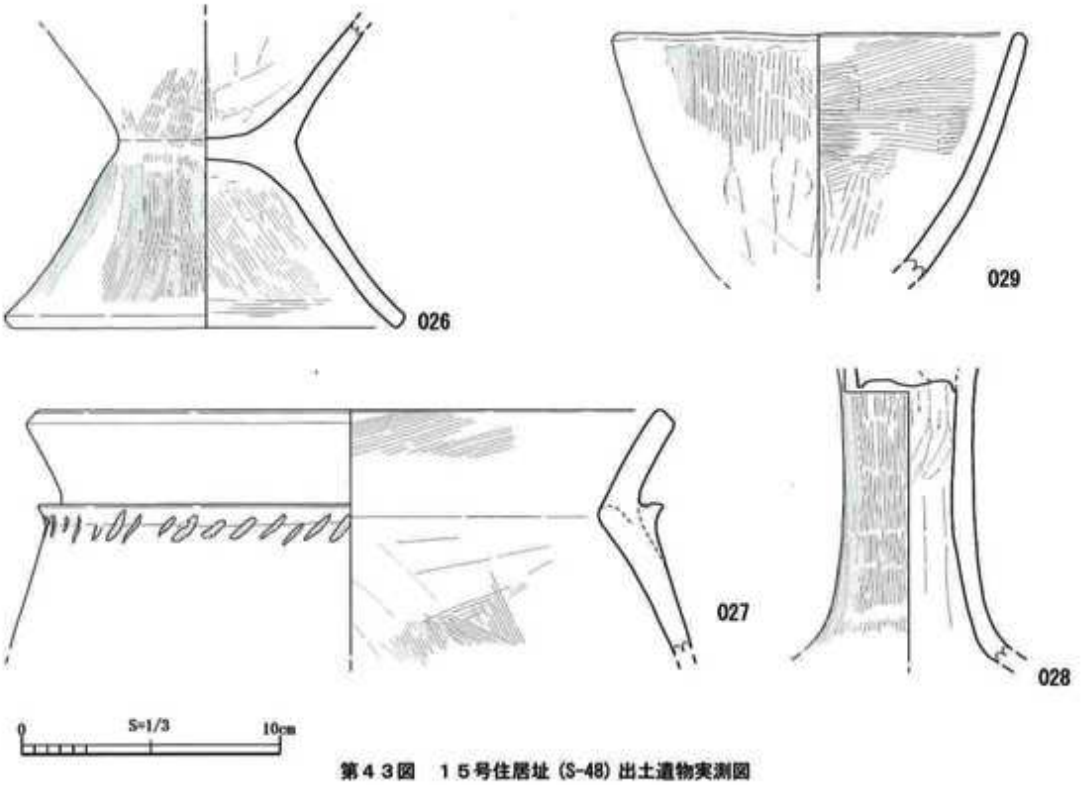


025は胴部以下を欠く広口壺である。頸部は直立気味ながら、口縁部に向って強く外方





第４２図　１５号住居址（S-48）出土遺物実測図



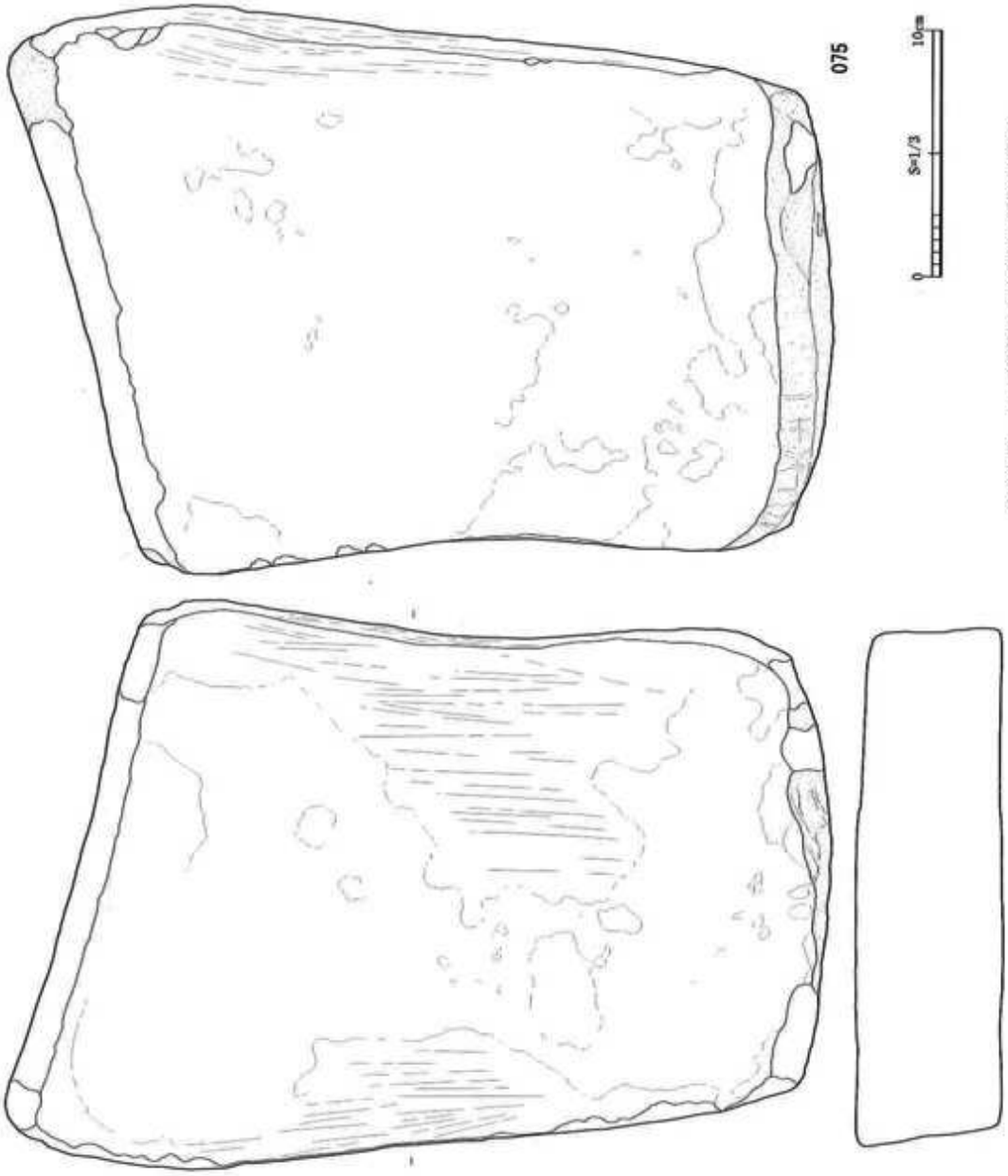
第４３図　１５号住居址（S-48）出土遺物実測図

へ反る。口縁端部は幅の狭い面を形成する。胴部と頸部の境界は、内面において比較的明瞭である。器面調整は内外面ともにハケで、部分的にナデが見られる。後期後半前後の土器と考えられる。

026 は台付きの甕である。胴部中位以上の部位を欠いている。脚は直線的に外方へ開き、端部に面を持つ。脚部高は相対的に高さがある。脚部形態の特徴から、後期後葉前後の土器と考えられる。器面は外面と脚内面がハケ、体部内面がナデであるが、ハケ後も数箇所でナデ調整が施されていた。

027 は甕である。胴部以下の大部分を欠く。口縁部は断面が「く」の字状を呈し、外方へ短く直線的に開く。口縁端部は面を持つ。頸部（屈曲部）外面には断面三角形状の突帯が貼り付けられ、突帯下端に列点文が施されている。器面調整は外面がナデ、内面がハケ後ナデである。上記諸特徴から、後期後葉前後に比定しうる。

028 は下方部を欠く高坏の脚部である。円筒状の脚は、裾付近で外方へ向って強く反る状況が確認できる。脚内面上方には、坏底部を形成したと考えられる充填粘土塊が一部残存している。器面調整は外面がハケ、内面がナデである。ただし、内面は器壁を削った痕等が十分にナデ消されていない。028 の時期は不明であるが、円筒形の脚という点で、後期後半前後のものと推測される。



第44図　15号住居址（S-48）出土遺物実測図

029は底部を欠く直口の鉢である。体部下方から口縁部にかけて、緩く内側に湾曲しながら立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。器面調整は内外面ともにハケであるが、部分的にナデやミガキが観察される。029は後期全般に見られる形態であり、詳細な時期を特定するのは困難である。

075は粘板岩製の砥石である。平面は台形状を呈し、全体に5～6cmの厚みを持つ。表裏・4側面、すべての面において使用の痕跡があるが、特に長側面の短い方で著しい磨り減りの状

況が確認できる。

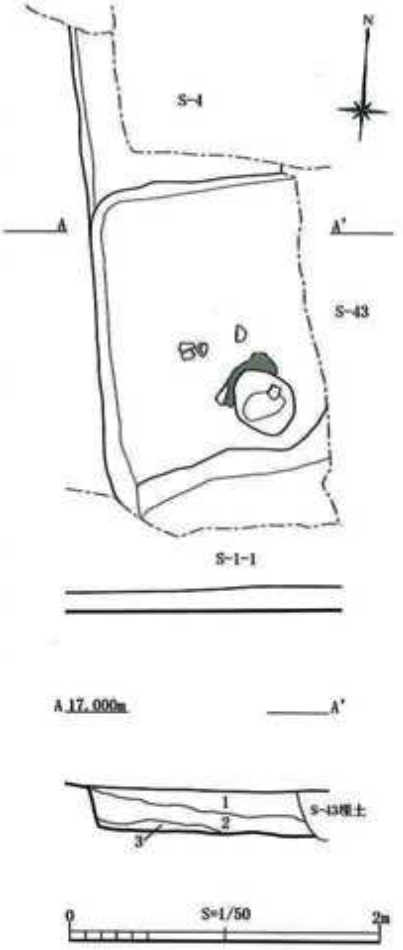
１６号住居址 (S-49)

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。9号溝跡(S-1-1)・5号溝跡 (S-4)・12号住居址 (S-43) と重複し、9号溝跡・5号溝跡より古く、12号住居址より新しい。東西長1.3m、南北長2.0m、深さ約0.2mである。東側がS-43に切られている。

12号住居址との重複関係については、5号溝跡壁面の断面観察で、12号住居址とは別遺構であると判断することができなかった。よって12号住居址と同一遺構として調査を進めたが、12号住居址・13号住居址・16号住居址を横断するベルトにおける堆積状況の精査や、側壁溝の存在、12号住居址P-7における柱抜き取り土の範囲の検討を行った結果、12号住居址とは別住居であるとの見解に達した。

この住居では、明確な炉跡を確認することができなかった。床は全体が硬化面である。住居内で検出したピットの周囲にて、高さ0.1m程度の土堤を確認した。

埋土は3層に分層される。遺物は弥生時代後期の遺物が多量に出土している。出土状態は一度廃棄された状況ではなく、自然堆積した埋土中からの出土である。



1層:暗褐色土 (10YR 3/3) 固くしまり、粘性強い。
径0.5cmの褐色粘土・カーボン・礫を少し含む。
2層:黒褐色土 (10YR 3/2) 固くしまり、粘性強い。
径0.5cmの褐色粘土を少し含み、礫を少し含む。
カーボンが多くなる。
3層:暗褐色土 (10YR 3/3) 固くしまり、粘性強い。
径3～5cmの褐色粘土ブロックを多く含む。

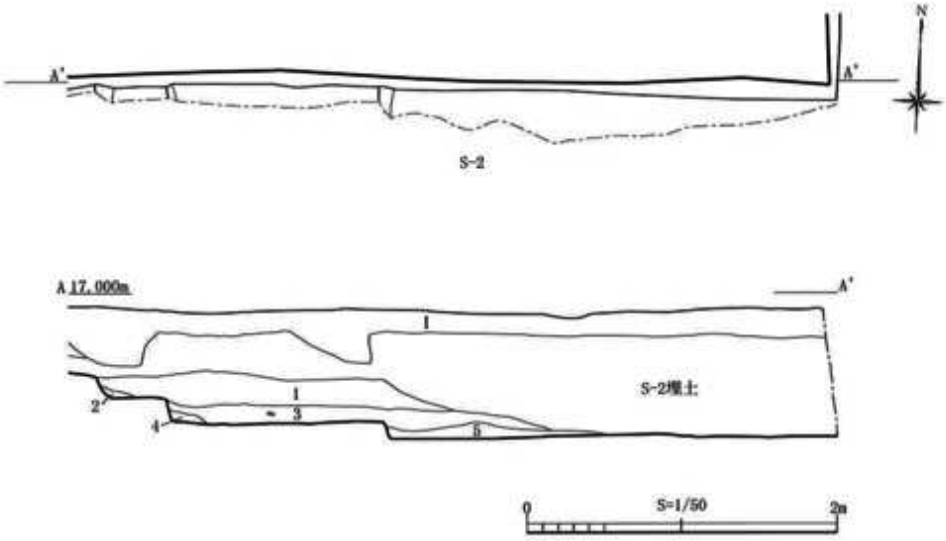
第４５図　１６号住居址 (S-49) 実測図

１７号住居址 (S-50)

調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。3号溝跡 (S-2) と重複し、3号溝跡より古い。東西長2.0m、南北長0.1m、深さ約0.3mである。

１８号住居址 (S-51)

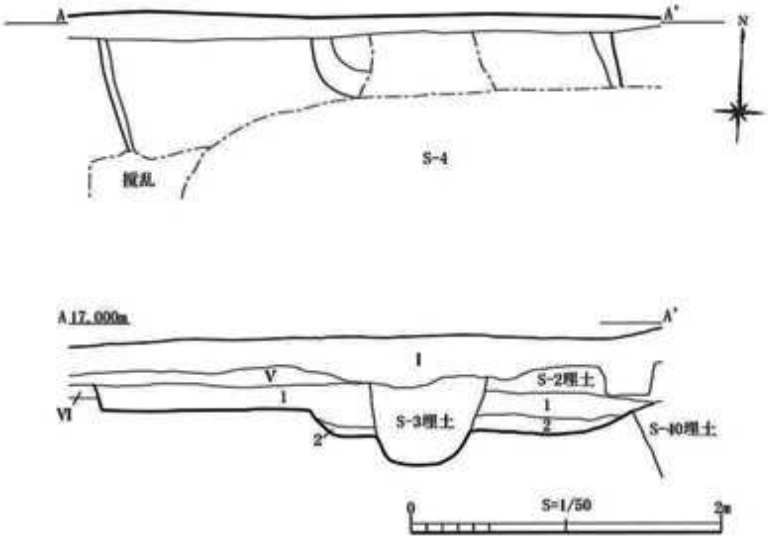
調査区北側、Ⅵ層上面にて検出した。5号溝跡と重複し、5号溝跡より古い。



S-50

1層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボンを少し含み0.1～0.3ｃｍの礫を多く含む。
2層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボンを少し含む。
3層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボンを少し含み0.1～0.3ｃｍの礫を多く含み
　　1～3ｃｍの褐色ブロックを少し含む。
4層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。1～5ｃｍの褐色ブロックを多く含む。
5層：黒褐色土(7.5YR 3/2) しまっており粘性強い。カーボンを少し含み1～3ｃｍの褐色ブロックを多く含む。

第４６図　１７号住居址 (S-50) 実測図



S-51

1層：暗褐色土(7.5YR 3/3) しまっており粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫・カーボンを少し含む。
2層：暗褐色土(7.5YR 3/3) しまっており粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫・カーボンを少し含む。
　　下位褐色ブロック(1ｃｍ)を少し含む。

第４７図　１８号住居址 (S-51) 実測図

第３節　中世の調査

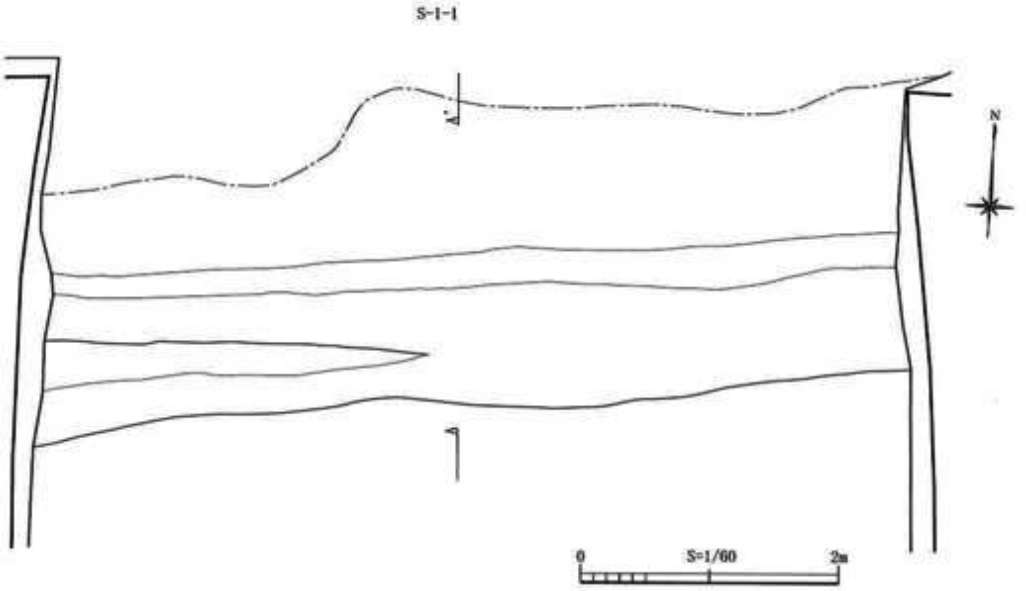
今回の発掘調査で検出された中世の遺構は、溝 12 条、土坑 14 基、ピット 25 基である。また、検出された溝の埋土中に瓦片を含むことから、この溝は中世浄光寺南大門の推定位置を検証できる資料となる可能性がある。

以下、中世の遺構について所見を記述する。なお、遺構番号については発掘調査時に設定した番号を採用する。

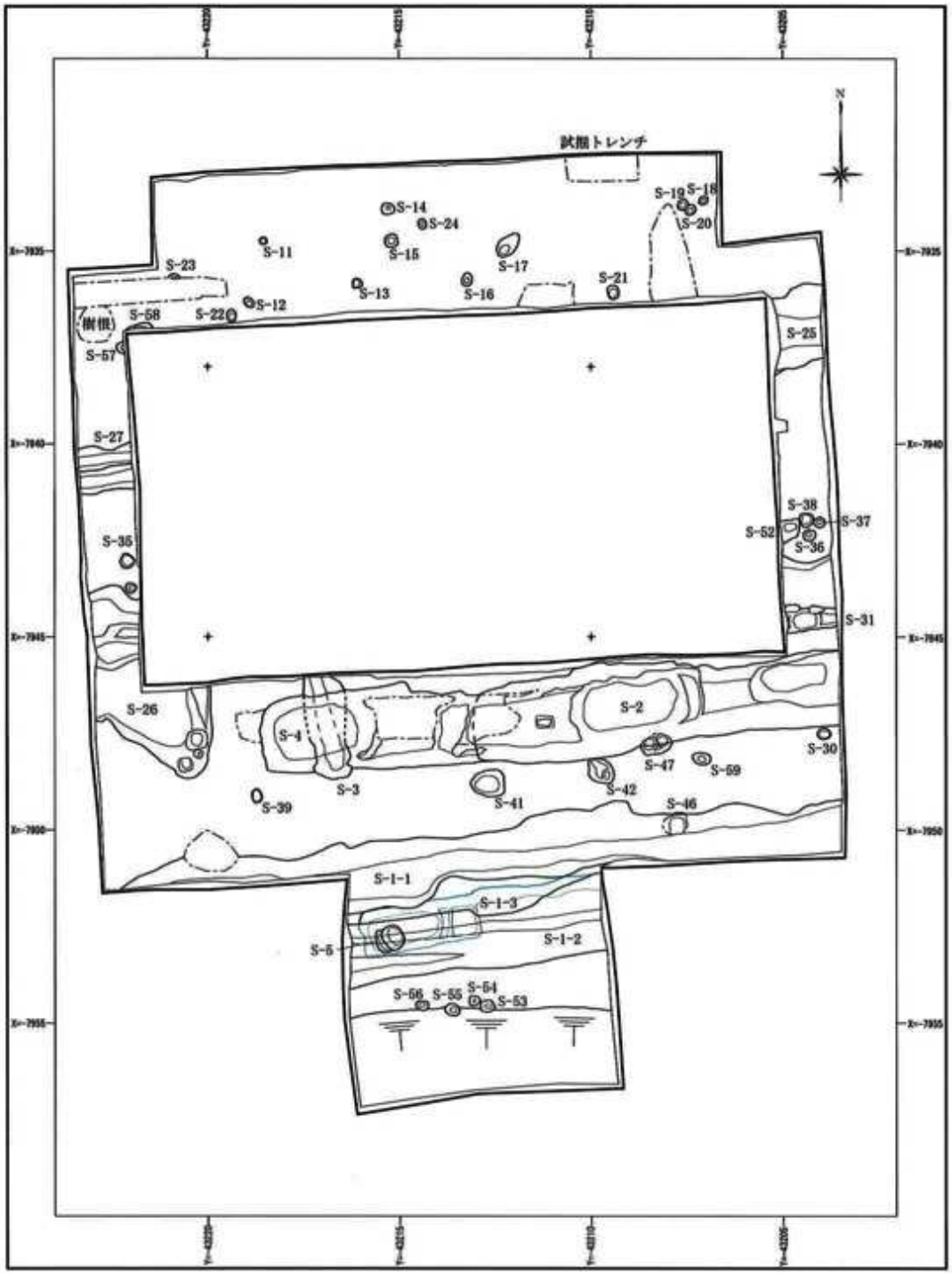
１号溝跡 (S-1-2)

調査区南側において検出した東西方向の溝である。1 号土坑（S-5）・2 号溝跡（S-1-3）と重複関係にあり、2 号溝跡より新しく、1 号土坑より古い。長さ 6.7 mを検出し、幅 2.0 m、深さ 0.8 mである。Ⅵ層上面にて検出した、薬研掘の溝である。

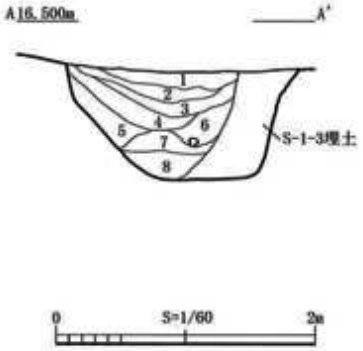
埋土は層全体に褐色ブロック（径 5 cm）を多く含むが、4 層をピークにその量は少なくなる。埋土は全て埋め戻しによるもので、堀底においても雨水による堆積は確認されないことから、短期間に掘削され、埋め戻された溝である可能性が高い。遺物は 6 層（埋土中位）より中国系の青磁碗が出土した。また、瓦片が少量出土している。



第４８図　１号溝跡 (S-1-2) 実測図



第４９図　中世～近世遺構配置図



S-1-2

1層　黒褐色土(10YR 2/3)　粘性ありしまりあり。
カーボン・褐色粒子をわずかに含む。

2層　黒褐色土(10YR 3/1)　粘性ややありしまっている。
褐色土ブロック(5ｃｍ)を多く含む。

3層　黒褐色土(10YR 2/3)　粘性ありややしまっている。
カーボンをわずかに含む。

4層　褐色土(10YR 4/4)　粘性ありしまっている。
黒褐色土ブロック(5ｃｍ)を多く含む。地山起因の埋土。

5層　黒褐色土(10YR 2/3)　粘性ややありあまりしまってない。
ボソボソしている。カーボン・焼土粒子をわずかに含む。

6層　黒褐色土(10YR 3/2)　粘性ありかなりしまっている。
カーボン・焼土粒子をわずかに含む。青磁椀を含む。

7層　褐色土(10YR 4/4)　粘性ありかなりしまっている。
5ｃｍの礫・カーボンをわずかに含む。

8層　黒褐色土(10YR 3/2)　粘性ありかなりしまっている。
カーボン・焼土粒子をわずかに含む。

第５０図　１号溝跡 (S-1-2) 実測図

051 は須恵器系鉢の底部片である。体部立ち上がりは、ほぼ直線的に外方へ開く。器面は、内外面ともにハケとナデが併用されている。

052 は中国系青磁椀の底部片である。底部外面を除く器面に釉がかかっている。見込（底部内面）中央には印刻の図柄が描かれている。断面が直立する高台を有する。

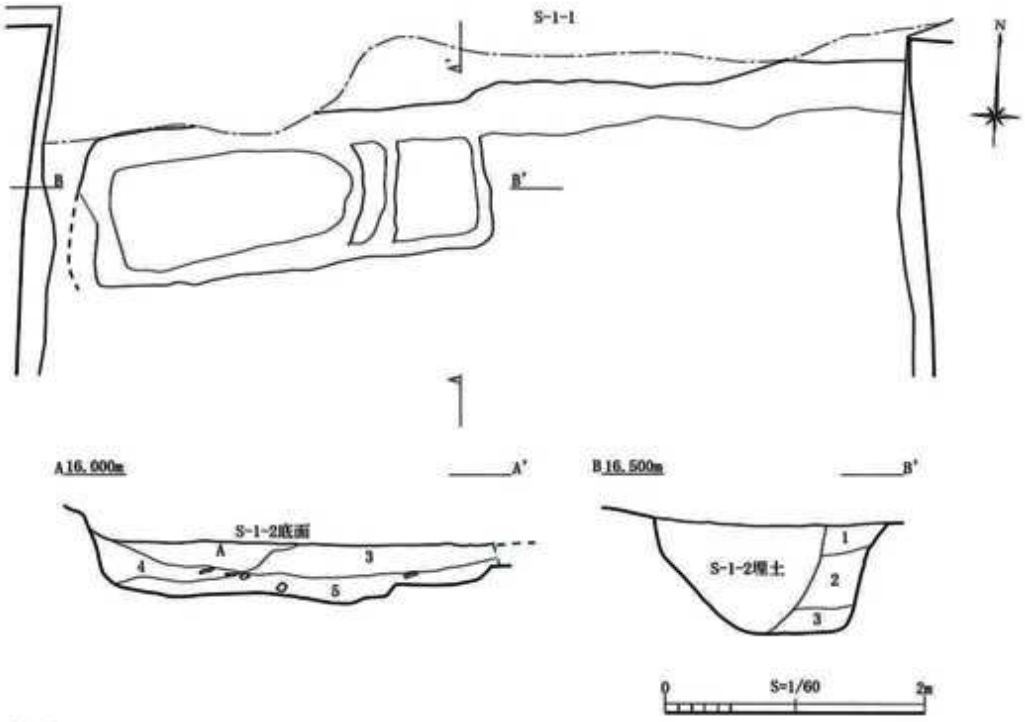
080 は土師質の錘である。円筒状の形態を有するが、軸がやや湾曲している。長軸 3.1cm、最大径 1.3cm を測る。

第５１図　１号溝跡 (S-1-2) 出土遺物実測図

２号溝跡 (S-1-3)

調査区南側において検出した東西方向の溝である。１号土坑（S-5)・1 号溝跡（S-1-2）と重複関係にあり、1 号土坑・1 号溝跡より古い。長さ 6.0 ｍを検出し、幅 2.0 ｍ、深さ 0.8 ｍである。Ⅵ層上面にて検出した、逆台形を呈する溝である。今回の調査では溝の西端を確認した。西端部分においては、底面より約 10 ～ 20cm ほど掘り込まれている。

埋土は層全体に褐色ブロック（径 5 cm）を多く含む。そ



S-1-3

A層　暗褐色土(10YR 3/4) 粘性なくしまりあり。
0.1cmの礫である。

4層　黒褐色土(10YR 3/2) 粘性があり固くしまる。
カーボン・褐色粘土ブロック(3cm)を多く含む。

5層　黒褐色土(10YR 2/3) 粘性がありしまる。
カーボンを少しふくみ褐色粘土ブロック(2cm)を多く含む。

1層　黒褐色土(10YR 2/3) 粘性ありしまっている。
褐色土ブロック(5cm)を多く含む。

2層　黒褐色土(10YR 2/2) 粘性ありしまっている。
焼土粒子・カーボンをわずかに含む。

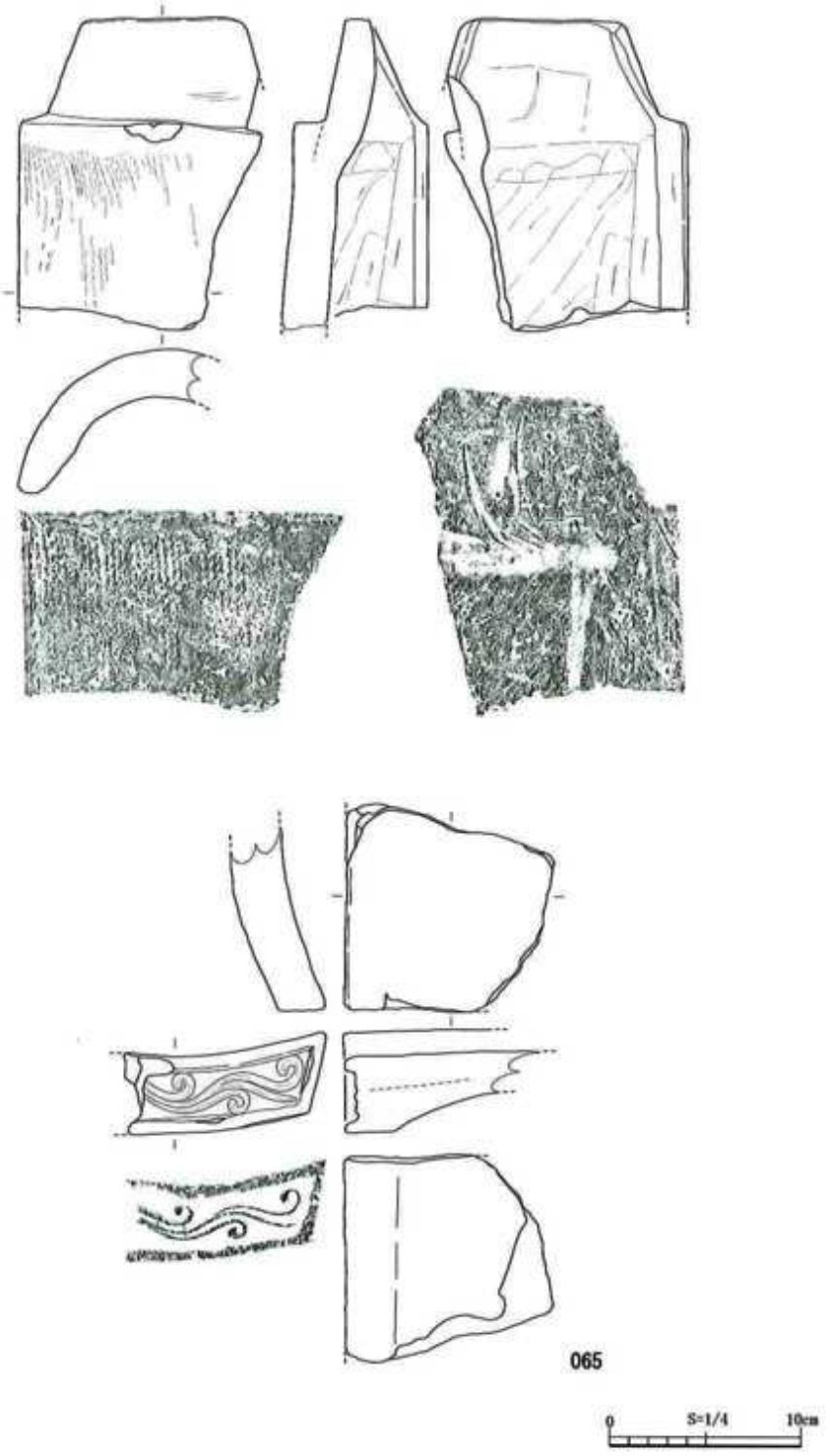
3層　黒褐色土(10YR 2/3) 粘性あり固くしまっている。
褐色ブロック(5cm)を非常に多く含む。

第52図　2号溝跡(S-1-3)実測図

の量は1号溝跡より若干多い。埋土は1～3層を確認し、西端部分では砂利層（a層）の下位に、4・5層を確認した。埋土は全て埋め戻しによるもので、堀底においても雨水による堆積は確認されないことから、短期間に掘削され埋め戻された溝である可能性が高い。遺物は4・5層（埋土下位）より瓦片が多数出土した。

064は丸瓦の玉縁側の破片である。胴部凸面には縄叩き痕が、凹面には斜め方向の糸切り痕が見られる。側面や凹面胴部側縁にはカマキリ痕があり、それら以外の器面調整はナデである。玉縁の平面は台形を呈し、玉縁凸面側縁は胴部側面から上方に傾斜する。

065は軒平瓦の瓦当側の破片である。胴部凹面にはナデ調整と離れ砂が、胴部凸面にはナデ調整が見られる。瓦当文様は唐草文である。瓦当外縁幅は比較的狭い。顎裏面の形状は、角張ることなく緩やかな湾曲を呈する。

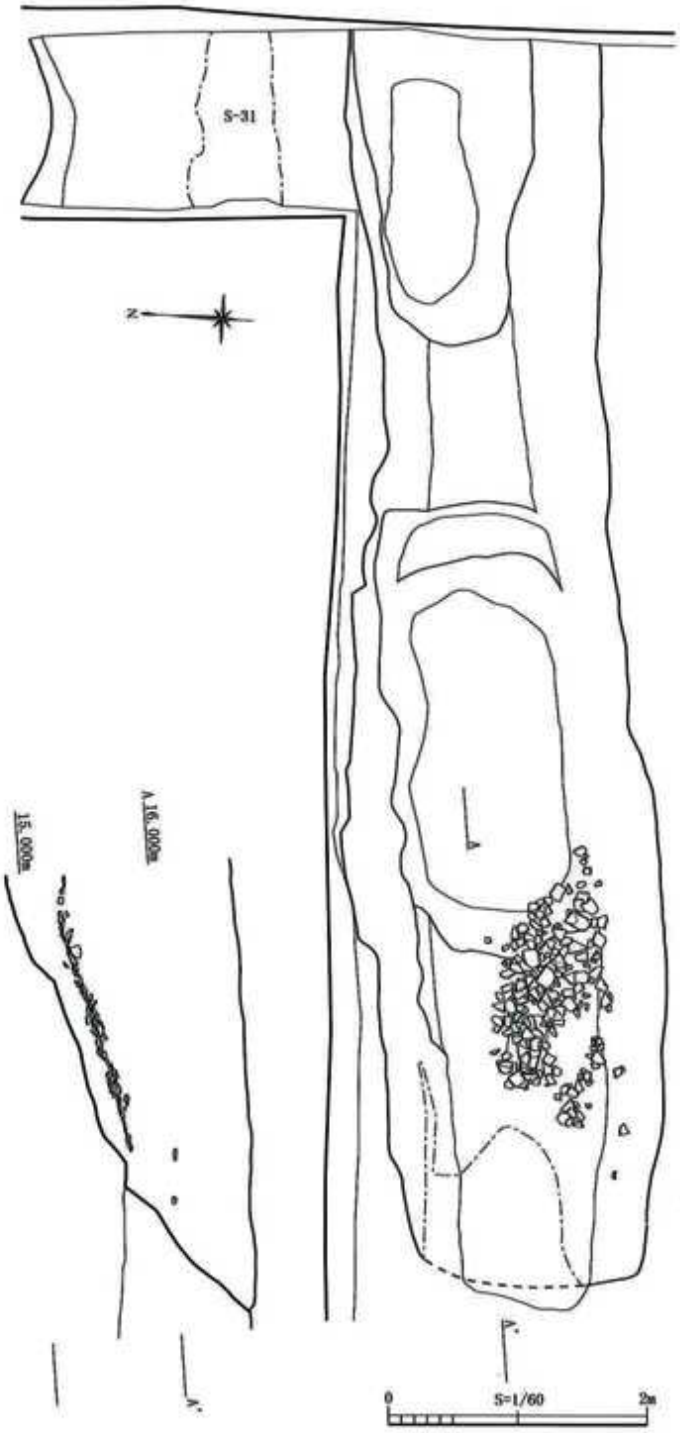


第５３図　２号溝跡（S-1-3）出土遺物実測図

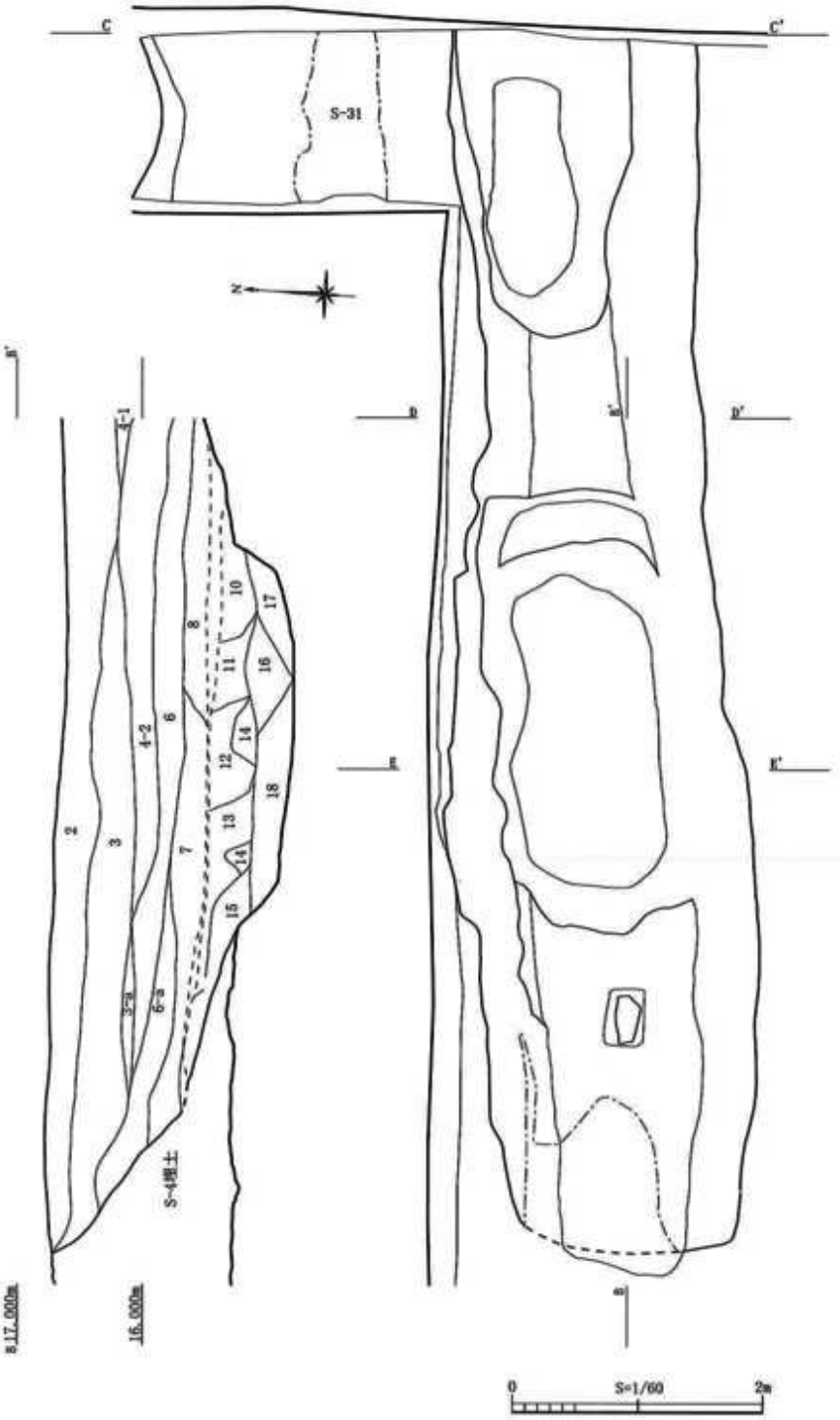
３号溝跡（S-2）

調査区南側において検出した東西方向の溝である。5号溝跡（S-4）・13号住居址（S-44）・14号住居址（S-45）と重複関係にあり、5号溝跡・13号住居址・14号住居址より新しい。長さ9.7ｍを検出し、幅2.3ｍ、深さ1.2ｍである。Ⅵ層上面にて検出した、逆台形を呈する溝である。今回の調査では溝の西端を確認し、その規模から5号溝跡との密接な関係性があると考えられる。西端部分は緩やかに傾斜し、部分的に深く掘り込まれた底面へと続く。底面は部分的に深く掘削され、底面から約0.5ｍ掘り込まれた部分も確認した。

埋土の最上層は、褐色土（10YR4/6）によって被覆され、溝上面とほぼ堆積範囲が一致することから、溝の窪み部分における整地土と考えられる。埋土上位層は、黒褐色土を基本とし、Ⅵ・Ⅷ層起源のブロック土（径5㎝）を多く含む。埋土中位層は、黒褐色土と暗褐色土を基本とし、Ⅵ・Ⅷ層起源のブロック土（径5㎝）を多く含む。埋土下位層も埋土中位層と同様である。埋土最下層は、部分的に深く掘り込まれた部分に堆積しているもので、ブロック状の暗褐色土・褐色土を確認した。堆積は、人為的な埋め戻しによるものである。



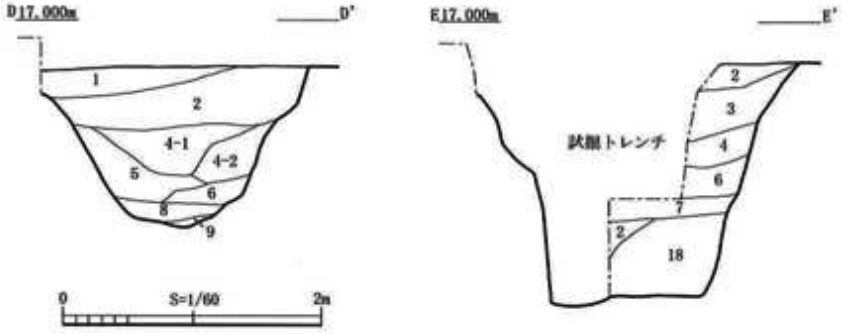
第５４図　３号溝跡（S-2）実測図



第５５図　３号溝跡 (S-2) 実測図

遺物は、埋土上層から白磁杯IX類（13 世紀後半～ 14 世紀前後）が出土している。また７層下位よりまとまった瓦片が出土した。出土状況から西側から流入したと考えられる。層全体から瓦片がまばらに出土しているが、もっとも出土量が多くなるのは埋土最下層である。また、７層下位にて土師坏（口径 13 ～ 14cm）が２点出土した。

031 は口縁部を欠く土師器の坏である。平底を呈し、体部は立ち上がりがやや内側に湾曲するもの



S-2 B-B' D-D' E-E'

1層 褐色土(10YR 4/6) 粘性なくしまりあり。1ｃｍ程度の小礫を含む。

2層 黒褐色土(10YR 3/1) 粘性ありしまりあり。少量の橙色ブロックを含む。(1ｃｍ未満)瓦片を含む。

3層 黒褐色土(10YR 3/2) 粘性ありしまりあり。少量の橙色ブロックを含む。(1～10ｃｍ未満)

3-a層 黒褐色土(10YR 3/2) 粘性ありしまりあり。わずかに橙色ブロックを含み一部に黒色土がみられる。

4-1層 暗褐色土(10YR 3/4) 粘性なくしまりあり。1ｃｍ程度の小礫を含み土師片を含む。一部に少量の褐色土(10YR 4/6)あり。

4-2層 黒褐色土(10YR 3/2)と褐色土(10YR4/6)の混合土。4ｃｍ未満の小礫や土師片をわずかに含む。

6層 黒褐色土(10YR 2/3)と褐色土(10YR 4/4)の混合土。やや粘性がありしまりあり。土師片10ｃｍ程度の小礫を含む。

6-a層 暗褐色土(10YR 3/3) やや粘性ありしまりあり。一部ににぶい黄褐色土(10yr 6/4)がまざる。橙色ブロック(1ｃｍ未満)瓦小片を含む。

7層 暗褐色土(10YR 3/3) やや粘性がありややしまる。一部に橙色ブロック(1ｃｍ未満)にぶい黄褐色土(10YR 6/4)がまざる。

8層 黒褐色土(10YR 3/2) やや粘性がありややしまる。全体的に少量の褐色土(10YR 4/4)がまざる。

9層 にぶい黄褐色土(10YR 4/3)わずかに粘性ありしまる。粘土化したローム小ブロック(7.5YR 8/4)を含む。

10層 黒褐色土(10YR 1/2)とにぶい黄褐色土(10YR6/4)の混合土。やや粘性ありややしまる。橙色ブロックを少量含む。(1ｃｍ未満)

11層 黒褐色土 (10YR 3/2) やや粘性がありややしまる。全体的に少量の暗褐色土(10YR 3/3)を含む。

12層 暗褐色土 (10YR 3/3)と褐色土(10YR 4/6)の混合土。粘性は弱いがしまりあり。5ｃｍ程度の小礫を含む。

13層 黒褐色土 (10YR 2/3) 粘性ありややしまる。全体的に(10YR 4/6)が少量みられる。

14層 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性ありややしまる。

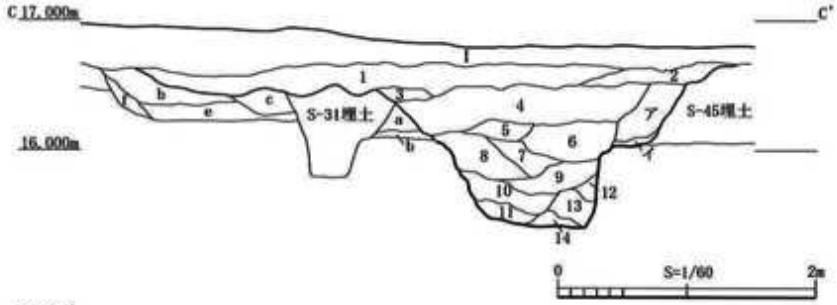
15層 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性ありややしまる。1ｃｍ未満の橙色ブロックと少量含む。

16層 黒褐色土 (10YR 3/2)とにぶい黄褐色土の混合土。10層より黒褐色土の割合が多い。やや粘性ありしまりはない。

17層 黒褐色土 (10YR 2/3) 粘性ありしまりは弱い。

18層 暗褐色土 (10YR 3/3)と褐色土(10YR4/6)の混合土。粘性ありしまりは弱い。

第５６図　３号溝跡 (S-2) 実測図



S-2 C-C'

1層　褐色土(10YR 4/6) しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を多く含む。

2層　黒褐色土10YR 3/1 しまりあり粘性強い。0.3～3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。

3層　褐色土10YR 4/6 しまりあり粘性強い。0.3～3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。

4層　黒褐色土10YR 3/1 しまりあり粘性強い。0.3～3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。

5層　黒褐色土10YR 3/2 しまりあり粘性強い。0.3～3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。下位に5ｃｍのⅧ層ブロックを含む。

6層　黒褐色土10YR 3/2 しまりあり粘性強い。0.3～3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。1～5ｃｍのⅧ層ブロックを非常に多く含む。

7層　暗褐色土10YR 3/3 しまりあり粘性強い。0.3～3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。

8層　黒褐色土10YR 3/2 しまりあり粘性強い。0.3～3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。

9層　暗褐色土10YR 3/3 しまりあり粘性強い。0.3～3ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。3ｃｍのⅧ層ブロックを非常に多く含む。

10層　黒褐色土10YR 3/3 しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を少し含む。

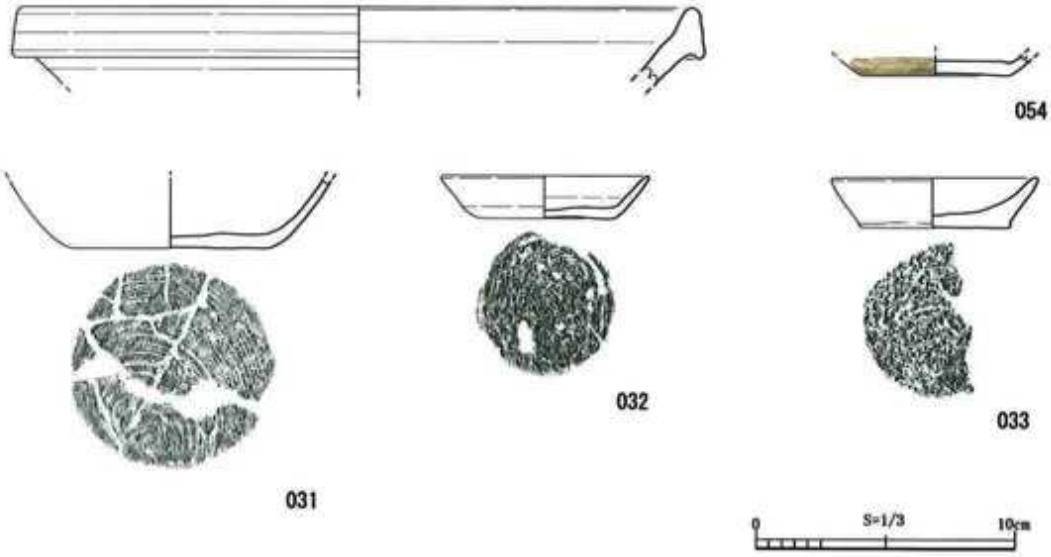
11層　黒褐色土10YR 3/3 しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を少し含む。

12層　暗褐色土10YR 3/3 しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を少し含む。1～2ｃｍのⅧ層ブロックを少し含む。

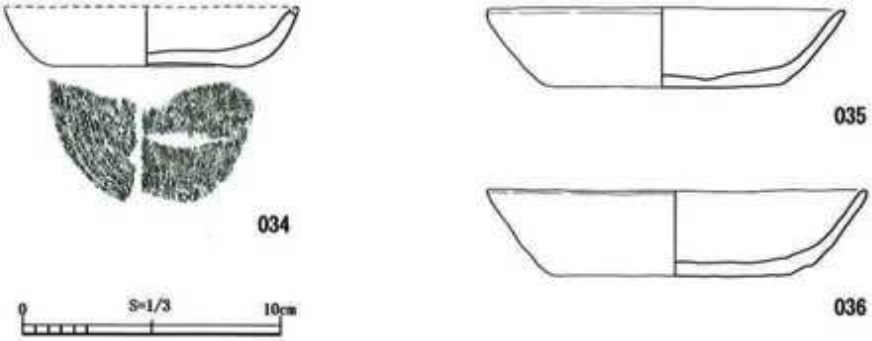
13層　暗褐色土10YR 3/3 しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を少し含む。1～2ｃｍのⅧ層ブロックを多く含む。

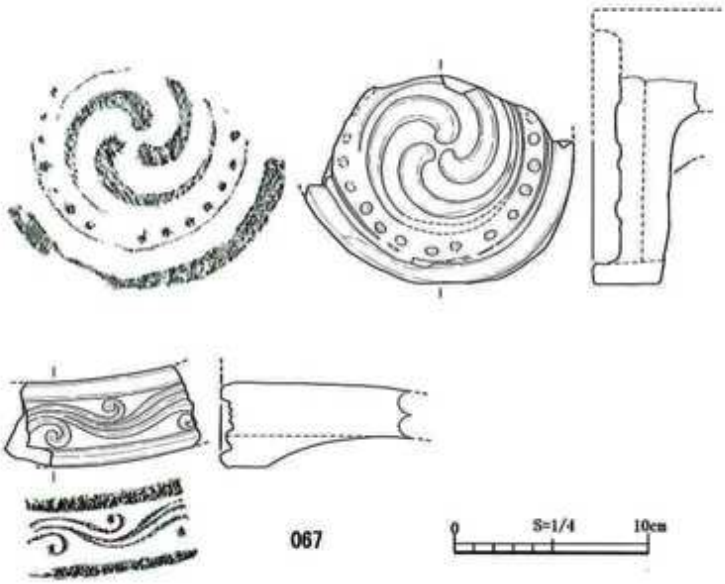
14層　暗褐色土10YR 3/3 しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を少し含む。5ｃｍ大のⅧ層ブロックを多く含む。

第５７図　３号溝跡 (S-2) 実測図



第５８図　３号溝跡 (S-2) 出土遺物実測図





第５９図　３号溝跡（S-2）出土遺物実測図

の、全体としては直線的に外方に開く。器面調整は内外面ともに回転ナデである。底部外面に糸切りの痕跡が認められる。

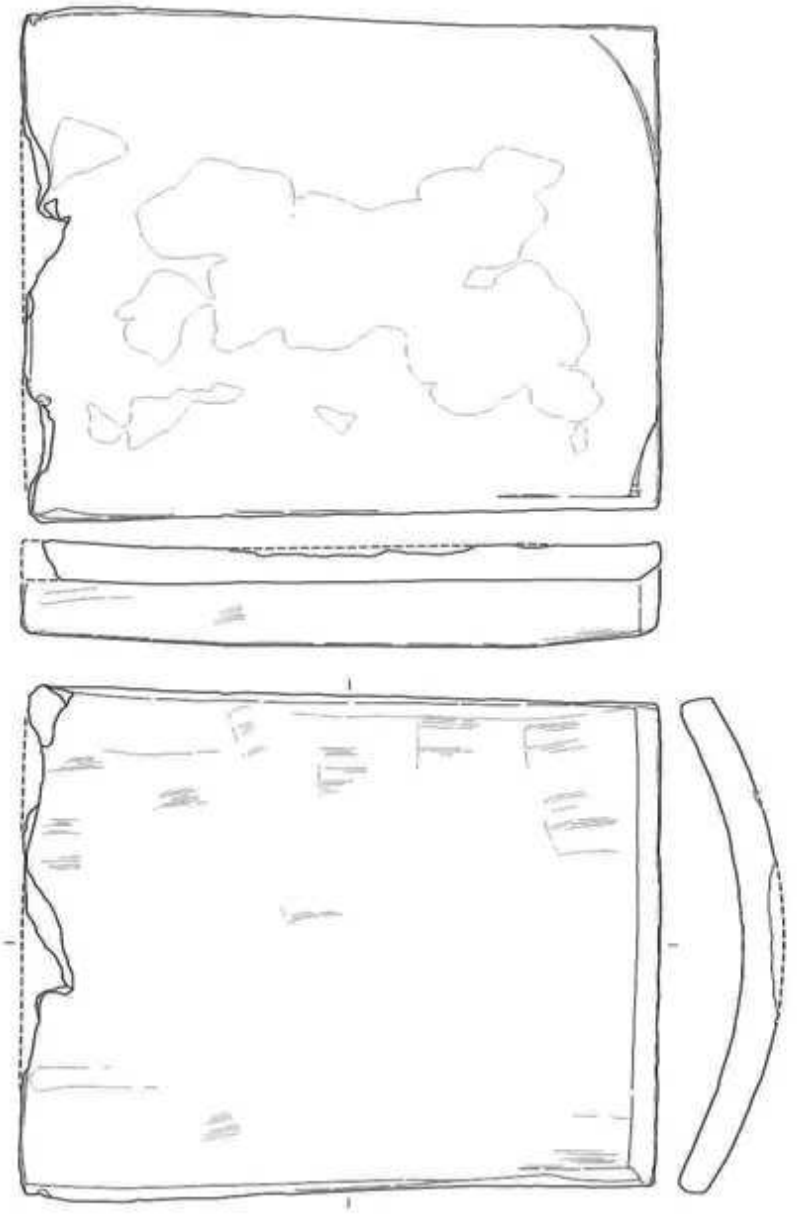
032は土師器の小皿である。底部は平底で、体部は直線的に外方に開き、口縁端部は丸く収まる。内外面ともに、最終調整は回転ナデである。底部外面には糸切り痕があり、口径8.0cmを測る。

033は土師器の小皿である。底部は平底で垂直に立ち上がる。体部は直線的に外方に開き、口縁端部は丸く収まる。比較的器壁に厚みがある。内外面ともに最終調整は回転ナデである。底部外面に糸切り離しの痕跡が認められる。口径は7.8cmである。

053は須恵器系鉢の口縁部片である。斜め外方へ開く形状をなす。口縁端部に面を有し、面の下縁は垂下する。器面は内外面ともに回転ナデ調整されており、口縁部最上部内面は比較的強めのナデが認められる。

054は中国系白磁皿の底部である。平底を呈し体部は外方に開きながら直線的に立ち上がる。内面には、底部と体部の境に細く浅い溝を形成する。外面には回転ヘラ切りの痕跡が認められる。内外面ともに釉がかかっているが、底部外面の釉はやや薄い。

034は口縁部を欠く土師器の坏である。やや上がり気味の平底を呈し、底部から体部にかけての立

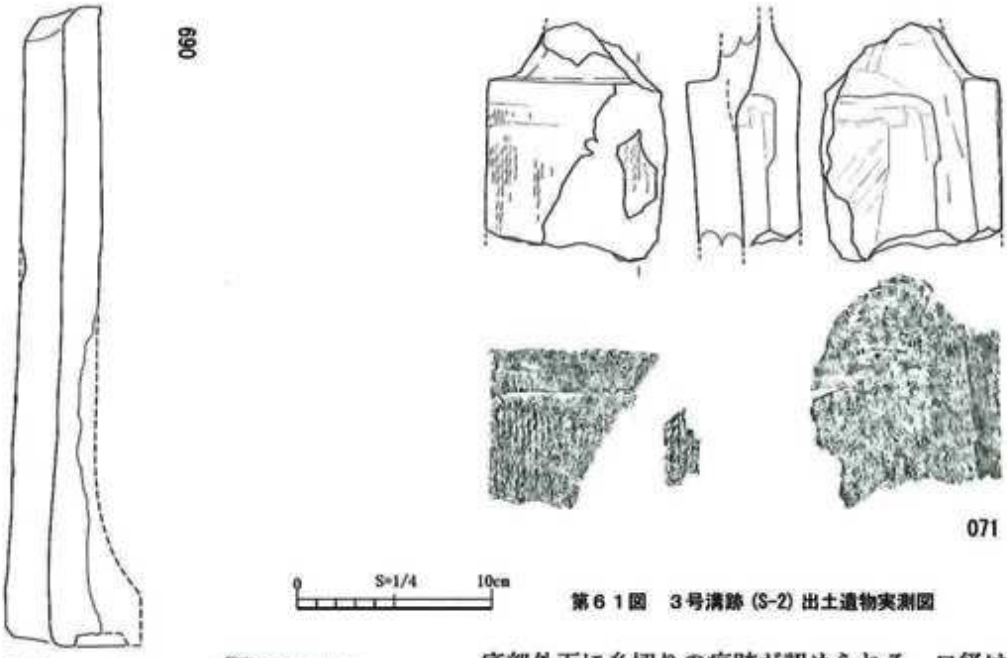


第６０図　３号溝跡（S-2）出土遺物実測図

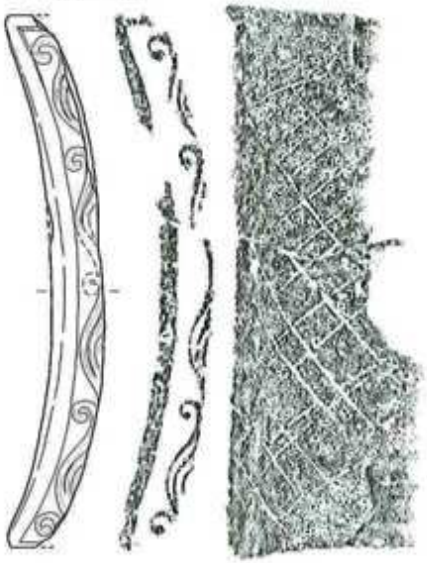
ち上がりは、やや内側に湾曲しつつ短く直線的に外方に開く。器面調整は内外面ともに回転ナデである。糸切り痕が底部外面に見られる。

035 は土師器の坏である。平底を呈し、体部は立ち上がりが若干内側に湾曲するものの、口縁部にかけては直線的に外方に開く。口縁端部は丸く収まる。内外面ともに回転ナデで仕上げられている。底部外面に糸切り痕が見られる。口径は 13.6cm を測る。

036 は土師器の坏である。底部は平底で、底部から体部にかけてやや内側に湾曲しながら、口縁部に向けて直線的に外方に開く。口縁端部は丸く収まる。器面調整は内外面ともに回転ナデである。



第６１図　３号溝跡（S-2）出土遺物実測図



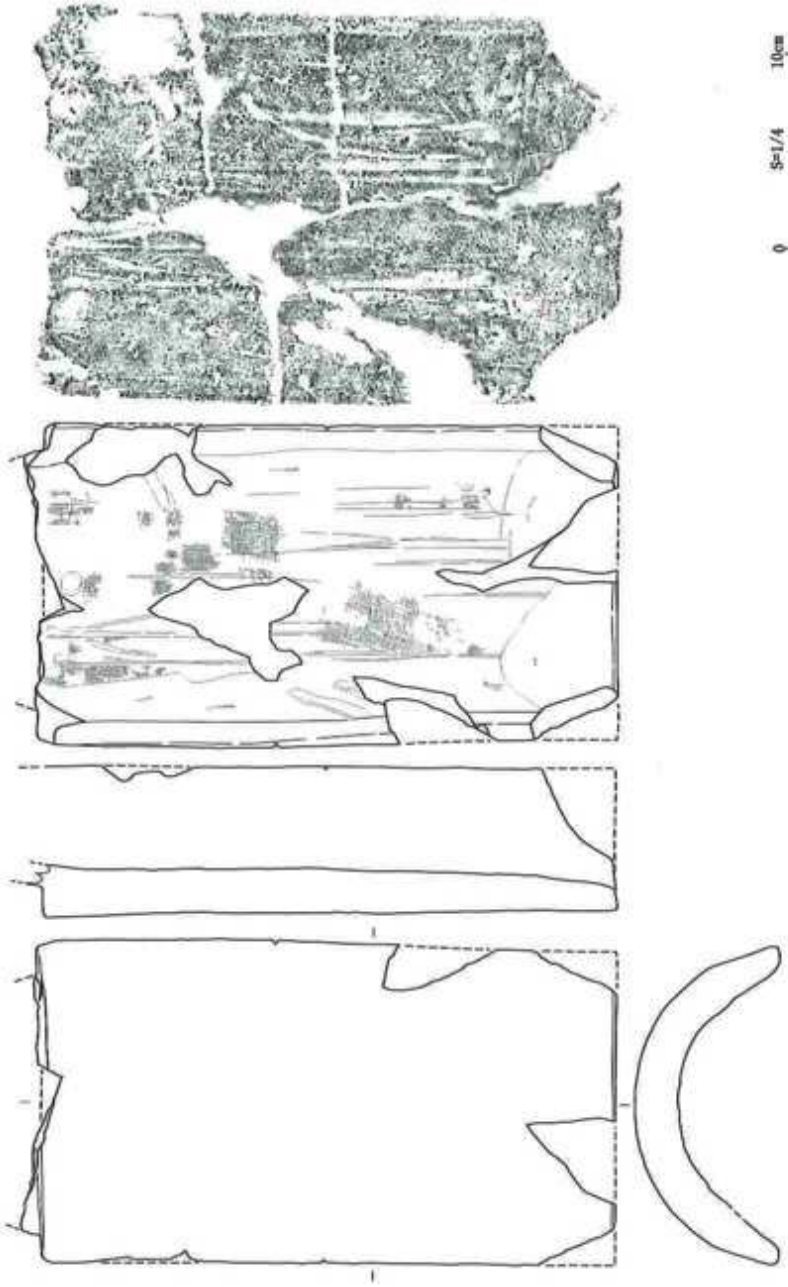
底部外面に糸切りの痕跡が認められる。口径は 14.4cm である。

066 は軒丸瓦の瓦当側の破片である。瓦当には離れ砂が、また木目と考えられる筋が多条見られる。瓦当裏面はナデ調整である。瓦当の断面には、瓦当表面部と裏面部の中間付近に継ぎ目が認められる。瓦当文様は中心に三つの巴文、その周囲に多数の珠文、さらに外側に圏線を配す。巴頭部は若干尖り、尾は長く伸びる。文様の断面は、相対的に低く丸みを帯びている。外縁は幅より高さの方が長い。

067 は軒平瓦の瓦当側の破片である。胴部凹面に離れ砂が見られ、調整はナデである。瓦当文様は唐草文である。顎凸面から胴部凸面にかけては、緩やかに内側に湾曲する。断面には、胴部と顎部の接合（顎貼り付け技法）の状況が明確に現われている。

068 は平瓦である。凹凸両面に離れ砂が見られる。凹面には斜め方向の糸切り痕があり、長軸方向に一部明瞭なナデ調整が見える。端面や側面にはカマキリ痕がある。凸面周縁の数カ所で成形台の痕が認められる。

069 は軒平瓦の瓦当側の上半部破片である。凹凸両面には離れ砂がある。凹面の長軸方向にナデ調整が認められる。瓦当文様は唐草文である。瓦当部の外縁幅はさほど広くない。凸面では顎部が剥



第62図　3号溝跡（S-2）出土遺物実測図

がれた痕跡（顎貼り付け技法）が確認できる。顎部が接合する箇所には斜格子状の刻線（カキアブリ）が認められる。凹面狭端面・側面にカマキリの痕跡が見られる。

071は丸瓦の玉縁側の破片である。胴部凹面に斜め方向の糸切り痕が見える。胴部凸面には縄叩きの痕跡がある。側面にカマキリ痕が見られる。それ以外の器面調整は概ねナデとケズリである。

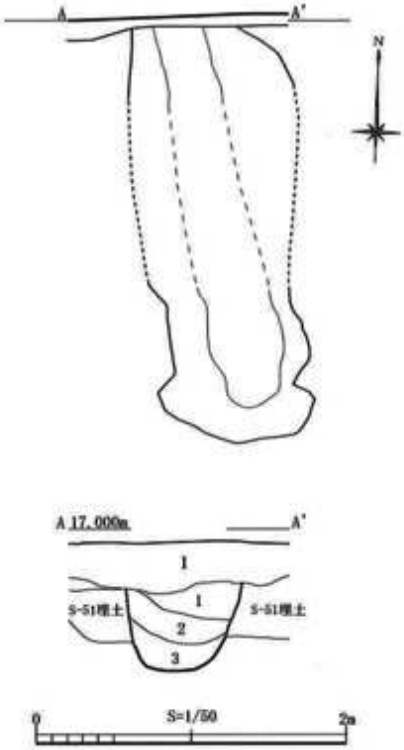
070は玉縁を欠く丸瓦である。凹面には布目痕と長軸方向のケズリ痕が、凸面にはナデ調整が認

められる。側面の玉縁側にカマキリ痕があり、側面の広端面側はナデ調整で丸みを帯びた形状を呈している。

4号溝跡（S-3）

調査区南側において検出した南北方向の溝である。5号溝跡（S-4）・18号住居址（S-51）と重複関係にあり、5号溝跡・18号住居址より新しい。長さ2.3mを検出し、幅0.8m、深さ0.5mである。Ⅵ層上面にて検出した。今回の調査では唯一の南北方向の溝である。南端部分は5号溝跡部分と重複、一致していることから、5号溝跡との関係性が考慮される。

埋土は3層に分層される。1～3層は暗褐色土（10YR3/3）と同質ではあるが、混入する礫や褐色ブロックの量から分けている。出土遺物は全て細片である。



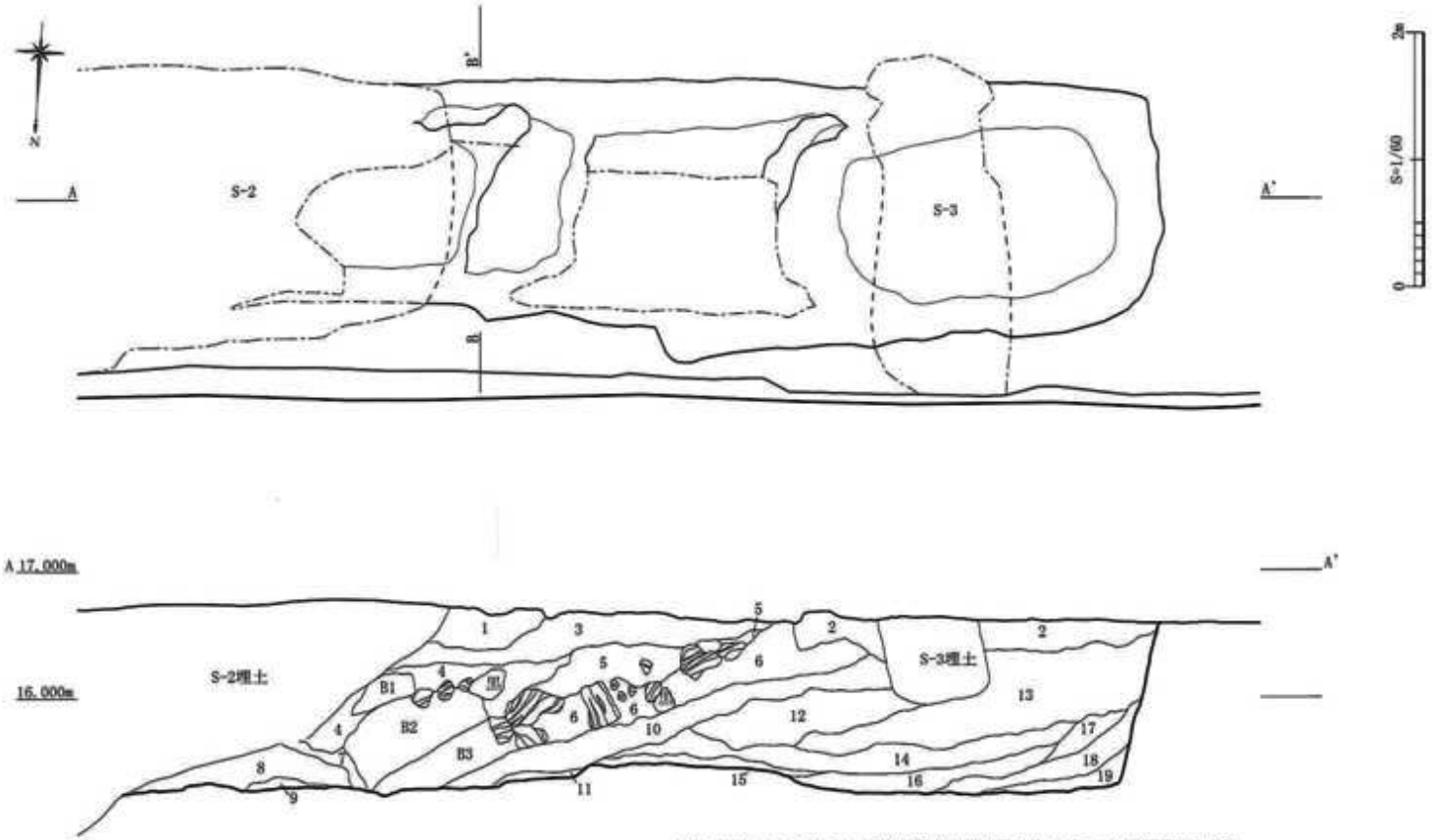
S-3
1層　暗褐色土10YR 3/3 暗褐色土 しまっており粘性強い。
0.1～0.5cmの礫を多く含む。
2層　暗褐色土(10YR 3/3) しまっており粘性強い。
0.1～0.5cmの礫を多く含む。
3層　暗褐色土(10YR 3/3) しまっており粘性強い。
0.1～0.5cmの礫を多く含む。0.5～3cmの褐色ブロックを多く含む。

第63図　4号溝跡（S-3）実測図

5号溝跡（S-4）

調査区南側において検出した東西方向の溝である。4号溝跡（S-3）・12号住居址（S-43）・13号住居址（S-44）・16号住居址（S-49）・18号住居址（S-51）と重複関係にあり、12号住居址・13号住居址・16号住居址・18号住居址より新しく、4号溝跡より古い。長さ15.0mを検出し、幅2.0m、深さ1.3mである。Ⅵ層上面にて検出した、逆台形を呈する溝である。今回の調査では溝の西端を確認し、東側においては3号溝跡と重複する。その規模から3号溝跡と密接な関係があると考えられる。西端部分は一部深く掘り込まれ、ほぼ垂直に立ち上がる。また、底面の中央で規模0.4m×0.3m、高さ0.1mのⅧ層削り出しの突起状遺構を確認した。一部3号溝跡と底面が一致することから、3号溝跡と同一遺構である可能性が高いが、埋土状態が極端に異なることから、時期が異なる別遺構として捉え調査を行った。

埋土の1～3層は暗褐色土（10YR3/3）であり、1cm程度の褐色ブロックを多く含む。4～6層においては、黒色土と褐色土が互層状となったブロック土（径5～50cm）を顕著に多く含む。ブロック土としてまとまりのあるものは図示し、互層方向を明記している。またB1～3層についても、極



※4～6層にて5～50ｃｍの黒色土褐色土が瓦層となるブロックが顕著にみられ
実測図においてはブロックとしてまとまりがあり瓦層の方向が明確なもののみ図示した。

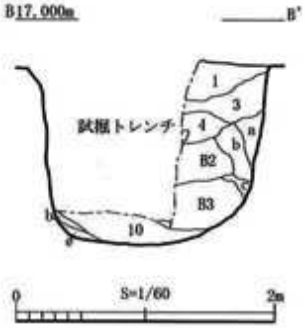
第６４図　５号溝跡（S-4）実測図

端に大きなブロックであるため図示した。横断方向にて確認したａ～ｃ層はＢ層の間に堆積したものであり、相当の大きさのブロック土が堆積したことを示唆する。７～９層の堆積はⅧ層削り出し突起状遺構を覆う堆積であるが、人為的な埋め戻し土であり、その後４～６層の堆積があったことを示す。10～17層までは人為的な埋め戻し土である。18層は柔らかい土質であり、自然堆積と判断した。また19層も18層と同質ではあるが、下位にて鉄分の沈殿の見られる水性堆積土を確認した。出土遺物は層全体から瓦片がまばらに数点出土している。

以上のように、５号溝跡は掘削されてある程度の期間機能した後、人為的に埋め戻された遺構である。その埋土には互層状態のブロック土を多く含むことから、築地された構造物の基礎を利用し埋め戻されたことが考えられる。

037は土師器の坏底部である。若干上がり気味の平底を呈する。器面は内外面ともに回転ナデ調整が施されている。糸切り痕が底部外面に見られる。

038は土師器の坏底部である。平底の底部に直線的に開く体部が取り付いている。器面は内外面ともに回転ナデ調整が施されている。外面に糸切り離しの痕跡がある。



S-4

1層　暗褐色土(10YR 3/3) 固くしまり粘性をおびる。
3ｃｍ程度の褐色粘土ブロックをまばらに少し含む。0.1ｃｍの礫を多く含む。

2層　暗褐色土(10YR 3/3) 固くしまり粘性をおびる。
1ｃｍ程度の褐色粘土ブロックをまばらにわずかに含む。0.1ｃｍの礫を多く含む。

3層　暗褐色土(10YR 3/3) 固くしまり粘性をおびる。
1ｃｍ程度の褐色粘土ブロックをまばらにわずかに含む。0.1～0.3ｃｍの礫を多く含む。

4層　黒褐色土(10YR 3/2) 固くしまり粘性をおびる。
1～3ｃｍ程度の褐色粘性ブロック・黒色粘土ブロックを多く含む。0.1～0.5ｃｍの礫を多く含む。

5層　暗褐色土(10YR 3/3) 固くしまり粘性をおびる。
1ｃｍ程度の褐色粘土ブロックをまばらに多く含む。0.1～0.3ｃｍの礫を多く含む。

6層　黒褐色土(10YR 3/2) 固くしまり粘性をおびる。
1～3ｃｍ程度の褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを多く含む。0.1～0.5ｃｍの礫を多く含む。

7層　黒褐色土(10YR 3/2) しまりなく粘性をおびる。
1～3ｃｍの黒色粘土ブロックをまばらに多く含む。

8層　黒褐色土(10YR 3/2) しまりあり粘性をおびる。0.5～5ｃｍの褐色粘土ブロックをまばらに多く含む。

9層　暗褐色土(10YR 3/3) しまりなく粘性をおびる。0.5～1ｃｍの褐色粘土ブロックをまばらに少し含む。0.1ｃｍ程度の礫を多く含む。

10層　黒褐色土(10YR 3/2) 固くしまり粘性をおびる。0.5～10ｃｍの褐色粘土ブロック、1ｃｍ程度の黒色粘土ブロックを非常に多く含む。0.1ｃｍの礫を多く含む。

11層　暗褐色土(10YR 3/3) 固くしまり粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。

12層　黒褐色土(10YR 3/2) 固くしまり粘性をおびる。0.5～3ｃｍの褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを非常に多く含む。0.1ｃｍの礫を多く含む。

13層　黒褐色土(10YR 3/2) 固くしまり粘性をおびる。0.5～3ｃｍの褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを多く含む。0.1ｃｍの礫を多く含む。

14層　黒褐色土(10YR 3/2) 固くしまり粘性をおびる。0.5～3ｃｍの褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを多く含む。0.1ｃｍの礫を多く含む。13層ほど粘質でない。

15層　黒褐色土(10YR 3/2) しまっており粘性をおびる。0.5～2ｃｍの褐色粘土ブロックを少し含む。

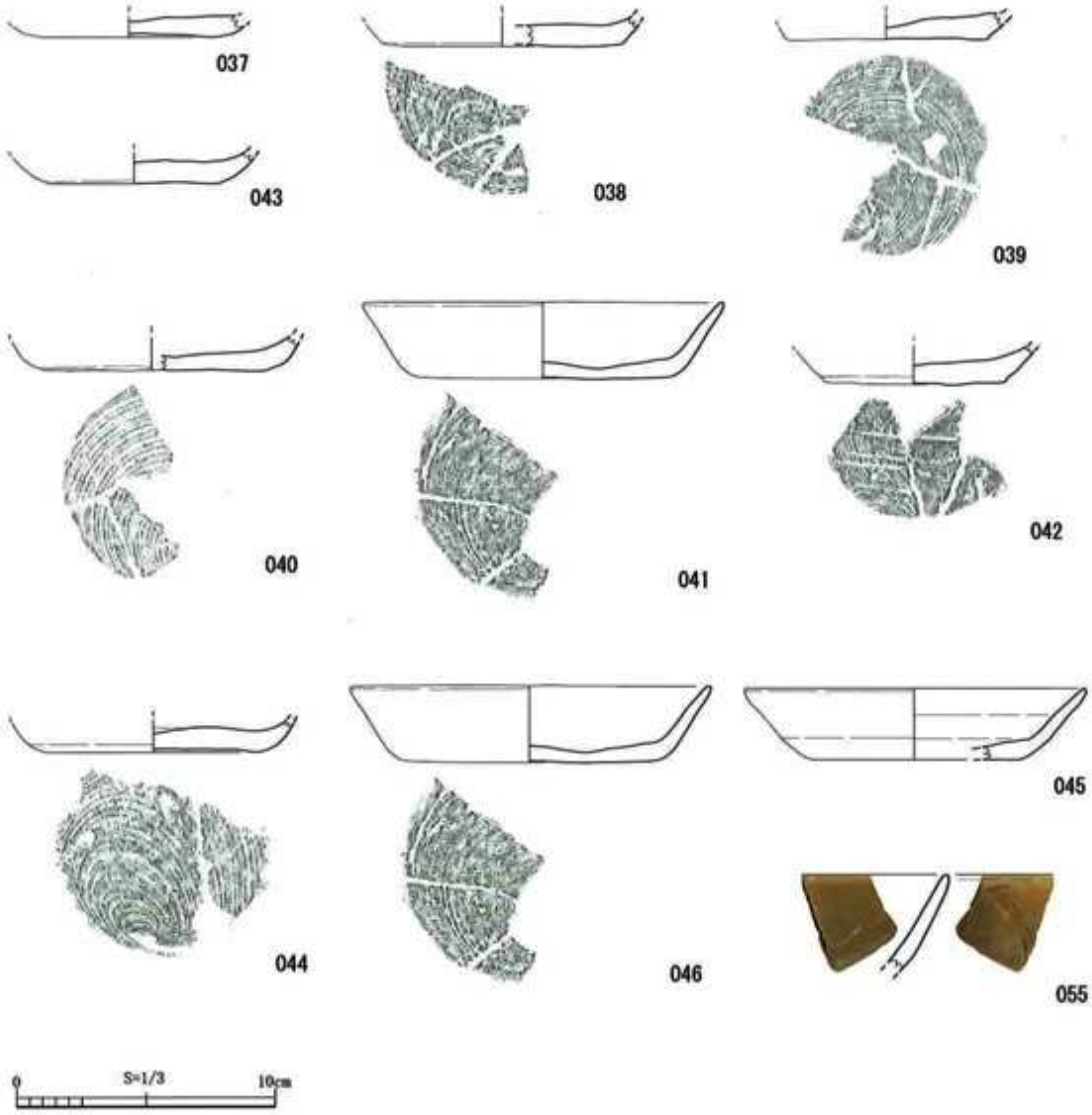
16層　黒褐色土(10YR 3/2) 固くしまっており粘性をおびる。1～5ｃｍの褐色粘土ブロック黒色粘土ブロックを多く含む。0.1ｃｍの礫を多く含む。

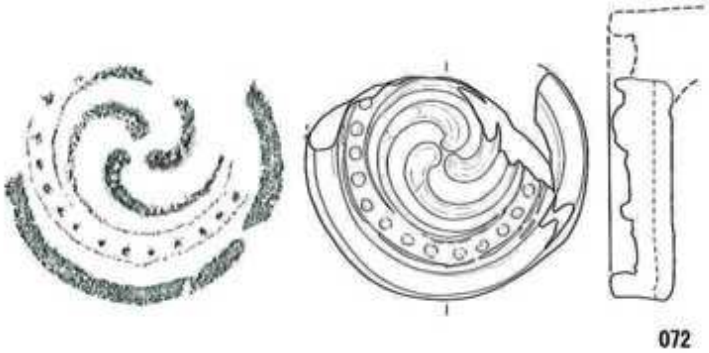
17層　黒褐色土(10YR 3/2) 固くしまっており粘性をおびる。1～5ｃｍの褐色粘土ブロック黒色粘土ブロックを多く含む。0.1ｃｍの礫を多く含む。16層よりブロックが多い。

18層　黒褐色土(10YR 2/2) しまっており粘性をおびる。柔らかみがある。カーボンをわずかに含む。(自然堆積)

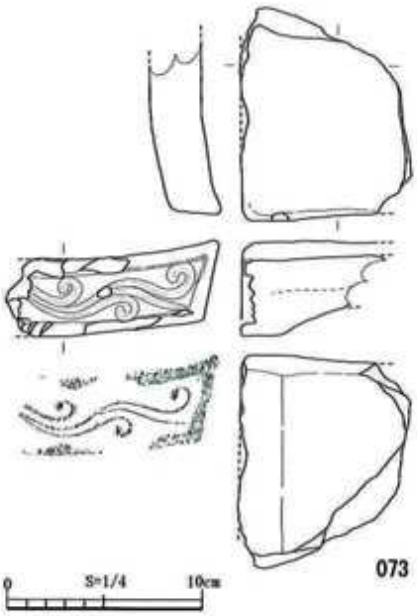
19層　黒褐色土(10YR 2/2) しまっており粘性をおびる。褐色粒子(0.1ｃｍ)を下位にて多く含む。(下位は水性堆積層)

第６５図　５号溝跡 (S-4) 実測図





第６６図　５号溝跡（S-4）出土遺物実測図



第６７図　５号溝跡（S-4）出土遺物実測図

039は土師器の坏底部である。底部は平底で、わずかな段を持って体部へと続く。内面中央には径約3.0cmの浅い窪みがある。器面は回転ナデ調整されており、外面に糸切り離し痕が見られる。

040は土師器の坏底部である。平底の底部から体部にかけては、やや内側に湾曲する。器面調整は内外面ともに回転ナデで、外面には糸切り離し痕がある。

041は土師器の坏底部で平底を有する。若干の段を形成して体部へやや内側に湾曲しながら続く。器面は内外面とも回転ナデ調整されている。外面に糸切り痕が認められる。

042は土師器の坏の底部である。底部は平底で、わずかな段を持って体部へ直線的に続く。器面調整は内外面ともに回転ナデで、外面に糸切り痕がある。

043は土師器の坏の底部である。平底を呈し、やや内側に湾曲しながら体部へと続く。内外面の調整は回転ナデによる。外面には糸切り離し痕がある。

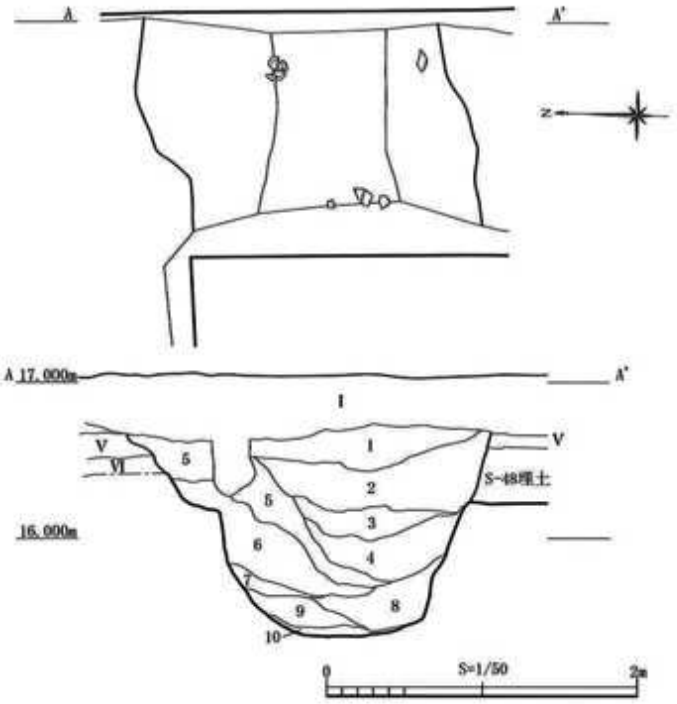
044は土師器の坏底部である。若干上がり気味の平底である。器面は回転ナデ調整が認められ、底部外面には糸切り痕が見られる。

045は土師器の坏である。平底を呈し、立ち上がりから口縁部にかけてほぼ直線的に外方に開く。口縁端部は丸く収まる。器面調整は内外面ともに回転ナデのようであるが、器面がかなり磨耗しているため定かではない。口径が復元で13.0cmを測る。

046は土師器の坏である。平底の底部から口縁部にかけて直線的に外方に開く。口縁端部は丸く収まる。器面は内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部外面に糸切り離しの痕跡が見られる。口径は13.8cmである。

055は青磁碗の口縁部片である。内側に極めて緩やかに湾曲しながら外方へ開く。内外面ともに釉が施されている。外面には線描きの蓮弁文が認められる。14世紀前後頃のものと推測される。

072は軒丸瓦の瓦当面の破片である。瓦当には離れ砂が見られる。瓦当裏面は弱いナデ調整が施されている。瓦当断面には、瓦当表面と裏面の中間付近に粘土の継ぎ目痕が残っている。瓦当文様は中心から順に三つの巴文、複数の珠文、圏線を配している。巴頭部はやや丸みを帯びる。外縁の幅と高さはほぼ同じ長さである。



S-25

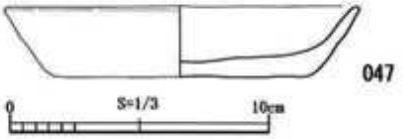
1層　暗褐色土(10YR 3/3)　しまりあり粘性強い。0.1～0.5ｃｍの礫を多く含む。カーボンをわずかに含む。
2層　暗褐色土(10YR 3/3)　しまりあり粘性強い。1ｃｍの礫を多く含み10～20ｃｍのⅥ層ブロックを非常に多く含む。
3層　暗褐色土(10YR 3/3)　しまりあり粘性強い。0.1～0.5ｃｍの礫を多く含みボツボツしている。
4層　暗褐色土(10YR 3/4)　しまりあり粘性強い。0.1～0.5ｃｍの礫を多く含みⅥ層ブロック(3～5ｃｍ)を多く含む。
5層　暗褐色土(10YR 3/3)　しまりややあり粘性強い。0.1～0.5ｃｍの礫を多く含みカーボンを少し含む。
6層　暗褐色土(10YR 3/3)　しまりややあり粘性強い。0.1～0.5ｃｍの礫を多く含みⅥ層ブロック(1ｃｍ程度)を少し含む。
7層　黒褐色土(10YR 3/2)　しまりややあり粘性強い。カーボンを少し含む。
8層　黒褐色土(10YR 3/2)　しまりややあり粘性強い。0.1～0.5ｃｍの礫・カーボンをわずかに含む。
9層　黒褐色土(10YR 3/2)　しまりややあり粘性強い。カーボンを少し含む。
10層　黒褐色土(10YR 2/2)　しまりややあり粘性強い。0.1～0.5ｃｍの礫・カーボンをわずかに含む。

第６８図　６号溝跡 (S-25) 実測図

６号溝跡 (S-25)

調査区東側、Ⅵ層上面にて検出した。東西方向に走る溝である。１号住居址(S-6)・15 号住居址(S-48)と重複し、１号住居址・15 号住居址より新しい。東西長 1.3 m、南北長 2.0 m、深さ約 1.3 mである。

埋土は大きく上層と下層の２層に分かれる。上層（1 ～ 4）は暗褐色土を基本とし、褐色ブロックを多く含むものである。下層（5 ～ 10）は若干褐色ブロックを含むものの、その量は上層より少なくなる。上層および下層で、北側からの土の流れ込みが認められる。褐色ブロックの量を考慮すると、この溝の北側に土盛が存在した可能性が考えられる。堆積は人為的な埋め戻しによるものである。



第６９図　６号溝跡 (S-25) 出土遺物実測図

遺物は埋土下位から瓦・土師坏（口径 13 ～ 14cm）が出土

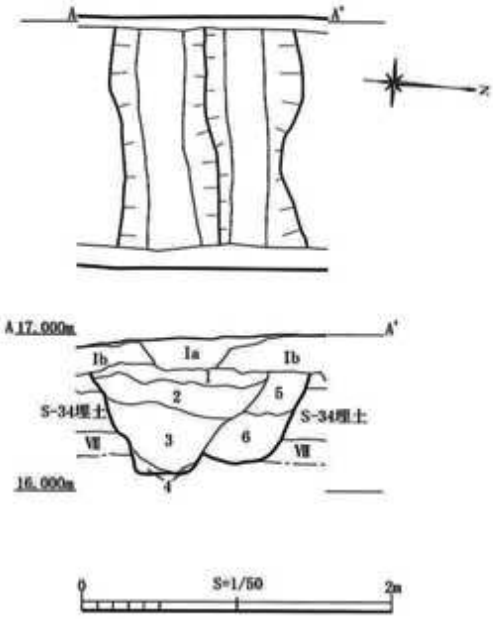
している。

047は土師器の坏である。底部は平底で、体部は口縁部に向って直線的に外方に開く。口縁端部は丸く収まる。器面は内外面をナデまたは回転ナデで調整されているようだが、器面の磨耗が激しいため詳細は不明である。復元口径は13.4cmである。

7号溝跡(S-27)

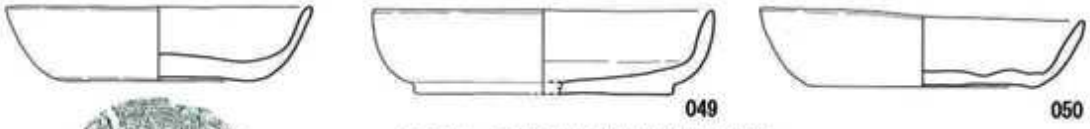
調査区西側、10号住居址埋土上面にて検出した。東西方向に走る溝である。10号住居址(S-34)と重複し、10号住居址より新しい。東西長1.3m、南北長0.6m、深さ約0.4mである。本来2条の溝であり、南側の溝が新しい。溝底面はⅧ層上面であることも影響して非常に硬い。埋土は黒褐色土を基調とする。南側の溝埋土は4層に分かれる。全層にⅧ層起源の礫が少量含まれる。北側の溝埋土は2層に分かれる。遺物は土師坏が出土している。6号溝跡出土の土師坏と同規格であり、時期も6号溝跡と同時期と捉えている。

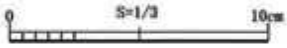
048は土師器の坏である。若干上がり気味の平底を有する。底部から体部にかけての立ち上がりは、



S-27
1層　黒褐色土(10YR 3/1)　ややしまっており粘性強い。カーボンをわずかに含む。
2層　黒褐色土(10YR 3/1)　ややしまっており粘性強い。カーボンをわずかに含む。0.1～0.3cmの礫を少し含む。
3層　黒褐色土(10YR 3/1)　ややしまっており粘性強い。カーボンをわずかに含む。焼土をわずかに含む。
4層　暗褐色土(10YR 3/3)　ややしまっており粘性強い。カーボンをわずかに含む。3～5cmの褐色ブロックを少し含む。
5層　黒褐色土(10YR 3/1)　ややしまっており粘性強い。カーボンをわずかに含む。0.1～0.3cmの礫・褐色ブロックを少し含む。
6層　黒褐色土(10YR 3/1)　しまっており粘性強い。カーボンをわずかに含む。0.1～0.3cmの礫・褐色ブロックを少し含む。

第70図　7号溝跡(S-27)実測図





第７１図　７号溝跡（S-27）出土遺物実測図

やや内側に湾曲しつつ直線的に外方に開く。口縁端部は丸く収まる。底部中央付近は相対的に厚みがある。器面調整は内外面ともに回転ナデで、底部外面に糸切り痕が認められる。口径は 11.6cm を測る。

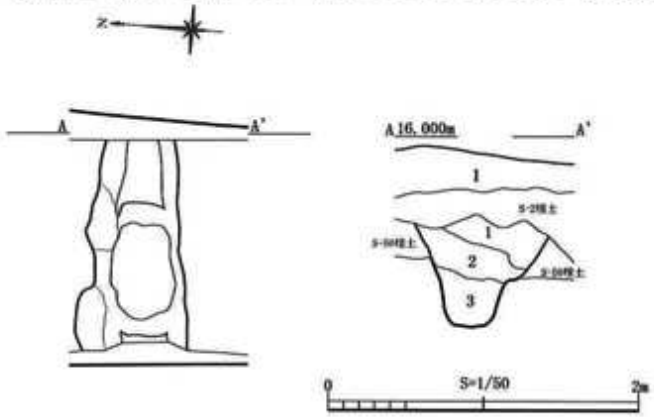
049 は土師器の坏である。平底の底部は垂直に立ち上がり、段を形成する。体部は下部で内側へ短く湾曲するが、口縁部にかけて直線的に外方へわずかに開く。口縁端部は丸く収まる。器面調整は内外面ともに回転ナデであり、底部外面に糸切り離し痕跡がある。口径は 12.9cm である。

050 は土師器の坏である。底部は平底を呈する。底部から体部にかけては、やや内側に湾曲しながら口縁部に向けて直線的に外方へ開く。口縁端部は磨耗のため不明瞭であるが、概ね丸く収まる。器面調整は内外面ともに回転ナデであり、底部内面には強めの回転ナデ痕跡が 2 箇所で見られる。底部外面には糸切り痕があり、口径は 12.9cm を測る。赤色粒子が比較的多く含まれる。

８号溝跡（S-31）

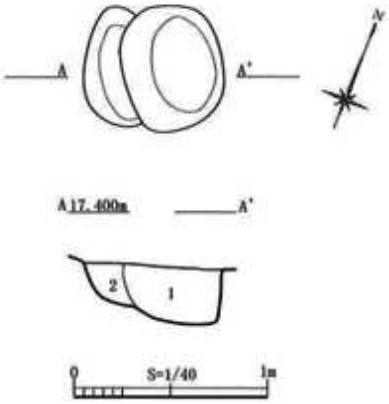
調査区東側、Ⅳ層上面にて検出した。東西方向に走る溝である。3 号溝跡（S-2）と重複し、3 号溝跡より古い。東西長 1.3 m、南北長 0.6 m、深さ約 0.4 mである。溝底面は凹凸を有する。

掘り込みは 3 号溝跡を被覆する褐色土の下位にあることから、3 号溝跡より古い遺構である。



S-31
1層　黒褐色土(10YR 3/2)　しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を多く含む。
2層　暗褐色土(10YR 3/3)　しまりあり粘性強い。0.1～0.3ｃｍの礫を多く含む。3ｃｍ程度のⅧ層ブロックを少し含む。
3層　黒褐色土(10YR 3/2)　しまりあり粘性強い。0.3ｃｍの礫を非常に多く含む。

第７２図　８号溝跡（S-31）実測図



1層　黒褐色土(10YR 2/3) やや粘性がありしまりなし
　　褐色土粒子(0.1cm)わずかに含む。(柱抜痕)
2層　暗褐色土(10YR 3/4) 粘性がありややしまっている。
　　褐色粘土ブロック(5cm)を多く含む。

第７３図　１号土坑 (S-5) 実測図

１号土坑 (S-5)

調査区南側において検出した土坑である。１号溝跡 (S-1-2) と重複関係にあり、1 号溝跡より新しい。長軸 0.75 m、短軸 0.65 m、深さ 0.2 m である。1 号溝跡埋土上層から検出した土坑である。

遺物は土器細片が少量出土している。

２号土坑 (S-26)

調査区西側、Ⅵ層上面にて検出した不定形の土坑である。7 号住居址 (S-29) と重複し、7 号住居址より新しい。東西長 3.1 m、南北長 3.7 m、深さ約 0.4 m である。東側の床面と立ち上がり部分に数基のピットを確認しているが、樹痕の可能性がある。

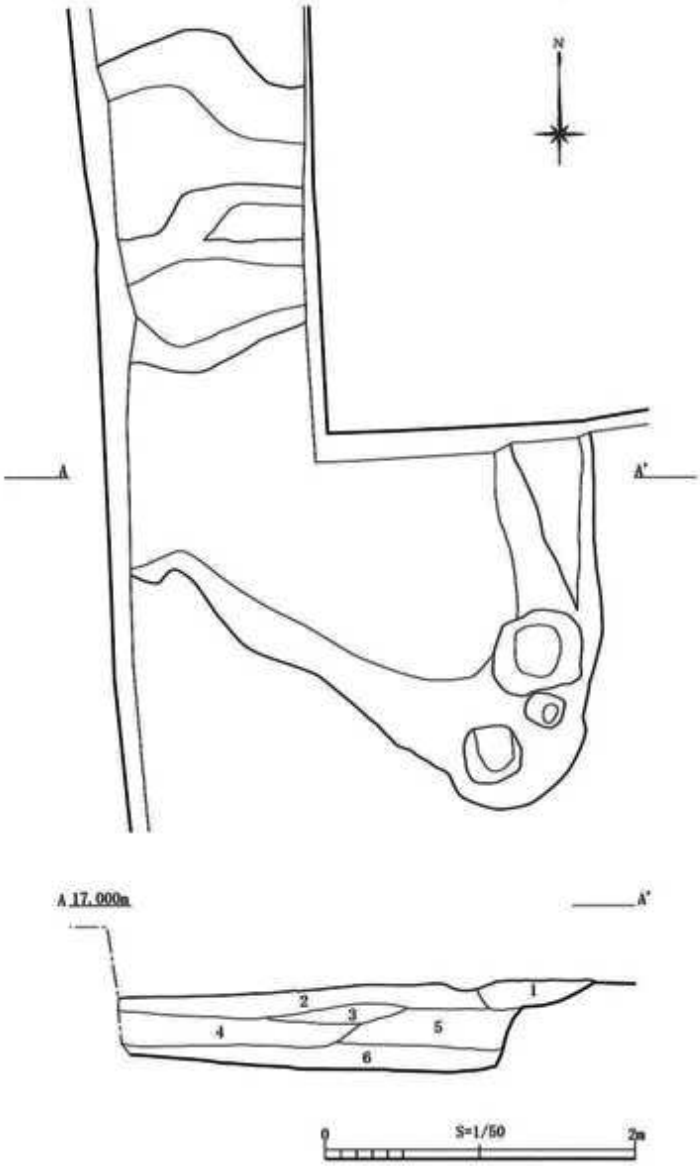
埋土は 6 層に分層される。全ての層にわたりⅧ層起源の礫が少量含まれる。また柔らかい質感であり、全体的にしまりがない。遺構の時期は判然としない。

３～１０号土坑 (S-52 ～ 58)

3 ～ 10 号土坑の埋土は、ほぼ同一で短期間に埋められている。色調は 10YR2/3 の黒褐色土で硬くしまり粘性があり、径 5 cmの褐色粘土ブロックを多く含む。

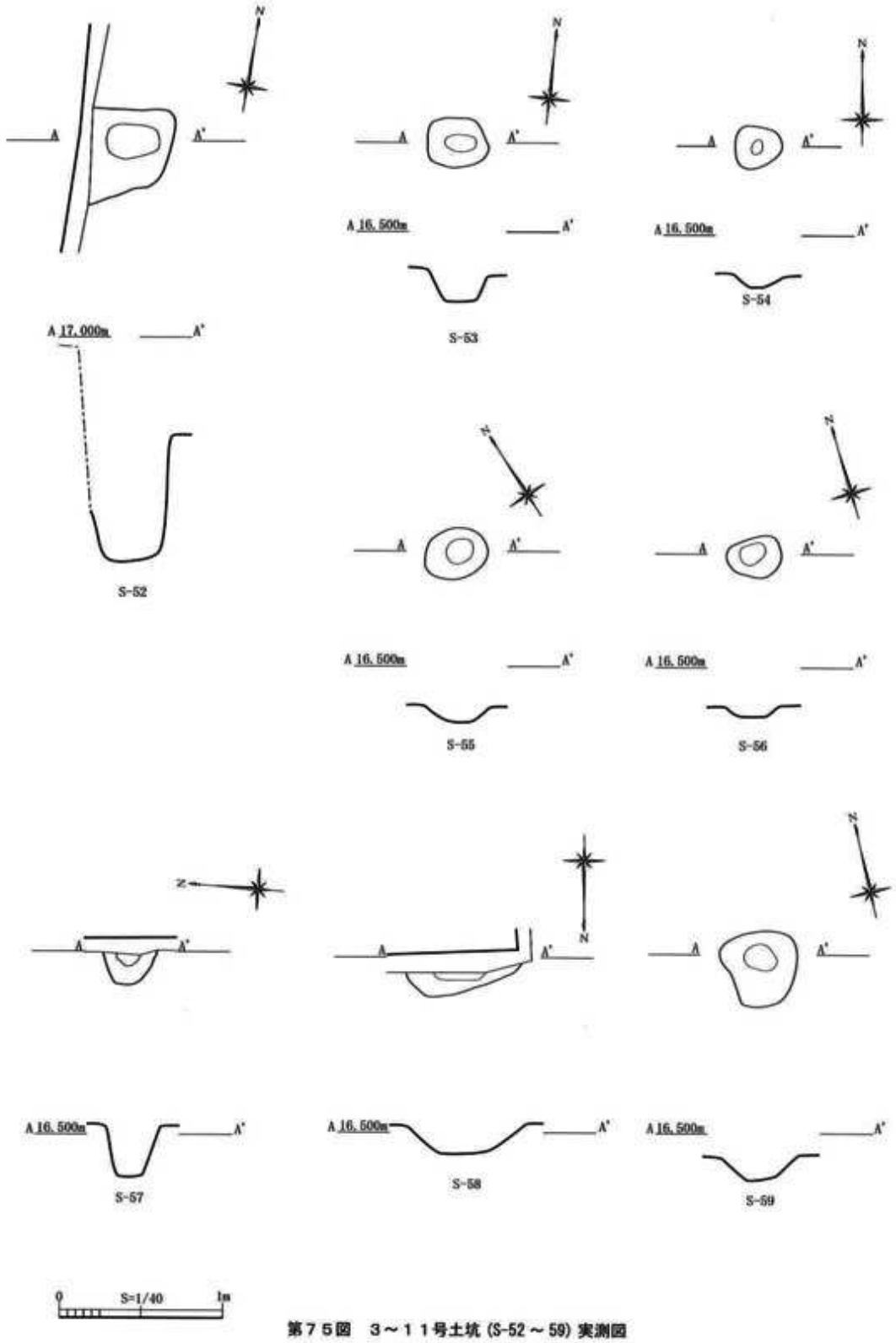
１１号土坑 (S-59)

11 号土坑も上記土坑と同様に短期間で埋まっている。色調は 10YR2/3 の黒褐色土でややしまり粘性があり、径 0.1 ～ 0.2cm の礫・焼土をわずかに含む。



1層　黒褐色土(10YR 3/2) しまり強い。粘性中。5mm以下の小礫多量混じる。
2層　黒褐色土(10YR 3/2) しまりやや強い。粘性中。5mm以下の小礫多量混じるが1層より少ない。
　　褐色粘土のブロック少量混じる。炭化物少量含む。
3層　暗褐色土(10YR 3/3) しまりやや強い。粘性やや強い。5mm以下の小礫少量混じる。
4層　黒褐色土(10YR 3/3) しまり中。粘性やや低い。5mm以下の小礫少量混じる。
　　褐色粘土(1ｃｍ以下)のブロック多量混じる。
5層　暗褐色土(10YR 3/3) しまり中。粘性やや低い。5mm以下の小礫混じる。
　　黒褐色土のブロック(1～2ｃｍ)多量混じる。
6層　暗褐色土(7.5YR 3/3) しまりやや強い。粘性やや強い。黒褐色土のブロック(1ｃｍ以下)少量混じる。

第７４図　２号土坑 (S-26) 実測図



第７５図　３～１１号土坑 (S-52～59) 実測図

第４節　その他の遺構・遺物

ここでは中世以降の時代と思われる遺構や元位置を特定するのに困難であるが、南大門遺跡を考える上で参考資料となる遺物について所見を記述する。

９号溝跡 (S-1-1)

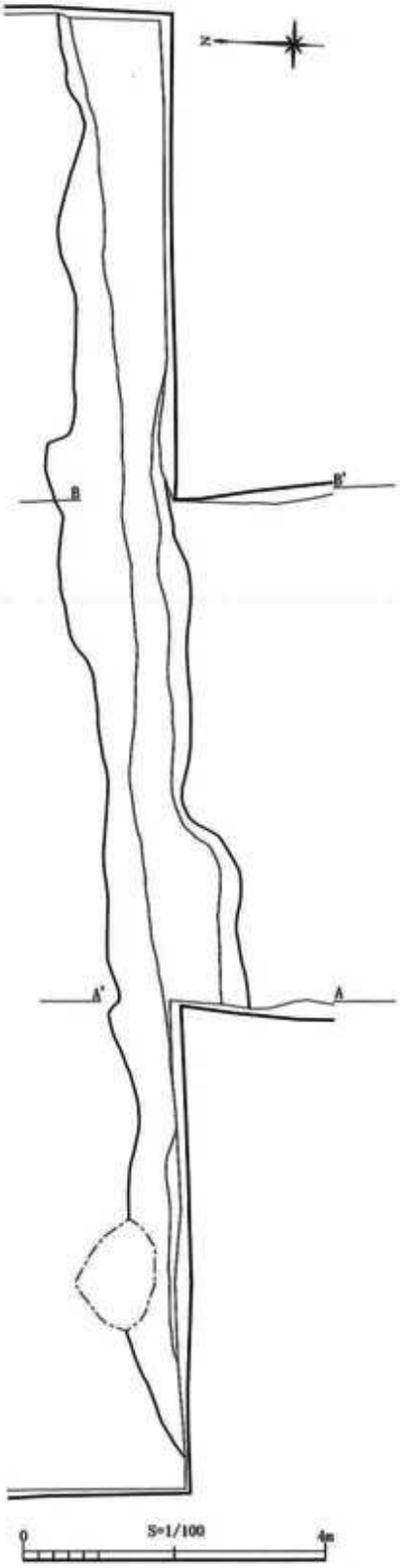
調査区南側において検出した東西方向の溝である。弥生時代の住居である 12 号住居址 (S-43)・13 号住居址 (S-44)・16 号住居址 (S-49) と重複関係にあり、12 号住居址・13 号住居址・16 号住居址より新しい。長さ 19 mを検出し、幅 1.5 m、深さ 0.4 mである。Ⅳ層上面にて検出した。溝断面形状は逆台形を呈する。

埋土は地点によって異なる。弥生時代の住居との重複部分では、住居埋土である黒褐色土が北側から流入している。また、Ⅵ層起源のブロック土を埋土中位から下位にかけて多く含む。近世陶器片を若干含むが、弥生時代後期の土器片が圧倒的に多い。そのため家形土器片と思われる遺物も混入している。

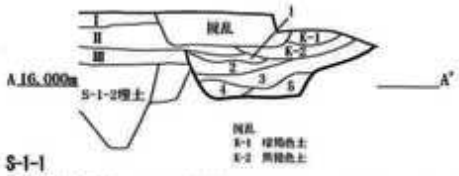
001 は家形土器の小破片と推測される。厚さ約 7mm のわずかに内側に湾曲する体部に、湾曲に沿う方向で直径 3 ～ 4mm の円柱形の粘土紐 2 本が接し並列して取り付く。2 本 1 組の粘土紐の両脇は、最終的に工具や指先を利用してナデ付けられているが、両者が接する中央部分は、工具等で線引きするかたちで仕上げられている。残存状況が良好な菊池川中流域の方保田東原遺跡（熊本県山鹿市）出土の家形土器（山鹿市教育委員会 2006）と比較すると、扉の枠の一部である可能性が高い。なお、001 は 12 号住居址出土の家形土器とは形態や製作技法、胎土等が類似するが、現状では両者が同一個体であるとは言い切れない。

３号溝跡から出土した遺物を以下の通り記述する。

002 は甕の脚部である。高さはあまりなく、外側に緩や



第７６図　９号溝跡 (S-1-1) 実測図



S-1-1

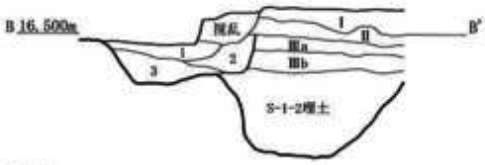
1層　黒褐色土(7.5YR 3/1) 粘性ややありしまってない。カーボンを少し含む。

2層　黒褐色土(7.5YR 3/2) 粘性がややありややしまっている。カーボンを少し含む。
褐色粘土ブロック(3cm)を少し含む。

3層　黒褐色土(7.5YR 3/2) 粘性がややありしまっていない。カーボンを少し含む。
褐色粘土ブロック(3cm)をわずかに含む。

4層　黒褐色土(7.5YR 3/1) 粘性がややありしまっていない。
カーボン及び焼土粒子をわずかに含む。

5層　黒褐色土(7.5YR 3/1) 粘性がややありややしまっている。
カーボンをわずかに含む。

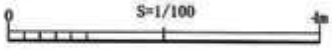


S-1-1

1層　暗褐色土(7.5YR 3/3) 粘性ややありしまっている。カーボンを少し含む。
0.1cmの礫を多く含む。

2層　暗褐色土(7.5YR 3/3) 粘性ありしまっていない。カーボンを少し含む。
褐色粘土ブロック(5cm)を多く含む。

3層　暗褐色土(7.5YR 2/3) 粘性がありしまってない。カーボンを多く含む。
0.5cmの褐色粘土粒子を少し含む。

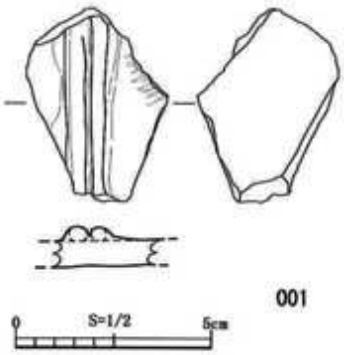


第７７図　９号溝跡 (S-1-1) 実測図

かに湾曲し、端部を丸くまとめる。これらの特徴から後期の中葉前後に比定しうる。器面は外面をハケ、内面をケズリ後、ナデで最終調整を行っている。

003 は甕の脚部である。直線的に外方へ開き、端部に面を持つことから、後期後葉前後の土器と考えられる。器面は外面を縦方向のハケ、内面を横方向（回転）のハケで調整しており、いずれも丁寧な印象を受ける。

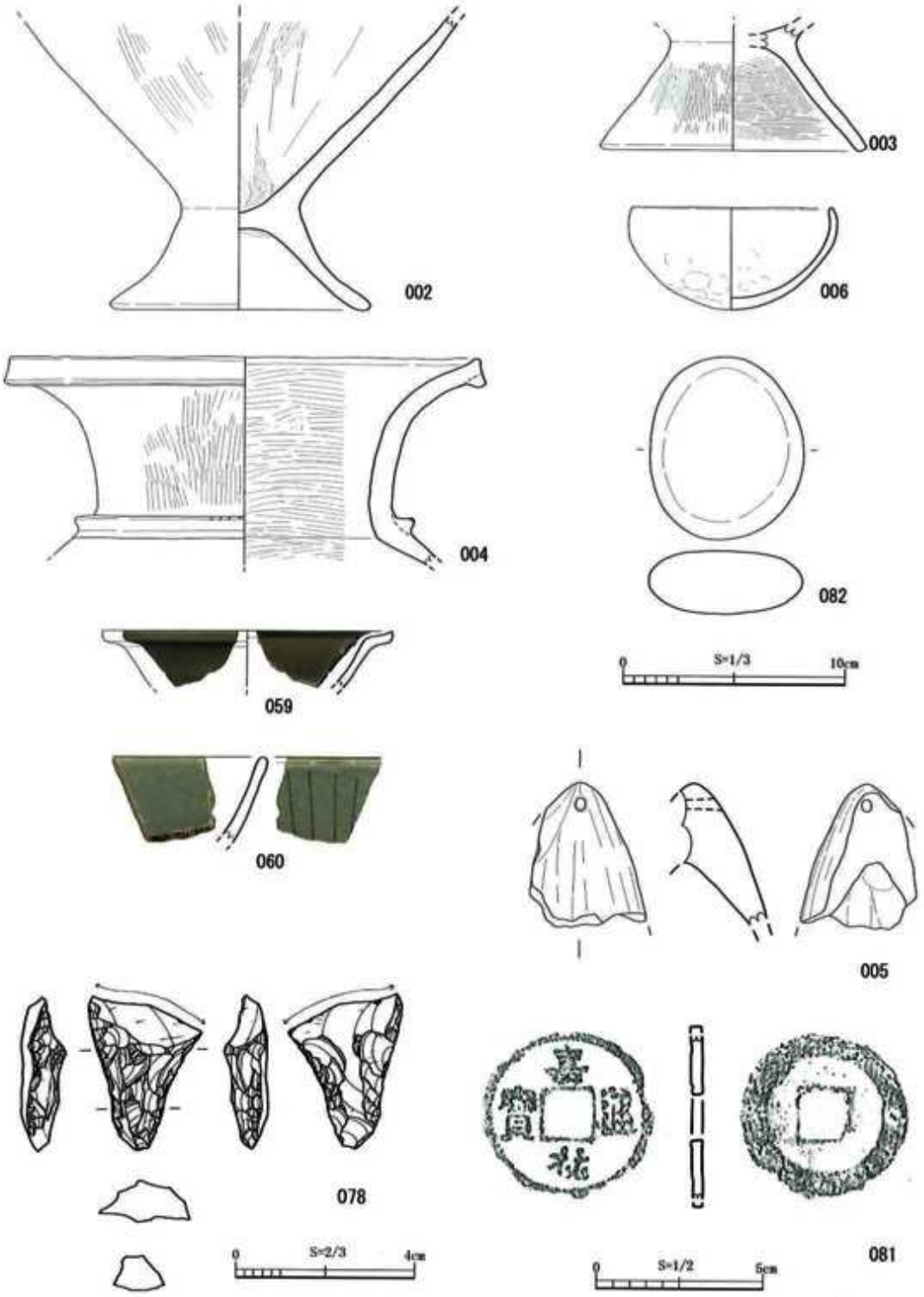
004 は広口壺の口縁部および頸部である。胴部と頸部の境は明瞭で、境界外面に断面三角形状の突帯を持ち、突帯頂部に刻み目を施す。頸部から口縁部にかけては、外側へ大きく湾曲する。口縁端部は肥厚し面を持つ。これらの諸特徴を考慮すると、後期中葉前後の土器と推測しうる。器面調整は外面を縦方向のハケ、内面を横方向のハケによる。



第７８図　９号溝跡 (S-1-1) 出土遺物実測図

５号溝跡から出土した遺物を以下の通り記述する。

005 は銅鐸形土製品の破片である。現存高は 4.3cm で、短径は 3.5cm を測る。単純な円錐形を呈し、鈕孔を模したと考えられる円形の穿孔が頂部に施されているが、型持たせ孔や文様などは見られない。天本洋一（1994）の３分類、常松幹雄（2004）の細分に従えば、鈕Ⅱ式の円錐形、神尾恵一（2012）の３類型７細分類ならばⅡｂ式に当てはまる。形態の点で言えば、中野小西田遺跡（福岡県北九州市，財団法人北九州市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室 2001）出土の銅鐸形土製品が類似例として挙げられる。器面調整は外面が縦方向のナ



第７９図　３・５号溝跡、表土及び撹乱等出土遺物実測図

デ、内面がナデである。

006は小型の鉢である。丸底を呈し、胴部から口縁部に向って内側へ緩やかに湾曲する。このような特徴を持つ鉢は、後期後半から終末期にかけて顕著に変化することなく存在するようである。器面は内外面ともにナデ調整で仕上げられている。

表土や撹乱から出土した遺物を以下の通り記述する。

059は青磁杯の口縁部である。体部から屈曲し、外方へやや上がり気味の水平口縁を形成する。口縁端部上方にはつまみ上げ状の拡張が見られる。この特徴的な形態の口縁部は、13世後半前後頃の龍泉窯系青磁と考えられる。

060は青磁碗の口縁部である。内側に若干湾曲しながら、直線気味に外方へ開く。口縁端部は丸く収まる。外面には縦方向の沈線文が施されており、14世紀前後頃の中国系青磁と推測される。

081は中国北宋の第四代皇帝仁宗の嘉祐年間（1056～1063年）に鋳造された銅銭で、「嘉祐通寶」と呼称される。真書と篆書の２種の書体があるが、本例は真書と考えられる。周縁を一部欠いており、現存最大長は2.4cmである。

082は磨石である。楕円形を呈し、長軸8.1cm、最大幅6.9cm、厚さ2.8cmを測る。全面に磨きがかかっている。

078は10号住居址（S-34）から出土した枝去木型の台形様石器である。厚みのある横広の剥片を素材とし、左右両側縁と裏面の両側縁から調整が施されている。正面左右の調整を行った後、裏面両側縁から調整がされ、その後正面左側縁と裏面左側縁から細かな調整が施されている。また厚みを減じるためか、稜上より正面左方向から調整（稜上水平調整）が行われている。刃部は水平でなくやや右下がりで、縁辺に微細剥離痕が見られる。

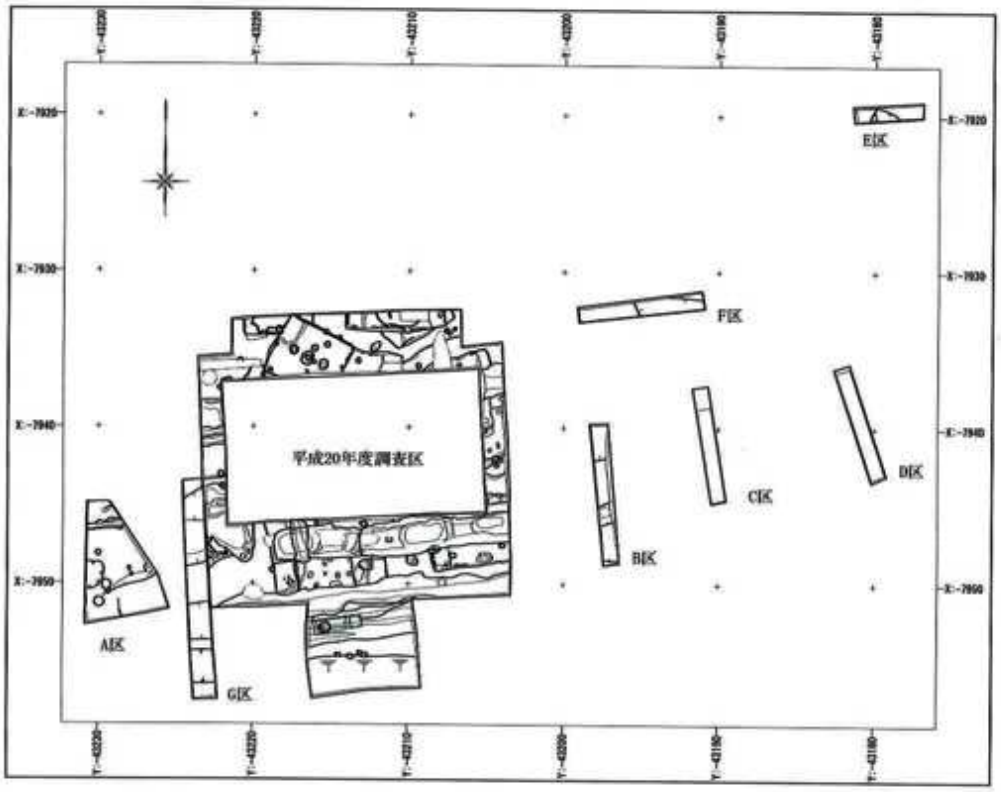
第Ⅳ章　追加調査

第Ⅳ章　追加調査

第Ⅰ章の調査の概要でも述べているように、蓮華院誕生寺南大門再建地は浄光寺南大門の存在が推定されている地点であり、平成20年度に行った発掘調査では浄光寺南大門に関連する溝や瓦片が出土した。そのため、浄光寺の寺域等を確認することを目的に、平成20年度調査区周辺にAからF区の試掘トレンチを設定し、平成21年度に追加調査を実施した。

追加調査はあくまでも遺構の有無を確認するための調査で、遺構の検出後、遺構の認定が困難だった場合のみに遺構と思われる箇所を掘り下げた。

追加調査の内容は、以下の通り調査区ごとに報告する。



第８０図　追加調査区位置図（縮尺500分の1）

【調 査 区】A区

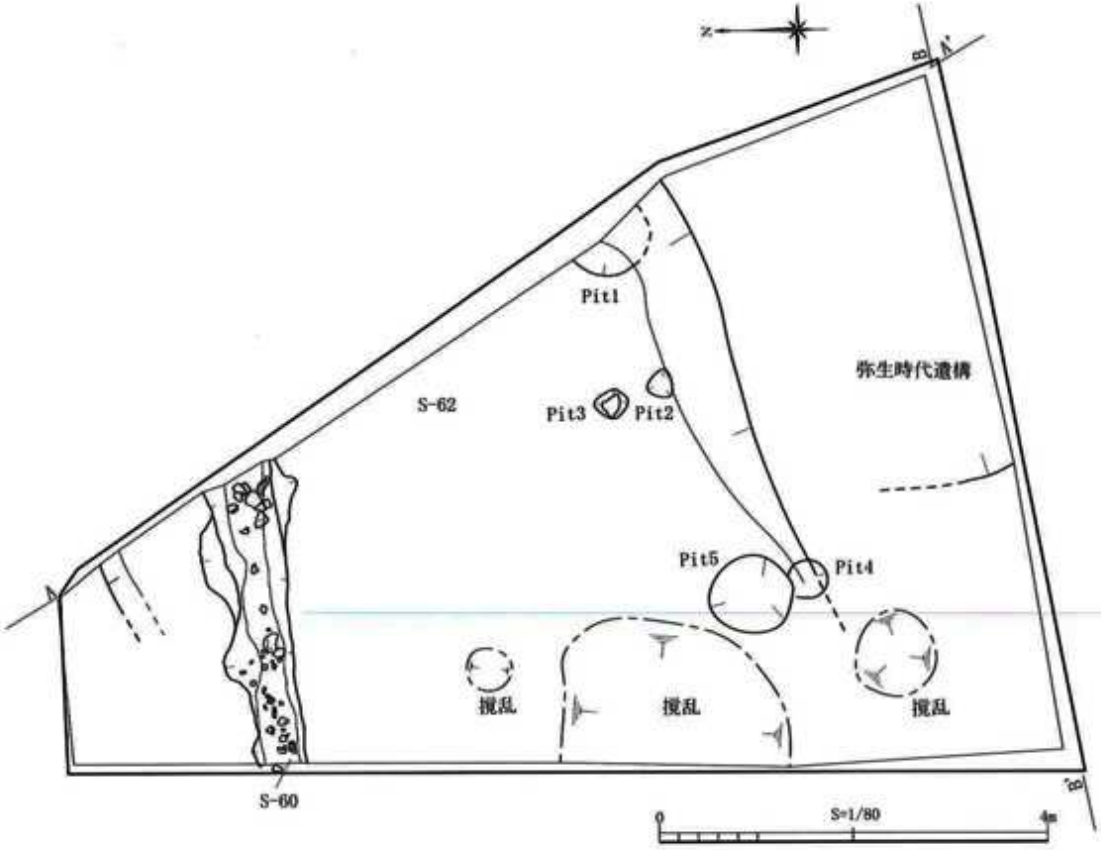
【検出遺構】S-60(溝)、S-61(溝)、Pit1～5(ピット)、弥生時代遺構1基

A区にて確認した遺構は、S-60(溝)、S-62(溝)、Pit1～5(ピット)、弥生時代遺構1基である。

S-60の埋土は、水成による堆積がみられず人為的に埋め戻されたと考えられる。S-61の埋土も同様である。Pit1～5の埋土はS-61の埋土に酷似しているため、S-61と同時期に埋め戻されたと思われる。

S-60の1層の上位から下位にかけて18世紀から19世紀の陶磁器片が出土し、これらの遺物は溝を埋め戻した際に混入したものと考えられる。この陶磁器片の時期が南大門廃頽後のものであるため、南大門廃頽後も門の跡地が宅地などに利用されていたことが伺える。

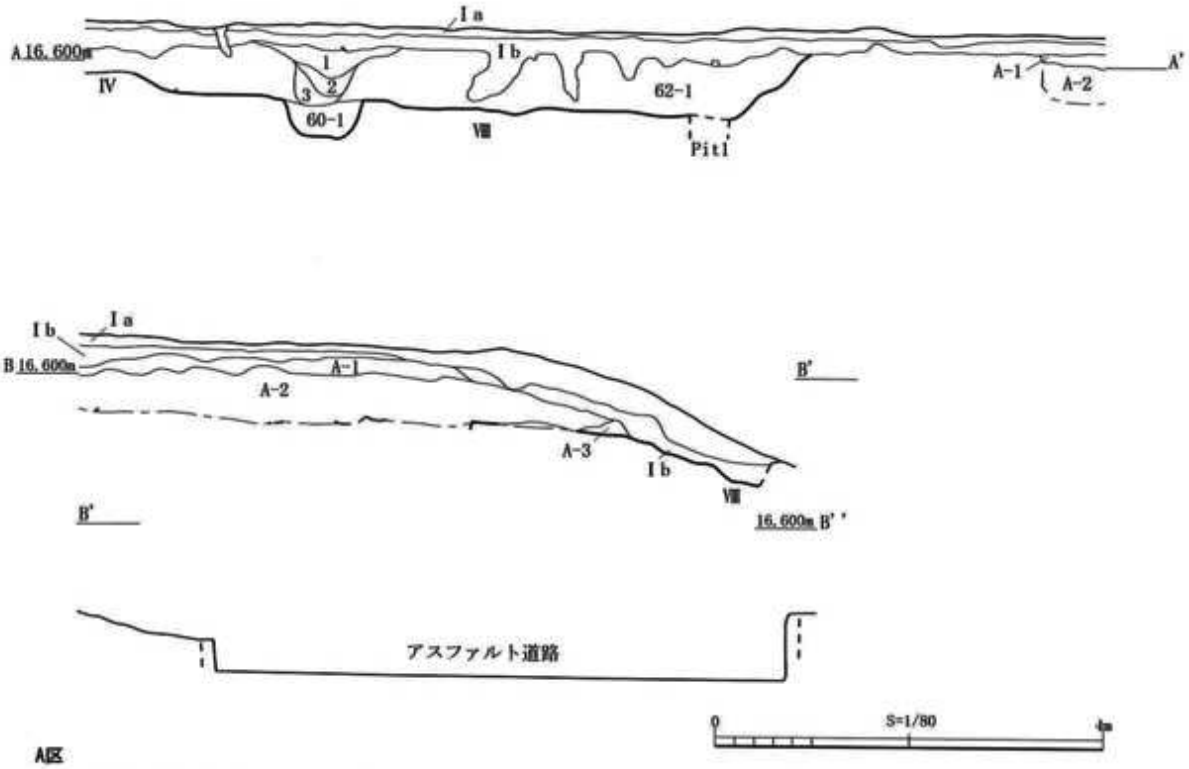
061は瓦質の火鉢の体部片である。内外面ともにナデ調整が施されている。外面には三つの



第81図 A区遺構実測図

漢字が刻まれている。真ん中の「月」以外は一部が欠け、判然としないが、最初の文字は「五」の可能性が高い。最後の漢字は、草冠状の文字が残っていることから、「廿」の字が考えられる。

062は底部を欠く擂鉢である。体部は緩やかに内側に湾曲しながら外方へ開き、外側へ屈曲して口縁部を形成する。口縁部は短く、水平気味だが外方に向かってやや上がる。口縁端部は面を



A区

A-1層：黒褐色土(10YR 3/1) G区のG-1層と同一
粘性中。しまり中。礫(0.2～1ｃｍ)ごく細かい土師片を含む。周辺の層の中で最も黒味が強くG区でも確認できる。

A-2層：暗褐色土(10YR 3/3) 弥生時代遺構埋土
粘性中。しまり中。礫(0.2～1ｃｍ)を含む。掘り下げを止めた高さでは弥生土器・土師器を多数検出した。(20ｃｍを超えるものもあり残存情況良好)同じ高さに炭化物も時折混じる。

A-3層：灰褐色土(10YR 4/2)
粘性小。しまり中。礫・褐色土ブロックを含む。

1層：灰黄褐色土(10YR 4/2)
粘性小。しまり中。褐灰細砂を多く含む。

2層：暗褐色土(10YR 3/3)
粘性中。しまり中(小)。褐灰色砂をブロックの状態で含む。時折貝殻(2枚貝)が混じる。

3層：暗褐色土(10YR 3/3)
粘性中。しまり中。2層よりも褐灰色砂の割合が少ない。

60-1層：暗褐色土(10YR 3/3)
粘性中。しまり中。含まれる砂の割合が他の土層より最も少ない。

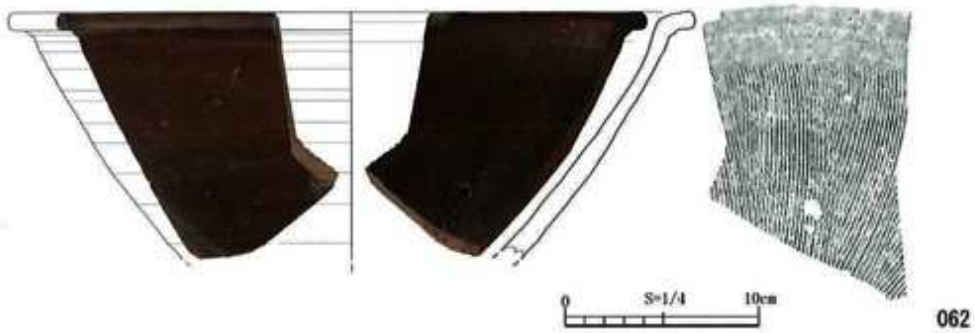
62-1層：黒褐色土(10YR 3/2)
粘性中。しまり中。礫・砂を含む。弥生土器・土師器を出土するが住居跡埋土のものに比べると破片が小さい(5ｃｍ以下)。

第８２図　Ａ区遺構実測図

有するが、全体的に丸味を帯びている。体部内面には口縁部直下約3cmまで擂り目が施されている。器面調整は口縁部から体部外面上方が回転ナデ、下方が回転ケズリである。釉は内外面ともに施されている。

063は染付の碗である。底部から体部下半にかけては緩やかな湾曲をなし、体部中位から口縁部にかけては直線的に外方へ開く。器壁はやや厚めである。底部には断面が丸みを帯びた高台が付く。釉は高台の畳付（端部）のみかからない。体部内外面には幾何学文様が施されている。見込（底部内面）には蛇の目釉剥ぎが見られ、また砂が付着しており、重ね焼きされたことを物語っている。16～17世紀頃の所産であろう。

076は石臼（挽き臼）の破片である。外縁から内側に向って約4cmの傾斜面、わずかな上がり段の先約4cmは水平面、さら



第８３図　Ａ区出土遺物実測図

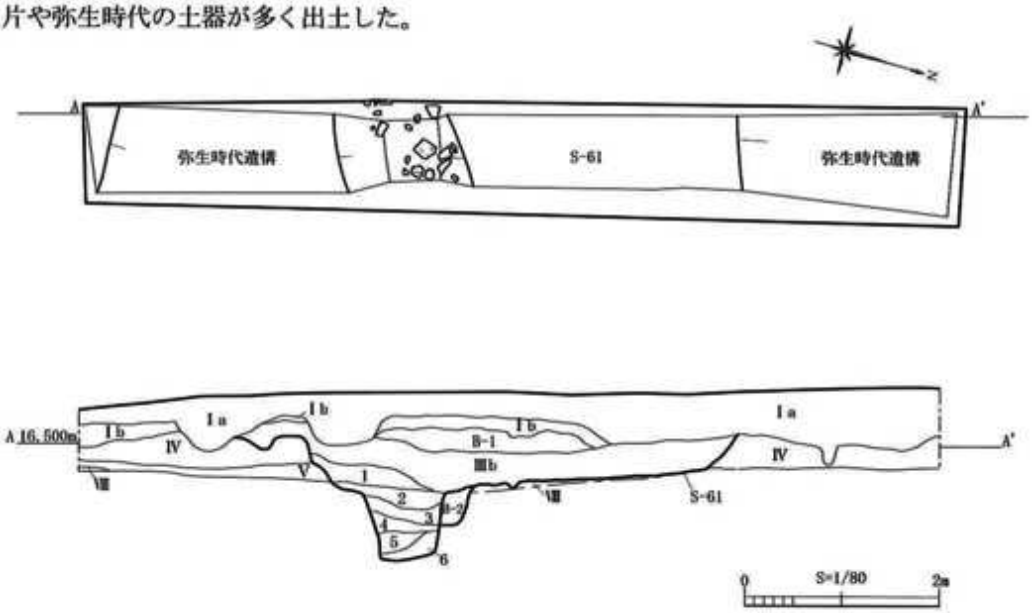
に中央に向って約4cmの緩やかな下り傾斜面を形成する。中央部付近には、直径約2cmになると推測される穿孔の一部が確認できる。形状から下臼と考えられる。

【調 査 区】B区

【検出遺構】S-61(溝)、弥生時代遺構2基

B区にて確認した遺構は、S-61(溝)、弥生時代遺構2基である。

S-61の埋土は、水成による堆積がみられず人為的に埋め戻されたと考えられる。また、S-61の1、2層にⅧ層を起源とする黄褐色ブロック土が多く含まれていた。S-61の埋土全位から瓦片や弥生時代の土器が多く出土した。



B区
B-1層:基本土層Ⅲa層に酷似し、基本土層Ⅲa層より色調がやや明るく10YR 4/3(褐色)に近い。
B-2層:ピットの埋土。溝より古い時期のものと思われ基本土層Ⅲb層に酷似している。

S-61埋土
1層:灰褐色土 (10YR4/2) 築地の崩落土
粘性小。しまりやや強い。粘性小黄褐色ブロックを下位に多く含み瓦片が多く出土している。
2層:黄褐色土 (10YR5/6) 築地の崩落土
粘性小。しまりやや強い。粘性小黄褐色ブロックを全体に含み1層より多く瓦片がみられる。
3層:暗褐色土(7.5YR3/3)
粘性小。しまりやや強い。黄褐色ブロックを上位に少量含み瓦片がまばらにみられる。
4層:暗褐色 (7.5YR3/3)
粘性小。しまり強い。黄褐色ブロックを左位に少量含む。
5層:褐色土 (10YR 4/4)
粘性小。しまり弱い。黄褐色ブロックを全体に少量含む。瓦片が少量出土する。
6層:暗褐色土(7.5YR3/3)
粘性小。しまりやや強い。黄褐色ブロックを全体にわずかに含む。瓦片が少量出土する。

第84図 B区遺構実測図

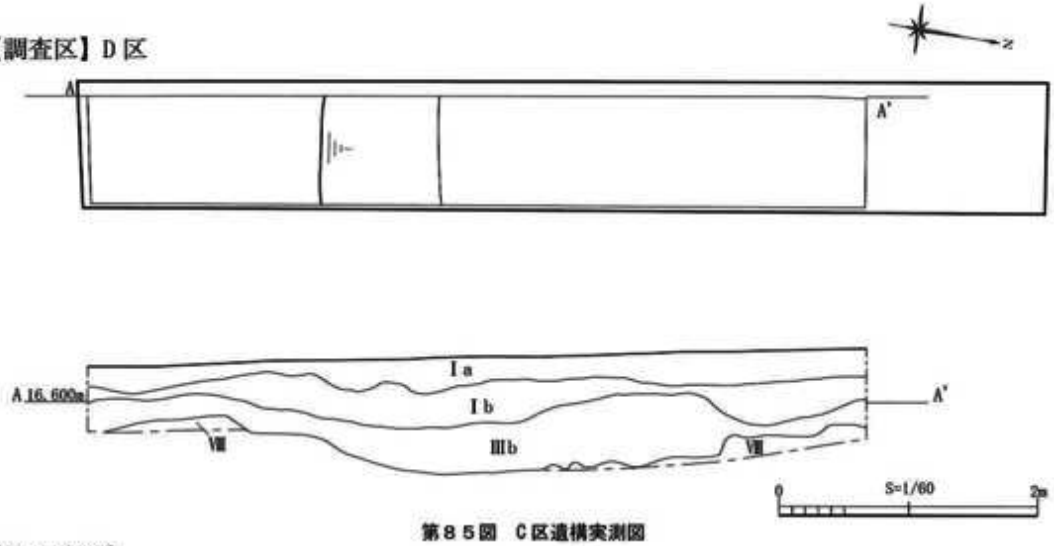
S-61 の埋没状況や瓦片の出土から S-61 の北側に瓦敷きの築地塀が造成され、築地の基礎を利用し埋め戻された可能性がある。S-61 の埋没状況、出土遺物（瓦片）、遺構の位置関係から、平成 20 年度調査時に確認された S-2 と同様の遺構と考えられる。

【調 査 区】C 区

【検出遺構】

C 区からは明確な遺構は検出されなかった。ただし、トレンチ南側から中央に向かってⅧ層が窪んでいる状況がみられた。これは自然地形ではなくトレンチ北側に築地を造成するためにⅧ層を掘削し窪んだ地形になっている可能性がある。この窪みは S-2 や S-61 でもみられた。

【調査区】D 区

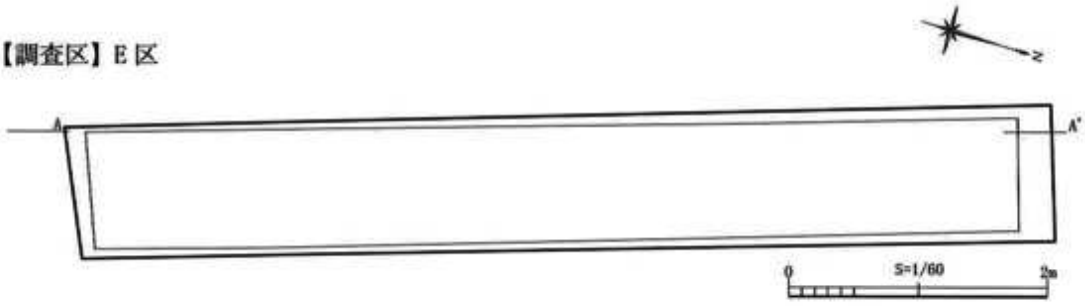


第８５図　C 区遺構実測図

【検出遺構】

D 区は昭和 30 年代に行われた市営住宅整備工事の影響が他の調査区より大きく、遺構の検出には至らなかった。

【調査区】E 区



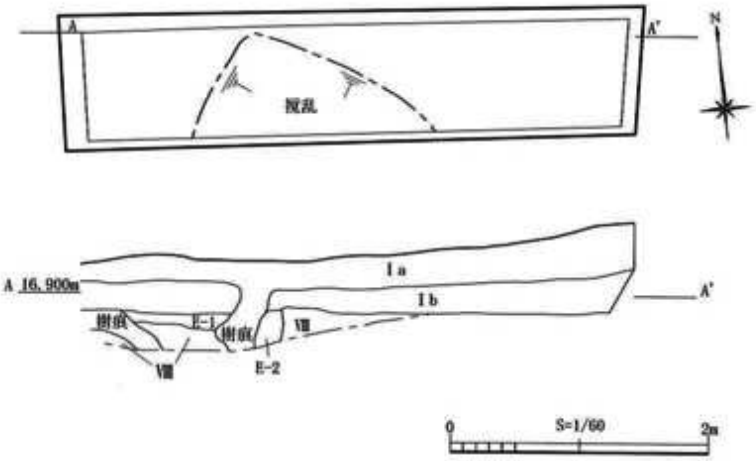
第８６図　D 区遺構実測図

基本土層Ib層は、暗褐色土・黄褐色土・灰褐色土が波状に堆積している。

第８７図　Ｄ区遺構実測図

【検出遺構】

Ｅ区は昭和 30 年代に行われた市営住宅整備工事によって掘削されたと思われる撹乱が確認された。



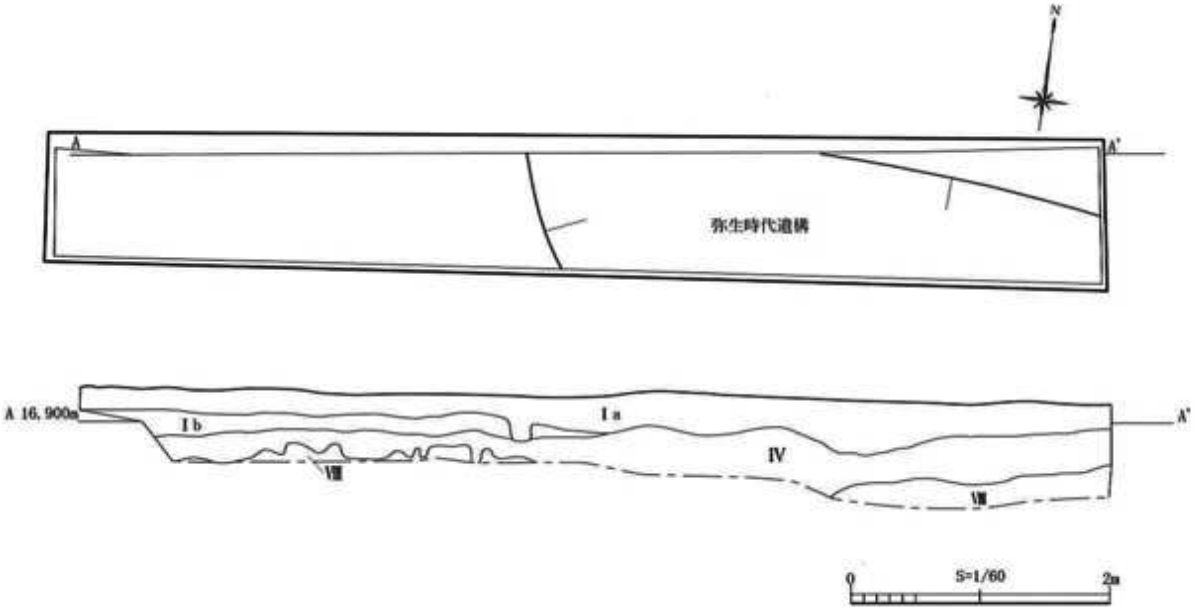
E-1層：にぶい黄褐色土(10YR 5/4)
　　粘性小。しまりやや強い。礫(0.5～1ｃｍ)を多く含む。
E-2層：黄褐色土(10YR 5/6)
　　粘性小。しまりやや強い。E-2層より色調が暗い。

第８８図　Ｅ区遺構実測図

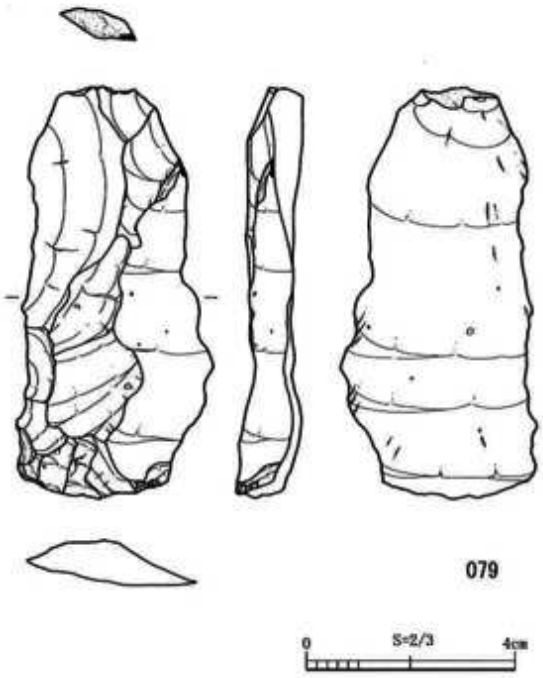
【調査区】Ｆ区

【検出遺構】弥生時代遺構１基

Ｆ区は弥生時代の遺構が１基確認された。昭和 30 年代に行われた市営住宅整備工事の影響が他の調査区より少なく、弥生時代の遺物を含む包含層の残存状況は良好であった。



第８９図　Ｆ区遺構実測図



第９０図　Ｆ区出土遺物実測図

079は縦長剥片で、石材は多久産の安山岩と思われる。

打面が原礫面の縦長剥片であり、調整はほとんどみられない。素材の状態で持ち込まれたものと思われる。

裏面や正面右側面は石質の関係でうねっている。末端はやや厚く主剥離面が正面側まで達し、ヒンジフラクチャーを起こしている。

Ｆ区の表土剥ぎ時に出土した遺物であるため、出土地点の元位置は不明である。

【調査区】G 区

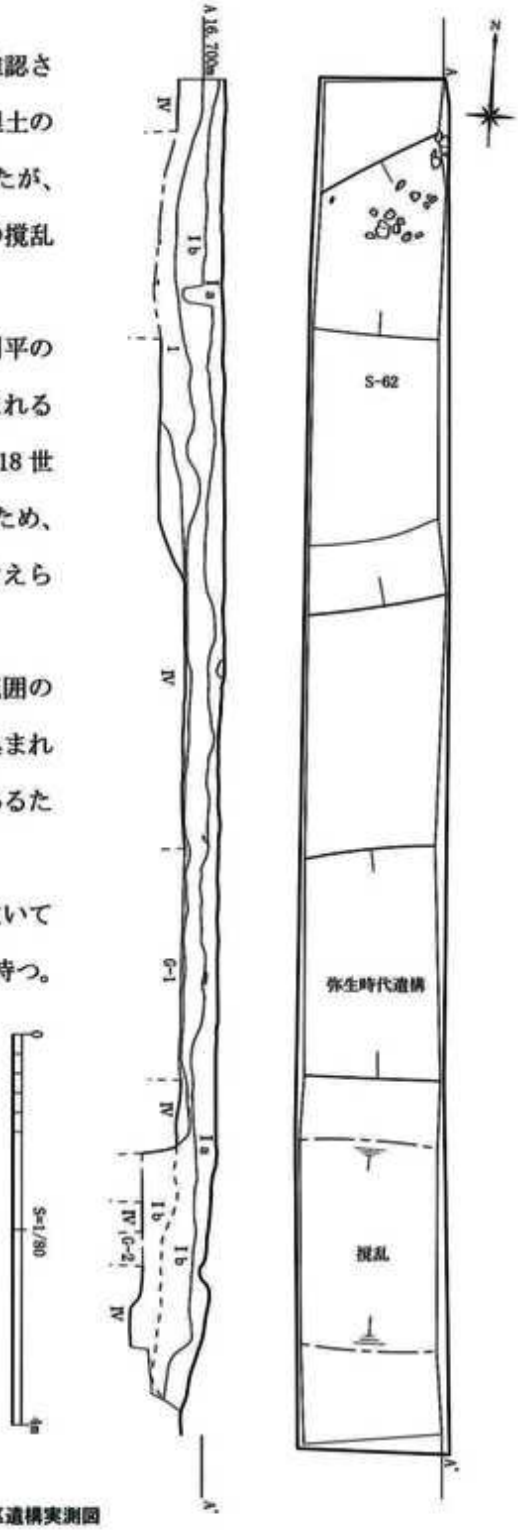
【検出遺構】S-62（溝）、弥生時代遺構 1 基

G 区は S-62（溝）と弥生時代の遺構が 1 基確認された。また、調査区南側から検出した遺構は埋土の様相から弥生時代の遺構ではないかと思われたが、昭和時代の遺物が出土したため住宅整備工事の撹乱と認定した。

S-62 は昭和 30 年代の住宅整備工事による削平の影響を受けるも、角礫や弥生時代の遺物が含まれる埋土が残存していた。S-62 の埋土下位から、18 世紀から 19 世紀の陶器片（擂鉢・甕）が出土したため、A 区で確認している S-60 と同時期の遺構と考えられる。

S-62 から出土した角礫は、調査を行った範囲の自然堆積層からは確認されず、人為的に運び込まれたものと思われる。また、角礫の形が扁平であるため築地塀に使用された可能性がある。

030 は台付きの甕である。胴部中位以上を欠いている。脚は直線的に外方へ開き、端部に面を持つ。

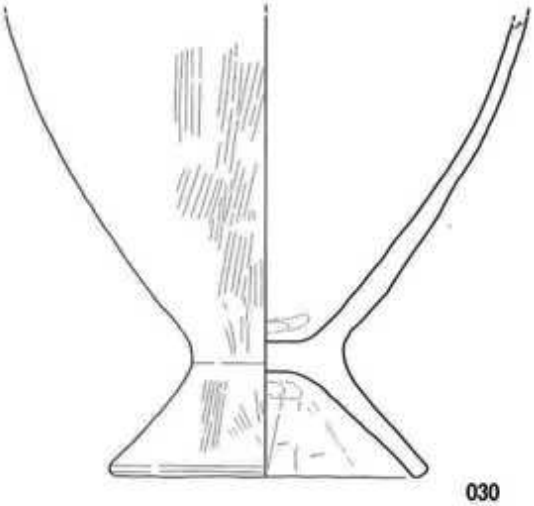


1層：黒褐色土（10YR 3/2）A区の62-1層と同一。粘性中しまり中。にぶい黄色土（10YR 4/3）をブロック状態で含む。

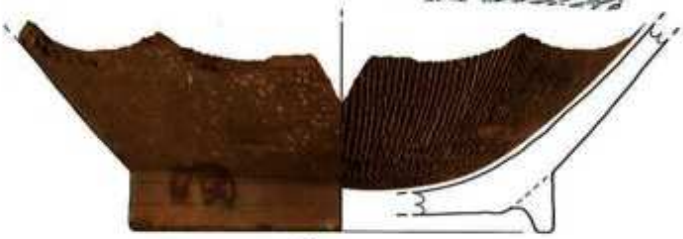
G-1層：黒褐色土（10YR 3/1）弥生時代遺構埋土 粘性中しまり中。A・G区土層の中で最も黒味が強い。礫（0.2～1cm）VI層よりははるかに多く含む。

G-2層：黒褐色土（10YR 3/1）しまり中粘性中。A・G区土層の中で最も黒味が強い。褐色ブロック・礫をわずかに含む。

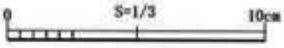
第９１図　G区遺構実測図



030



058



第９２図　６区出土遺物実測図

体部と脚部の接合痕は、明瞭に観察できない。器面調整は内外面ともにハケで、部分的にナデが採用されている。脚内面には、工具による成形痕が一部見える。脚部はやや長めであることから、後期中葉のものと推測される。

056 は染付の折縁の大皿である。緩やかな湾曲を呈する体部に、水平やや上がり気味の平縁口縁が取り付く。平底の底部には、断面が丸みを帯びた高台が付く。釉は畳付（高台端部）のみかかっていない。見込、口縁上部、体部外面にそれぞれ異なる図柄が描かれている。また底部外面には「肥」の文字が確認できる。肥前産のものであろう。16～17 世紀前後頃の所産と考えられる。

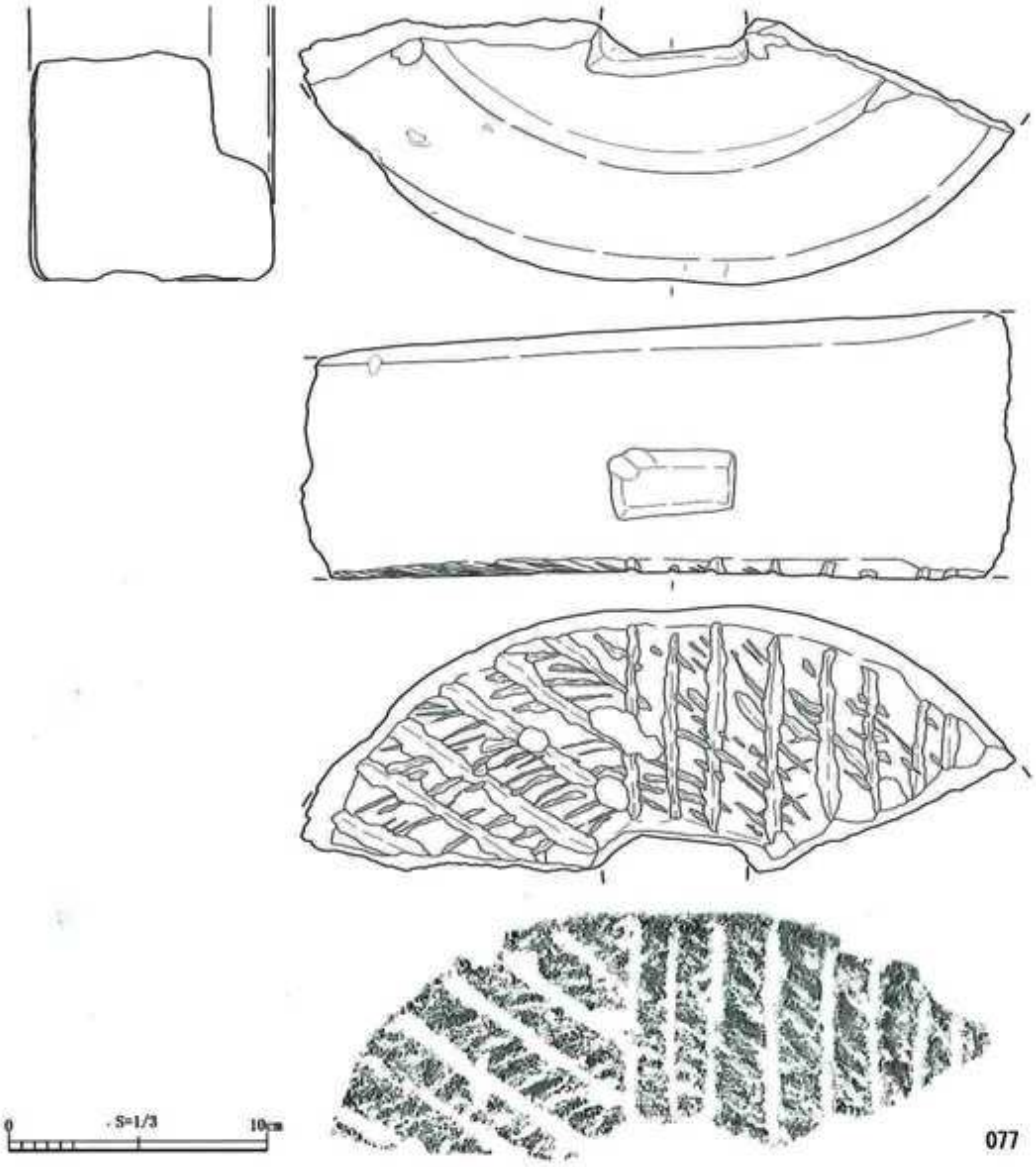
057 は染付の八角鉢である。体部は直線的に外方へ開き、外側へ緩く屈曲して口縁部を形成する。口縁端部は丸く収まる。底部に高さ 1cm ほどの直立する高台が付く。高台内面には釉がかかっていない。体部内外面には、竹や梅などの図柄や文様が施されている。底部がやや厚めであり、肥前系の陶磁器と推測

第９３図　Ｇ区出土遺物実測図

される。

058は陶磁器で、擂鉢の底部および体部下部である。体部は直線的に外方へ開く。高さ約1cmの直立する高台があり、畳付（高台端部）は面を有する。体部内面には擂り目が見られ、釉が施されている。外面は畳付を除いて釉がかかっている。また、底部には砂目が観察される。

077は石臼（挽き臼）の破片である。上面は幅約4cmの水平外縁を有し、約2cmの落ち込みを経て再び水平面を形成する。低水平面の中央方面には、高さ約7cmの方形の穿孔が認められる。側面中央には、上端約2.5cm × 4.5cmの浅い枘の凹みがある。下面（磨り面）には平行する等間隔の副溝６本と８本が、方向を違えて接している。

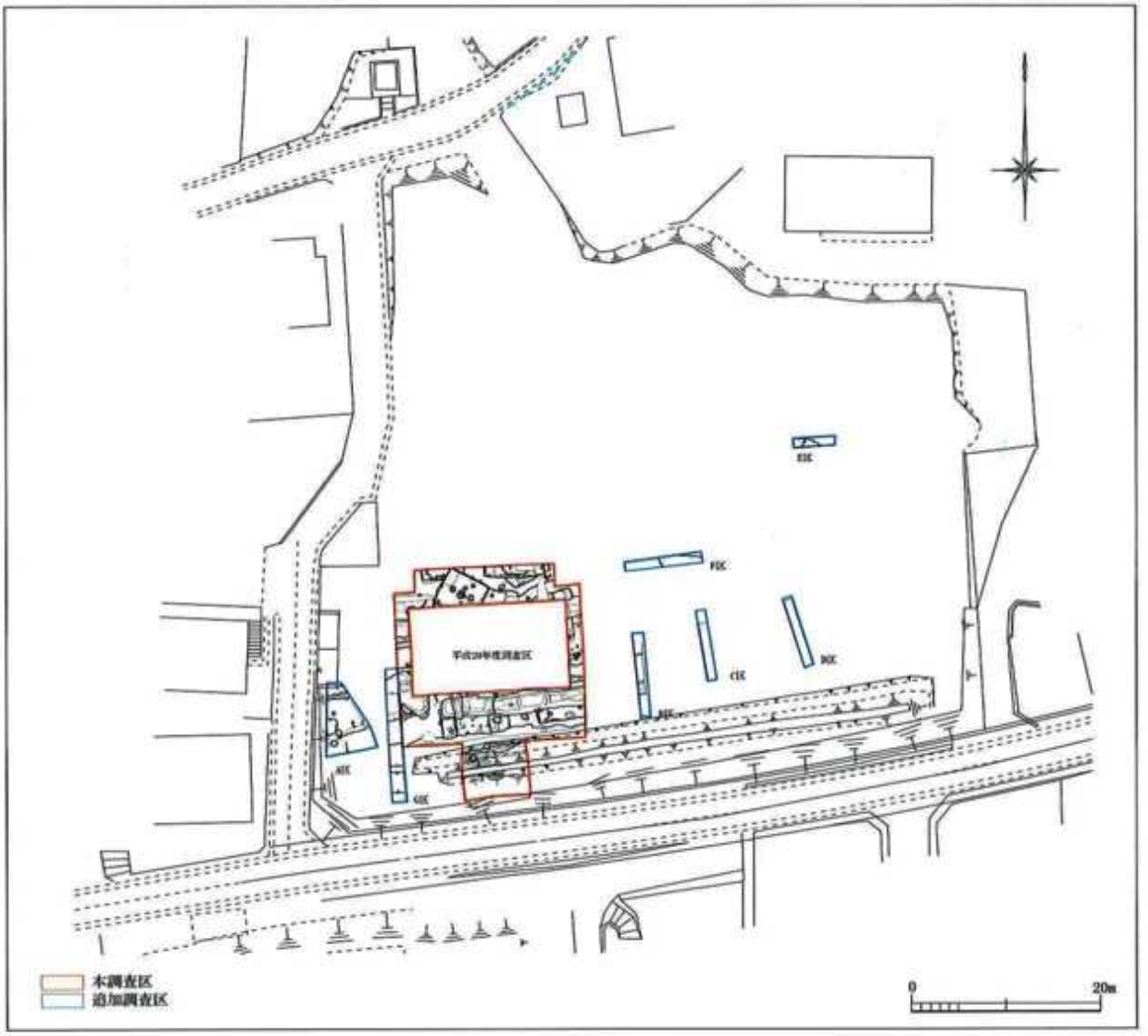


第９４図　Ｇ区出土遺物実測図

第Ⅴ章　総括

第V章　総 括

蓮華院誕生寺南大門再建に伴う南大門遺跡の調査成果は、第Ⅲ章・第Ⅳ章で報告したように大きく弥生時代と中世の遺構や遺物が挙げられる。その中でも特筆すべき点は、全国でも出土例が少ない弥生時代の家形土器片の出土、中世では浄光寺のものと推定される溝跡や瓦片の出土が挙げられる。また、浄光寺廃頽後の近世の遺構や旧石器時代の石器もみられる。ここでの総括は本発掘調査のまとめとし、浄光寺関連については付論での所見で補填していただきたい。



第９５図　南大門遺跡発掘調査周辺地形調査区合成図

弥生時代

・遺構

本発掘調査では弥生時代の住居址が18軒検出された。調査区の設定や中世の遺構による攪乱をうけていたため住居址の全容を把握するには困難であった。その中でも5号住居址は、遺構全体の約7割が検出でき、住居内中央に炉跡、炉跡を挟むように柱穴が2本確認できた。また、北西隅に地山削り出しのベッド状遺構、住居壁際に壁際溝もみられる。他の住居址でもベッド状遺構が確認できいずれも地山削り出しである。住居址全体で共通しているのが、床面は全域に硬化しているものの、貼床の検出までは至っていない点である。ただし14号住居址では、唯一貼床を想定させる浅い掘り込みが検出された。

住居址の埋没については、床面に近い埋土は自然堆積している様相が多く、住居廃棄後一定期間放置していた可能性が高い。その後、元々住居があった場所を整地し再利用していた事が伺える。

・遺物

弥生時代の遺物は、住居址内や中世の溝跡から多く出土している。ただし、土器の胎土が脆いせいか細片が多く、完形に近い形での出土はわずかであった。そのため、他の部位より残存しやすい底部が多い傾向にある。また、家形土器片や鐸形土製品のような祭祀に利用したと思われる土器も出土している。家形土器片の出土点数は、本発掘調査を含めて全国で11例目となる。

弥生時代の土器の時期としては、古くは弥生時代の後期中頃と思われ、後期後半にあてはまる時期の土器が多い。

中　世

・遺構

中世の時期と思われる主な遺構は、溝跡が12条、土抗が14基確認できる。第Ⅲ章でもふれたように、1・2・3・5号溝跡は、浄光寺の寺域や字名でもみえる浄光寺の南大門を想定できる遺構と思われる。なかでも3号及び5号溝跡から瓦片が多く出土している。また、3号及び5号溝跡の埋土から黄褐色ブロックを多く含む土が一括して堆積している様相や、瓦片が溝内から出土している事から、溝跡の脇に築地塀があったことが示唆される。溝の底面から水生堆積は検出されず、溝を短期的に修繕し一度埋めた溝を掘り起こして再利用していることが窺える。

・遺物

溝跡の埋土から瓦片以外に土師器や輸入陶磁器の出土もある。土師器については弥生時代の土

器同様胎土が脆く摩耗が激しかったため、調整痕の観察が困難であった。輸入陶磁器はわずかであるが溝跡や表土から出土し、中国産の陶磁器片と思われる。輸入陶磁器は13世紀から14世紀頃の時期と考えられ、土師器もこの時期に相当するのではないかと推察される。瓦片も弥生時代の土器や土師器と同様に、胎土が脆く摩耗が激しい状況であった。

今回の調査では、浄光寺に伴うとみられる瓦が多量に出土した。主に2号溝跡と3号溝跡から出土し、特に3号溝跡の7層下位から瓦溜り状に集中して出土した。内容は、軒丸瓦、軒平瓦などで、総量は縦58㎝×横38㎝×深さ14㎝のコンテナ約12箱分、重量は約150kgである。平成19年度の確認調査1トレンチですでに鬼瓦片が出土しており、本調査の結果と照合し、その位置は3号溝跡の3層に相当する地点であることが判明した。

3号溝跡からの瓦の出土状況は、建物の倒壊直後のような一次的な堆積状況ではなく、埋没するまでにある程度原位置から動いていると判断される。接合状況について、完形に接合する瓦は少ないことからも、広範囲から集積されたのちの破棄状況であると判断される。

熊本県内における中世瓦の研究は、古代瓦のように比較的豊富な出土例があり、研究事例が蓄積されている状況に較べて低調である。全国的には畿内を中心に研究成果が蓄積され、古代から中世、近世を経て現代まで存続する法隆寺などの有力寺院の瓦に加えて、発掘調査での出土瓦も豊富であり、それらを中心に編年研究がなされている。中世瓦に関しては、九州管内では大宰府の観世音寺や大分の宇佐弥勒寺などの出土例を元に編年案が示されているものの、熊本県内では出土例の少なさなどから全体像を把握できるには至っていない。これらのことから、今回出土した瓦の時期を判断することは困難であるが、3号溝跡から瓦と共に一括出土した土師器が13世紀後半から14世紀代に編年付けられることから、瓦の時期を推察する指標としたい。

その他の遺構、遺物

近世の溝跡が2条検出され、近世の遺物も表土等であるが多く出土し、浄光寺廃頽後も南大門遺跡は土地利用されていたことが窺える。

旧石器時代の石器が弥生時代の住居址や表土から出土している。石器の元位置を特定するのは困難ではあるが、南大門遺跡周辺のいずれかに旧石器時代の遺跡が想定される。

まとめ

本発掘調査の弥生時代の住居址から祭祀に使用されたと考えられる家形土器片や鐸形土製品が出土した背景にあるのは、浄光寺跡寺域確認調査（玉名市教育委員会1989）時に本発掘調査周辺

で確認された、箱式石棺・竪穴石室墓・小型石棺・土壙墓群や南大門遺跡の東にある東南大門遺跡（玉名市教育委員会 2000）が関連していることが示唆される。また、家形土器片は菊池川中流域に位置する方保田東遺跡から出土しており、本発掘調査で出土した家形土器片は弥生時代菊池川流域でどのような交流があったか検討をする基礎資料になり得るのではないかと考えられる。鐸形土製品は青銅器の模倣品であり、本発掘調査では青銅器は出土していないが、南大門遺跡での青銅器に関わる交流の一端が垣間見られる。南大門遺跡の北側にある蓮華遺跡（玉名市教育委員会 2002）の発掘調査では、弥生時代の遺構が検出され、住居址の構造は本発掘調査で確認している住居址と酷似している。南大門遺跡や近隣遺跡から弥生時代の環濠は確認されていないが、蓮華遺跡よりやや北東側にある築地館跡（熊本県教育委員会 2013）では、弥生時代の環濠が確認されている。

今後、南大門遺跡やその周辺遺跡から環濠が確認される可能性があり、今回の発掘調査は、南大門遺跡を形成している丘陵にある弥生時代の集落形成を検討する材料となるものと思われ、今後の調査成果に期待したい。

浄光寺の寺域を示す遺構と考えられる溝跡や、寺院で使用されたと思われる輸入陶磁器、築地塀もしくは門に葺かれていたと想定される瓦片などが出土し、浄光寺の当時の様子をうかがい知る資料が多く確認できた。瓦片は前文で述べたように、中世瓦は現段階では他の遺跡の資料が少なく、現状の報告のみや土師器の編年により時期を想定するに至った。今後、同時期の瓦片の資料増加に伴い、本発掘調査で出土した瓦片の研究が進展することを望む。

また、弥生時代の土器や中世の土師器・瓦片の胎土は、在地の粘土を使用していると思われ、非常に脆い状況であった。これは土器に使用する南大門遺跡、もしくは周辺から採取された粘土の性質が脆い傾向にあるためで、この様相は北は福岡県大牟田市の遺跡から出土する同様の土器にも同じことが想定できる。この点についても触れておきたい。

《参考文献》

天本洋一 1994「北部九州の鐸形土製品について」『佐賀考古』第 1 号，佐賀考古談話会，pp. 55-67。

市本芳三 1995「瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編，真陽社，pp. 502-10。

小畑弘己 1983「台形石器」『季刊考古学　日本旧石器人の生活と技術』第 4 号，雄山閣，pp. 56-9。

神尾恵一 2012「銅鐸形土製品祭祀の研究」『古文化談叢』第 67 集，九州古文化研究会，pp. 177-221。

鈴木敏則 2004「弥生時代の家形土器　－静岡県浜松市鳥居松遺跡出土例を中心に－」『地域と古文化』『地域と古文化』刊行会，pp. 22-31。

高木正文 1979「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集，九州古文化研究会，pp. 89-128。

續伸一郎 1995「中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編，真陽社，pp. 485-501。

常松幹雄 2004「鐸形土製品に描かれた絵画と記号」『日本考古学』第17号，日本考古学協会，pp. 67-79。

日本銀行調査局編 1972『図録 日本の貨幣 1』東洋経済新報社。

原田範昭 1999「中九州における弥生時代後期土器の編年－熊本平野部の土器にみる社会背景－」『先史学・考古学論究 Ⅲ』龍田考古学会，pp. 29-58。

美濃口雅朗 1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会，pp. 119-48。

矢島恭介 1985「日本出土銭貨一覧」『日本考古学辞典』株式会社東京堂出版，pp. 599-604。

山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊，雄山閣出版株式会社。

山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編，真陽社，pp. 470-84。

菊池市教育委員会 2008『森北後田遺跡　藤田上原遺跡』菊池市文化財調査報告 第2集。

(財) 北九州市教育文化事業団 2001『長野小西田遺跡2』北九州埋蔵文化財調査報告書第262集。

熊本市教育委員会 2007『二本木遺跡群Ⅱ』二本木遺跡群第13次調査区発掘調査報告書。

熊本県教育委員会 1987『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告 第88集，熊本県文化財保護協会。

熊本県教育委員会 1992『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告 第121集。

熊本県教育委員会 1992『二子塚－熊本内陸工業用団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』熊本県文化財調査報告 第117集。

熊本県教育委員会 1993『狩尾遺跡群　－激甚災害にともなう埋蔵文化財の調査－』熊本県文化財調査報告 第131集。

熊本県教育委員会 1996『蒲生・上の原遺跡　－県営農業基盤整備に伴う埋蔵文化財の調査－』熊本県文化財調査報告 第158集。

熊本県教育委員会 2005『前田遺跡　－国土交通省菊池川河川事務所月田地区排水樋管築堤工事及び県道玉名立花線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財の調査－』熊本県文化財調査報告225集。

山鹿市立博物館 1982『方保田東原遺跡』山鹿市立博物館調査報告書 第2集，山鹿市教育委員会。

山鹿市立博物館 1987『方保田東原遺跡 (3)』山鹿市立博物館調査報告書 第7集，山鹿市教育委員会。

山鹿市教育委員会文化課文化財係 2006『方保田東原遺跡 (7)』山鹿市文化財調査報告書 第2集，山鹿市教育委員会。

【謝 辞】

遺物の原稿作成に当たって、以下の方々にご教示を賜った。越知睦和、金田一精、佐藤伸二、永井孝宏、中村幸史郎（五十音順、敬称略）。また、資料調査において佐治健一氏、山鹿市立博物館にご配慮をいただいた。記して感謝を申し上げます。

表1 遺物観察表

番号	出土位置	種類	器種	残存率	法量								焼成	備考
					器高	口径	底径	脚部径	最大高(長)	最大幅	最大厚	重量		
01	9号溝跡	弥生土器	家形土器	破片					4.85	3.56			良好	
02	3号溝跡	弥生土器	台付壺	脚部1/3	(13.1)		(11.1)						良好	
03	3号溝跡、17号住居址	弥生土器	台付壺	脚部1/2	(5.3)		(11.2)						良好	
04	3号溝跡、17号住居址	弥生土器	壺	口縁部1/5	(9.2)	(21.1)							良好	
05	5号溝跡	土製品	鐸形土製品	体部	(4.3)								良好	穿孔1ヶ所あり
06	5号溝跡、18号住居址	弥生土器	鉢	全体で2/3	4.6	8.9							良好	
07	1号住居址	弥生土器	台付壺	全体で1/3	(17.0)	(21.2)	(12.2)						良好	
08	3号住居址	弥生土器	台付鉢	ほぼ完形	12.1	17.9	12.5						良好	
09	3号住居址	弥生土器	壺	胴部1/4									良好	胴部外面に黒斑
10	3号住居址	弥生土器	高坏	脚貼付け部から脚部1/6	(14.2)		(16.5)						良好	残存部に穿孔4カ所
11	6号住居址	弥生土器	鉢	全体で1/2	(6.7)	13.8							良好	
12	8号溝跡、10号住居址	弥生土器	壺	口縁部から底部1/2	48.7								良好	
13	10号住居址	弥生土器	台付壺	脚部1/3	(12.9)		(13.0)						良好	
14	10号住居址	弥生土器	台付壺	脚部完存	(5.6)		13.6						良好	
15	12号住居址	弥生土器	家形土器	体部破片					6.80	7.60	3.70		良好	
16	12号住居址	弥生土器	高坏	体部1/3	(6.1)	(31.8)							良好	
17	12号住居址	弥生土器	壺	口縁部1/3	(8.9)	(20.6)							良好	
18	12号住居址	弥生土器	台付壺	脚部1/3	(9.7)		(12.4)						良好	
19	14号住居址	弥生土器	台付壺	口縁部から脚部完存	(36.2)		11.6						良好	
20	14号住居址	弥生土器	高坏	脚部2/3	(12.9)		15.0						良好	穿孔3カ所
21	14号住居址	弥生土器	小型壺	全体で1/2	8.5	8.8							良好	
22	15号住居址	弥生土器	台付壺	全体で1/6	(38.2)	(18.4)	(13.2)	(23.1)					良好	外面に黒斑
23	15号住居址	弥生土器	壺	口縁部3/2	(30.3)	(37.4)							良好	内面に黒斑
24	15号住居址	弥生土器	壺	口縁部1/6から肩部3/4	(20.2)	(19.9)							良好	外面に黒斑
25	15号住居址	弥生土器	壺	口縁部1/6頸部2/3	(13.0)	(20.0)							良好	
26	15号住居址	弥生土器	台付壺	脚部1/3	(11.8)		(14.9)						良好	
27	15号住居址	弥生土器	壺	口縁部1/4	(9.4)	(24.0)							良好	外面頸部に櫛描列点文
28	15号住居址	弥生土器	高坏	脚部破片	(12.5)								良好	
29	15号住居址	弥生土器	鉢	口縁部1/4	(9.5)	(15.4)							良好	
30	11号溝跡	弥生土器	台付壺	脚部完存	(17.7)		(11.7)						良好	外面に煤、内面に黒斑点
31	3号溝跡	土師器	坏	底部4/5	(2.7)		7.8						良好	
32	3号溝跡	土師器	小皿	底部ほぼ完存	1.6	(8.0)	5.3						良好	
33	3号溝跡	土師器	小皿	全体で1/2	1.7	(7.8)	5.5						良好	煤付着
34	3号溝跡	土師器	坏	全体で1/2	2.2		7.7						良好	付着物あり
35	3号溝跡	土師器	坏	底部ほぼ完存	3.0	13.8	8.8						良好	
36	3号溝跡	土師器	坏	底部1/2	(3.3)	(14.4)	(9.1)						良好	
37	5号溝跡	土師器	坏	底部1/2	(0.6)		8.7						良好	
38	5号溝跡	土師器	坏	底部1/4	(1.2)		(9.3)						良好	
39	5号溝跡	土師器	坏	底部3/4	(1.0)		(7.7)						良好	
40	5号溝跡	土師器	坏	底部1/3	(1.3)		(8.6)						良好	
41	5号溝跡	土師器	坏	底部1/3	(1.1)		(8.7)						良好	
42	5号溝跡	土師器	坏	底部1/3	(1.5)		(7.0)						良好	
43	5号溝跡	土師器	坏	底部1/4	(1.1)		(6.6)						良好	
44	5号溝跡	土師器	坏	底部2/3	(1.1)		(8.6)						良好	
45	5号溝跡	土師器	坏	全体で1/3	2.7	(12.0)	(8.1)						良好	
46	5号溝跡	土師器	坏	全体で1/3	2.9	(13.8)	(10.0)						良好	
47	6号溝跡	土師器	坏	底部4/5	2.7	(13.4)	9.6						良好	
48	7号溝跡	土師器	坏	底部完存	2.8	(11.6)	8.2						良好	
49	7号溝跡	土師器	坏	全体で2/5	3.2	(12.9)	(9.9)						良好	
50	7号溝跡	土師器	坏	全体で3/4	3.0	12.3	8.8						良好	
51	1号溝跡	須恵器系	鉢	底部破片	(4.3)								良好	
52	1号溝跡	青磁	碗	底部1/7	(2.7)		(4.4)						良好	中国系
53	3号溝跡	須恵器系	鉢	口縁部1/2	(3.0)	(25.8)							良好	
54	3号溝跡	白磁	皿	底部1/2	(0.8)		(5.7)						良好	
55	5号溝跡	青磁	碗	破片	(3.7)								良好	蓮弁文
56	10号溝跡	陶磁器	折縁皿	底部1/5	(3.5)	(35.6)	(20.8)						良好	底部に「肥」の文字
57	10号溝跡	陶磁器	八角鉢	口縁部1/5	(8.5)	(17.0)	(7.0)						良好	肥前系
58	11号溝跡	陶磁器	擂鉢	底部1/3	(8.0)		(16.2)						良好	
59	南区	青磁	坏	口縁部/1/6	(2.5)	(13.0)							良好	龍泉窯系
60	南区	青磁	碗	破片	(3.8)								良好	中国系、蓮弁文
61	A区	瓦質土器	火鉢	破片	(5.5)								やや不良	表面に「五月廿」の文字
62	A区	陶磁器	擂鉢	口縁部1/7	(12.6)	(35.0)							良好	
63	A区	陶磁器	碗	口縁部1/2底部2/3	6.2	10.9	4.5						良好	
64	2号溝跡	瓦	丸瓦						(16.30)	(12.70)				
65	2号溝跡	瓦	軒平瓦	頭部1/2					(10.90)	(10.80)			良好	唐草文
66	3号溝跡	瓦	軒丸瓦	頭部1/2					(10.60)	(13.90)			良好	左三つ巴文
67	3号溝跡	瓦	軒平瓦						(10.30)	(9.30)			良好	唐草文
68	3号溝跡	瓦	平瓦						30.10	26.30			良好	
69	3号溝跡	瓦	軒平瓦						32.80	27.30			良好	唐草文
70	3号溝跡	瓦	丸瓦						(30.60)	16.30				
71	3号溝跡	瓦	丸瓦						(12.20)	(9.40)			良好	
72	3・5号溝跡	瓦	軒丸瓦	頭部2/3					(5.40)	(14.50)			良好	左三つ巴文
73	5号溝跡	瓦	軒平瓦						(8.70)	(10.70)			良好	唐草文
74	12号住居址	硬石器	石皿						20.60	14.70	3.80	1400.00		
75	15号住居址	硬石器	砥石						33.70	23.00	6.10	8500.00		
76	S-63	石製品	石臼	下臼1/5	(5.4)	(28.0)								
77	G区	石製品	石臼	上臼1/3	(9.4)	(33.4)								鳥嘴石(羽島か)
78	10号住居址	剥片石器	台形様石器						3.40	2.55	0.95	4.76		安山岩
79	F区	剥片石器	縦長剥片						7.85	3.75	1.30	29.73		
80	1号溝跡	土錘類	土錘	完形					3.10				良好	
81	南区	銅銭	嘉祐通寶	ほぼ完形					2.4		1.05			
82		硬石器	磨石	ほぼ完形					8.10	6.90	2.80	239.00		

表2 遺物観察表

	色調		胎土		調整	
番号	外	内	素地密度	含有鉱物	外(凸、表)	内(凹、裏)
01	明黄褐Hue10YR6/6	橙Hue7.5YR7/6		石英, 長石, 角閃石	ナデ, ハケ, 粘土の貼付	ナデ
02	にぶい黄橙Hue10YR7/3	にぶい橙Hue7.5YR7/4	普通	石英, 赤色粒子, 長石, 雲母	ハケ, ナデ, ヨコナデ	ケズリ, 工具ナデ, 指頭圧, ナデ
03	にぶい黄橙Hue10YR6/3	灰黄褐Hue10YR6/2	普通	石英, 赤色粒子, 長石, 雲母	ヨコナデ, ハケ, ハケ, ヨコナデ	ナデ, ハケ, ヨコナデ
04	明黄褐Hue10YR7/6	にぶい黄橙Hue10YR7/3	普通	雲母, 石英, 角閃石, 赤色粒子	ハケ, 貼付凸帯, ナデ, 刻み文	ヨコナデ, ハケ
05	にぶい黄褐Hue10YR5/3	灰黄褐Hue10YR6/2	普通	石英, 長石, 雲母, 赤色粒子	工具ナデ	ナデ
06	にぶい黄褐Hue10YR5/3	にぶい黄橙Hue10YR7/4	普通	石英, 雲母, 長石	ヨコナデ, 指頭圧, ナデ	ヨコナデ, ナデ
07	にぶい黄橙Hue10YR6/3	にぶい黄橙Hue10YR6/4	普通	石英, 雲母, 長石, 赤色粒子	ヨコナデ, ハケ, 工具ナデ, ハケ, 指頭圧, ナデ	ヨコナデ, ハケ, ナデ, 指頭圧, ナデ, 工具ナデ
08	橙Hue2.5YR6/6	にぶい黄褐Hue10YR5/2		石英, 長石, 雲母	ハケ, ナデ, ヨコナデ	ハケ, ナデ
09	浅黄橙Hue7.5YR8/6	橙Hue7.5YR7/6		石英, 長石, 黒色粒子		ヘラケズリ, 工具ナデ
10	にぶい黄橙Hue10YR7/3	にぶい黄橙Hue10YR7/4		石英, 長石, 角閃石, 緑石	ナデ, ハケ	ナデ, ハケ, 工具痕
11	にぶい黄橙Hue10YR7/4	明黄褐Hue10YR7/6	普通	石英, 角閃石, 赤色粒子, 雲母, 長石	ナデ	ナデ
12	にぶい橙Hue7.5YR7/4	橙Hue7.5YR6/6				
13	灰褐Hue7.5YR4/2	橙Hue7.5YR6/6	普通	石英, 角閃石, 長石, 雲母, 赤色粒子	ハケ, 工具ナデ, ヨコナデ, ヨコナデ, ハケ, ヨコナ	ハケ
14	にぶい黄橙Hue10YR7/4	にぶい黄橙Hue10YR6/3	普通	石英, 雲母, 長石, 角閃石, 赤色粒子	ハケ, ヨコナデ, ヨコナデ	ヨコナデ, ハケ
15	明黄褐Hue10YR7/6	橙Hue7.5YR7/6		石英, 長石, 黒色粒子, 黄色粒子	ナデ, 粘土の貼付	ナデ
16	橙Hue7.5YR6/6	明黄褐Hue10YR7/6	普通	石英, 角閃石, 赤色粒子, 長石	ヨコナデ, ハケ, 工具ナデ	
17	橙Hue7.5YR7/6	橙Hue7.5YR7/6	普通	石英, 長石, 雲母, 赤色粒子, 角閃石,	ヨコナデ, ハケ	ヨコナデ, ハケ
18	暗灰黄Hue2.5Y4/2	にぶい黄橙Hue10YR6/4		石英, 長石, 角閃石, 赤色粒子	ハケ, ナデ, ヨコナデ	ハケ, 工具ナデ
19	にぶい黄橙Hue10YR6/4	灰黄褐Hue10YR4/2		石英, 雲母, 赤色粒子, 長石, 角閃石	ヨコナデ, ナデ, ハケ	ナデ, ヨコナデ, 指頭圧
20	にぶい黄橙Hue10YR7/4	橙Hue7.5YR6/6	普通	石英, 雲母, 長石, 赤色粒子, 角閃石	工具ナデ, ハケ, ナデ, ヨコナデ	しぼり痕, 工具ナデ, ハケ, ナデ, ヨコナデ
21	橙Hue7.5YR6/6	橙Hue7.5YR7/6	普通	石英, 赤色粒子, 雲母, 長石	ヨコナデ, ハケ, 和刺突文, ナデ	ヨコナデ, 指頭圧, ナデ
22	にぶい黄橙Hue10YR7/4	明黄褐Hue10YR7/6		石英, 長石, 角閃石	ハケ, ヨコナデ, 指頭圧, 工具ナデ	ハケ, ヨコナデ, 指頭圧
23	にぶい橙Hue5YR6/4	にぶい橙Hue7.5YR5/3		石英, 赤色粒子, 黒色粒子	ハケ, ヨコナデ, 刻み凸帯	ハケ, ヨコナデ, ヘラケズリ
24	橙Hue7.5YR7/6	にぶい橙Hue7.5YR6/4		石英, 赤色粒子, 長石, 角閃石	ハケ, ヨコナデ, 波状文	ハケ, ヨコナデ
25	橙Hue5YR6/6	明赤褐Hue5YR5/6	普通	石英, 長石, 雲母	ヨコナデ, ハケ, ハケ, ヨコナデ, ハケ	ヨコナデ, ハケ, ナデ
26	橙Hue7.5YR6/6	にぶい黄橙Hue10YR6/4	普通	石英, 赤色粒子, 雲母, 長石	ハケ, ナデ, ヨコナデ, ハケ, 指頭圧	工具ナデ, ナデ, ハケ, ナデ, 指頭圧
27	にぶい黄橙Hue10YR7/4	にぶい橙Hue7.5YR7/4	普通	石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤色粒子	ヨコナデ, ナデ	ハケ, ヨコナデ, ハケ, 工具ナデ
28	にぶい黄橙Hue10YR7/4	にぶい黄橙Hue10YR6/3	普通	石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤色粒子	ハケ	ナデ, ケズリ, 工具ナデ
29	にぶい黄橙Hue10YR7/4	にぶい黄橙Hue10YR7/3	普通	石英, 長石, 角閃石, 雲母, 赤色粒子,	ヨコナデ, ハケ, 工具ナデ	ヨコナデ, ハケ, ハケ, ミガキ
30	にぶい黄橙Hue10YR7/3	にぶい黄橙Hue10YR6/4		石英, 長石, 黒色粒子, 赤色粒子, 緑石	ハケ, ヨコナデ, 指頭圧	ナデ, ヨコナデ, 工具痕
31	橙Hue5YR6/6	橙Hue5YR6/6		長石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
32	浅黄橙Hue10YR8/4	にぶい黄橙Hue10YR7/4		長石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
33	橙Hue5YR7/6	橙Hue7.5YR6/6		長石, 角閃石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
34	にぶい橙Hue7.5YR6/4	にぶい黄橙Hue10YR6/4		長石, 赤色粒子	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
35	橙Hue7.5YR6/6	橙Hue5YR6/6		長石, 赤色粒子	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
36	橙Hue7.5YR7/6	橙Hue7.5YR7/6		長石, 赤色粒子	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
37	にぶい黄橙Hue10YR7/4	橙Hue5YR6/8		長石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
38	橙Hue5YR6/8	橙Hue7.5YR6/6		長石, 赤色粒子	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
39	橙Hue5YR6/8	にぶい黄橙Hue10YR6/4		長石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
40	明褐Hue7.5YR5/8	橙Hue5YR6/6		長石, 赤色粒子	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
41	橙Hue5YR6/8	にぶい黄橙Hue10YR7/4		長石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
42	橙Hue5YR6/8	橙Hue7.5YR6/6		長石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
43	橙Hue7.5YR7/6	黄橙Hue7.5YR7/8		長石, 赤色粒子	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
44	橙Hue5YR6/8	橙Hue5YR6/8		長石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
45	橙Hue7.5YR7/6	にぶい橙Hue7.5YR7/4		長石	回転ナデ	回転ナデ
46	にぶい橙Hue7.5YR7/4	橙Hue7.5YR7/6		長石	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
47	橙Hue5YR6/6	橙Hue7.5YR7/6		長石, 赤色粒子	ナデ	回転ナデ
48	にぶい橙Hue7.5YR6/4	にぶい橙Hue7.5YR7/4		長石, 赤色粒子	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
49	橙Hue7.5YR7/6	橙Hue7.5YR6/6		長石	回転ナデ	回転ナデ
50	橙Hue7.5YR6/6	橙Hue7.5YR6/6		長石, 赤色粒子	回転ナデ, 糸切り	回転ナデ
51	灰Hue5Y5/1	黄灰Hue2.5Y5/1		長石	ハケ, 工具ナデ	ハケ, ヨコナデ
52			精		施釉	施釉, 陰刻
53	灰Hue5Y6/1	灰Hue7.5Y6/1	普通	石英	回転ナデ	回転ナデ
54			精		施釉	施釉, ヘラ切り
55			精		施釉	施釉
56			精		施釉, 染付	施釉, 染付
57			精		施釉, 染付	施釉, 染付
58			精	石英	施釉	線目
59			精		施釉	施釉
60			精		施釉	施釉
61	にぶい黄橙Hue10YR6/3	にぶい黄褐Hue10YR5/3	普通	石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤色粒子	ナデ, 棒状工具文字	工具ナデ
62			精	石英	回転ナデ, 施釉, 回転ヘラケズリ	回転ナデ, 施釉, 線目
63			精		施釉, 染付	施釉, 染付
64	黒褐Hue2.5Y3/1	黒褐Hue2.5Y3/2			ナデ, 縄目叩き痕	ナデ, カマキ, 糸切り痕
65	黄灰Hue2.5Y5/1	黒褐Hue2.5Y3/1		石英, 長石, 角閃石	ナデ	ナデ, 離れ砂
66	黄灰Hue2.5Y5/1	灰白Hue2.5Y8/1		長石, 石英, 角閃石, 黒色粒子	離れ砂	ナデ
67	褐灰Hue10YR5/1	にぶい黄橙Hue10YR6/4		石英, 長石, 黒色粒子		ナデ, 離れ砂
68	にぶい橙Hue7.5YR7/4	橙Hue7.5YR7/6		石英, 角閃石, 黒色粒子, 赤色粒子		ナデ, 離れ砂, 糸切り痕
69	灰Hue5Y5/1	灰HueN5/			離れ砂	ナデ, カマキリ, 離れ砂
70	にぶい黄橙Hue10YR6/4	橙Hue7.5YR7/6			ナデ	ケズリ, 布目痕
71	褐灰Hue10YR6/1	にぶい黄橙Hue10YR6/3		長石, 石英, 雲母, 赤色粒子	ナデ, 縄目叩き痕	ナデ, ケズリ, 糸切り痕
72	灰Hue10Y4/1	灰Hue10Y5/1		長石, 石英, 金雲母	離れ砂	ナデ
73	黄灰Hue2.5Y5/1	黒褐Hue2.5Y3/1		石英, 角閃石, 赤色粒子, 黒色粒子, 雲母	ナデ	ナデ, 離れ砂
74						
75			粘板岩			
76					ケズリ, ノミ痕(側縁部), 穿孔	
77					加工痕, 使用痕	
78						
79						
80	にぶい橙Hue7.5YR7/4			長石	指頭圧, ナデ	
81						
82					ミガキ	ミガキ

付　論

・地域社会・東アジアのなかの浄光寺

・蓮華院五輪塔実測記

・南大門遺跡周辺における地理的・歴史的環境の考察

地域社会・東アジアのなかの浄光寺

熊本学園大学

小川弘和

1．はじめに–肥前東妙寺文書のなかの浄光寺–

浄光寺は、西大寺末寺として全国的な律宗ネットワークのなかに位置づけられていた寺院であり、中世後期をとおして一定の寺勢を誇ったものの、戦国争乱のなかで焼亡した。このため、自身は一切の文書・典籍を残しておらず、その歴史については、他の律宗寺院の史料中での断片的言及と、考古学的知見に拠るしかない。よってそれらをひろく当該期の九州や玉名郡域の情勢のなかに位置づけつつ、浄光寺の沿革を探っていくことにしよう。

その名がはじめて現れるのは、大宰府宛の永仁６年（1298）７月 14 日「太政官符」（東妙寺文書）である。肥前国神崎荘内にあった律宗寺院である東妙寺と、近傍の尼寺・妙法寺は、寺域内での殺生禁断を要望した。それを京都の公家政権が許可し、九州の行政を統括する大宰府に、その実施を命じたというのが、その概要だ。

この太政官符に引用された東妙寺住持唯円の要望書には、「当寺者、為無仏世界度衆生、去弘安年中草創地也、妙法寺者、建立以後、即令止住尼衆、歴四十余廻之星霜畢、彼是両寺、依有勅願、共口祈天長地久御願事、于今無退転」と記されている。東妙寺は弘安年間（1278 ～ 88）、妙法寺は永仁６年から遡ること 40 年程、おおよそ 1260 年頃の創建で、ともに「勅願」、つまり天皇の祈願寺であるという。ここで両寺が求めている「殺生禁断」とは、本来は聖域であるべき寺院敷地での殺生を禁じるという、仏教にとっては当然の論理だが、転じて中世には、寺域や寺領荘園において、他者、特に殺人を旨とする武者などの介入を排除し支配権を確立するために掲げられていった。

そして両寺がこの要求を正当化するための類例として、「且肥後国浄光寺者、沙門惠空私建立之寺院也、雖非勅願、已被下宣旨、被禁断殺生畢」と、その名を挙げられたのが、浄光寺なのである[1]。曰く「浄光寺は惠空が私的に創建した寺院であり、勅願寺ではないにもかかわらず、すでに宣旨（天皇の命）によって殺生禁断を実現している。」ならば勅願寺である東妙・妙法両寺は当然…という論理が展開されている。ここから読みとれる創建期の浄光寺についての論点は、鎌倉時代後期における律宗の全国的展開のなかで、肥前東妙寺・妙法寺と前後して成立した寺院であること。勅願寺ではないにもかかわらず、勅願寺並の待遇を得ていた以上、公家政権に圧力・

影響を与えうる存在を後ろ盾としていたこと。それは鎌倉幕府以外には考えられず、その創建にも幕府の一定の関与があったとみるのが自然であること。その際、幕府と現地の諸勢力との間で、さまざまな利害の調整があったであろうこと、といったところだろう。そこでまず、鎌倉後期における律宗の展開のありさまを、中世日本の仏教全体のなかに位置づけながら、概観しておこう。

2．東アジアのなかの日本中世仏教

日本の仏教は律令国家のもとで整えられた南都六宗（三論・成実・法相・倶舎・華厳・律）を基礎とし、これに平安時代初頭にもたらされた天台・真言両宗が加えられた八宗が、中世には国家安穏などの祈祷を担う正統仏教とされていた。これに対し、いわゆる「鎌倉新仏教」は異端とされており、かつて考えられたほど時代を代表する宗派ではなかったというのが、現在の定説である（黒田 1975 など）。浄光寺が属した真言律宗は、奈良の西大寺を再興した叡尊（1201–90）が、戒律をつうじて真言密教の深奥を極め、もって衆生の救済を目指したもので、貧者救済などの社会事業に努めたことはよく知られている。ふつう、正統仏教内部の改革派として位置づけられる。

古代の東アジア世界では、遣唐使に象徴される国家的使節が、唐を中心とする対外関係の軸だったが、中世の対外関係は、中国江南沿岸部を拠点とする商人たちのネットワークを基盤とするものになっていた。日本から中国を目指す留学僧は商人の船に便乗して往来し、商人は自身の信仰する宗派の寺院を東アジア各地の港湾都市に建立していく。仏教と商人のネットワークは、リンクして東アジア全体に張り巡らされていった。

そして日本中世の仏教もそのなかにあった。たとえば比叡山延暦寺は、大宰府近傍の大山寺を支配に収めて対宋交易の窓口とし、そのもとに宋商たちを編成していく一方、足元に望む琵琶湖の水運を軸に、京都と北陸との間の交通体系も掌握していった（渡邊 2010）。このような、学術交流や布教のルートと物流との一体的整備は、院政期に、列島各地における末寺・荘園の獲得のかたちで進められた。

ところが鎌倉時代に入ると、「鎌倉新仏教」の臨済宗が、対外関係での存在感を高めてくる。聖福寺が、博多居留の宋人たちが建立した堂舎を起源に、栄西を開基に迎えて成立したとされるように、南宋で隆盛して宋商たちに受容された臨済宗は、ほぼリアルタイムで博多や大宰府にもちこまれた。さらに、摂家将軍・九条頼経の父であることを背景に、鎌倉時代前期の公家政権を主導した九条道家は、京都に東福寺を建立。建長 7 年（1255）に完成した、その開山に迎えられたのは、渡宋経験を持つ禅僧・円爾。かくして宋–博多・大宰府–京都を結ぶ、臨済宗と日宋交易との複合的ネットワークが確立していく。

一方、鎌倉幕府と臨済宗との本格的な接触は、蒙古襲来前後に降ることになる。東国から出発した鎌倉幕府は、承久の乱での勝利で西国への影響を強めていく。そのうえで、幕府を軸に臨むこととなったモンゴルとの二度にわたる戦争と、その後の警戒体制の長期的継続は、鎌倉幕府が西国、特に最前線となった九州への影響を拡大・深化する決定的なきっかけとなった。戦線の維持には鎌倉-京都-九州を結ぶ交通体系の掌握・管理が欠かせない。そのため、交通の要衝に点在する所領荘園の多くは幕府によって接収されていく。

それとあわせて、幕府は臨済宗との関係を強めて、その勢力拡大を後推しした。内外の高僧を迎えて建長寺をはじめとする都市鎌倉の臨済宗寺院は急速に整備されていき、臨済宗ネットワークの東のターミナルとしての位置を確立した。その一方、列島各地には、地域における交通の要衝を中心に、新たな臨済宗寺院が次々と創建されていく。その受け皿となったのは、幕府と関係を深めることで地位の保全や向上を期待した、地域の武士・領主たちであった。そして臨済宗とならんで、鎌倉幕府の交通掌握政策を担う結果となったのが、実は真言律宗だったのである。

3．真言律宗・鎌倉幕府と九州社会

叡尊らの西大寺流真言律宗教団は1240年代から活動を本格化させていくが、彼と公・武両政権の主要人物とが強く結びつくきっかけとなったのは、全国を襲った正嘉2年（1258）の飢饉であった。その克服が課題となるなかで、貧者救済を掲げる真言律宗は公・武両政権に注目され、まず文応元年（1160）には、公家政権の主催者・後嵯峨院の側近であった葉室定嗣の帰依を得、また弘長2年（1162）には鎌倉の北条時頼に招かれて、その保護を得ていくようになる（網野1974）。中世には都市的場の四隅をはじめとする交通の要衝は、さまざまな人々が行き交う境界でもあり、生ける貧者が群がるとともに死者がうち捨てられる場でもあった。貧者救済と死者の葬送供養を旨とした叡尊教団は、公・武両政権の保護のもとに、このような交通の要衝に末寺を得て、あわせてその近傍に位置する橋や港湾の管理も委ねられていく。その結果、彼らは延暦寺が掌握していた日本海-小浜-琵琶湖-京都を結ぶ交通ルートなどにも食い込んでいった（松尾2010）。

そして叡尊教団と幕府との関係は、モンゴルとの対決が不可避となっていく1260年代後半から、さらに深いものとなっていく。文永5年（1268）の四天王寺での勤行を皮切りに、彼は公・武両政権の求めに応じて異国調伏・戦勝祈願の法会・祈祷をとりおこなうこと数度に及ぶとともに、その教線は西国、さらに九州へとのびていくことになる。博多西南部・那珂川に面する位置には、九州における律宗の拠点と目される大乗寺が存在した。亀山院（1249-1305）勅願と推定

される大乗寺の創建は13世紀末ないし14世紀初頭頃と考えられる。また、幕府の九州支配の拠点であった鎮西探題の御所は、その近隣であったとも推定されている。鎌倉時代末から南北朝時代にかけて、西大寺-大乗寺-九州各地の律宗寺院という体制が整えられて、九州各地にその教線が展開していくとともに、その環境・立地からみて、鎮西探題のもとで大乗寺が、博多港と那珂川の水上交通の管理を担っていた可能性が指摘されている（松尾 2010）。

第1図は、諸史料にもとづき中世九州における西大寺末寺の分布を示したものである[2]。それらが沿岸部を中心とする交通の要衝と目される場に集中していることがみてとれよう。たとえば、先述の東妙・妙法両寺があった肥前国神崎荘は、平安時代以来、有明海における交通・交易の要衝であった。そして築地の浄光寺もまた、菊池川河口部の要港・高瀬に近接した位置にある。

中世東アジアの対外関係の基盤となった東シナ海をまたぐ海商のネットワークに類する商業・交通ネットワークは、ユーラシア大陸の海・陸各地に形成されており、モンゴル帝国によるユーラシア大陸の大半の制圧は、それらのネットワークをひとつに連結するものだった。それは西ヨーロッパ勢力が主導した大航海・近世グローバリゼーションの歴史的前提に位置する、世界史的な事件であった。その一環であるモンゴルの日本侵攻に対抗するための、鎌倉幕府の交通編成と連動しつつ、真言律宗は臨済宗とならんで西国・九州に教線を拡大していった。幕府の関与のもとに、その頃に創建されたと推定される浄光寺も、そのような「世界」のなかの中世日本の社会史・仏教史のなかに、歴史的位置を持つものなのである。

4．浄光寺と地域社会

近世に干拓される前の菊池川河口部の海岸線は、現在の国道501号線の辺りであったと推定される（規工川 1989）。中世には河口からほど近い位置だった高瀬は、有明海の海上交通と、玉名・山鹿・菊池郡域を貫き菊池川の上流にまで至る、水上交通との結節点となる、地域の要衝の港として小都市的景観を形成していた[3]。そしてそれは、博多・五島列島-有明海-南九州-南西諸島と連なる、海上交通ルートの一角を占めていたのである。

このような高瀬は、中世には筥崎八幡宮領の大野別符（おおよそ旧岱明町域から菊池川西岸までの範囲の地域）の東南域に含まれていた。別符とは、当時の地方行政機関である国府から、特別に開発の許可を得た所領のこと。先述の「太政官符」のように、律令制では上級機関からの許可証等は「符」という様式の文書によった。つまり「特別の符」を得た所領というわけである。別符はふつう、開発の責任を負うことと引き換えに、税の減免措置をうけた。筥崎八幡宮は、博多からやや東に位置する、京都・石清水八幡宮の末社。八幡神発祥の地・宇佐八幡宮の神宮寺で

第１図　九州の西大寺末寺位置図

ある、弥勒寺と一体化していた石清水は、筥崎宮を交易センターとして、九州各地に獲得した末寺末社・荘園をつなぐ交通ネットワークを形成していた。そのなかに位置づけられる大野別符の確立は、1160年代後半頃、平氏の支配を軸に、九州の中世的体制の骨格が定まっていくなかでのことであったと思われる。

鎌倉幕府の後ろ盾のもとで浄光寺が建立された背景には、このような高瀬を近傍から睨み、その交通機能に介入するという目的があったと考えて間違いない。しかし、それには現地の諸勢力との利害調整・連携が必要となる。その受け皿となったのは、紀氏一族だっただろう。紀氏は玉名郡西部を拠点に、国府のスタッフも輩出した平安時代以来の勢力である。この地域が筥崎宮領となる際にも、現地の取りまとめ役を務めたと思われ、別符内の開発で分出していった村々は、一族によって分割支配されていった。

しかし平氏が鎌倉幕府に滅ぼされると、九州は幕府による植民地支配のもとにおかれた。ただし九州各地の勢力は、多かれ少なかれ平氏の九州支配のなかに位置づけられていた者たちである。それらをすべて殲滅することは現実的ではないから、幕府は肥後の菊池氏のような大勢力だけを罰して、中小の勢力は温存するかわりに、東国の有力御家人を郡地頭などという広域管理者として配することで、地付きの勢力を監督・牽制する体制を樹立していった。玉名郡域には、隣国・豊後の守護に任じられ、後に戦国大名となる有力御家人・大友氏らが配された可能性が高い。大野別符のうち尾崎村は、鎌倉時代には大友氏の庶流・詫磨氏の所領となっている。紀氏は御家人と認められて地位は保全されたものの、大野別符全域を排他的に支配できる状況ではなくなっていた。

そして蒙古襲来を機に東国御家人が九州の所領に下向し、地歩を固めていくと、地付きの勢力はそれに圧迫されていくことになった。特に紀氏のばあい、北に接する野原荘に東国御家人・小代氏が乗り込んできたことが、決定的だったようだ。そのなかで紀氏による大野別符支配は危機に曝され、その結束も揺らいでいく。紀氏一族の本家は「築地」を名字とする、築地村を拠点とする家系だった。ところが、この頃には築地家と別の家との間に激しい紛争が展開し、そのなかで本家の地位も別の家に移動した形跡があるのだ。この後、一族結合のあり方が再編・強化されたらしく、室町時代に入る頃に一族は、大野別符の「大野」を、その名乗りとしていくことになる。

紀氏が鎌倉後期の危機を克服していくうえで、幕府との結びつきを強めていくことは最も有効な手段だった。たとえば紀氏は、鎮西探題の訴訟実務要員として下向し、肥前に所領を得ていくことになる東国御家人・安富氏に接近をはかっている。おそらく、内・外の紛争解決での援助を期待してのものだろう。別符の中心地・築地における浄光寺の創建もまた、そのような幕府との

連携の模索のなかで、実現したものと考えられるのである[4]。

5．おわりに

冒頭で述べたように、浄光寺についての文献史料はきわめて乏しい。しかし視野をひろく九州全体や、さらに東アジア規模にまでとり、一方で地域の情勢に深く分け入っていくことで、その歴史的位置を陰画のように浮かび上がらせることは不可能ではない。モンゴル帝国の成立という世界史的事件のインパクトによる中世日本の激動と、地域社会のこまやかな律動。その交差するところに、浄光寺は生まれたのである。

注

(1) 田邊哲夫は浄光寺の創建者・惠空を、功徳院流快雅・皇圓・成源・信空（叡尊の弟子）などに師事した慈嵐の弟子とする（熊本県玉名市教育委員会 1989 など）。ただしそこで典拠とされている「密教系譜」については不明。これが佐和隆研編『密教辞典』（宝蔵館）付録「密教系譜」を指すのだとすれば、管見の限り、そこに惠空にいたる系譜は確認できなかった。

(2) 八尋 1976 をもとに田邊哲夫（熊本県玉名市教育委員会 1989）が補訂したものを一部修正し転載した。

(3) 本項目での高瀬・大野別符およびその領主・紀氏についての記述は、小川 2005 にもとづいている。

(4) 浄光寺については『肥後国誌』などの近世・近代地誌類に、平清盛の息子・重盛による創建伝承が採られている。中世の同時代史料による裏付けのない伝承を、そのまま事実とみるわけにはいかないが、鎌倉幕府による禅・律寺院の創建事例のなかには、既存の天台宗などの寺院を再興・宗派替えしたものも多い。よって伝承には何らかの事実が反映されており、浄光寺には平安末期ないし鎌倉時代前半のうちに創建された先行寺院が存在した可能性は否定できない。一方、築地村を皇圓阿闍梨の出生地とする伝承は、中世の同時代史料はもちろんのこと、「本朝高僧伝」や『肥後国誌』など近代初頭までの史料には確認できない。管見の限り、それがはじめて記された文献は、皇圓阿闍梨が投身・龍に変化したとされる静岡の桜ヶ池にある、池宮神社社務所の発行した「遠州桜ヶ池由来記」（大正 12 年（1923）初版。大正 15（1925）・昭和 3 年（1928）に「修訂」が重ねられており、見ることができたのは昭和 3 年版）である。出生地伝承の検証は、現状の文献史学の能力をこえるものといえよう。

【引用文献】

網野善彦　1974『蒙古襲来』小学館

小川弘和　2005「古代・中世編」『岱明町史』岱明町

熊本県玉名市教育委員会　1989『浄光寺跡寺域確認調査』

黒田俊雄　1975『日本中世の国家と宗教』岩波書店

規工川宏輔　1989「中世の海岸線を引く」熊本地名研究会編『甦る熊本の中世』秀巧社

松尾剛次　2010『中世律宗と死の文化』吉川弘文館

八尋和泉　1976「筑前飯盛神社神宮寺文殊菩薩騎獅像および豊前大興善寺如意輪観音像について-九州西大寺末寺の仏像新資料二例-」『九州歴史資料館研究論集』2

渡邊　誠　2010「十二世紀の日宋貿易と山門・八幡・院御厨」同『平安時代貿易管理制度の研究』思文閣出版、2012年に再録

蓮華院五輪塔実測記

公益財団法人　元興寺文化財研究所

狭 川 真 一

1．はじめに

関白塔と呼ばれるこの２塔は、九州の石造五輪塔中最大規模を有するもので、早くから注目されてきた。現在は山門の左手に長方形の石壇を作り、その上に２基を並べて安置している。本稿では向って右手の塔を東塔、左手の塔を西塔と呼称する（写真 1)。

以前は現在の地点から少し南西の地点に、やはり２基が並立して建っていた。その当時の写真（写真２・16）ではすでに地輪の下には隙間ができているようにも見えるが、詳細は明らかではない。ただ、移転後の基礎石以下の遺構はそのまま保存されているが、地下は未調査である。

また、この関白塔の西側一帯は竹藪であったが、古くからマウンド状のものが存在していた。それを除去すると内部から残欠化した五輪塔群が大量に見つかったとのことで、現在は関白塔の西側に低い基壇を作って並べ、祀っている。さらにその西側にも残欠の集積があり、相当数の五輪塔がこの付近に存在していたようである。これらのうち、関白塔と関連するとみられる資料について簡単に言及する。

写真１　蓮華院五輪塔現状

写真２　蓮華院五輪塔旧景（昭和６０年）

2．石塔概要

計測部位は図１に示し、当該部位の計測値は表１に掲げた。数値は最も特色の表れていると判断した面の数値であり、他の面を計測すると若干の誤差がある場合もある。また、この表に含まれないが必要な数値は本文中に随時掲示する。実測図は建築実測図タイプ（狭川 2004a）で作成している。

①東塔（図2、写真3）

凝灰岩製で各部が揃っている。塔の総高は250.6cmで、地輪下には幅116.5cm、高さ20.5cmで方形の台座が敷かれている。台座の石材は本体と近似するもので、一具のものと判断した。

地輪は上下辺とも同じ幅でやや横長の長方形を呈し、幅に対する高さの比は66.0%である。上面は中央付近が0.3cmほど高くなり、わずかだが水垂勾配を意識したものと思われる。水輪は高さを押さえ気味の球体で、最大径は中心よりやや下にある。火輪は軒口の幅が23.0cmと厚めで、ほぼ垂直の面をなす。その上辺部の反りは中央に直線部分を残すが左右へゆっくりと反り上がり、下辺もほぼ同じである。軒裏面は大きく反り上がっており、中央部分でその高さは5.2cmにも達し、肥後地域の特色を出している。火輪の隅棟は直線的に下りながら下部に近づいて反りを強め、軒上辺へと取り付く。屋根中央部は全体で緩やかに反っている。風輪は半球形を呈するが、上辺は中央側へ0.6cmほど傾斜して窪んでいる。空輪はきれいな宝珠形で上部は小さくつまみ出される。

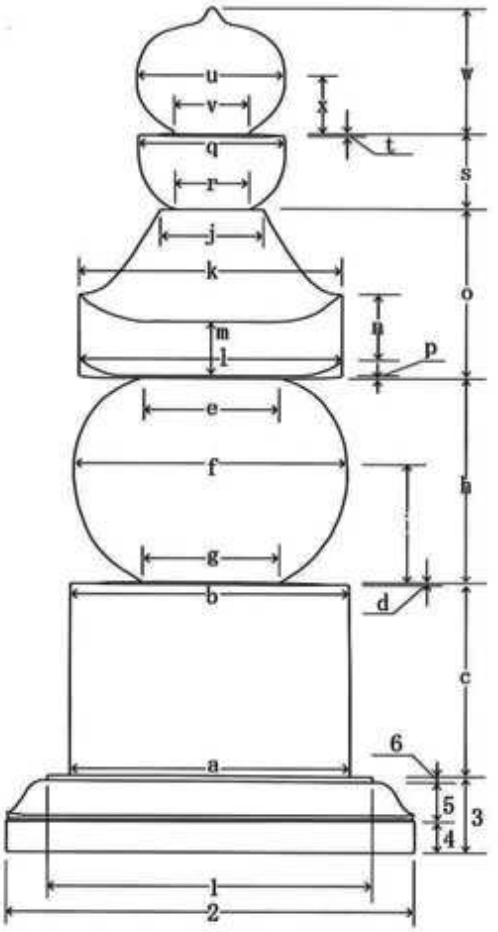


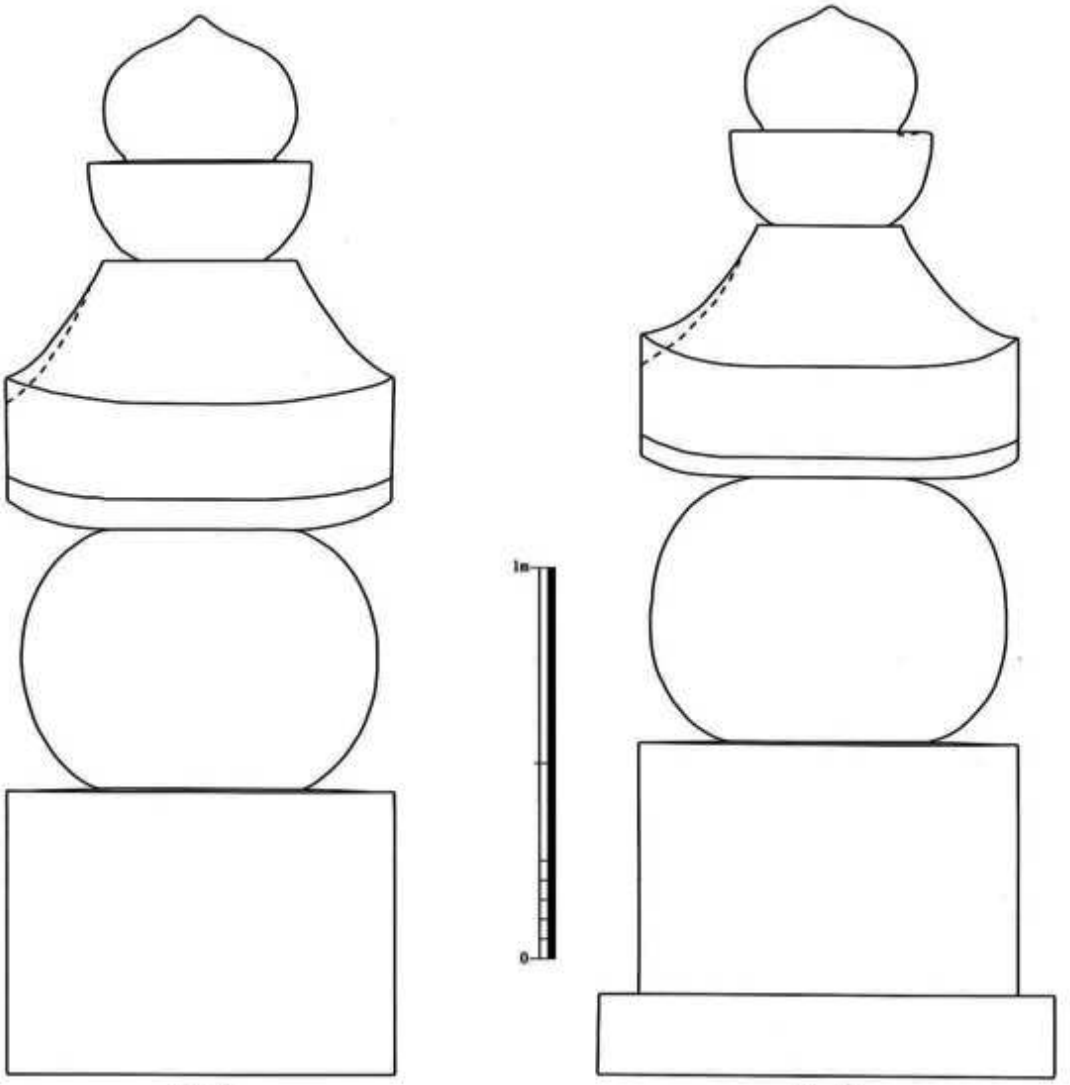
図1　五輪塔の計測部位

五輪塔の表面に梵字や銘文を配置した形跡はない。また、解体時の詳細な情報は残されていないが、関係者からの聞き取りでは地・水輪、水・火輪の接合には枘等の構造物は確認されなかったとのことである。また、解体時に田邊哲夫氏の指導により左右の塔の水輪を入れ替えたようで、もし枘構造となっていたならば、単純に入れ替えることは困難だったとも推定できる。これは西塔にも該当することである。なお、このことと後述する残欠群の資料状況から空風輪の下部を除いて、枘による組み立ては行われていないと判断される。

②西塔（図2、写真4）

凝灰岩製で各部が揃っている。塔の総高は268.8cmで、台座はない。

地輪は上下辺とも同じ幅でやや横長の長方形を呈し、幅に対する高さの比は72.5%で、東塔よりも縦長気味である。上面は中央付近が0.5cmほど高くなり、水垂勾配を意識したものと思わ



西　塔　　東　塔

図２　蓮華院五輪塔実測図（1/20）

表１　蓮華院五輪塔計測表

西塔						現高	268.8
部位		計測値cm	部位		計測値cm	部位	計測値cm
空輪	x	12.7	火輪	p	7.7	水輪	i 31.5
	w	36.9		o	68.3		h 65.9
	v	38.3		n	25.0		g 53.0
	u	49.5		m	24.1		f 91.8
風輪	t	0.3		l	98.5		e 49.0
	s	25.1		k	99.4	地輪	d 0.5
	r	32.7		j	49.7		c 72.6
	q	57.6					b 99.5
							a 99.1

東塔						現高	250.6
部位		計測値cm	部位		計測値cm	部位	計測値cm
空輪	x	12.5	火輪	p	5.2	水輪	i 31.7
	w	31.7		o	63.7		h 66.9
	v	34.7		n	25.5		g 52.0
	u	43.8		m	23.0		f 91.2
風輪	t	−0.6		l	96.0		e 39.5
	s	24.0		k	96.0	地輪	d 0.3
	r	29.0		j	36.5		c 64.3
	q	51.4					b 97.0
							a 97.0

写真３　蓮華院五輪塔東塔

写真４　蓮華院五輪塔西塔

れる。水輪は高さを押さえ気味の球体で、最大径は中心よりやや下にあるが、東塔と比較すると上下のカーブは均一的である。火輪は軒口の幅が 24.1cm と厚めで、若干上方へ開き気味に作る。その上辺部の反りは直線部分がほとんど認められず、左右へゆっくりと反り上がる。下辺は中央部分に直線を残している。軒裏面は大きく反り上がっており、中心部分でその高さは 7.7cm にも達する。東塔と比較するとその実数値も大きいが比率の上でも反り上りが強調されていることがわかる。火輪の隅棟は直線的に下りながら下部に近づいて反りを強め、軒上辺へと取り付く点は東塔と変わらないが、火輪上辺の幅がかなり広い。火輪軒口部分の幅（最大幅）に対する上辺の比率は、東塔で 38.0%だが、西塔では 50.0%となる。屋根中央部は全体に緩やかに反っている。風輪は半球形を呈するが、上辺は中央側が 0.3cm ほど高く、地輪同様に水垂勾配を意識したものであろう。空輪はきれいな宝珠形で上部はつまみ出されるが、東塔より大振りである。

五輪塔の表面に梵字や銘文を配置した形跡はない。接合手法については東塔で記述。

なお、両塔には地輪上辺に細かな傷や水輪側面に人為的な小穴（写真 5）が認められる。聞き取りの結果、地元ではこの石塔を削って粉にして飲むと、腹痛が治るという伝承があることがわかった。

写真５　蓮華院五輪塔水輪の穴

③残欠資料（写真6・7）

東西両塔に類似した凝灰岩製で無梵字のものがいくつか残されており、それを簡単に紹介する。

地輪　集積された北東隅付近に3基分あり、A：幅44.5cm、高さ29.8cm、B：幅45.5cm、高さ29.9cm、C：幅45.5cm、高さ30.9cmを測る。Cの上面と思われる部分に径20cm内外、深さ5cm前後の円形の刳り込みがある。これが枘穴かどうかは、現状では判定が難しい。

水輪　集積の南辺東西隅（ア・イ）と基壇に並べられた最奥中央のもの（ウ）がある。ア：最大径51.6cm、高さ35.6cm、イ：最大径57.1cm、高さ42.7cm、ウ：最大径53.8cm、高さ40.0cm。

空風輪　集積の上に積まれている。北側のものは頂部が欠損するが、現状高29.2cm、風輪最大径27.5cm、風輪下に径12cm、高さ7.0cmの枘が作り出される。南側のものは、高さ35.7cm、風輪最大径30.0cmで枘は欠損している。

この残欠資料が一具のものかどうかは、さらなる詳細な調査を行う必要があるが、大きさの類似する塔が少なくとも3基は存在したことを知らせている。これらを復元すると規模の上では東西両塔の6割前後しかないが、形状は類似したものであり東西両塔との関連性はきわめて深いと思われる。

写真6　蓮華院前に集積された石塔の残欠群

写真7　蓮華院前に並べられた石塔群

3．所　見

①両塔の比較と年代

両塔はいずれも肥後地域を中心に分布する火輪の軒裏面を大きく反らせるタイプの五輪塔で、ともに表面に梵字などの表現は行われていない。石材もほぼ類似のものであり、共通性がうかがわれる。ただし、細部の観察では異なる部分も多々指摘できた。西塔の解説で触れているが、地輪は西塔がわずかだが高さを強調しており、火輪は軒裏面の反りの比率が西塔で大きく、上辺の幅も実数値、比率ともに大きい。これらの点のいくつかは、西塔のほうが後出することを示唆するとみたい。

さて、これらの塔の造営年代だが、銘文がないので確定は難しい。しかし、熊本県北部に集中して見出される鎌倉時代後期から南北朝時代前半期の五輪塔とその形状に共通するものが多く(狭川 2012)、近い時代を想定しておきたい。

②関白塔の伝承

本塔は早くから関白塔と呼ばれていた。『肥後国誌』「関白屋敷」の項の要約をみると、「平重盛が当地を知行して、父清盛の驕奢な日々がその度を増し、皇室を悩まし無道の振舞が多く、ついには一族滅亡のあとを弔う人もなかったので、ここに浄光・妙性の二箇寺を建立し［原文は浄光寺のみ］、父母の悪行滅罪のため大五輪二基を建て衆僧を集めて常住念仏三昧の道場とした」(田添夏喜 1980) ということに由来しているらしい。しかし、実際の石塔の年代とは一致せず、「里俗ノ説」とすべきである。また、浄光寺も重盛の創建としているが、後述のとおりこれも現状では首肯できない。

③西大寺系律宗との関係

さてこの石塔のある場所は築地と称するところで、ここが西大寺系律宗寺院の浄光寺の跡であることは早くから知られていた。上述のとおり『肥後国誌』では平重盛の創建としているが、『肥前東妙寺文書』永仁六年 (1298) 七月十四日の官宣旨に「(前略) 且肥後國浄光寺者、沙門惠空私建立之寺院也、雖非勅願、已被下宣旨、被禁断殺生畢 (以下略)」(『鎌倉遺文』19745 号) とみえ、惠空が創建した寺院であることがわかる。本書第Ⅱ章での整理では、惠空は信空 (西大寺第二代長老) から教えを受けた慈胤の弟子とされている。ここで奈良西大寺とのつながりが知られるが、明徳二年 (1392) の西大寺蔵『諸国末寺帳』に「筑地　浄光寺」、永享八年 (1426) の『西大寺坊々寄宿諸末寺帳』に「肥後国築地　浄光寺」とみえている (以下統合して『末寺帳』とする)。少なくとも 1392 年には西大寺の末寺として存在していることは確実だが、上記の宣旨を参考にすると、その創建は永仁六年 (1298) 以前に遡ることになろう。

さて、当該五輪塔が西大寺奥之院叡尊廟の五輪塔 (写真 8・9) と関係する指摘を行ったのは八尋和泉である。八尋は九州に所在する律宗系寺院の調査を行うなかで、無種子無銘の大五輪塔が佐賀県東妙寺末寺の石塔院 (写真 10)、本塔、熊本県八代市の玉泉寺 (写真 11)、鹿児島県志布志市の宝満寺墓地などに所在することをあげ、「西大寺大五輪塔の系譜を眼前にする思い」と述べている (八尋 1976)。詳細な検討は加えられていないが、まさに的を射た指摘である[1]。このほか、『末寺帳』に記載される寺院のなかで北九州市に所在する大興善寺にも無種子の大五輪塔が存在している (写真 12)。上記した多くの寺院はいずれも『末寺帳』の各国の筆頭に挙げられている寺院であることも注目されるが、玉泉寺を除くすべてで複数の塔が確認されていること

写真８　西大寺奥之院叡尊五輪塔

写真９　西大寺奥之院歴代墓五輪塔

写真１０　佐賀県石塔院歴代墓五輪塔

写真１１　熊本県玉泉寺五輪塔

が重要である。

その代表的なものは東妙寺末寺の石塔院で、唯円墓塔をはじめ５基が境内に並ぶ。石塔院は東妙寺の末寺とされるが、まさに墓を守る寺として存在していたのであり、東妙寺の奥之院として機能していたと言えるだろう。奥之院を持つことは西大寺自体に求められるものであり、西大寺の伽藍から西へ約 500 mのところに叡尊塔を中心に計５基の五輪塔が並ぶ。祖師叡尊の塔は一際大きく作られているが、第二代長老墓以後は叡尊塔の 57%前後の大きさで製作されている（狭川 2003）。これに類似するのは大阪の西琳寺にある旧高屋宝生院所在の一群である。現在の姿は復原的に配置されたものだが、中央に一際大きな叡尊の分骨塔を置き、周囲に関係僧侶の墓塔を配置する（狭川 2004b）。平面的な配置こそ異なるが、きわめて類似した墓所の形成方法である。

写真１２　福岡県大興善寺五輪塔残欠

律宗寺院に附属する墓所つまり奥之院を形成しているところは、叡尊の弟子忍性の分骨塔を中

写真１３　奈良額安寺忍性墓五輪塔群

写真１４　三重県北山墓地五輪塔群

心に以後、歴代住持の墓とみられる石塔が並ぶ奈良県大和郡山市の額安寺（写真 13）が著名だが、近年確認された三重県北山墓地（写真 14）と弘正寺や岐阜県染戸石塔群（写真 15）と長康寺の関係（松井 2011）などはその代表例であり、京都府浄瑠璃寺と近在の西小墓地の旧状も類似するものに復原できると言えよう（狭川 2002）。九州の事例も先の石塔院だけでなく、宝満寺も現在の墓地内に散在しているとは言え無種子塔が多数見られるほか、北九州市大興善寺にも残欠になっているが花崗岩製の大型無種子塔が 2 基以上存在していたことは確実である。つまり、奥之院にはその寺院に関わる歴代住持の墓塔が並ぶという景観が復原できるのである。

写真１５　岐阜県染戸五輪塔群

この視点でみると、蓮華院五輪塔は浄光寺の歴代墓の可能性が高い。大胆に推測すると、古式とみた東塔は、当寺の開山である惠空の墓塔かも知れない。また、現在は 2 基存在するだけだが、隣接地から出土した残欠から、やや小振りながら少なくともあと 3 基は同形式塔の存在が推定できる。つまりこの付近に浄光寺の歴代墓があった可能性が指摘できる。しかし、『肥後国誌』の「五輪塔二基」の項では「此塔無銘高一丈一基ハ見ヘス浄光寺跡ノ林中ニアリ」とあるので、あるいは『肥後国誌』編纂時点では旧状のように 2 基並立する姿ではなかったかも知れず、別の地点に本来の場所があったとも考えられる。ただ、近接地で出土した残欠資料を評価すると、現在の地点周辺に捉えるのが最も妥当であろう。

この問題は旧状写真の場所周辺の発掘調査が行われることや、「浄光寺跡ノ林中」とされる場所の探索、奥之院として本寺（浄光寺）と墓所の位置関係の再検討などを行うことでさらに一歩前進すると思う。今後の様々な調査に期待したい。

注

(1)無種子の大五輪塔というだけで律宗系五輪塔を概念化することはできないが、少なくとも13世紀末から14世紀代のもので、無種子の大型五輪塔は律宗の影響下に造営されたものが多いことは間違いない。ここでは厳密な意味でそれを示すことはできないが、八尋の指摘に従って無種子の大五輪塔をもって律宗と関係深いものと見なして記述を進める。

【参考文献】

田添夏喜　1980「西大寺末寺の調査　浄光寺蓮華院」『玉泉寺』(熊本県文化財調査報告第44集)
熊本県教育委員会

松井一明　2011「東海地域における律宗系五輪塔の出現と展開」『日引』第12号、石造物研究会

八尋和泉　1976「筑前飯盛神社神宮寺文殊堂文殊菩薩騎獅像および豊前大興善寺如意輪観音像について」
『九州歴史資料館研究論集 2』九州歴史資料館

狭川真一　2002「当尾・西小墓地の旧景観」『歴史考古学』第50号、歴史考古学研究会

2003「西大寺奥ノ院五輪塔実測記」『元興寺文化財研究所研究報告2002』(財) 元興寺文化財研究所

2004a「石塔の実測図」『元興寺文化財研究』第83号、(財) 元興寺文化財研究所

2004b「高屋宝性院出土五輪塔実測記」『元興寺文化財研究所研究報告2003』(財)元興寺文化財研究所

2012「九州の五輪塔」『中世石塔の考古学』高志書院

※『肥後国誌』は、後藤是山編　1916『肥後国誌・上巻』九州日日新聞社印刷部を1972年青潮社が復刻したものを使用した。

文末になったが、五輪塔の調査にあたって、蓮華院貫主 川原英照師、宗務長 川原光祐師にお世話になったほか、石塔移動時の状況について (有) 肥後樹景 小峰敏夫氏にご教示をいただいた。また、前川清一氏、竹田宏司氏、美濃口雅朗氏、鈴木美奈都氏のご協力があった。記して感謝したい。

なお、本稿は科学研究費「日本中世の葬送墓制に関する発展的研究」(課題番号21320152) の成果の一部を含んでいる。

写真１６　昭和50年代頃の関白塔

（田添夏喜 1980『浄光寺蓮華院跡出土品』玉名市文化財調査報告第５集 玉名市教育委員会より）

写真１７　関白塔近くに集積された古塔群全景

（平成25(2013) 年７月 末永崇撮影）

南大門遺跡周辺における地理的・歴史的環境の考察

玉名市教育委員会

末永　崇

1．はじめに

南大門遺跡及び浄光寺跡が所在する、小岱山南麓に広がる丘陵一帯は、緩やかに南側に傾斜し、多くの小中河川によって開削され、小規模な谷底平野が入り組む複雑な地形を呈する。玉名市と長洲町の境になっている行末川の左岸には、友田川とその支流の今泉川が主な河川としてあり、それらへ向けて幾筋もの支流が流れ込む。

玉名市教育委員会では、今回報告分の蓮華院誕生寺南大門再建に伴う南大門遺跡の調査（平成20年度）以外にも、国道208号玉名バイパス建設工事に伴う築地池下遺跡の調査（平成20年度）、浮田溜池関連施設の調査（平成21年度）、市道岱明玉名線建設工事に伴う塚原遺跡の調査（平成22～23年度以降継続中）などが行われ、近年は玉名市築地と岱明町の境付近における発掘調査事例が多い。

平成17年に旧玉名市と旧岱明町が合併したが、それまでは別々の自治体であったため、本来地勢的に連続する地域であっても全体的な地形や遺跡の分布が把握しづらい状況であった。合併後、主に小岱山南麓に広がる丘陵の全体像が把握しやすくなったと感じており、発掘調査事例の増加で地図等をよく目にし、さまざまな点を検討する機会も多くなった。そのような中で、地形と河川及び水路、池などの水利、交通などの地理的な特徴でいくつか気づいた点があり、それら景観を構成する諸要素を抽出し、個別に検討することで、南大門遺跡及び浄光寺跡を中心とする全体的な景観復元を考慮した考察を行いたい。また、その景観がどの時代まで遡ることができるのかについても検討し、中世浄光寺が創設される前後の時期の時代背景に関して可能な限り考察したい。

2．地形

『玉名市史　資料篇3自然民俗』の地形分類図によると、小岱山南麓に広がる丘陵地は、主に山腹・山麓傾斜地（傾斜十五度未満）、段丘面1～3、谷底平野に区分される。第1図に山麓傾斜地と段丘面2を濃いグレー、段丘面3を薄いグレー、谷底平野を白で示した。図中の範囲では、概ね山麓傾斜地は今泉川より北側、境川の中流域より北側であり、山田の集落が所在する丘陵は

段丘面２に相当する。今泉川より南側、築山小学校より南側は段丘面３に相当する。山麓傾斜地に比べ非常に緩やかな傾斜であり、標高 15m から 20m の高低差である。傾斜区分は、山麓傾斜地が傾斜２（３度以上、８度未満）から傾斜３（８度以上、１５度未満）、段丘面３が傾斜１（１分の３００以上、３度未満）に区分される。段丘面３から特に傾斜が緩やかになる状況である。四十九池の南側は、ちょうど山麓傾斜地帯からの谷間が、段丘面３へ接続する地点であり、扇状地が形成されている。その南側は、築地館から西側の萩尾の集落まで、東西に帯状に微高地が形成される。そのさらに南側には、平坦地が三池往還までひろがり、緩やかに友田川へ向けて傾斜している。

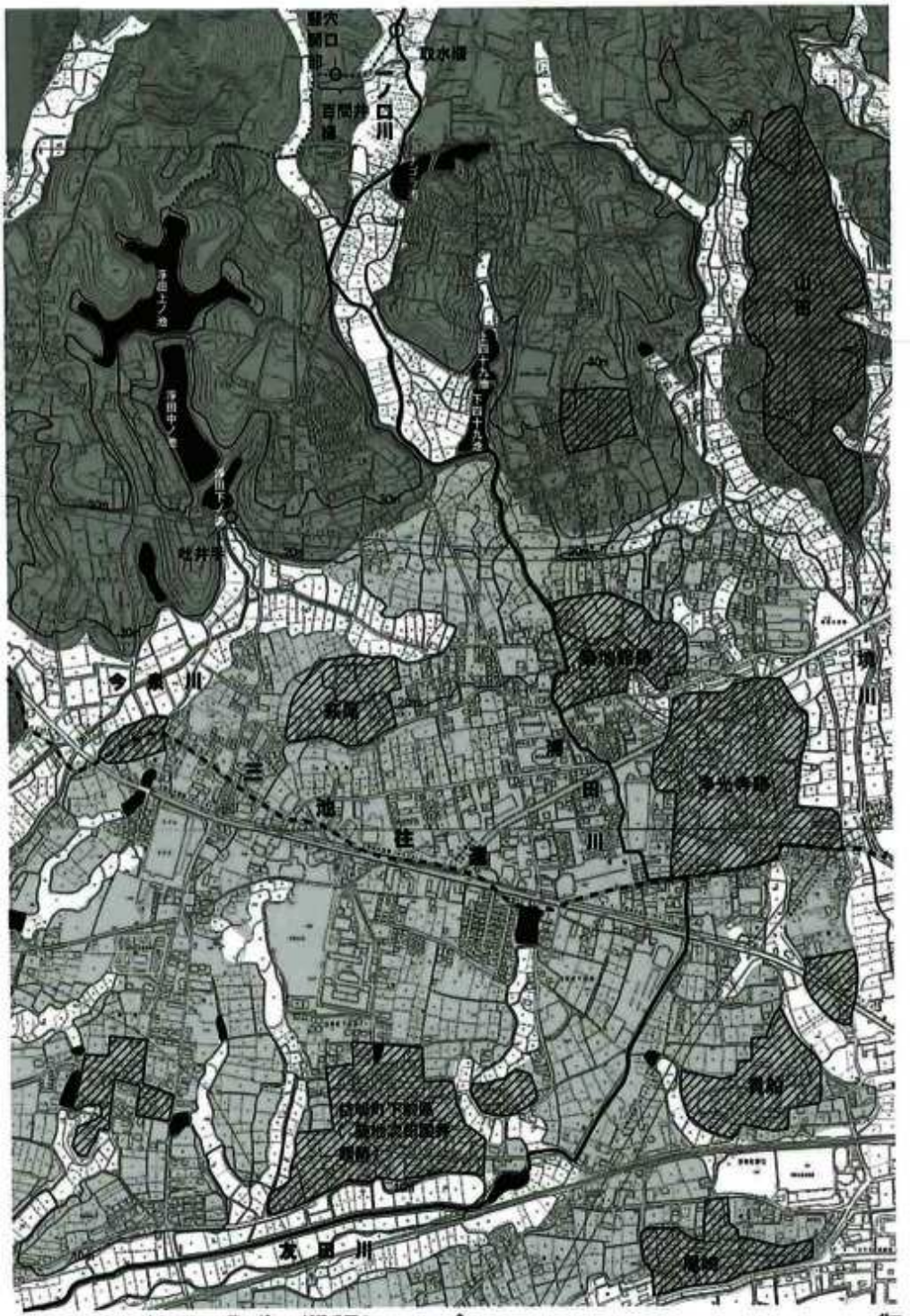
地質については『玉名市史　資料篇３自然民俗』の表層地質図によると、山麓傾斜地と段丘面２の堆積物は、概ね阿蘇火砕流堆積物と赤田層（中位段丘堆積物）であり、段丘面３は概ね岱明層（低段丘堆積物）である。発掘調査などで観察される岱明層は明黄褐色を呈する砂礫層であり、局地的に粘性土が混入する。岱明層の上位は褐色のローム層が堆積する。

当地域における河川については、行末川支流の友田川と、さらにその支流の今泉川水系がある。現在の行政区分上は、二級河川の行末川水系（流域面積 25.46 ㎢）内の友田川（流路延長 4.6km）と今泉川（流路延長 2.1km）に区分され、さらに友田川上流部分は準用河川の築地川（2.7km）となっている。

河川の名称については、『肥後国誌』や『玉名郡村誌』などの地誌によれば、時代や地域によって様々な呼称があるが、それらの地誌をもとに今回の論考内では説明の便宜上、次のとおり区分する。友田川水系として、小岱山山腹の玉名市築地字一ノ口を源とする一ノ口川、四十九池より南側の浦田川、JR 鹿児島本線とほぼ平行して流れる部分を友田川とする。また、浮田ため池を源として南西側へ流れ、友田川へ合流するまでの部分を今泉川とする。浮田ため池に近い部分の流路は、浮田川とも呼ばれる。いずれの河川沿いも、主に細長い谷底平野が形成され、大部分は水田となっている。

３．集落及び遺跡の分布

国土地理院所蔵で、閲覧可能な昭和 30 年から 40 年にかけての高度経済成長期前後の航空写真をみると、集落域と耕作地は明瞭に区分されている。そこで集落域と判断される部分を斜線で第１図に示した。明治時代初期の『玉名郡村絵図』の中での集落域の区分と比較すると概ね同様であり、近世の村々の様相に極めて近いと判断される。図中の範囲では北側から山田の集落、四十九池神社東側の上築地集落、西築地の萩尾集落、築地館跡が所在する集落、浄光寺跡の集落、



※1　濃いグレーが段丘面2、薄いグレーが段丘面3
　　白地は谷底平野部、黒は池を示す。
※2　実線の等高線は10m、20m、30mを示す。
※3　斜線部の範囲は集落域を示す。

第1図　南大門遺跡周辺地形図

貴船神社の集落、岱明町下前原の集落、菊尾集落、専修大学玉名高校の南側の尾崎集落などが主な集落域として所在する。それらの集落は高度経済成長期に宅地化された部分を除き、少なくとも江戸時代末期の位置及び地割を良く残している。以下、集落ごとに概要を記す。

山田の集落は、南北に細長い丘陵上に位置し、最も北側に藤で有名な山田日吉神社が所在する。そこから南に延びる参道両側は「山田白山十二坊」と呼ばれる遺跡又は石造物が所在し、かつては天台系修験道の拠点となっていたと考えられている。地形的にも、比較的平坦な段丘面３から山麓傾斜地への接続域であり、以下に述べる集落の中でも標高が最も高い。宗教的にも霊山小岱山への入り口として山と下界を繋ぐ境界としての位置付けもできる。

築地館跡は大野一族の館と伝えられ、西側に浦田川が流れる。さらに西側は萩尾の集落が所在する。萩尾の集落から築地館跡の集落までは、段丘面３にありながらも東西に細長い微高地状を呈す。その北側は扇状地が拡がり山麓傾斜地と一ノ口川が所在する谷底平野に接続する。

浄光寺は真言律宗の寺院で、鎌倉中期には既に所在が確認される。推定寺域は南北約 350m、東西約 250m に及ぶ大規模な寺院であり、現在は蓮華院誕生寺が再興されている。南側は三池往還に接続する。

岱明町の下前原地区は、地区の中心部が大野一族の築地次郎国秀館跡と伝えられる。大野一族の前原氏の拠点とも考えられ、前原宗因の墓が所在する。大野別府内での集落としての規模は比較的大きい部類に入る。

尾崎集落は、南に大野牟田を望む丘陵端部に所在する。鎌倉時代中頃には、大友氏系である託磨氏の所領として中尾崎、北尾崎の地名がみえる。

貴船神社は、昭和 15 年建立の碑文によると、天平２年（766）の勧請を伝える。周辺は神社と一帯となり集落を形成している。

これら丘陵上に分布する集落は、近世の村落形態が色濃く残り、地割がそのままの範囲が多い。さらに中世においても存在し、集落の中心は館が所在する場合が多い。場所によってはその起源が古代まで遡る場合もあり得ると思われる。

以上で述べた集落の間をぬうように、段丘面３上の平坦地を三池往還が東西に延びる。土地利用に関しては、昭和 30 年代以前の航空写真で判断する限り、基本的に谷底平野は水田、丘陵上は畑となっている。畑の中に島状に集落域が分布している状況である。丘陵上においても、萩尾の集落から築地館の集落にかけての南側、浄光寺跡の西側、三池往還以北の範囲は水田となっている。三池往還以南の丘陵上は畑であるが、昭和 40 年代以降、地下水汲み上げによる灌漑設備が整えられ水田としても利用可能になった。

4．浮田ため池と関連施設

浮田ため池は、江戸時代後期に整備された農業用ため池である。山麓の谷部分を池として利用しており、南北に細長い形状である。『関家文書』によると、文化13年（1816）、当時の庄山村・友田村・上村・中程村・下村の五か村の用水として創設された。その後嘉永5年（1852）に、坂下手永惣庄屋関忠之丞の尽力により、干ばつの年の用水不足を解消し、行末・友田川水系に属する下流の村々の用水を確保するために、もとからあった溜池（中ノ池）の上下に掘り添えが行われた。その結果、上ノ池・中ノ池・下ノ池が連結した三段の池となり、下流の扇崎村ほか九か村が受益地域に含まれるようになった。面積は三つの池合計で12町余となっており、玉名市域では突出して規模が大きい池である。

溜池までの貯水方法は、一ノ口川に設置された分水堰から水を取り込み、水路及び暗渠を構築して浮田上ノ池まで導水する設備が整えられている。三連の溜池で貯水された用水は三方向へと分配されており、その一つが今泉川となって流域に流れている。池の貯水量が規定以上となった場合には、堤を越えて今泉川に流す仕組みの余水吐きの施設が整備されている。今泉川の源流一ノ口川から丘陵部分に暗渠を構築して流し、谷部分には土手を構築しその上を水路で導水するという技術は、池部分とその下流の水路全体を含め、江戸時代に整備された灌漑システムとして注目に値する。

5．友田川流域について

一ノ口川から浦田川、さらに友田川への流路全体の概要について述べると、小岱山麓の地形分類でいう山腹及び山麓傾斜地から源を発し、小規模な谷川を集約して一ノ口川となっている。浮田溜池への分水樋門を過ぎてナゴラ池の西を経由し、谷底平野を蛇行しながら流れ、下四十九池の南側へ達する。そこから南東側へ流れを変え、浦田川となって築地館跡の西側を流れ、浄光寺跡の南西側で三池往還と接する。そこから三池往還と並行して東へ90mほど流れ、浄光寺跡の南西側と接する地点で南側へとほぼ直角に流れる。そこからさらに直線的に南西側へ向けて流れ、友田川の谷底平野へと接続する。

この流路で注目したいのが、一ノ口川から浦田川にかけての流路状況である。下四十九池以北の一ノ口川は、谷底平野を蛇行しながら流れている一般的な小規模河川である。そのような谷底平野の河川は、谷底の最も低い部分を蛇行しながら流れるのが自然における通常の状態である。人の手が加えられると、耕地化の際に谷間の中間に流路が固定されるなど流路変更が行われる。あるいは谷底平野が狭小で一枚の圃場面積が充分確保できない場合は、谷間のどちらかに水路を

寄せて整備される場合もある。一ノ口川の谷底平野の場合は、流路が谷の端から端まで蛇行するように整備されてはいるものの、もともとの自然の流路をベースに改修された状況であるといえる。

そして谷底平野の出口、扇状地との境に相当する部分に土手が築かれる。四十九池を堰き止めるように東西に構築され、その土手上にさらに水路が整備されている。これは浮田溜池へ谷を渡す導水路構築にみられる手法と同類である。

下四十九池の南側から延びる浦田川は、本来は池からの水を流す水路であり、一ノ口川からの土手上の水路を経て合流する。この地点から下流の浦田川は、自然に形成された流路ではなく、地形的にみても明らかに人工的に整備されたものと判断される。よって、下四十九池から扇状地及び丘陵上を開削された用水路とみられる。池と水路の接続部分は、現在は塞がれているような状態で観察が困難であり、取水施設等は確認できない。地形的に判断すると、本来一ノ口川は、四十九池の地点から西側に流れて今泉川へと接続するのが本来の流れと考えられるが、土手で谷全体を塞いで流れを変更し、浦田川を開削してそちらへ接続している状況である。一ノ口川と浦田川の接続地点の状況は、一ノ口川側にコンクリート堰が設けられている。現在は戸板等はなく、堰の機能は果たしていない。一ノ口川底から浦田川底への高低差は2mほどある。

浦田川は、一ノ口川との接続地点付近では、幅約6m、深さ約4mを測る素掘りの水路で、築地館跡方面へとほぼ同じような水路状況で流れる。築地館と西側の萩尾集落にかけての東西に細長い微高地を貫くように南流し、三池往還まで達する。周辺が宅地になっている部分では、水路法面がコンクリート間知ブロックなどで補強されている。

浦田川の源となる四十九池に関しては、上四十九池と下四十九池から成り、一ノ口川が流れる谷から派生する小規模な谷を池として造成されている。下四十九池東側の畔には四十九池神社が所在する。現況から、浮田溜池と同様の形態を呈する農業用溜池であったと判断される。創設年代は定かではなく、名称の由来として、戦国時代に戦火を逃れた大野一族の婦女子四十九名がこの池に身を投げたことが伝わっている。

昭和31・37年撮影の航空写真をみると、浄光寺跡西側で、浦田川中流域に相当する部分の西側では水田域となっている。三池往還を境に北が水田、南が畑と明瞭に土地利用の状況が判明する。水田域は、北側が萩尾集落から築地館跡にかけての微高地まで、東側が浦田川、南側が三池往還に接する範囲で、概ね15町ほどの面積を有し、方形に区画されている状況が看取される。字名も「大坪」がある。通常、水田は大野牟田などの低湿地か谷底平野が主で、段丘上は畑が主であるが、前述の範囲は例外的に丘陵上に水田が営まれている。確認できる限り段丘面上におい

写真１　南大門遺跡周辺航空写真（昭和 31 年撮影）※ 国土地理院より

写真２　南大門遺跡周辺航空写真（昭和 37 年撮影）※ 国土地理院より

ての唯一の水田地帯である。これは四十九池とそこからの用水路である浦田川によって用水の確保が可能となり、水田化されたとみられる。

菊池川下流域の現在の灌漑状況は、玉名市と和水町の境付近に設けられた白石堰から両岸に 1 号幹線水路と 2 号幹線水路が延び、水田の大部分を潤している。『岱明町地方史』によると、右岸より取水する 2 号幹線水路は元玉名、河崎を経由して岱明町まで延び、上野口尾崎で築山揚水機から、150 馬力の電動ポンプにより 15m 揚水し、築山の用水不足田 40 町歩へ用水補給を行い、またここの畑地帯 99 町に分水し開田する、とある。また二号幹線水路が完成した昭和 42 年に

は、大干ばつに見舞われたにも関わらず、新設水路のおかげで梅林牟田、小田牟田方面は豊富な水量を送ることができたという。しかし1号幹線水路側の右岸の玉名市築山地区では、一九の溜池が干上がったため、新しく用水用に堀った井戸の数が、山田上35、中尾25、築地西15、築地上26、山田下20、築地下6、合計127本であった（築山小調べ）、という。玉名市築地から岱明町にかけての丘陵地帯では、用水の確保が難しい状況であることが窺える。四十九池からの浦田川の用水路も、白石堰完成時点にはその機能をほぼ失っていたと考えられる。

以上の状況から推察すると、四十九池とそこからの浦田川、西側に隣接する水田域は、丘陵上にも関わらず灌漑設備が整えられ、古くからの水田地帯であったことが考えられる。しかし白石堰とそこからの水路完成前後の時期では用水不足が生じていたようで、現在でも水利条件は良好ではない。現状では水田の多くが宅地化されている。

では灌漑用の池である四十九池、そこからの用水路である浦田川、概ね方形に区画された水田域という灌漑施設と一連の耕地とは、いつ頃から整備され、どのくらいの期間使用されたのかについては資料もないためまったく不明である。四十九池については、伝承から判断すると、戦国時代にはすでに池として存在していたようである。浦田川は玉名郡村誌の築地村の項には用水として記載されているが、一ノ口川の記載はない。玉名郡村誌の絵図では、明治時代初期の状況が判明し、近世の段階でも概ね同様な状況であると考えられる。水田域は大部分が宅地化されているが、一部残っている耕作地もあり、現在も水稲が栽培されている。これらの状況から、少なくとも近世には耕作がなされており、それがどのくらいまで遡るかの判断が重要であると考えられる。

一ノ口川については、浦田川の開削時期とかならずしも同じというわけではなく、玉名郡村誌絵図には記載がないことから、後世の整備になるかもしれない。ただ、一ノ口川上流の浮田溜池分水堰は近世に存在したことは確実なので、一ノ口川の記載が省略されているだけかもしれない。また、これら灌漑施設は、営農上一括して整備されるべきものであり、一町四方の水田区画、水路、ため池はほぼ同時期の整備であったと考えたい。

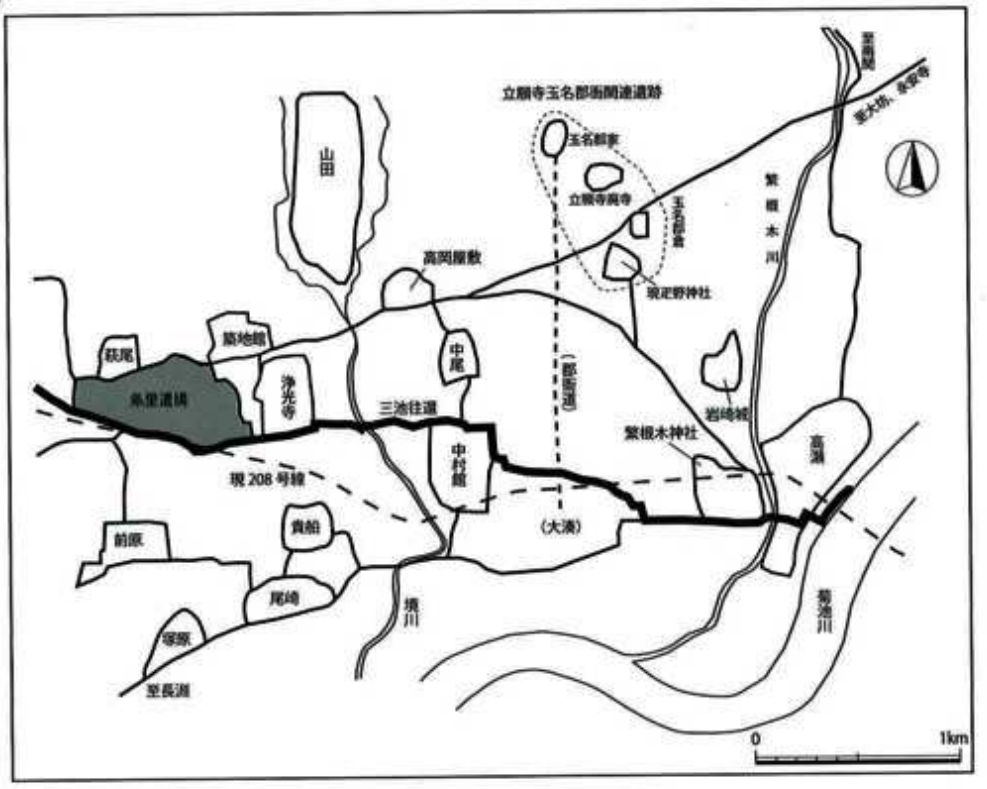
菊池川下流域における灌漑状況については、現代は一級河川である菊池川の豊富な水量を主として整備されている。溜池を利用した山間部の灌漑は、あくまでも水利条件の良くない範囲での補助的な役割であったことは否めないが、溜池や、複雑な地形の中をぬって整備された水路は、それぞれの時代で多様な技術を駆使し、大規模河川を利用した灌漑施設とは歴史的・土木構造的にまた違った評価ができると思う。

次に、これらの灌漑施設及び水田と、三池往還との関係について考察したい。道路としての評

価自体は後述するが、三池往還と浄光寺跡とは接しており、ちょうど三池往還からの入口が浄光寺の南大門であった状況であるので、浄光寺と三池往還は同時期の存在といえる。また道路の北側が水田域、南側が畑作域となっており、土地利用の境にもなっていることから、水田域と三池往還は同時期に存在したと考えられる。よって三池往還、浄光寺、四十九池、浦田川、水田域までは同時期に存在したと判断される。この中で三池往還と浦田川の前後関係については、浦田川の一部が浄光寺跡の南西側の地点で三池往還に沿って流れている区間があり、流路の整備時には三池往還が既に存在したとみなすことができるので、三池往還が先で浦田川が後と判断される。

6．交通

三池往還は三池街道とも呼ばれ、筑後の三池と高瀬を結んでおり、国道 208 号線が整備される以前は地域の主要道であった。そのルートは近世の段階で、高瀬―繁根木―亀甲―中―築地（以上旧玉名市域）を経由して旧岱明町域を通り、現在の荒尾市金山から諏訪川に架かる岩本橋を通って三池に至る。高瀬からは田原坂を経由して植木方面へと続く。三池往還以外の地方主要道に相当する路線では、高瀬を中心にして長洲へと続く道路と、繁根木川経由で南関方面へ続く道路もある。



第２図　古代～中世主要施設配置図

現在の玉名市域における近世段階での三池往還と高瀬を軸とした交通網は、遺跡や集落の配置等の状況で判断する限り、中世段階でも近世とほぼ同様と考えられる。

熊本県北部の古代道路については、主要街道である駅路沿いの駅家として、筑後国狩尾駅から肥後国に入り、玉名郡南関町に比定される大水駅、玉名郡和水町江田に比定される江田駅、熊本市植木町に比定される高原駅を経由して肥後国府に通じるルートが想定されている。さらに木下良氏の研究によると、狩路駅から分岐して筑後国三毛郡を経由して玉名郡に至るルートが、駅路の支線である伝路に想定されている。それはほぼ三池往還に相当する路線であり、官道として古代から整備されていたとみられる。ただ、そうした場合は立願寺の玉名郡衙は官道沿いではなく、やや離れた位置にあり、脇道が必要になる。古代官道といえば、直線状に整備され、規格性を持った道路遺構がイメージされるが、三池往還の路線に関しては直線状ではなく、地形的な制約もあってかなり屈曲している。

玉名地域の古代道路研究に関しては、田邊哲夫氏により提唱されている玉名郡衙関連遺跡の一つである郡衙道がある。現在の JR 玉名駅周辺に比定される湊から、ほぼ北側に一直線に伸びる道路跡が示されている。その道路と共に、立願寺廃寺、玉名郡倉跡推定地、玉名郡家跡推定地などが古代玉名郡衙の関連施設として研究されている。それ以外にも、現在の疋野神社周辺から岩崎を経由して高瀬へとつながる道路跡が存在する。また築地から高岡屋敷跡を経由して、玉名郡倉跡推定地へと続く道路跡も存在する。その道路跡は立願寺の丘陵を越え、繁根木川を渡って元玉名の丘陵際を通るルートに接続するようである。現在も大部分の地割が残り、道路としての機能を有する部分もある。それらの道路も木下良氏によって伝路として想定されている。しかし近世末の状況を示す郡村図の絵図では道路としての記載もなく、せいぜい集落と集落を繋ぐ生活道としての扱いであったと考えられる。このことは、かつて玉名郡の中心的地域であった立願寺郡衙が次第に衰退し、そこを経由する必要性も少なくなり、近世の段階では地域内の一集落となったことを示しているものと思われる。

立願寺郡衙と入れ替わるように、中世段階の三池往還の路線沿いは、大野別符内での重要施設が多い。高瀬、繁根木、中、築地である。高瀬は既に港としての機能も整備され、菊池氏の勢力下に置かれ玉名地方の中心地として発展を遂げていたであろうし、その隣接地である繁根木には総鎮守といわれる繁根木八幡宮が所在する。現玉名市中にも中世館の所在した形跡があり、繁根木八幡宮の旧宮地と伝えられる重要地点である。築地は浄光寺跡が所在する。高瀬の宝成就寺は延喜4年（904）の開基、繁根木八幡宮は応和元年（961）の勧請を伝える。浄光寺は鎌倉時代の創建であるが、場所としてはそれ以前から何らかの拠点であった可能性は十分考えられ、真言律

宗系では既設寺院を元にした開基例もあるという。この三池往還と接する各地点は、その始原は古代まで遡ることが窺える。

交通の状況と、各施設及び遺跡の存続時期を検討すると、立願寺経由のルートから現在の三池往還のルートへの主要ルートの転換があった形跡が考えられる。

7．浄光寺跡の評価

以上、集落及び遺跡、水路及び水田域の分布、交通の状況を個別に検討した。これらの成立時期について明確にすることは困難であるが、これまで述べてきた景観を形成する要素を全体的に概観し、それぞれの内容の成立時期を考慮すると、中世の時点（概ね浄光寺が成立していたとみられる鎌倉時代中期ごろ）には既にこれらの諸要素は存在していた状況であったことが推察される。さらに浄光寺跡の西側に広がる水田地帯は、古代の条里遺構としてみなすことができ、それに付随する水路や溜池などの灌漑施設についても、始原を古代に求めることができる。三池往還と路線沿いの諸施設の大部分も、古代以来の遺構または遺跡であると考えられる。

ところで古代玉名郡の中心的地域が現在の立願寺一帯であったことはこれまでの研究で明らかであるが、それらの諸施設の存続期間は出土遺物から8世紀から9世紀ごろにかけてで、10世紀以降も郡衙として機能していたことは考えにくい。これらの施設の衰退以降、玉名郡の行政機構の変遷に関しては不明な点が多い。工藤敬一氏は、平安時代の荘園公領制の展開の中で、山鹿荘と玉名荘の成立と、玉名東郷と西郷の分化について研究されている。氏は10世紀末～11世紀初頭の段階で、郡の徴税体制の変化に伴い、のちに野原荘となる現荒尾市と長洲町の地域、中心部の玉名東郷・西郷、菊池川以南の山北郷と伊倉郷という三ないし四つへの地域分化が進んだのではないか、とされている。この時期の玉名郡内の体制変化と、立願寺玉名郡衙の衰退は密接に関連するとみられる。日置氏に代わって玉名西郷を支配したのは、当然紀姓大野氏である。大野氏は鎌倉時代筥崎宮領大野別符の地頭であり、また仁治2年（1241）の肥後国留守所下文に「郡司紀」と署名している。かつ承元2年（1208）の石貫山内に大平野寺の建立を指示した公文所下文には、「政所紀」とある。このように紀姓大野氏は、大野別符、仁和寺領玉名荘、新編成された玉名西郷という、重層的で複雑な土地所有制度内でそれぞれ個別に在地領主として支配権を得て、荘園化にも関与しながら地位を築いていったようである。

では、立願寺の玉名郡衙衰退後、分化した玉名郡内のそれぞれの拠点はどこかといえば、玉名西郷に関しては、当然大野氏の支配下内での場所の一つということになる。田邊哲夫氏は、玉名市内の古代瓦出土地点などを検討し、大野氏の本来の拠点は築地ではなかったか、としている。

郡または荘園の拠点であるならば、当時の主要道路沿いに求めることが妥当であり、これまで検討してきた状況を勘案すると、浄光寺跡地周辺はその位置にふさわしい条件を有していると判断される。日置氏勢力下の立願寺玉名郡衙の衰退後、浄光寺建立以前に玉名郡の拠点的施設であった可能性を指摘したい。具体的な年代は判明し得ないが、紀姓大野氏の勢力下、大野別符や仁和寺領玉名荘などが成立していく過程において、それらの拠点となる施設が三池往還沿いに整備されていった様子が窺える。浄光寺の地点、繁根木八幡宮、高瀬の諸施設は、のちの近世にまでわたってさらに玉名地域の要として発展していくことになる。

8．おわりに

現在の蓮華院誕生寺の正門西側に所在する2基の大型五輪塔は、鎌倉時代後期から南北朝期に編年付けられる遺産である。にもかかわらず「関白塔」と称し、平重盛の造立と伝えられる所以は、地域に伝わる中世以前の記憶の伝承ではないかとも考えていた。今回の考察では、地形や集落の分布、水利、交通を中心に検討を行った。その結果、それら景観を形成する諸要素の起源が古代に遡る要素が多くあり、古代玉名郡の状況を併せて検討すると、紀姓大野氏を中心とした郡内再編成の動きと、浄光寺跡地周辺を巡る動向までおぼろげながら見えてきたように感じる。

古代玉名郡の実情は、立願寺玉名郡衙に関してはこれまでの研究成果があるが、それ以外は不明な点が多い。今回指摘した浄光寺開基以前の状況の予察は、その解明に少しでも寄与できればと考えている。ただ、多量の古代瓦が出土する立願寺廃寺、礎石と大型掘建柱建物が検出された玉名郡倉跡推定地については、明らかに郡の中心にふさわしい内容の遺跡である反面、それに匹敵するような遺跡は、玉名郡衙以外には現在のところ見当たらない。玉名市域全体でも、奈良時代から平安時代の古代の遺跡自体が玉名郡衙以外では少なく、調査例もあまりない。各地で古代瓦が少なからず出土しているが、出土状況などの詳細は把握しづらく、今後の課題としたい。

【参考文献】

玉名市立歴史博物館こころピア編　2005『玉名市史　通史篇上巻』 玉名市

玉名市史編集委員会編　1992『玉名市史　資料篇1絵図・地図』 玉名市

玉名市史編集委員会編　1992『玉名市史　資料篇2地誌』 玉名市

玉名市史編集委員会編　1993『玉名市史　資料篇3自然民俗』 玉名市

玉名市史編集委員会編　1993『玉名市史　資料篇5古文書』 玉名市

坂田邦洋　1994『玉名郡衙』 玉名市歴史資料集成第12集－市制40周年記念－　玉名市

門岡　久　1969『明治百年記念　岱明町地方史』 岱明町

岱明町史編纂委員会・執筆委員会編　2005 『岱明町史』 岱明町

南関町史編集委員会編　2002『南関町史　特論』 南関町

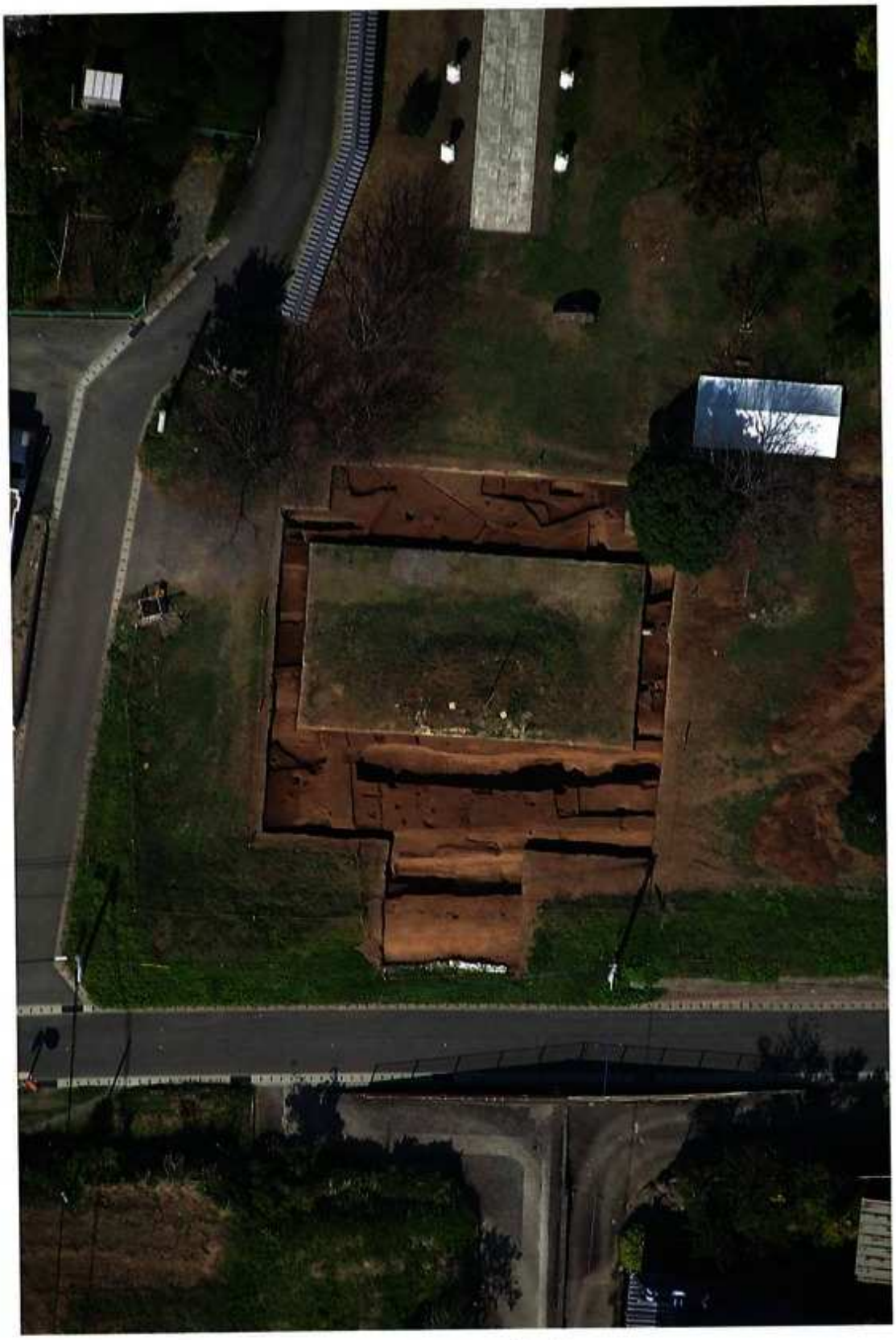
田邊哲夫　1990「立願寺瓦を出土する五遺跡の性格」『九州上代文化論集』 乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

中村安宏　2010『浮田溜池関連施設　一般国道 208 号玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』 玉名市文化財調査報告第 23 集　玉名市教育委員会

木下　良　1983「西海道の古代官道について」『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府文化論叢 上巻』 吉川弘文館

図版

- 本調査
- 追加調査
- 主な出土遺物
- 南大門関連



1　調査区全景（上空から）

図版２

２　３・５号溝跡完掘状況（東から）

３　３号溝跡出土軒丸瓦片（東から）

４　３号溝跡出土瓦片（西から）

５　５号住居址完掘状況（北東から）

６　左上　12号住居址（北から）
７　上　12号住居址出土家形土器片（遠景）
８　左　家形土器片（近景）

図版４

９　調査前状況（南から）

１０　安全祈願（北から）

１１　調査区南側検出状況（東から）

１２　調査区北側検出状況（西から）

１３　1・2号溝跡完掘状況（東から）

１４　1・2号溝跡横断西壁土層断面（東から）

１５　３号溝跡出土瓦片（北から）

１６　３号溝跡出土瓦片（北西から）

１７　５号溝跡縦断南壁土層断面（北から）

１８　３号溝跡出土平瓦（西から）

１９　３・５号溝跡完掘状況（東から）

２０　３号溝跡底面削り出し突起　（東から）

２１　２号住居址遺物出土状況（東から）

２２　10号住居址遺物出土状況（北東から）

２３　15号住居址遺物出土状況（南から）

２４　15号住居址遺物出土状況（南西から）

２５　13号住居址炭化物出土状況（東から）

２６　14号住居址遺物出土状況（北から）

２７　調査区北側完掘状況（西から）

２８　調査区東側完掘状況（南から）

２９　調査区西側完掘状況（北から）

３０　１・２・９号溝跡横断土層断面（西から）

３１　３号溝跡横断土層断面（西から）

３２　７号溝跡完掘状況（東から）

図版８

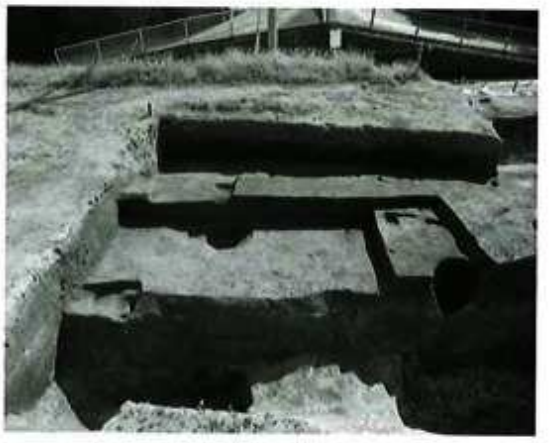
３３　２号住居址完掘状況（北から）

３４　３号住居址遺物出土状況（南から）

３５　３号住居址完掘状況（西から）

３６　10号住居址調査区南壁土層断面（北から）

３７　12号住居址柱抜き取り痕及び
廃土の散布状況（北から）



３８　14号住居址完掘状況（北から）

１　A・G区調査区全景（北西から）

２　B-F調査区全景（西から）

図版１０

３　Ａ区遺構検出状況（北から）

４　Ｂ区遺構検出状況（北から）

５　S-60 検出状況（西から）

６　S-60 遺物出土状況（西から）

７　S-61 瓦片出土状況（北から）上層

８　S-61 瓦片出土状況（東から）下層

９　G 区 S-61 遺物出土状況（南から）

１０　G 区 S-61 角礫出土状況（北から）

図版１２

１１　Ａ区周辺掘削状況（南から）

１２　調査区南側道路（東から）

１３　調査区南側道路（西から）

本発掘調査における主な出土瓦片集合写真

図版１４

01

02

03

04

05

06

07

08

09

10

11

12

13

14

15

16

17

図版１６

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

図版１８

51

53

61

74

75

77

76

77

78

79

80

81

82

報告書抄録

ふりがな	なんだいもんいせき
書名	南大門遺跡
副書名	蓮華院誕生寺南大門再建に伴う発掘調査
シリーズ名	玉名市文化財調査報告
シリーズ番号	第28集
編著者名	末永崇 大野泰輔 西谷彰
編集機関	玉名市教育委員会　株式会社 九州文化財研究所
所在地	熊本県玉名市岱明町野口2129
発行年月日	2013年11月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なんだいもんいせき 南大門遺跡	たまなし つかち 玉名市塚地2152	43206	－	32度 55分 50秒	130度 32分 06秒	20080825 ～ 20081027	240㎡	南大門再建に伴う発掘調査
なんだいもんいせき 南大門遺跡	たまなし つかち 玉名市塚地2152	43206	－	32度 55分 50秒	130度 32分 06秒	20091008 ～ 20091021	90㎡	浄光寺跡確認調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南大門遺跡	包含層	旧石器時代		石器	
	集落	弥生時代	住居址 土坑 柱穴	弥生土器 石製品	
	寺院	中世	溝 土坑 柱穴	瓦 土師器 陶磁器 石製品	
	集落	近世	溝	陶磁器	

南大門（平成 23 年 4 月 再建）

東方守護
『持国天』

南方守護
『増長天』

西方守護
『広目天』

北方守護
『多聞天』

南大門の四天王像

玉名市文化財調査報告 第28集
中世真言律宗系寺院浄光寺跡

南大門遺跡

蓮華院誕生寺南大門再建に伴う発掘調査

平成25年11月30日発行

発　　行　玉名市教育委員会
〒869-0292　熊本県玉名市岱明町野口2129
TEL0968-57-4429・FAX0968-570-4442

監　　修　蓮華院誕生寺
〒865-0065　熊本県玉名市築地2288
TEL0968-72-3300・FAX0968-75-1065

編集・印刷　株式会社　九州文化財研究所
〒862-0954　熊本県熊本市中央区神水1丁目32番19号
TEL096-381-2267・FAX096-381-2299

出 版 元　株式会社　河田印刷
〒861-4101　熊本県熊本市南区近見8丁目5-105
TEL096-353-1049・FAX096-353-1044